資料
NO. 62-908
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
昭和62年10月7日
01-353
253
(4)

群馬県太田市

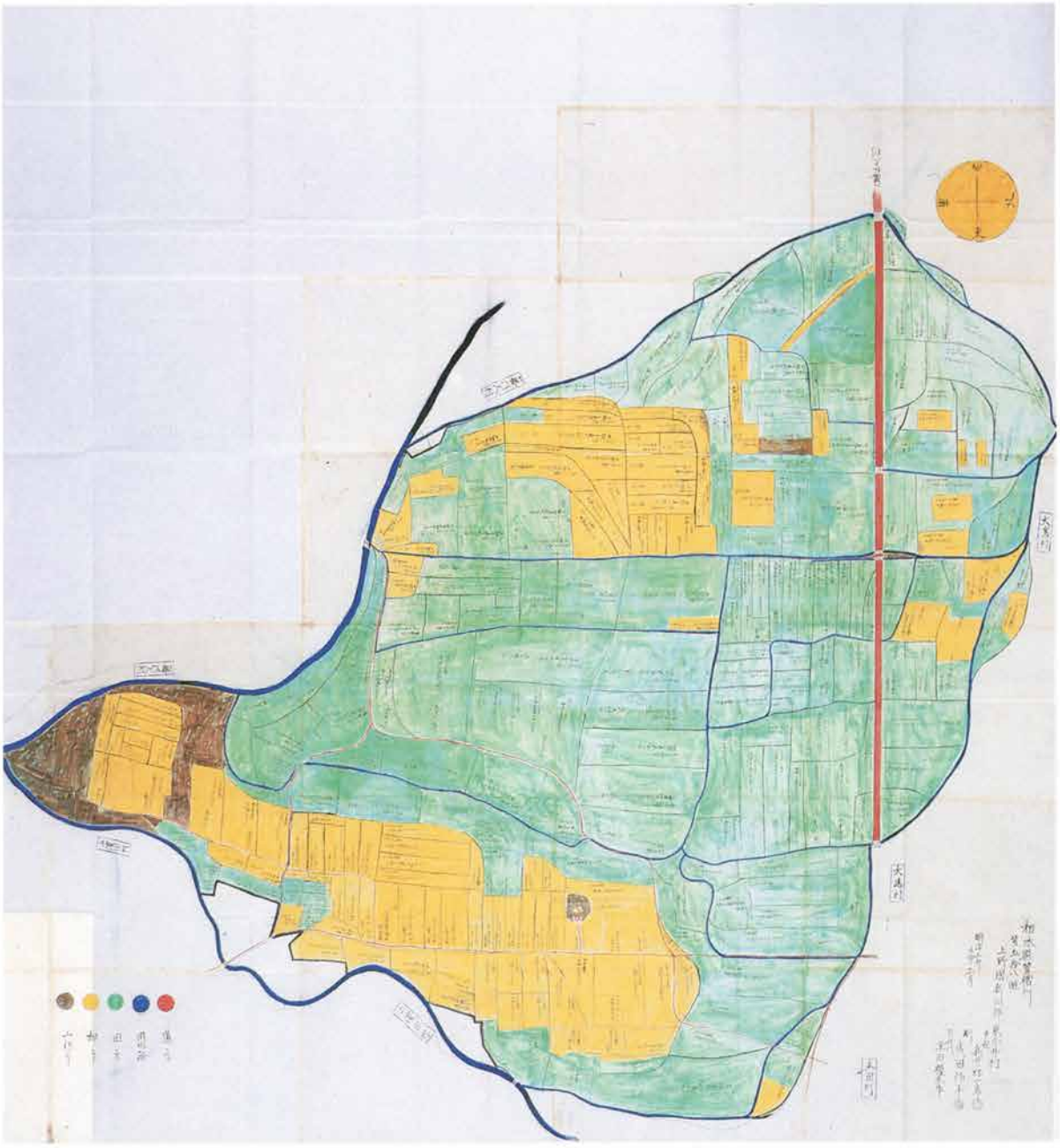
浜町屋敷内遺跡C地点

はまちょうやしきうち

県営浜町住宅団地建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

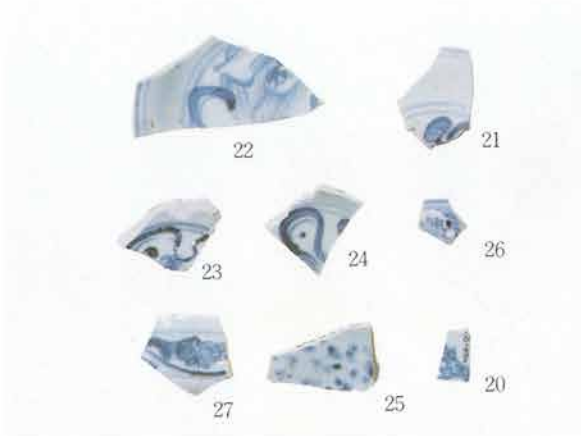
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

巻頭図版　1　東今井村地引絵図



1
2
3
12
14
7
13

10
5
4
6
15
9


22
21
23
24
26
27
25
20

57
39
60

序

太田市を中心とする地域は、古墳時代には、東国一の規模を誇る天神山古墳をはじめ数多くの古墳が築かれ、中世にあっては、新田氏一族の本拠地ともなり、歴史上の各時代を通じて、常に東毛の地の中心地として重要な役割をになってきた所です。現在にあっても、県下最大の工業生産力を誇り、群馬県の工業生産の中心として発展しつつあります。それだけに、人口の増加も著しく、住宅の需要も高い地域であります。

ここに報告します浜町屋敷内遺跡も、県営住宅団地造成に伴って発掘調査を実施したものですが、中世から近世にいたるまでの土器や木器などの日常什器をはじめ、多数の石臼、中国製陶磁器等が出土し、本県における中世・近世を考古学的に知る上で基準資料ともいうべき貴重な資料の数々を得ることができました。

本遺跡の発掘調査から整理にいたるまでの間、事業主体である県住宅供給公社をはじめ太田市教育委員会、そして、調査や整理にたずさわっていただいた関係者等多くの方々の御指導、御協力をいただきました。ここに報告書を刊行する運びになりましたのも、これら多くの方々の総力が結集された結果であり、厚く感謝の意を表します。

本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されていくことを願い序といたします。

昭和60年3月15日

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　清　水　一　郎

謝　　辞

発掘調査にあたっては、太田市教育委員会の中里吉伸氏、宮田　毅氏により多大な御協力をいただいた。整理研究作業に際して、金属製品については東京芸術大学教授中里政樹氏、東京国立博物館の香取忠彦氏、関　秀夫氏より御教示をいただいた。石臼の鑑定は三輪茂雄同志社大学教授にお願いした。青銅製品のX線回析とかわらけの夾雑鉱物の分析などは、県立工業試験場花岡紘一氏に依頼した。木材の材質鑑定を県立常磐高校須田光衛氏、石製品の材質を県立歴史博物館田中宏之氏に依頼し、五輪塔については同館磯部淳一氏の御教示を得た。また、遺跡周辺の地質について、前橋市立女子高校中島啓治氏の御教示を受けた。太田市史編さん室の諏訪和雄氏には近世文書の検討について多大な御協力を受けている。また、県文化財保護審議委員山崎　一氏と県文化財保護課長森田秀策氏には本書の執筆をお願いした。新井房夫氏、阿久津宗二氏、神沢憲治氏、仲野泰裕氏、山下歳信氏からも御教示をいただいた。記して感謝の意を示す。

例　　言

1　本書は1979（昭和54）年度の県営浜町住宅団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡は、群馬県太田市浜町59番地に所在する。

3　遺跡名である浜町屋敷内遺跡C地点は、現在の町名と小字名からなる。太田市教育委員会で調査した屋敷内遺跡A・B地点に隣接する同一の遺跡である。

4　発掘調査は、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団が、県住宅供給公社および、県教育委員会と委託契約を締結し実施した。調査期間は1979年4月16日より1980年2月20日、調査面積は9,850㎡であった。

5　調査組織は以下のとおりである。

事務担当　小林起久治、井上唯雄、飯塚喜代子、秋山二三夫、松土淳子、後藤栄子

調査担当　関　晴彦、飯田陽一、徳江秀夫

井戸掘削　原澤ボーリング株式会社

6　発掘調査後の整理研究作業は、1981年度と1984年度に以下の組織で実施した。

事務担当　小林起久治、沢井良之助、白石保三郎、梅沢重昭、松本浩一、大沢秋良、神保侑史、近藤平志、定方　隆、国定　均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子

報告書作成　井野みゆき、皆川正枝、細井敏子、高橋フジ子、田村栄子、山田きよ江、高橋順子、山田光子、後藤和美、須田幸子、平沢あや女、小池信子、金田美津子

保存処理　浜野和宗作、伊能敬司、関　邦一、宮沢健二

7　本書の編集は、飯田を中心に、関、徳江の現場担当者が協議して行った。

8　本書の執筆者は、以下のとおりである。

山崎　一　Ⅳ－1、森田秀策　Ⅰ－1、大江正行　Ⅲ－1、新倉明彦　Ⅲ－8、津金沢吉茂　Ⅲ－10、須田　努　Ⅳ－2、関　晴彦　Ⅱ－4、Ⅲ－11～14・16、飯田陽一　Ⅰ－4、Ⅱ－3、Ⅲ－2～4・15、徳江秀夫　Ⅰ－2～3、Ⅱ－1～2、Ⅲ－5～9

9　本書の写真図版は、遺構を関　晴彦が、遺物を佐藤元彦が撮影した。

10　出土遺物、写真、図面等は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡　　例

1　本書の挿図縮率は指定のない限り下記のとおりである。

遺構	溝……1/200	遺物	陶磁器・かわらけ・砥石・フイゴ羽口・硯・不明軽石製品……1/3
	井戸・土壙……1/60		木製品……1/4
	掘立柱建物……1/100		内耳土器・擂鉢・石擂鉢……1/5
	部分図……1/200		石臼・板碑・五輪塔……1/6
			金属製品……1/2および1/3
			古　銭……1/1

1　遺構図の方位は磁北をあらわす。

1　遺物写真の縮率は挿図と同一になるように努めたが統一されていない。

1　挿図中に使用したスクリーントーンは次の事項をあらわす。

遺　構　　撹　乱

遺　物　　陶磁器　　鉄　釉

灰　釉

1　第4図に使用した記号は次の事項をあらわす。

集　落　　古　墳　　城館址

1　第Ⅱ章3　土壙挿図の土層断面図に使用したⅠ～Ⅳの層は下記の内容を示す。

Ⅰ　暗褐色土層　　軽石粒の混入するしまりの強い土層

Ⅱ　黒褐色（黒褐色）土層　腐植土に近い層。ローム土の混入する場合が多い。

Ⅲ　暗褐色土層　　粘性のある粒子の細かな土層。

Ⅳ　暗黄褐色土層　　ローム土を中心とする粘性の強い土層。しまりのない場合が多い。

1　第Ⅲ章13　木製品挿図の別色は調整痕をあらわす。

1　遺物一覧表中の計測値で（　）が付されているものは復元値を、〔　〕が付されているものは残存値を示す。単位はすべてcmである。その他、本書一覧表で使用した省略記号は76頁に記した。

1　本書で使用した地図は下記のとおりである。

第1図　国土地理院　「深谷」　1;50,000

第4図　国土地理院　「上野境」　1;25,000

第92図　耕地図　「太田市と鳥ノ郷」および「沢野村」より合成

目　　次

巻頭図版
序
謝　辞・例　言
凡　　例

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　遺跡の位置と地形 …… 4
　3　周辺の遺跡 …… 5
　4　調査の方法と経過 …… 9
Ⅱ　調査の内容・遺構 …… 11
　1　溝 …… 11
　2　井　戸 …… 18
　3　土　壙 …… 28
　4　掘立柱建物・柱列及び小穴群 …… 43
Ⅲ　調査の内容・遺物 …… 49
　1　陶 磁 器 …… 49
　2　かわらけ …… 65
　3　内耳土器 …… 88
　4　擂　鉢 …… 96
　5　石　臼 …… 99
　6　石 擂 鉢 …… 124
　7　砥　石 …… 126
　8　板　碑 …… 133
　9　五 輪 塔 …… 140
　10　不明軽石製品 …… 146
　11　金属製品 …… 149
　12　フイゴ羽口 …… 155
　13　木 製 品 …… 156
　14　硯 …… 164
　15　古　銭 …… 165
　16　その他の遺物 …… 169
Ⅳ　浜町屋敷内遺跡の性格について …… 175
　1　今井館址について …… 175
　2　近世における今井村の状況 …… 177
　3　成果と問題点 …… 183
　　参考文献 …… 184

挿 図 目 次

第1図　遺跡位置図 …… 1
第2図　遺跡全体図 …… 3
第3図　土層柱状図 …… 4
第4図　周辺遺跡図 …… 6
第5図　屋敷内遺跡全地点遺構略図 …… 10
第6図　3　号　溝 …… 12
第7図　7・8号溝 …… 14
第8図　大溝断面 …… 17
第9図　井　　戸(1) …… 20
第10図　井　　戸(2) …… 21
第11図　井　　戸(3) …… 22
第12図　井　　戸(4) …… 23
第13図　井　　戸(5) …… 24
第14図　土　壙　(1) …… 29
第15図　土　壙　(2) …… 30
第16図　土　壙　(3) …… 31
第17図　土　壙　(4) …… 32
第18図　土　壙　(5) …… 33
第19図　土　壙　(6) …… 34
第20図　掘立柱建物 …… 45
第21図　柱列（上第一柱列 下第二柱列） …… 46
第22図　小　穴　群 …… 47
第23図　舶載陶磁器(1) …… 53
第24図　舶載陶磁器(2) …… 54
第25図　陶　磁　器(1) …… 55
第26図　陶　磁　器(2) …… 56
第27図　陶　磁　器(3) …… 57
第28図　陶　磁　器(4) …… 58
第29図　かわらけ(1) …… 67
第30図　かわらけ(2) …… 68
第31図　かわらけ(3) …… 69
第32図　かわらけ(4) …… 70
第33図　かわらけ(5) …… 71
第34図　かわらけ(6) …… 72
第35図　かわらけ(7) …… 73
第36図　かわらけ(8) …… 74
第37図　かわらけ(9) …… 75
第38図　内耳土器（土鍋）(1) …… 89
第39図　内耳土器（土鍋）(2) …… 90
第40図　内耳土器（ほうろく）(1) …… 91
第41図　内耳土器（ほうろく）(2) …… 92
第42図　擂　　鉢 …… 97
第43図　石　臼　(1) …… 102
第44図　石　臼　(2) …… 103
第45図　石　臼　(3) …… 104
第46図　石　臼　(4) …… 105
第47図　石　臼　(5) …… 106
第48図　石　臼　(6) …… 107
第49図　石　臼　(7) …… 108
第50図　石　臼　(8) …… 109
第51図　石　臼　(9) …… 110
第52図　石　臼　(10) …… 111
第53図　石　臼　(11) …… 112
第54図　石　臼　(12) …… 113
第55図　石　臼　(13) …… 114
第56図　石　臼　(14) …… 115
第57図　石　臼　(15) …… 116
第58図　石　臼　(16) …… 117
第59図　石　臼　(17) …… 118
第60図　石　擂　鉢 …… 125
第61図　砥　石　(1) …… 127
第62図　砥　石　(2) …… 128
第63図　砥　石　(3) …… 129
第64図　砥　石　(4) …… 130
第65図　砥　石　(5) …… 131
第66図　板　碑　(1) …… 134
第67図　板　碑　(2) …… 135
第68図　板　碑　(3) …… 136
第69図　板　碑　(4) …… 137
第70図　板　碑　(5) …… 138
第71図　五輪塔(1) …… 142
第72図　五輪塔(2) …… 143
第73図　五輪塔(3) …… 144
第74図　不明軽石製品 …… 148
第75図　金属製品(1) …… 153
第76図　金属製品(2) …… 154
第77図　フイゴ羽口 …… 155
第78図　木製品(1) …… 157
第79図　木製品(2) …… 158
第80図　木製品(3) …… 159
第81図　木製品(4) …… 160
第82図　木製品(5) …… 161
第83図　　硯 …… 164
第84図　古　銭　(1) …… 166
第85図　古　銭　(2) …… 167
第86図　古　銭　(3) …… 168
第87図　その他の遺物(1)石製品 …… 169
第88図　その他の遺物(2)石棒・埴輪 …… 169
第89図　その他の遺物(3)土　器 …… 170
第90図　その他の遺物(4)瓦・有孔土器 …… 171
第91図　その他の遺物(5)土師器・須恵器 …… 173
第92図　屋敷内遺跡周辺の小字名 …… 176

一 覧 表 目 次

表1　周辺の遺跡一覧 …… 7
表2　井 戸 一 覧 …… 19
表3　土 壙 一 覧 …… 35
表4　掘立柱建物・柱列計測値一覧 …… 48
表5　陶 磁 器 一 覧 …… 59
表6　かわらけ一覧 …… 76
表7　内 耳 土 器 一 覧 …… 93
表8　擂 鉢 一 覧 …… 98
表9　石 臼 一 覧 ……118
表10　石 擂 鉢 一 覧 ……125
表11　砥 石 一 覧 ……127
表12　板 碑 一 覧 ……137
表13　五 輪 塔 一 覧 ……141
表14　木 製 品 一 覧 ……156
表15　古 銭 一 覧 ……165
表16　その他の土器一覧 ……172
表17　土師器・須恵器一覧 ……174

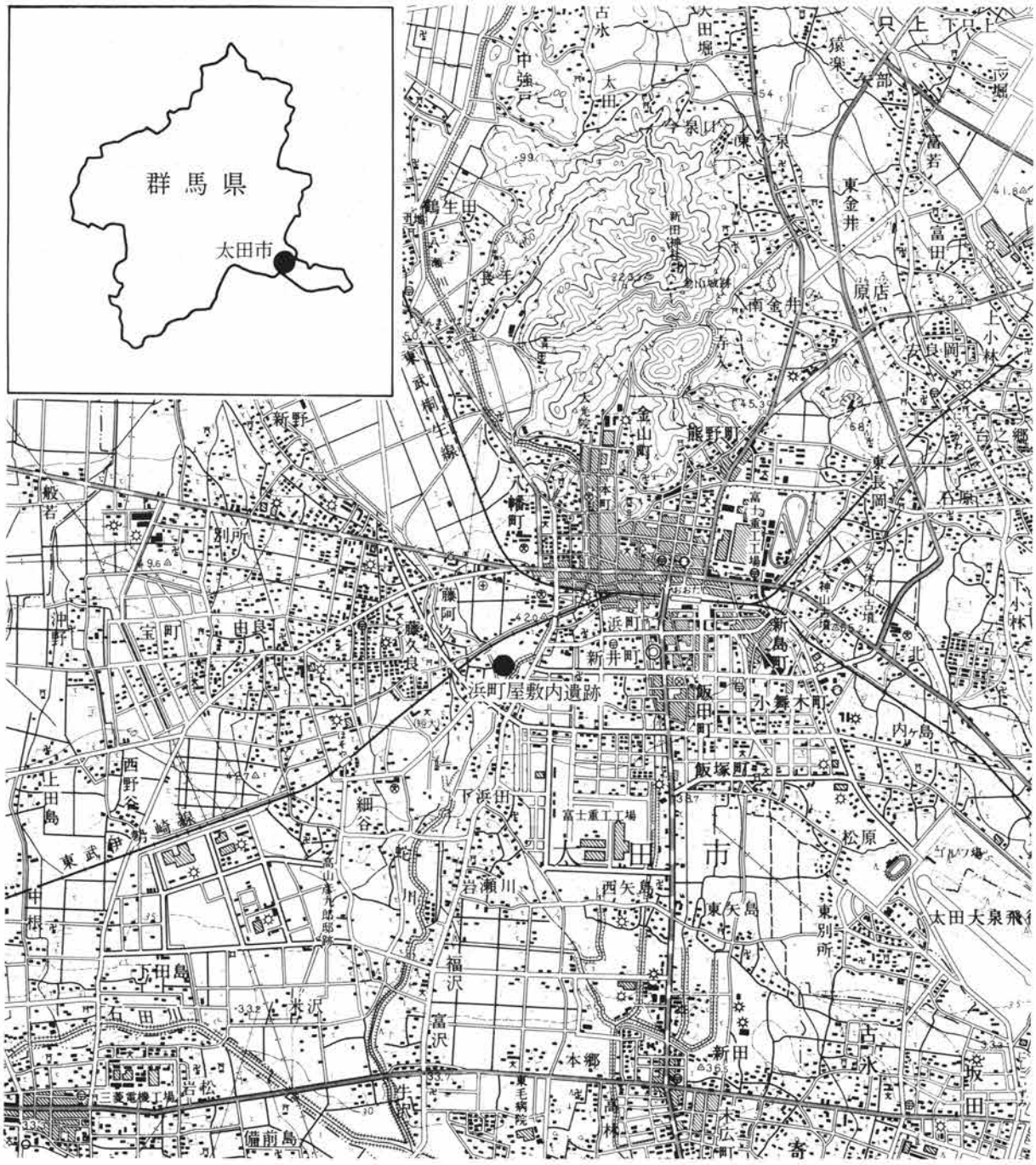
図 版 目 次

巻頭図版1　東今井村地引絵図
巻頭図版2　陶 磁 器
図版1　東今井村地引絵図　部分
図版2　調査前の土地利用と主な遺構
図版3　遺跡部分図配置図
図版4　遺跡部分図(1)
図版5　遺跡部分図(2)
図版6　遺跡部分図(3)
図版7　遺跡部分図(4)
図版8　遺跡部分図(5)
図版9　遺跡部分図(6)
図版10　遺跡部分図(7)
図版11　遺跡航空写真
図版12　発掘調査スナップ
図版13　溝 (1)3号溝
図版14　溝 (2)
図版15　井 戸 (1)
図版16　井 戸 (2)
図版17　土 壙 (1)
図版18　土 壙 (2)
図版19　土 壙 (3)
図版20　土 壙 (4)
図版21　土 壙 (5)　遺物出土状態
図版22　掘立柱建物・柱列
図版23　陶 磁 器(1)
図版24　陶 磁 器(2)
図版25　かわらけ(1)
図版26　かわらけ(2)
図版27　かわらけ(3)
図版28　内耳土器（土　鍋）
図版29　内耳土器（ほうろく）
図版30　内耳土器底部・擂鉢
図版31　石 臼 (1)
図版32　石 臼 (2)
図版33　石 臼 (3)
図版34　石 臼 (4)　石擂鉢
図版35　砥　石
図版36　板　碑
図版37　五 輪 塔
図版38　五輪塔・不明軽石製品・その他
図版39　金 属 器
図版40　金属器X線透過写真
図版41　木 製 品(1)
図版42　木 製 品(2)
図版43　その他の遺物
図版44　古　銭

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1　調査に至る経過

群馬県太田市は県内第一の工業都市に成長すると同時に、人口も県下でも有数の激増地域になっている。すなわち、昭和30年10月１日（以下月日同じ）に50,019人であったのが、40年には87,897人、50年には



第１図　遺跡位置図

国土地理院
深谷１；50,000

110,724人と10万人を突破、58年現在では129,25人になっている。このため市としても、市内全域における道路整備、区画整理などが大きな課題となり、太田市総合計画に基づき、着々と整備事業を進めている。特に市街地に隣接した西本町から藤阿久にかけての蛇川と八瀬川にはさまれた地区では、西藤区画整理事業（92.9 ha）が昭和50年11月に認可され63年度までの予定で進行中であった。こうした中にあって昭和53年3月、県営太田東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査を担当していた県教育委員会文化財保護課の飯塚卓二主事が浜町地区の東武伊勢崎線の南側に位置する工事現場から遺構と遺物を発見した。その報告を受けた県教育委員会では、太田市教育委員会に当該地区の埋蔵文化財の存在の有無を照会した。これにもとずいて同市教育委員会では、トレンチによる確認調査を実施したところ、2軒の竪穴住居址を検出し、遺跡の拡がりが南方へ延びていることが確認された。また、遺跡地は区画整理事業対象地区であるが、群馬県住宅供給公社の県営浜町住宅団地として造成される用地が多く占めていることも判明した。県教委員会では開発に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施について太田市教育委員会、県住宅供給公社との調査を開始した。

昭和53年度に入り、ようやく関係者の調整が進み、4月24日の三者協議（県住宅供給公社、県教委、太田市教委）により、A地点の調査については次の方針で対応することが確認された。

1．発掘調査主体は「太田遺跡調査会」（会長太田市教育委員会教育長）とし、これに伴う経費は群馬県住宅供給公社が負担するものとする。また経理事務については直接、公社が担当する。

2．発掘調査の担当は群馬県教育委員会文化財保護課の石塚久則文化財保護主事とし、調査補助員として山下歳信氏が当るものとする。

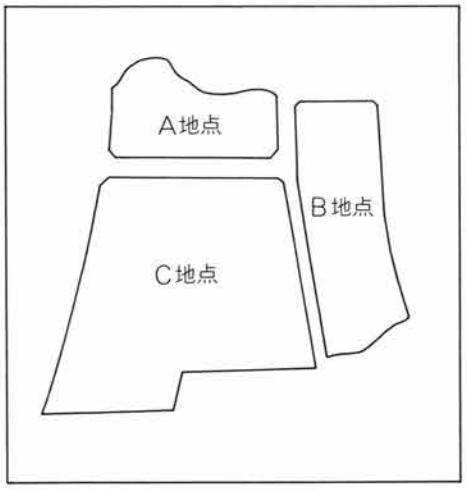
3．発掘届等文書事務及び作業員の雇用等の用件は太田市教委が分担するものとする。

4．発掘調査の準備は4月下旬に行い、5月上旬から調査を開始する。

以上の結果、4月26日から具体的な準備を始め、5月3日には発掘担当者を含めて再度協議し、翌5月4日付けで調査会と住宅供給公社の間で委託契約が締結された。そしていよいよ現地の調査は5月8日から開始され、8月まで続行され、成果を得ることができた。

つづいてA地点の東側に当るB地点については太田市教委が担当することとし、昭和53年10月23日から翌54年3月6日まで発掘調査が実施された。

さらにA地点の南側道路をへだてたC地点、14,176㎡のうち太田市への譲渡及び保留地、緑地等3,878㎡を除外した10,298㎡については昭和53年度に発足した財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当することとし、昭和54年4月12日に関係者間での、協議を経て、同月18日から発掘調査が始められ、翌55年2月20日まで続行されたものである。



発　掘　区　図

第2図　C地点全体図

2　遺跡の位置と地形

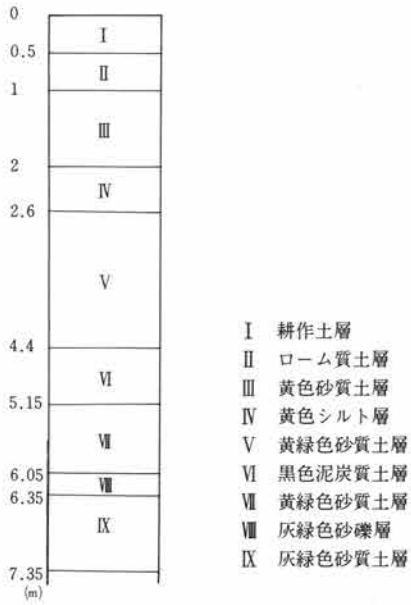
本遺跡は群馬県の南東部、太田市浜町59番地に所在し、市街地の南西約1.4kmに位置する。遺跡は足尾山系に属する八王子丘陵・金山丘陵の南側、標高42m前後の台地上に立地する。

八王子丘陵・金山丘陵は大間々町を扇頂としてその南側に発達する大間々扇状地の東に点在する小丘陵で、東側は渡良瀬川により足尾山地の南西縁から分離されたようになっている。金山丘陵は標高223m、古生層を基盤層としている。丘陵の東と西側には古生層が広がり、中央部分では第三紀の金山流紋岩類が不整合でこれを覆っている。北西部には強戸礫層と呼ばれる海成層が分布している。この層には多少の乱れがあり、構造線の影響と考えられている。

金山丘陵の南側には由良台地、邑楽台地が広がる。これらの台地は由良台地の西側に位置する木崎台地から邑楽郡板倉町まで続く自然堤防状の台地で、その後の大間々扇状地のⅠ面あるいはⅡ面形成時の開析作用により島状にとり残されてできあがったとされている。上部ローム・中部ロームの下には水成の砂質土が累積している。本遺跡の西側には由良台地がある。また、現在の太田市の市街地も同様の成因による洪積台地上に立地している。遺跡の南東には島状の台地が沖積地にはさまれ東西方向に並列し、東南部へ延びる。

本遺跡は現在は新田用水から入水している蛇川・八瀬川により東西を画されており、遺跡の南端で２河川は合流している。蛇川左岸、Ａ地点の北側には、小河川を伴う狭い沖積地が東から延びて、これが遺跡の北側を画する形になっている。標高はＡ地点の北側が最も高く42.7m、南にむかって序々に下がり、Ｃ地点の南端は41.3mである。標高42m以上に住居址が占地していることがわかる。

耕作土下の層位は、下位に示したとおりである。耕作土の下には関東ローム層の堆積があり、中位に板鼻黄色軽石（ＹＰ）が団塊状に含まれていた。その下位には厚い水成堆積の層が確認できた。この台地は由良台地や邑楽台地と同様の地層をもつ。Ⅵについては遺跡の北側、金山丘陵の南西にまで延びていると思われる。現状での地目は桑畑の他に水田の占める割合が高い。水田化については中近世の堰等の用水系の整備等を検討する必要があるが、由良台地とはやや様相を異にしている。蛇川が洪積台地を分断するように流路を形成していることもやや不自然な状況である。地質学的な検討からは、この金山丘陵と由良台地にはさまれた小地域は構造線の影響を受けて小さな変動をおこなっているともいわれる。



第３図　土 層 柱 状 図

左の基本土層はＢ地点南端、八瀬川右岸のカッテング面の記録で、太田高校（現、前橋市立女子高校）教諭、中島啓治氏、1979（昭和55年）の作図である。

Ⅰの黒褐色土は桑畑等による耕作土でこの土層中からの遺構の検出はなかった。

Ⅱはローム層である。土壙、小穴群、深度の浅い溝等はこの土層を掘り込んでいる。また、本遺跡の全ての遺構はローム層上面を確認面としている。

Ⅲ以下は井戸、５号溝、大溝が掘り込まれている。Ⅳ・Ⅵは不透水層と思われるがⅢ・Ⅴはその層中に小単位があり、それらの境目から少量の透水がある。また、砂層を混じえる場所もある。

3　周辺の遺跡

屋敷内遺跡とその周辺の地形については前述のとおりである。この地域には多期にわたって多くの遺跡が分布しており、それぞれが独立して、また、相互に関連しあいながら歴史を構成してきたと考えられる。ここではそれらの遺跡について調査例を中心に概観してみたい。

(1)先土器・縄文時代　　屋敷内遺跡から先土器時代の遺物は出土していない。太田市周辺においても現在のところ発見例は少ないが金山丘陵の東側の支丘陵には尖頭器を出土した焼山・金井口・細田の各遺跡が分布する。これらは先土器時代終末から縄文時代創草期のものであろう。

縄文時代の遺跡は八王子丘陵・金山の他に由良台地や邑楽台地の沖積地を臨む台地上からも検出されているが、現在のところ大規模遺跡の調査例はない。河川等の地形的制約が要因となり大規模集落が形成されなかった可能性も考えられる。

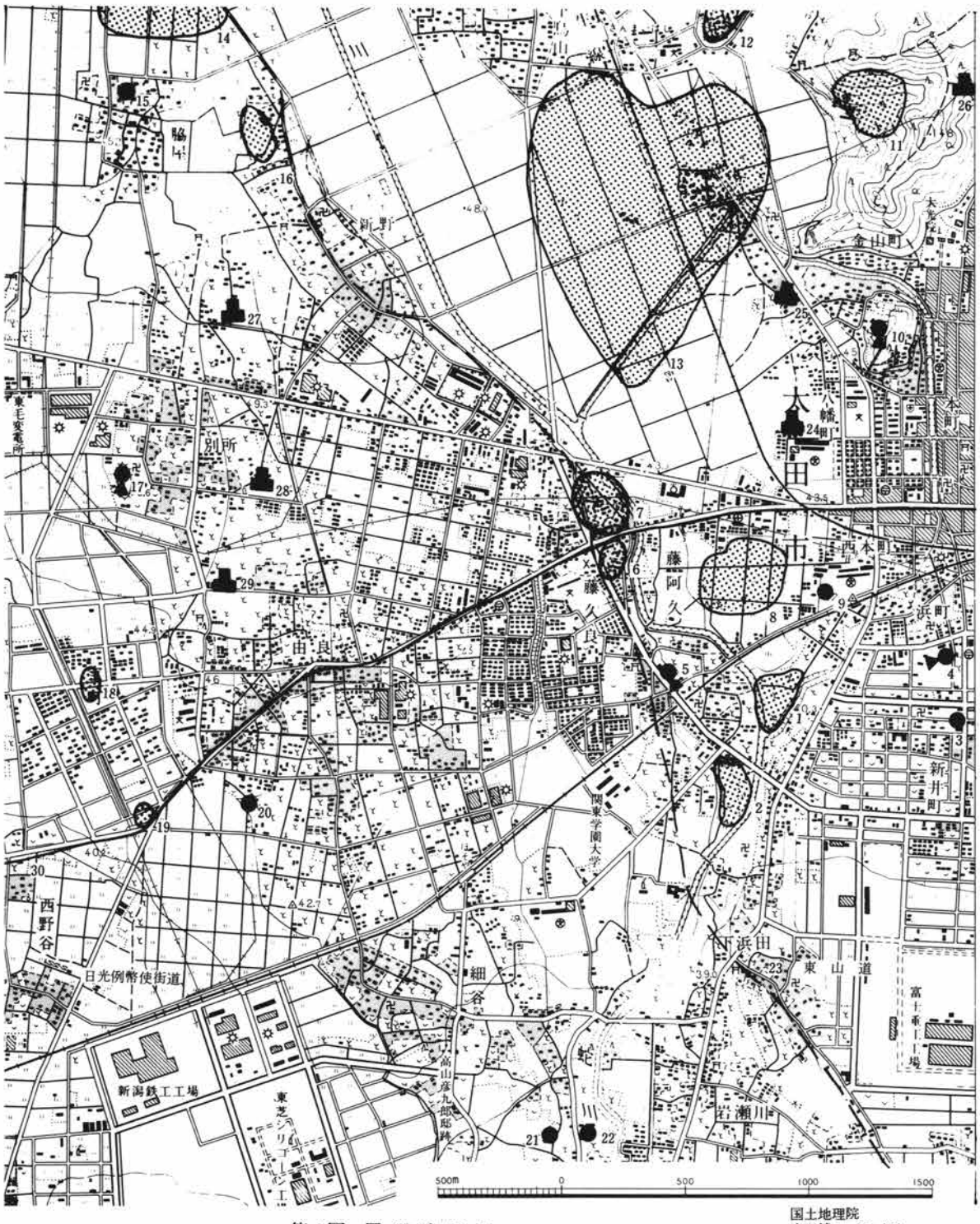
(2)弥生・古墳時代　　弥生時代の後期には群馬県西部、前橋台地西縁を中心として樽式土器を、赤城山南麓を中心に赤井戸式土器を使用した文化圏が広がっていたと考えられている。しかし、屋敷内遺跡の周辺には中期・後期とも弥生土器の分布は非常に稀薄である。一方、古墳時代の土器とされる石田川式土器を出土する遺跡は爆発的に増加する。遺跡は台地の縁辺のみならず大間々扇状地のⅡ面末端に広がる沖積地内に残存する微高地上にも存在することが米沢二ッ山古墳墳丘下の住居址や五反田遺跡の調査により確認されている。中・後期においても遺跡の分布は前期と同様の傾向を示しているが微高地上の分布はやや減少するようである。屋敷内遺跡においてもA地点では前期・後期の住居址が検出されている。また、北接して舞台遺跡、蛇川右岸、由良台地上には大道北遺跡・川窪遺跡と後期の集落が調査されている。

屋敷内遺跡においてはA・B両地点で古墳の周堀が確認されている。蛇川右岸には大塚古墳を中心とした古墳群が形成されている。また、B地点では前方後方形の周溝墓が検出されており、遺跡の南方3㎞に現存する朝子塚古墳や金山丘陵の支丘陵頂部に位置する八幡山古墳などの立地を考える上で重要な資料となろう。石田川式土器を使用する人々は彼らのもつ土木技術により、この地域の農耕地化に着手・成功をした。その後、この生産域を基盤とした社会が成立・展開しその中で天神山古墳や別所茶臼山古墳、後期群集墳が築造されていったと思われる。

また、6世紀にはいると金山・八王子丘陵は窯業生産の一大中心地となる。[註1] 金山丘陵の北面に位置する菅ノ沢遺跡では須恵器の窯址とともに製鉄炉址・炭窯址もあわせて調査されている。ここで生産された須恵器は県内を始め埼玉県北部にも供給されている。

(3)奈良・平安時代　　この時期の遺跡の調査例も極めて少ないが遺跡の分布は古墳時代後期と類似すると思われ、個々には拡大傾向にあろう。遺跡の北西5㎞には創建時の瓦が白鳳期である寺井廃寺があり、この近接地には東山道新田駅の存在が推定される。[註2] 716（宝亀2）年以前の東山道は新田駅より南折し武蔵国へ向う路線が本路とされており、この武蔵路には由良台地の東縁を新野・藤阿久・下浜田へと続く旧路があてられている。また、太田市市街地の南部は「太田条理」と称され、条理制の遺構が広範囲に残存していたとされている。

(4)中世　　屋敷内遺跡の遺構・遺物は室町時代後半から江戸時代前半に集中する。1157（保元2）年、新田義重は新田荘の下司職[註3]となり、以後新田氏は一郡一荘のこの地域を基盤に一大武士集団へと発展している。南北朝の統一を境にやや衰退するが、新田荘は岩松氏に引き継がれている。現在の新田郡内には反町・世良田・江田・岩松・脇屋といったところに館址が残っている。



第4図　周辺遺跡図

国土地理院
上野境1；25,000

金山城は金山丘陵全体を城域とする山城で、戦国期、岩松氏の再築で岩松・由良氏の一大拠点となったと考えられるが後北条氏により戦略され1590（天正18）年に廃城となっている。

また、尾島町世良田にある長楽寺は新田義季が開基となり、以後、新田・足利・徳川氏とその庇護を受けて存続した名刹で鎌倉時代から室町時代初期には北関東における勉学の府となっていたようである。1976（昭和51）年の調査[註4]では舶載陶器や茶臼（喫茶の習慣を証明する）など高度な文化の受容があったことを示す遺

物が出土している。そして、太田市周辺には五輪塔・板碑などの石造物が多く、板碑は太田市で287基、新田町で182基、尾島町で215基[註5]が確認され、この地域の文化の一断面をみることができる。

(5)近世　　徳川家康の関東移封、江戸幕府の成立と幕藩体制が整備、強化される中、1646（正保３）年には五街道に準じた主要街道として日光例幣使街道が制定され、太田宿が設置されている。また、大光院新田寺（呑竜様）が幕府により保護されたため太田宿はその門前町としても発展していった。

江戸時代の中頃、屋敷内遺跡は太田宿の西南、今井村内に位置していたと思われる。1770（明和７）年の「東今井村様子書上帳」[註6]によると３給支配地であり、太田町や隣接村の百姓が田畑を耕作しており、百姓家が一軒も所在しなかったことが記されている。1872（明治５）年の地籍図では調査区域は畑地として記されている。ただし、出土遺物の年代に対応する江戸初期の文献の所在については不明確でその時期の今井村の状況を把握するには至らなかった。

註

（註１）　菅ノ沢遺跡は1967（昭和42）～79（54）年にかけて駒沢大学が調査を実施した。

（註２）　新田駅、東山道武蔵路については研究者の間で論議の途上であるが今回は『群馬県史研究』19によった。

（註３）　新田荘に関しての論文も多数ある。新田荘の成立については峰岸純夫「東国武士の基盤」『荘園の世界』1972（昭和48）年を参照した。

（註４）　大江正行他『長楽寺遺跡』尾島町教育委員会　1978（昭和53）年が報告されている。

（註５）　ここにあげた数値は津金澤吉茂『板碑の総合研究』２地域編　1983（昭和57）年のＰ90～91の表による。

（註６）　『太田市史（近世資料３）』1983（昭和58）年に登載されている。

表１　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時期	遺跡の概要	文献
1	屋敷内遺跡	浜町	縄・古 中・近	本報告の遺跡。Ａ地点を太田市遺跡調査会、Ｂ地点を太田市教育委員会が調査する。広く中近世の遺跡が確認された他、Ａ地点からは撚糸文土器と古墳時代前期・後期の住居址、Ｂ地点から、前方後方形の周溝墓、円墳が検出された。	
2	川窪遺跡	藤阿久町	古	蛇川右岸、由良台地の縁辺に位置する。1970（昭和45）年、太田高校郷土クラブが調査を実施する。鬼高～平安時代居住域。	(62)
3	新井八幡神社古墳	新井町	古	角閃石安山岩使用の横穴式石室を有する。東西に延びる台地上に古墳群が広がる。	(2)
4	稲荷山古墳	新井町	古	前方後円墳。	(62)
5	大塚古墳	藤阿久町	古	６世紀代の前方後円墳と考えられる。	(62)
6	藤阿久大道北遺跡	藤阿久町	古	蛇川右岸、由良台地上に立地する。遺跡は現在の河道から台地内部に向かって300ｍ程広がっている。	(62)
7	藤阿久古墳群	藤阿久町		後期群集墳。上毛古墳綜覧には周辺に７基の存在が記載されている。	(61)
8	舞台遺跡	西本町	古・近	金山丘陵の南東、蛇川左岸の洪積台地上に立地する。現在は水田化している。４地点が調査され古墳時代後半の集落址であることが確認された。Ｄ遺跡の住居址下検出の土壙からは多量の炭化米が出土している。	(50)
9	稲荷塚古墳	西本町	古	円墳。	(62)
10	八幡山古墳	八幡町	古	金山丘陵の一支丘の頂部に位置する全長80ｍの前方後円墳。竪穴系の主体部を有すると考えられている。『上毛古墳綜覧』の鳥之郷村第１号墳。	(8)
11	貧之塚古墳群	大字太田	古	後期群集墳。	(62)
12	長手口古墳群	大字太田	古	後期古墳群。	(62)

No.	遺跡名	所在地	時期	遺跡の概要	文献
13	三枚橋南遺跡	鳥山大島	縄～古	包蔵地、縄文時代中～後期の土器、古式土師器を出土する。	(62)
14	堂原遺跡	大字脇屋・新野	縄	由良台地の北端に位置し、沖積地に臨む。1951（昭和26）年、69（昭和44）年、72（昭和47）年の3回にわたり調査が実施される。E地点からは称名寺～堀之内Ⅰ式を中心とする縄文中期末～後期の土器が出土している。	(48)
15	オクマン山古墳	大字脇屋	古	径35mの円墳。3度の調査が実施された後消滅した。内部主体は輝石安山岩の割れ石を使用した横穴式石室である。墳丘には形象埴輪を含めた埴輪列があった。	(62)
16	釣堂廃寺跡	大字脇屋	奈～平	堂原遺跡の南側、沖積地を臨む場所に位置する。国分寺系の布目瓦、軒丸瓦の瓦当面を出土している。	(30)
17	円福寺茶臼山古墳及び新田氏累代の墓附石幢	大字別所	古・中	由良台地の西縁、沖積地を臨む台地上に位置する。茶臼山古墳は全長157mの前方後円墳、5世紀前半の築造と考えられる。新田家累代の墓は茶臼山古墳の前方部東側を削平して画されており、五輪塔、石層塔など20基余りがある。石幢は古墳の墳丘上にあり、1344（長享3）年の銘文が見られる。	(63)
18	諏訪下遺跡	宝町	古	大間々扇状地南端に広がる沖積地内の微高地上に立地し、由良台地の西縁から250mを測る。遺構としては土壙、溝を検出する。周辺の沖積地には古墳時代前期の水田の存在が推定されている。	(25)
19	五反田遺跡	宝町	古～平	諏訪下遺跡の南側に位置し、同様の立地をしている。古墳時代前期の竪穴住居址、奈良、平安時代の掘立柱建物遺構を検出する。他に土壙・井戸がある。	(25)
20	由良狐森古墳	大字由良	古	由良台地の西側縁辺に位置する後期古墳。人物埴輪、鍔釧等を出土。	(62)
21	稲荷塚古墳	大字細谷	古	蛇川右岸、白山古墳が近接する。蛇川沿いには古墳群が続く。径35mの円墳。主体部は粘土槨。	
22	白山古墳	大字細谷	古	蛇川右岸、由良台地の南端に位置する。獣形鏡出土。	
23	東山道		古代	宝亀2年のルート変更以前、新田駅から武蔵国へ向う路線が由良台地の東縁に沿ってあったとされている。また、東下浜田、新井町一帯はいわゆる太田条里と呼称され条里制遺構が残っていたとされている。	(31)
24	大島城跡	八幡町	中	太田女子高校の北側に位置し、字城の内という地名を残す。東西に並ぶ並郭構造と推定されている。金山城の外堡。	(57)
25	大島館跡	大字大島	中	大島城の北0.5kmに位置する。	(57)
26	金山城跡	大字太田	中	標高230～290mの金山に築造された連立式の山城で、本丸、二の丸、三の丸をはじめとした諸郭は全域が石垣構築となっている。平安末期に新田氏の持城として構築されたと伝えられ、1469（文明元）年横瀬国繁により再構築、由良氏、北条氏の手をへて1590（天正18）年廃城となった。	(57) (59)
27	脇屋義助館跡	大字脇屋	中	正法寺東南約1kmに位置するが館跡の堀・土塁等はほとんど壊滅した。多宝塔・骨蔵器を出土し、正法寺で収蔵する。	(57)
28	台源氏館跡	大字由良	中	由良台地の中央、円福寺茶臼山古墳の東方約0.5kmに位置する。土塁が一部残存している。	(57)
29	由良城跡	大字由良	中	台源氏館跡の南北約0.5kmに位置する。宝泉城とも呼ばれ金山城の出城である。北と西側の土塁や堀の跡が残存する。	(57)
30	日光例幣使街道		近	1647（正保4）年、日光例幣使の派遣に伴い整備された街道である。屋敷内遺跡の北方600mを通過し、東に太田宿、西に木崎宿があった。享保年間（1801～03）年にルートの変更があり以前は、現在の東武伊勢崎線沿いにあったといわれている。	(3)

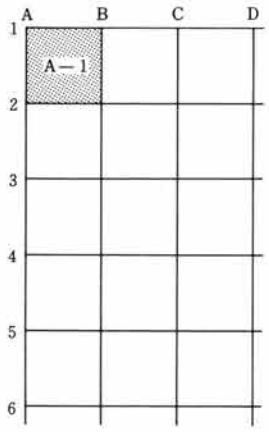
4　調査の方法と経過

屋敷内遺跡C地点の発掘調査に着手するにあたり、前年度に行われたA・B地点の調査成果より、周溝墓や古墳、中世館址の存在を予想していた。とりわけ古墳では、上毛古墳総纜に下表のとおり、屋敷内の小字内に太田町6～8号が記載されている。同8号墳はA地点とC地点にかかる小字内の古墳で、A地点からは確認されなかったため、本遺跡に存在することを確実視していた。また、山崎　一は、A地点の堀から、群馬県古城塁址の研究（補遺篇）の中で、屋敷内遺跡を今井屋敷と想定したが、B地点の調査では館址の存在が確認できず、今回の調査の大きな課題として持ち越されていた。

上　毛　古　墳　総　纜（439頁）

番号	形　状	現　状	発掘の有　無	所　在　地 字・番地	地目	畝　・　歩	規　模(尺) 大サ　高サ
6	圓　型	杉　林	有	屋敷内　1489	山　林	23　40	38　5
7	同	山　林	同	同	同	35　07	21　6
8	同	同	同	同	同	25　20	58　8

今回の調査に入る段階での遺跡地は、放置された桑がのびた平坦な荒地であり、古墳の盛り土や土塁の痕跡などは認められなかった。調査区域内には前年の確認調査時に重機によってあけられた5本のトレンチがあり、調査はこれらのトレンチ内の精査より開始した。古墳の検出が予想された遺跡北西側一帯に、幅1.5mのトレンチを5mの間隔で設定し、周堀の検出に努めたが古墳は確認できず、重機による表土剝ぎを実施することにした。排土置場が確保できなかったため、調査区北側の排土を一旦、南側へ移すこととなった。表土剝ぎ後、確認できた溝を試掘し、南北走行の5号溝がいわゆる薬研堀の形状を呈し、館址に関連する可能性が強いと考え、この溝の走行にあわせて調査区内に4Mメッシュのグリッドを設定した。このグリッドは磁北より西へ26°ふれる。グリッドには右表のように、東西方向にはアルファベット、南北方向にはアラビア数字を使用し、北西隅のポイントをグリッド全体の呼称にあてた。なお、遺構の平面測量には平板を使用し、1/20スケールの遺構原図を作成することとした。

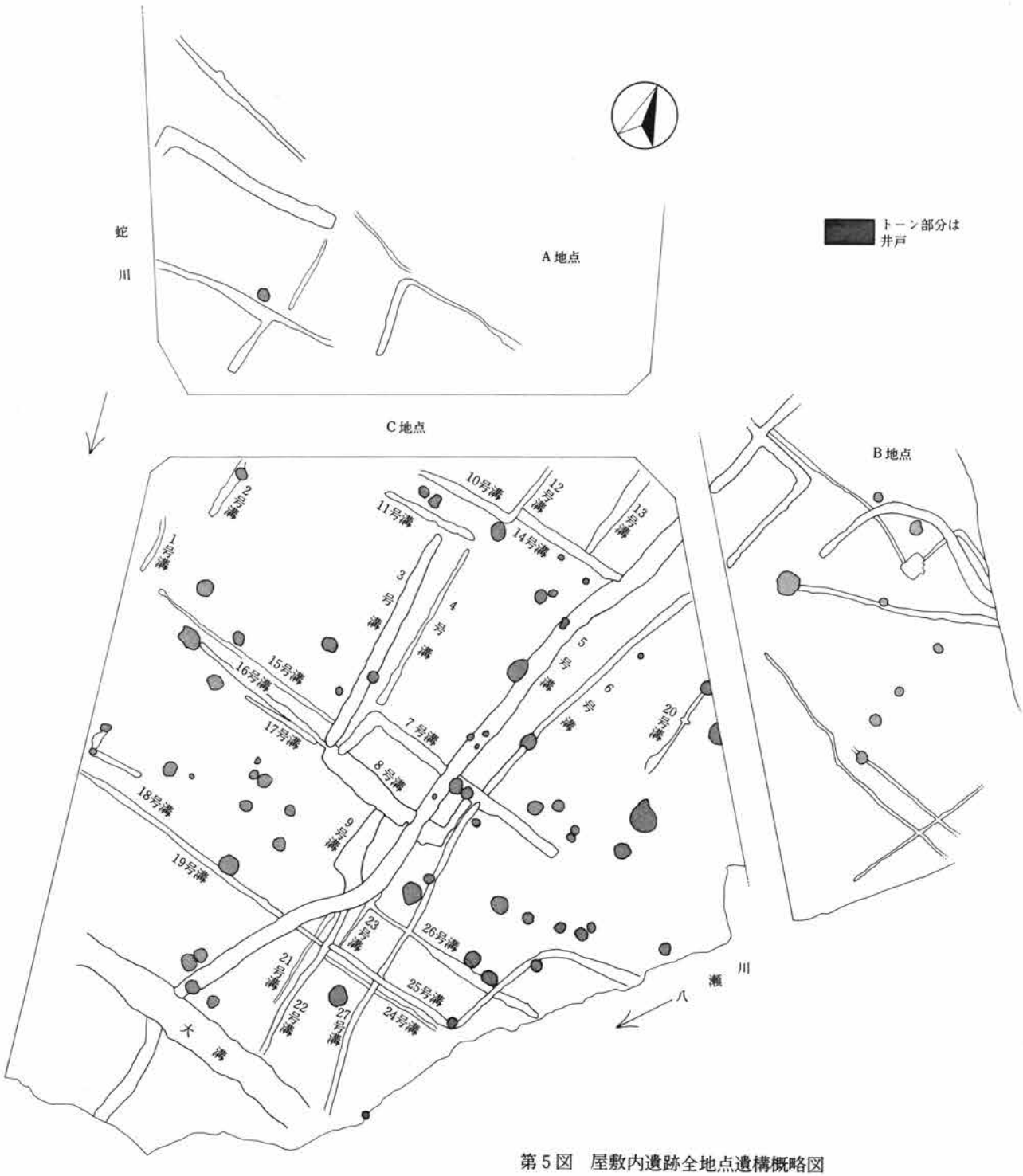


表土剝ぎの結果、古墳や住居址の存在しないことが判明したが、溝・井戸・土壙がきわめて多数確認された。梅雨時期をひかえ、井戸の発掘をさけ、溝や土壙の調査を先行して行ったが、水はけの悪い土地のため台風シーズンが終わるまで排水には悩まされ、特に遺物出土状態の把握には困難が多かった。8月下旬には排土置場が確保され、遺跡全体の表土剝ぎがすすんだ。また、夏休み中の神奈川大学考古学研究会の応援をうけた。溝の大半が掘り上がった段階で館址の方形区画が存在しないことが確実となり、遺跡の性格が大きな疑問となってきた。3つの小穴群から、建物址検出のため長い時間を費やしたが目的は達成できなかった。溝や土壙では、重複の先後関係把握に力点をおいた。

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

秋以後は井戸と大溝の発掘に着手した。井戸は試験的に担当者が発掘した所、深さ５ｍ近いものがあり、下方で大きくオーバーハングするなど、安全対策上の問題が多かったため、掘削作業を業者委託した。蛇川の橋梁工事や住宅建築の設計変更があり、調査中途の12月下旬に遺跡の航空写真撮映を実施した。

発掘調査は２月15日に修了、２月20日に現場からの撤収を完了した。



第５図　屋敷内遺跡全地点遺構概略図

Ⅱ　調査の内容・遺構

1　溝　（第６～８図，図版12・13）

今回の調査においては27条の溝が検出された。このうち、流水の痕跡が確認できたものは５号溝と大溝の２条であり、他はその痕跡が認められなかった。５号溝、大溝は水路としての機能を有していたと思われる。また、５号溝は時期決定が困難な点もあるが、いずれの溝よりも前出の遺構と考えられ、次時期の遺構が構築される時点で、埋没が既にほぼ終了していたと考えられる。

他の溝は居住あるいは生産のための区画の機能を有していたと思われるが、それぞれの機能を追求するまでには至らなかった。但し、遺物の出土状態、埋没土の状態などの共通点をまとめると１号・２号溝を西辺に、４号溝を東辺に、15～17号溝を南辺に、11号溝を北辺にした、矩形の区画が存在するようにも思われる。また、７号・８号溝は遺物が多量に多層にわたり出土しており、出土状態に共通性があり、ほぼ同時期の形成と考えられる。また、その他に比較的遺物の出土した溝は３号・10号・14号溝である。

他遺構の分布との関係を分析すると井戸との重複が多いことが看取できた。井戸66基中21基が重複する。前後関係からみると溝が完全に埋没した後に井戸が構築されている場合が圧倒的に多く直接の関連性は認められなかったが、今後、同様の性格を有する遺跡における状況との比較検討も必要な点である。

１号溝

Ａ―14～Ｃ―18グリッドに達する15.6ｍを検出した。走向はＮ４°30′Ｅ、南端は不明瞭に立ち上がる。Ｂ―16付近での上端は0.82ｍ、下端は0.3ｍを測る。断面は壁面の変換点が不明瞭なレンズ状を呈する。両端の底面の比高差は20㎝である。埋没土は暗褐色で、上層には軽石が、下層にはロームブロックが多く含まれていた。

２号溝

Ｃ―12～Ｃ―15グリッドに達する長さ12ｍを検出した。走向はＮ14°Ｅである。断面形は薬研状を呈し北側での規模は上端1.4、下端0.35ｍである。残高は50～70㎝である。埋没土は４層に分層ができた。底面は南端が高く比高差は５㎝である。１号井戸、２号・11・23号土壙と重複するがいずれよりも後出と考えられる。

４号溝

Ｋ―８～Ｍ―15グリッドまでの22.4ｍを検出した。走向はＮ10°Ｅと３号溝のそれとほぼ一致していた。Ｍ―14グリッド付近から南はやや西に傾く。確認面での規模は上端0.6～1.2ｍ、下端0.5ｍ、残高8㎝であった。埋没土は暗褐色土の一層、北側、Ｌ―10グリッド埋没土中から古伊万里の碗を出土する。他に煙管の雁首が出土した。

６号溝

この溝はＢ地点においても確認されているがＣ地点ではＳ―３～Ｘ―28グリッドまでの84ｍを検出した。走向は西側に張り出す弧状を呈し、Ｓ―11グリッドより上はＮ28°30′Ｅ、これよりＳ―16グリッドまではＮ17°30′Ｅ、下はＮ６°Ｅの走向を示す。断面形は箱形を呈する。底面のレベルは北端で41.69ｍ、南端との比高差は25㎝である。埋没土は暗褐色土と灰褐色土が交互に堆積している。７号溝よりも後出である。

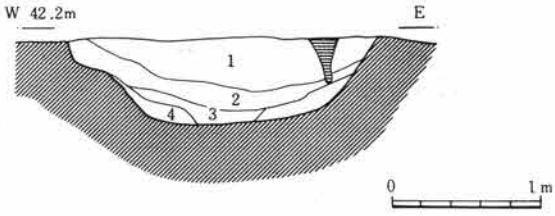
3号溝　（第6図，図版12）

J—9からM—18グリッドにかけて検出されたほぼ直線的に延る南北溝である。走向はN 8°Eである。長さ31.2m。断面形は薬研状を呈するが上面の幅が広いものである。K—12からL—16グリッドにかけては、壁面の下位に稜が顕著に残り、これより下位は斜めに大きく外反する壁面がつくられている。他の部分も同様の形状を有していたと考えられるが、崩壊が進行し残存しなかったと思われる。上面の幅は1.7～2.5m、底面は、0.7～0.8mであった。底面は南端に向って序々に低くなり、両端の比高差は約30cmであった。壁面の良好な部分の高さは66cmを測り他地点においても30cm以上の残存高であった。

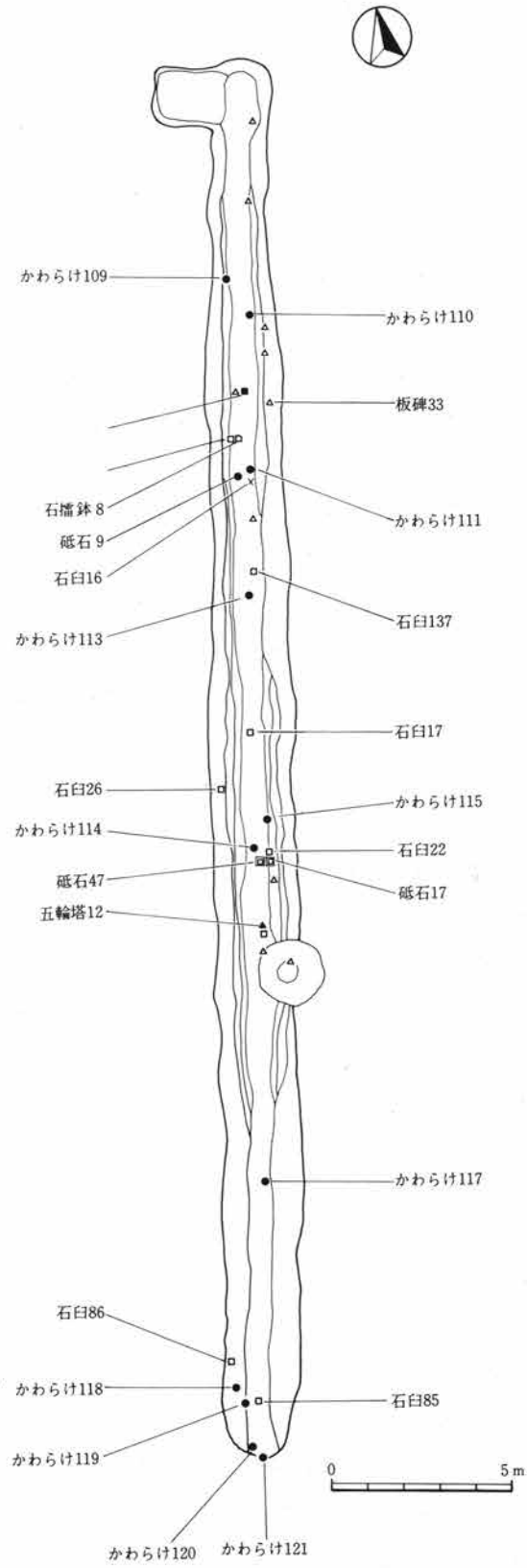
17ライン以南で8・15・16号溝とL—15グリッドでは4号井戸とそれぞれ重複している。8号溝を除いてこれらは3号溝よりも後出のものである。8号溝との重複関係は土層の状態からは確認できなかった。

埋没土は部分的に異なるが、レンズ状の堆積を成し3層程に大別できる。Bラインの南、1.2mの埋没土の下層にはスサ状の炭化物を含む焼土塊が確認できた。

出土遺物は地点を限らず全体から出土しており、器種別の傾向等は看取できない。埋没土の上層から中層には溶結凝灰岩の角礫をはじめとした、円・角礫が多量に含まれており、これらと共に、五輪塔や板碑片が出土している。五輪塔等は第一次的な機能を既に失っ



①暗茶褐色土層　粘土粘を含みやや灰色味を帯びる粘質土層。径0.5～5cm程のロームブロックを多量に混入する。
②黒褐色土層　やや灰色味を帯びた粘質土。ロームブロック散見。
③暗褐色土層　灰色味を帯び著しく粘性が強い。ローム粒散見。
④暗褐色土層　灰色味の強い粘質土層、カーボン、ブロック散見。



第6図　3　号　溝

ていたと考えられる。石臼についても同様の出土状態である。かわらけ、内耳土器は多数出土し、その内、実測可能な個体はかわらけ13、内耳土器２であった。57は美濃焼の皿で、K—12グリッドの底面直上からの出土である。

金属器は刀子がK—10グリッドの底面直上から出土している。また、埋没土中から煙管が出土した。

５号溝

P—２からQ—35グリッドにかけての長さ104ｍを検出した。北端はＢ地点へ続いており、南端についても調査区域外へ延びている。調査区内では大きく２度走向を変えている。北端からR—19グリッドまではやや西に張る弧状を呈しながらN16°Eの走向である。R—14グリッドから、大溝まではN38°E、それ以南はK６°Eの走向である。

断面形は逆台形状を呈し、上面の幅は、2.7～3.28、底面の幅は1.36～1.64ｍ、深さはQ—27グリッドで121㎝、R—19グリッドで85㎝、南端のQ—35グリッドで57㎝であった。底面は著しい段差はなく緩やかに南側に向って下がり、比高差は50㎝である。また、平坦面の中央部に細砂を埋没土とする小溝があった。この小溝は５号溝の全体にわたってみられたものである。水の流れたことを証明している。

埋没土は地点でややことなるが自然堆積状態であった。遺物は少量であったが古墳時代の杯・甕が出土している。この点はやや注目されるが、遺構との直接の関係を把握するまでには至らなかった。

７号溝　（第７図）

N—18からはじまりN—16で鉤の手状に東に約78°曲がりV—14グリッドに達する溝である。東西の走向はN27°W、南北の走向はN25°Eである。長さは44.5ｍである。８号溝との重複関係は不明な点が多いが長方形の小区画をつくり出している。N—16グリッドの外側の立ち上がりは上面がやや張り出し丸味をおびている。

断面形は上面の幅の広い逆梯形を呈し、底面は丸味を帯び幅も比較的広いものである。部分的に壁面の中位に弱い稜が認められた。深さは東端の残存状態が良好で約60㎝、他も30㎝以上の残存状況であった。

埋没土は地点により異なるが、中層にロームブロックを多く含む褐色土が流れ込んでいることが特記できる点である。また、埋没土中には全層にわたり、安山岩を中心とした角礫・円礫が多く含まれており、底面に近いものも多かった。

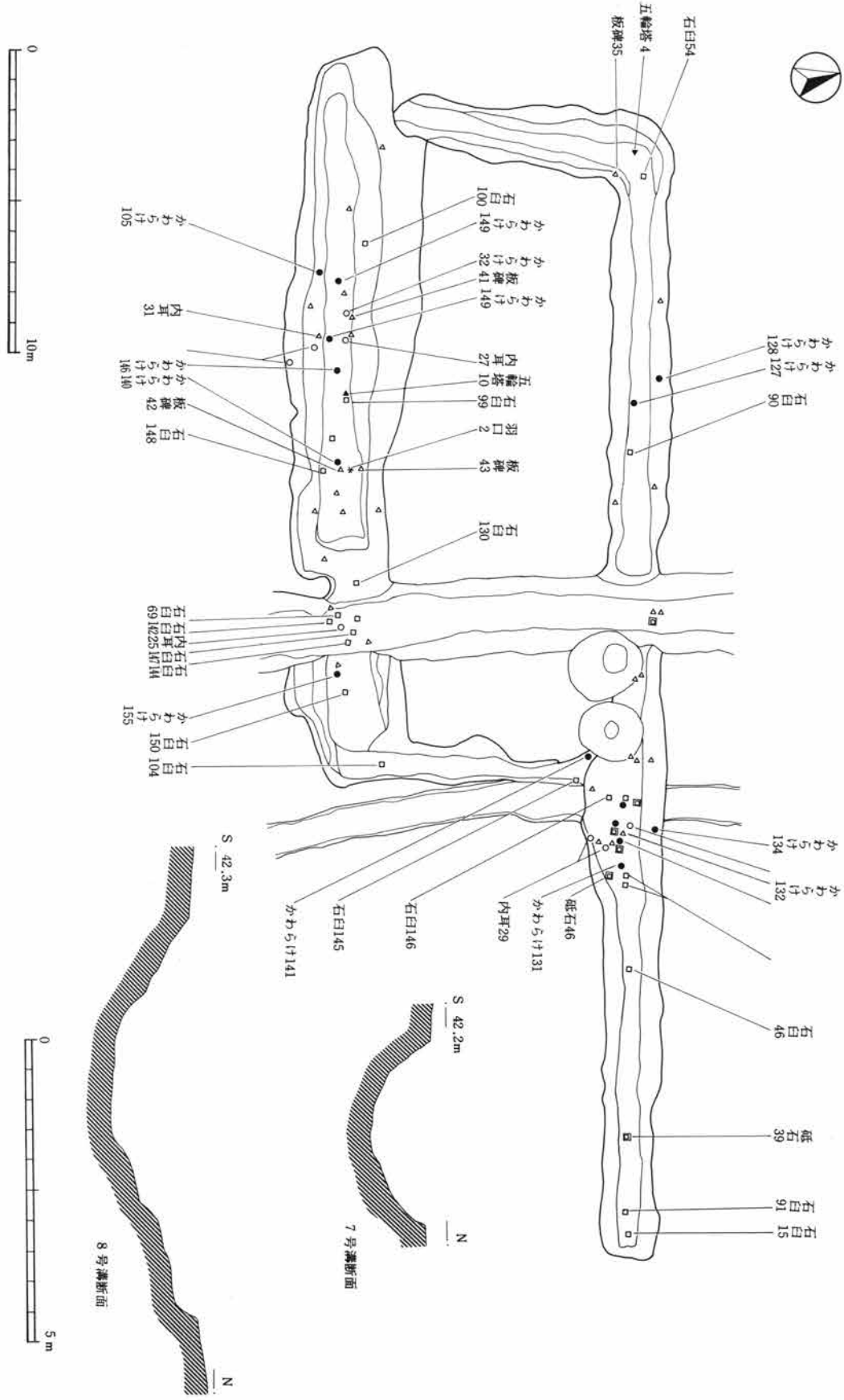
５・６号溝、40・41号井戸と重複関係にあるがいずれの遺構もこの溝よりも後出である。

出土遺物は遺構内全体から出土したが、底面に近いものは少なく、埋没土の上、中層が主体となっていた。量的には東西方向の部分に多く認められた。

五輪塔、板碑は３号溝同様、礫としての意識しかないようである。かわらけは実測可能な個体、15個体、内耳土器は５個体が出土している。砥石は11個体を出土しており、他の遺構に比して出土量が多い。

８号溝　（第７図）

M—18からR—15グリッドにかけて検出されたものでS—17グリッドで鉤手状に屈曲し、その北端で７号溝と重複する溝である。東西の長さは24.2ｍ、走向はN78°W、南北は長さ8.6ｍ、走向はN25°Eである。東西溝の断面形は薬研と箱堀が組みあわさったようで、壁面の中位に弱い稜をもち、これより上は大きく外反する形状を呈している。上面の幅は最大部分で4.3ｍ、底面の幅は1.4ｍである。深さは良好な部分で62㎝であった。Q—17グリッドでは南側の上面が細く据れ、底面のレベルも約20㎝程高くなっていた。鉤の手の南北溝は上面の幅が1.3ｍと東西に比して著しく小規模になる。底面の高さも鉤手状に屈曲する部分で10㎝程高くなっている。埋没土は暗褐色土層で上層にはローム粒が含まれるが、３・７号溝のような含入状態で


石臼54
五輪塔4
板碑35
かわらけ 128 127
石臼 90
かわらけ 134
かわらけ 132
石臼 46
礎石 39
石臼 91
石臼 15
礎石46
かわらけ131
内耳29
石臼146
石臼145
かわらけ141
かわらけ 149
かわらけ 32
板碑 41
かわらけ 149
内耳 27
五輪塔 10
石臼 99
羽口 2
板碑 43
石臼 130
石臼 100
かわらけ 105
内耳 31
かわらけ 146
かわらけ 140
板碑 42
石臼 148
石臼 69
石臼 162
内耳 25
石臼 167
石臼 144
かわらけ 155
石臼 150
石臼 104
S 42.2m
N
7号溝断面
S 42.3m
N
8号溝断面
0
10m
0
5m

第7図　7・8号溝

はなかった。

東西溝の部分で５号・９号溝と南北溝で６号溝・41号井戸と重複するが、いずれの遺構よりも前出である。３号・７号溝との重複関係は断定できない。

遺物の出土状態は３号・７号溝と同様の状況である。但し、特記すべき状況としては内耳土器の完型品が多く出土していることである。４は底面から41㎝、６は28㎝、12は49㎝離れての出土である。他にかわらけで図化しえたものが、13個体、擂鉢３、五輪塔は火輪１、羽口片３、石臼16、板碑片40、砥石１である。

９号溝

P―18～Q―21グリッドで検出した。前後関係は不明であるが最低３度の掘りかえしがあったと考えられる。西側の溝はQ―21グリッドで東に走向を変え５号溝と重複している。26号溝と同一の可能性も考えられる。N～P―18グリッドでは８号溝の埋土中に走向をほぼ同じにしてつくられており、N―18グリッド、８号溝の北側の立ち上がりで検出した溝につながると思われる。

10号溝

H―７からK―６グリッドに至る東西溝である。走向はN16°Wである。東端は123号土壙と重複する。12号・14号溝と同一の可能性もある。上面の幅は16.8ｍ、底面の幅は0.92ｍである。底面は東に向って下がり、比高差は約30㎝である。埋土は軽石とロームブロックを含む暗褐色であった。2ヵ所に礫が集中しており、これらに混在し石臼、五輪塔、陶器片が出土した。

11号溝

10号溝の南５ｍに位置する東西溝で、G―９～K―８グリッドに達する。16.1ｍを検出した。走向はN12°Wである。掘り方は不明確で浅い箱形の断面形を呈する。西端は径、1.0ｍの土壙状のピットと重複している。北側の立ち上がりにはピットが多く重複している。埋土は明褐色土層で軽石を多く含入していた。

12号溝

K―12からL―６グリッドにいたる9.8ｍを検出した。走向はN19°E、南に向って低くなり、比高差は43㎝であった。小規模であるが断面形は薬研状を呈しており、埋土は軽石を少量混入する明褐色土層である。遺物の出土量は少なかったが五輪塔の地輪をはじめ、内耳土器片等を出土している。

13号溝

N―１～O―５グリッドにたっする14.2ｍを検出した。14号溝との重複関係は不明である。走向はN16°Eで底面の比高差は15㎝で南側が高かった。断面形は確認面が低く不明瞭な点が多いが箱形を呈していたと思われる。埋没土は軽石、ローム粒混りの明褐色であった。

14号溝

L―６～P―４グリッドに至る17.4ｍを検出した。走向はN12°Wである。N―５グリッド付近は底面が下がり残存の壁高も72㎝を測った。上端の最大幅は1.9ｍ、下端は0.8ｍであった。薬研形の断面形を呈する。埋没土は暗茶褐色土、黒褐色土、暗褐色土の３層に分かれていた。遺物は上、中層から多く出土している。５号溝より後出である。

15号溝

D―18～M―17グリッドにたっする35.4ｍを検出した。走向はN17°W、底面は東端にむかって低くなり、比高差は25㎝である。断面形は上端が外反する逆梯形を呈している。埋没土は黒褐色と暗茶褐色土の２層に大別できる。出土遺物はかわらけ、石臼、板碑があったがいずれも東側からの出土である。３号溝との重複関係は不明である。

16号溝

Ｉ—19～Ｍ—18グリッドの間の26.1ｍを検出した。走向はＮ19°Ｗと15号溝とほぼ等しいものである。東側にむかって低く、比高差は５㎝である。Ｋ—18グリッドでは一部分掘り返しがおこなわれている。断面形は逆梯形を呈しており、上端の幅は0.7～1.5ｍである。埋没土は黒色土と暗茶褐色土の２層に大別できる。

17号溝

Ｇ—18～Ｍ—18グリッドにいたる13.6ｍを検出した。16号溝の南に接してある。走向はＮ13°Ｗである。底面は東に低く比高差は25㎝を測る。上端の幅は0.64ｍ、下端は0.4ｍであった。

18号溝

Ｇ—25～Ｉ—24グリッドにいたる8.16ｍ、を検出した。走向はＮ97°Ｅである。上端の幅は１ｍ前後、下端は70㎝であった。底面は西に向って低く、比高差は20㎝であった。西端は32号井戸と重複するが前後関係は不明である。

19号溝

Ｈ—25～Ｓ—23グリッドにいたる47.9ｍを検出した。走向はＮ15°Ｗである。底面はほぼ一定である。

20号溝

Ｖ—５～Ｖ—９グリッドに至る南北溝である。北端で14号井戸と重複するが前後関係は不明である。また、確認できた最南端では径４ｍの皿状の窪みがあり、内耳土器を始めとする遺物が多く出土している。溝自体の走向はＮ14°Ｅで、比高差は17㎝である。長さ14.3ｍ、幅0.5ｍ、残高25㎝である。

21号溝

Ｓ—22～Ｓ—28にかけて検出された。南北溝である。長さ16.7ｍ、上端の幅0.75ｍ、下端の幅0.55ｍである。残存壁高は３～15㎝である。比高差はない。東側にはこの溝と平行するように22号溝がある。埋没土はローム粒を含む暗褐色土層。

22号溝

Ｂ—22～Ｔ—28グリッドにかけて検出された南北溝である。長さ26.7ｍ、上端の幅1.1ｍ、下端の幅0.8ｍ残存壁高は10～20㎝である。埋没土はローム粒を含む暗褐色土層である。

23号溝

Ｓ—20～Ｓ—22グリッドにかけて検出された南北溝。長さ10.8ｍ。北端は５号溝、南端は25溝と重複する。上端の幅0.85ｍ、底面の幅0.6ｍ、残存壁高は約10㎝である。

24号溝

Ｓ—24～Ｘ—22グリッドにかけて検出された東西溝。長さ20.8ｍ。西端は22号溝と重複する。東端は不明瞭である。箱形の断面形を呈し、上面の幅0.75ｍ、底面の幅0.5ｍを測る。残存壁高は37㎝、埋没土はローム粒を少量含む褐色土層である。

25号溝

Ｓ—23～Ｃ′—15グリッドにかけて検出された東西溝。Ｙ—17～22グリッドの間は走向を変えて南北方向Ｎ29°Ｗに掘られている。薬研状の断面形を呈し壁面の下位に弱い稜をもっている。上面の幅1.25ｍ、底面の幅0.3ｍ、深さ約66㎝である。埋没土は黒色味のある褐色土が全層にみられるが、埋没土中の遺物から近年まで使用されていた可能性もある。

26号溝

Ｓ—21～Ａ′—17グリッドにかけて検出された東西溝である。長さ32.2ｍ。西端は23号溝と重複する。断

面形は、逆梯形を呈するが、VからWグリッドにかけては上面が著しく広がっている。深さは15～60㎝、全体的には東に向って低くなるが、X—20グリッドは他に比してやや低くなっている。埋没土はローム粒を含む暗褐色土である。

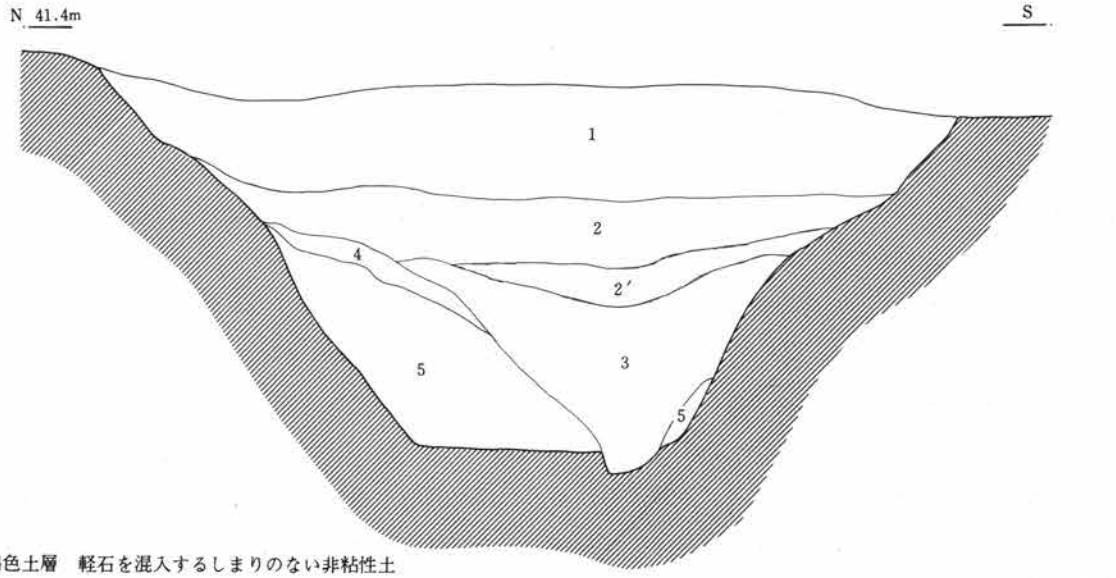
27号溝

S—24からU—23グリッドにかけて検出された東西溝。長さ8.56m。掘り方は不明瞭で一見畝状を呈している。上面の幅0.4m、深さは10㎝。埋没土は暗褐色土が一層である。

大　溝　（第8図）

調査区の南側、L—31～W—29グリッドにかけて検出した溝である。西端は蛇川の現流路、東端は八瀬川の現流路に接するものと思われる。この溝を境にして南側には遺構が極端に少なくなる。走向はN19°30′W、掘削当初は直線を基本に計画されたと考えられる。底面はやや蛇行する部分があるが掘削後の崩落での変形と考えられる。断面は逆梯形を呈し、上面の幅は4.2～6.5mを測る。底面の幅は0.7～1.3mを測る。深さは西端で、244㎝、東端で213㎝である。比高差は西端が低く25㎝である。

底面の東側9㎝は掘りかえし時の底面が細い溝状に残っている。北側の壁面の中位、T—39グリッド付近にはピットがほぼ1.4m等間隔にほぼ直線的にあった。規模は西から、径40、深さ、50、径60、深さ63、径48、深さ31、径64、深さ43、径64、深さ54㎝である。また、南壁のS—30グリッドにも3つのピットがある。規模は径29、深さ29、径36、深さ26、径24、深さ33㎝である。この東にもやや離れて、径28、深30㎝、径44、深さ31㎝のピットがある。5号溝よりも後出である。



①黒褐色土層　軽石を混入するしまりのない非粘性土層。ローム等はほとんど混入しない。
②暗褐色土層　①層に類するが若干ローム粒を含む。②ではさらにローム粒が多くなる。
③黒褐色土層　粒子の粗い非粘性黒色土層。上方ではロームブロック散見。下方では砂が多くなり底面にむかって漸移的に多くなる。
④黒色土層
⑤暗茶褐色土層　②と④が交互に堆積しあっている。厳密には10層ほどに分層可能。

第8図　大　溝　断　面

2　井　　戸　（第９～13図，図版14・15）

本遺跡Ｃ地点から検出された井戸は総数で66本を数える。分布の粗密はありながらも大溝以北の調査区域のほぼ全域から検出されている。これらについて分布・形状・埋没土・出土遺物等の視点からまとめてみたいと思う。なお、Ａ地点からは１本、（調査面積約2000㎡）、Ｂ地点からは８本が検出されている。

分布は先述のように調査区全域に広がっているが重複関係にあるものが６例ある。また、５ｍ以内に近接する例は29である。近接する場所、特に重複して鑿井することは壁面の崩落を招きやすく非機能的な占地と思われる。このようなことからすると土地利用上の区画等による井戸の占地に何らかの規制が働いたとも考えられる。

他の遺構との関連性をみると溝との重複は22例、そのうち、新らしい時期の掘削と考えられる25号溝と重複する58号井戸を除いた他はいずれもそれぞれの溝よりも後出である。５号溝と重複する例は９例あり、６・８・12号は５号溝の埋土中に全く重複している。５号溝が完全に埋没し、なお、その埋没土が安定した後の鑿井と考えられる。44・45号井戸は土壙状の遺構と重複しているが直接の関連性は見いだしえなかった。

形状は平面形で(1)円形、(2)確認面は円形で中位は方形の掘り方のもの（１・５号井戸）の２つに分けることができる。断面形からは(1)上方が大きく外反し、中位以下は直線的に掘り込まれロート状を呈するもの、(2)中位に稜をもつことなく、円筒状の直線的な断面形を呈するもの、(3)壁面が大きく外反し、擂鉢状を呈するものと分けられる。

上屋等の施設は検出できなかった。石組は、底面に至るまで全てをそれによるものはなかったようである。ただし、埋没土の上層に角礫を多く含む井戸もあり、地上部分に簡単な石組施設があった可能性もある。

確認面からの深度は最も浅いものが18号井戸で1.23ｍ、最も深いものは56号井戸で6.06ｍであった。傾向としては径が小さく、円筒形の断面形を有するものは比較的深度が浅いものが多く、分布としては調査区域の南西Ｒライン以南、Ｅ～Ｐラインの間には深度３ｍ以下のものが集中している。

本遺跡は基本土層のところで記したように、耕作土、関東ローム層の下に水成堆積の土層が累重しており、砂質土層、シルト層がその主体となっている。他遺跡の井戸の壁面には砂層を掘り抜いている例が多いが本遺跡では基本土層としての厚い砂層の堆積は認められなかった。しかし、砂質土中にブロック状の砂層が入りこんでおり、これが透水層となっていたと思われる。基本土層のⅢとⅣの間に砂層が入り込む井戸が多数あったが確認面から約１ｍの部分で直接井戸の機能とは関係しないと思われる。29・60・66号井戸はＯ―27グリッド周辺に集中しており、確認面からの深度は3.1～3.9ｍである。これらの井戸は底面が砂層であった。

井戸の調査は渇水期の11月から２月にかけておこなわれたが、出水量は少なく１昼夜で約１ｍ程の水量であった。素掘りの井戸の壁面には中位から下位にかけて「あぐり」と呼称されるふくらみの部分があった。本遺跡の井戸には大小の相異はあるが「あぐり」のあるものは35基におよぶ。52号井戸では底面から1.5ｍ上で「あぐり」がはじまり、外側へ65㎝も張り出している。56号井戸で2.2ｍであった。この「あぐり」は、使用時の透水層からの出水による影響が考えられる。また、周辺の状況に変化がない限り、出水量・貯水量はほぼ一定しており、使用時の取水→透水層からの出水→貯水のくりかえしによる水位の変化により土層中の粘性の軟弱な部分が剝落をおこした結果と考えられる。

埋没土の状態は概的にほぼ一定であった。上層から中層にかけては黒色土・ローム質黄褐色土、黄色砂質土等が混土状態を成していた。上層は約１ｍ程までは遺物も多く含まれており、土層が人為的埋没を示すような井戸もあった。深い井戸の下層は調査時においても水分を多量に含んでおり、埋没土は青灰褐色のヘド

ロ状をなし有機質を多分に含んだ状態であった。

埋没土の上層には溶結凝解岩を中心に角礫が多く含まれていた。井戸廃棄時投げこみと考えられる。4号井戸は確認面から1m下に1辺1mの大礫があった。

遺物は埋没土の上層と下層から出土したものは様相を全くことにしている。下層からの遺物は、木製品、加工痕の残る木材、自然木片、竹片、炭化果核、炭化米などである。木製品は曲物が13個体分、うち底板のみのものが8個体であった。果核は梅と桃である。加工痕のある木器は、52号井戸から柱状の木で途中がえぐりこまれているものが、66号井戸からは杭状のものが出土している。竹片の出土例も多い。竹については民俗例からの追証ができるが、本遺跡出土のものとそれらの儀礼との直接の関係は把握するに至らなかった。

上層からの遺物は石臼、五輪塔、板碑、陶磁器、土器類である。これらは確認面から2m以上の埋没土中で礫と混土状態をなしており、既に遺物としての機能が意識されていないことがわかる。このような状態のものは11例である。

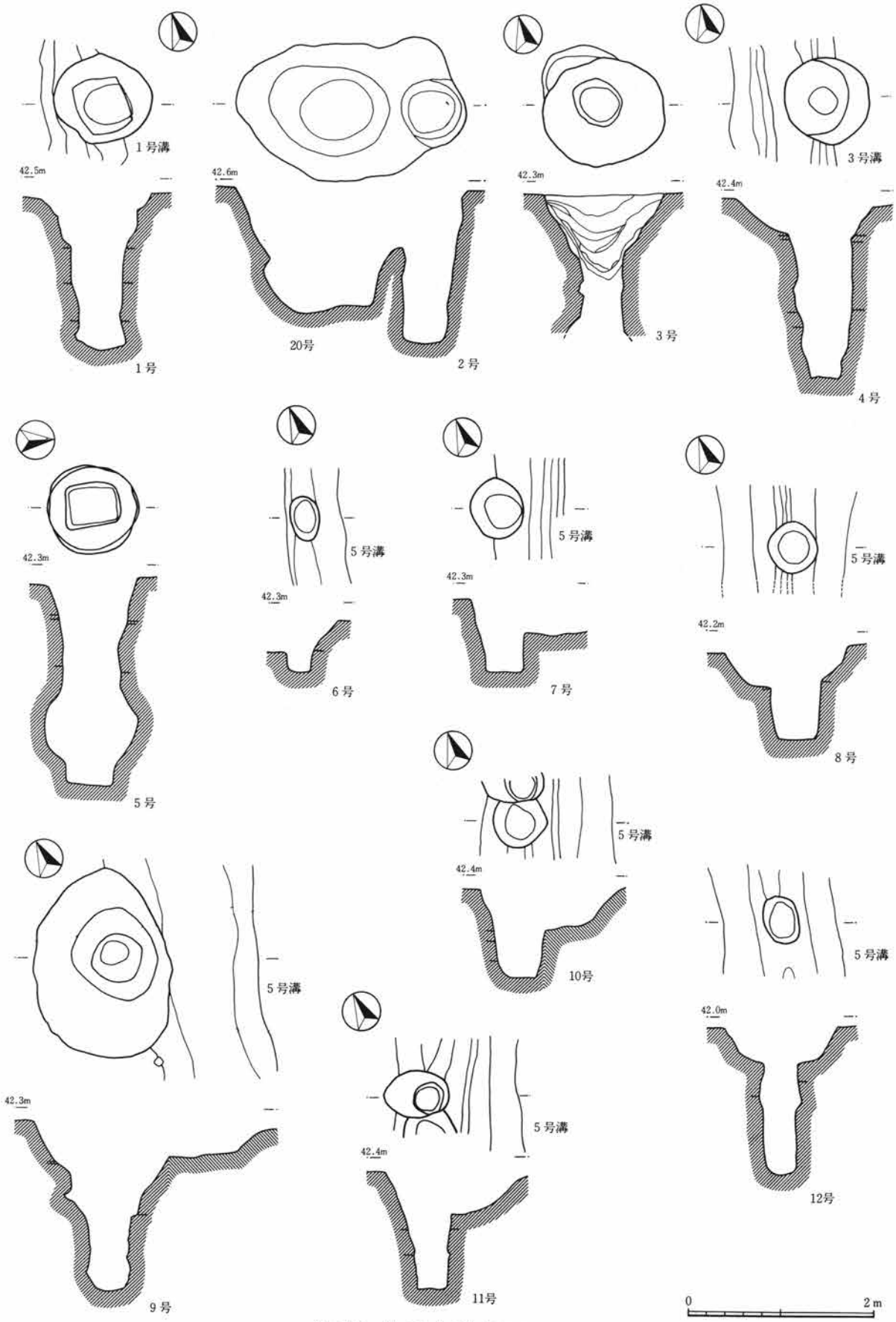
本遺跡の井戸は全て素掘りの井戸である。透水層からの取水量については、蛇川・八瀬川等の河床の変化も考慮しなければならないため一概に少量であったとはいえない。掘り方は透水層までを目的に鑿井を行い、透水層下の不透水層を掘り下げこの部分に貯水をおこなっていたと思われる。井桁については不明である。上層がロート状に外反している形状はやや機能的には不合理とも思われるが、埋没土層の断面に施設等の痕跡は認められなかった。滑車を用いないで、釣瓶を上げ下げしたものと思われる。

井戸と他の遺構との関連性、鑿井の時期の細別については把握できなかった。江戸時代の明和7（1770）年の文書では本遺跡周辺は畑地となっており、出土遺物からもこれ以後の鑿井はなかったようである。遺物からすれば、板碑や五輪塔が本遺跡内に造立され、これらに対しての直接（造立者やその一族）の信仰心がなくなった時期に井戸も廃棄されており、その時期は江戸時代初頭と推定できよう。

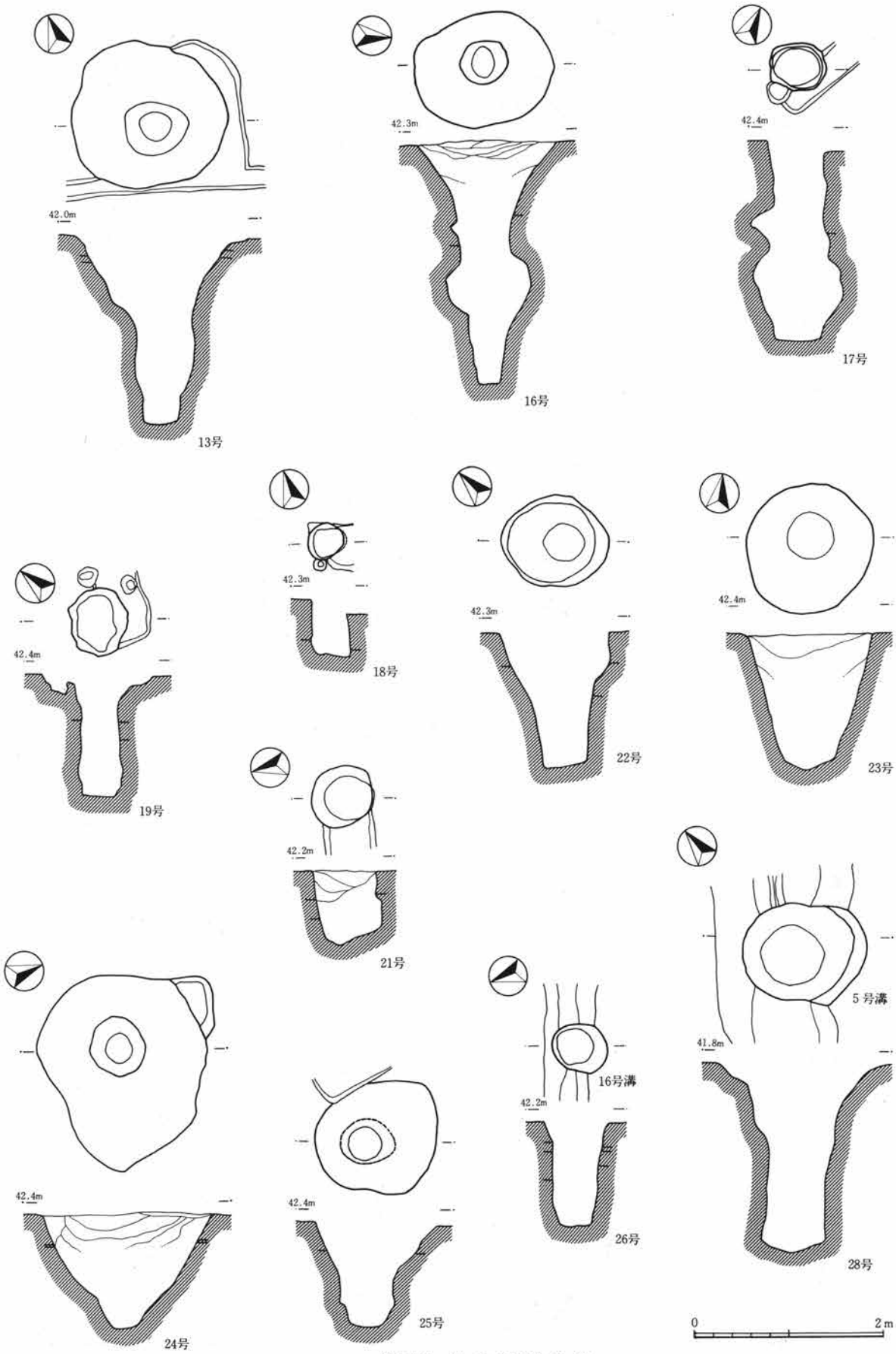
しかし、河川に隣接するこの地域に、時間的な幅があるものの66基の井戸が鑿井されたことについての性格づけは困難であり今後の検討すべき点の1つである。

表2　井　戸　一　覧

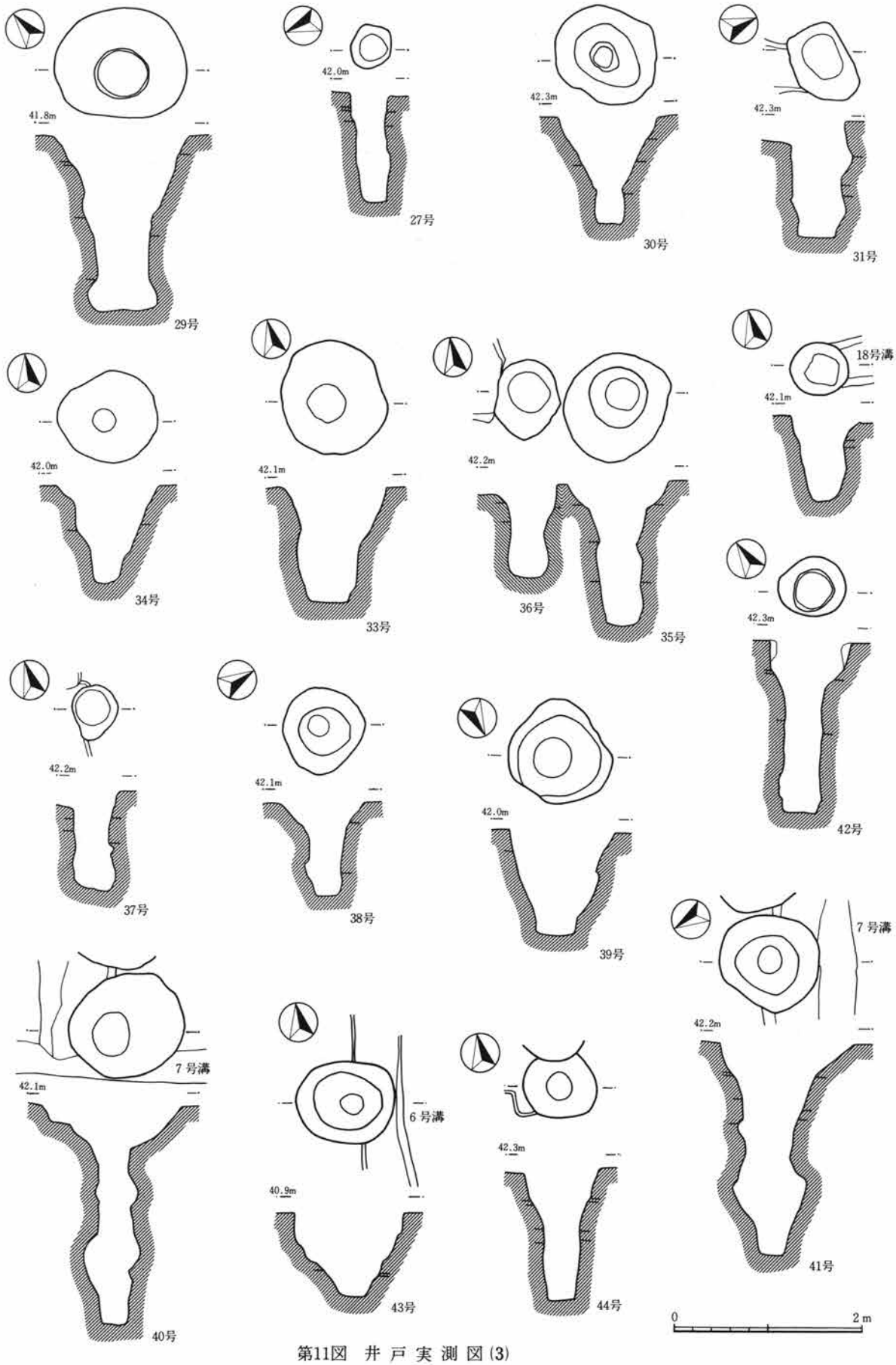
No.	検出位置	規模（cm）				形状の特徴	出土遺物	備考
		深さ	口径	中端	底径			
1	C－13	〔327〕	213	108		中端は矩形を呈する。	㊥ 小皿1・2	1号溝と重複 未完掘
2	I－18	322	177		100	平面形は円形、断面は円筒状をなす。	㊥ 陶器　円筒・形象埴輪 ㊦ 砥石1・40　石棒	20号井戸より後出。 埋土中に礫多数。
3	J－15	〔130〕	260	100		ロート状の断面。あぐりの部分あり。	㊥ 小皿3～7　㊦ 板碑5　砥石2	中層に礫あり 未完掘
4	L-13・14	378	183	135	60	上端はロート状の断面形。		3号溝より後出
5	U－13	442	188	94	75	上面は円形、中端以下は矩形の掘り方。下位にあぐり部分。	㊥ 陶器　内耳　円筒・形象埴輪 ㊧ 自然木　竹片	
6	Q－13	117	65		45	断面は円筒形。	㊥ 形象埴輪	5号溝より後出
7	Q－13	154	115		80	断面はやや外反する円筒形。		5号溝より後出
8	Q－13	193	107		67	断面は円筒形、底面は平底。	㊥ 陶器	5号溝より後出


1号溝
42.5m
1号
42.6m
20号
2号
42.3m
3号
3号溝
42.4m
4号
42.3m
5号
5号溝
42.3m
6号
5号溝
42.3m
7号
5号溝
42.2m
8号
5号溝
42.3m
9号
5号溝
42.4m
10号
5号溝
42.4m
11号
5号溝
42.0m
12号
0
2m

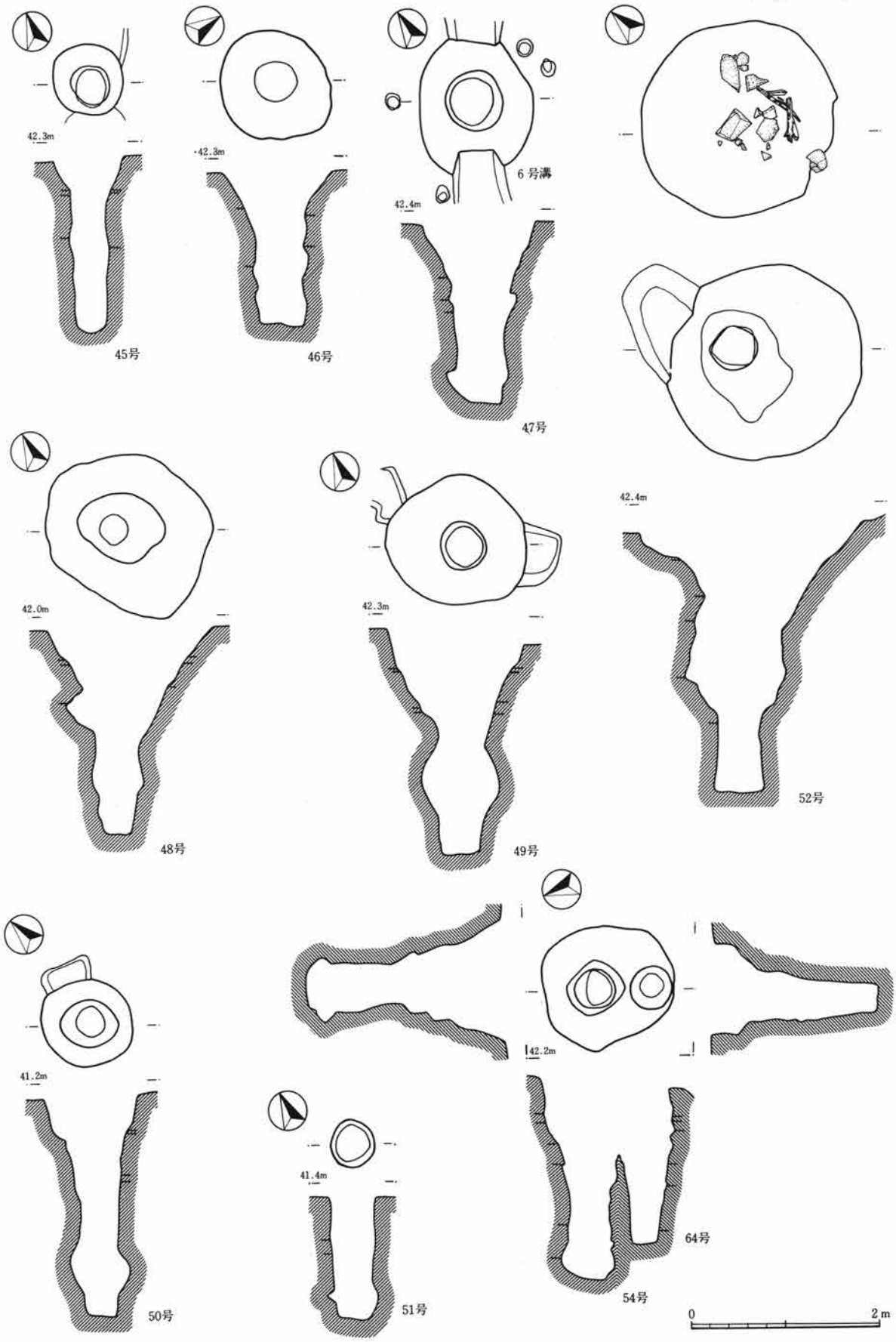
第9図　井戸実測図(1)


42.0m
13号
42.3m
16号
42.4m
17号
42.4m
19号
42.3m
18号
42.3m
22号
42.4m
23号
42.2m
21号
5号溝
41.8m
28号
16号溝
42.2m
26号
42.4m
24号
42.4m
25号
0
2m

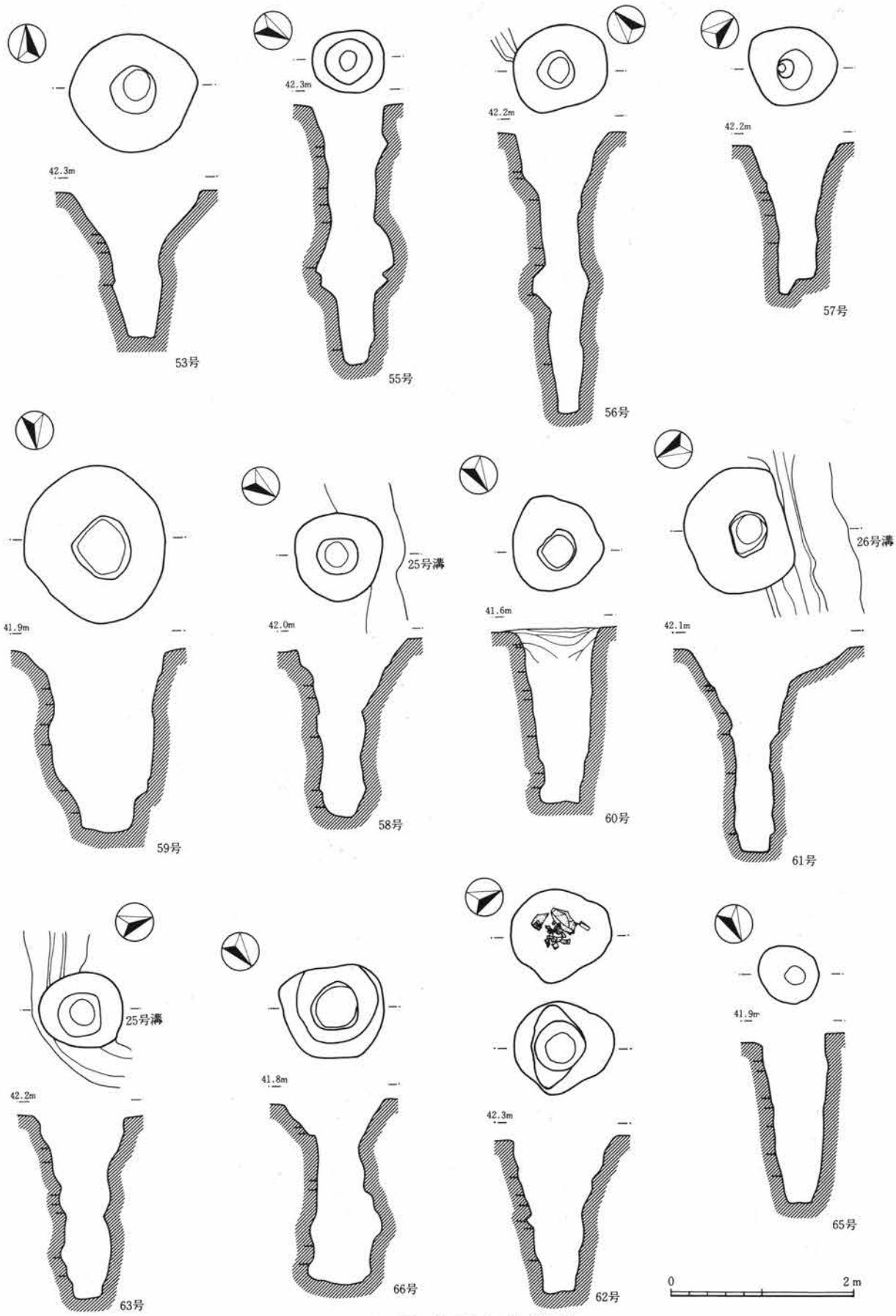
第10図　井 戸 実 測 図 (2)


41.8m
29号
42.0m
27号
42.3m
30号
42.3m
31号
42.0m
34号
42.1m
33号
42.2m
36号
35号
18号溝
42.1m
42.3m
42号
42.2m
37号
42.1m
38号
42.0m
39号
7号溝
42.2m
41号
7号溝
42.1m
40号
6号溝
40.9m
43号
42.3m
44号
0
2m

第11図　井戸実測図(3)


42.3m
45号
42.3m
46号
6号溝
42.4m
47号
42.0m
48号
42.3m
49号
42.4m
52号
41.2m
50号
41.4m
51号
42.2m
64号
54号
0
2m

第12図　井戸実測図(4)


42.3m
53号
42.3m
55号
42.2m
56号
42.2m
57号
41.9m
59号
25号溝
42.0m
58号
41.6m
60号
26号溝
42.1m
61号
25号溝
42.2m
63号
41.8m
66号
42.3m
62号
41.9m
65号
0
2m

第13図　井戸実測図(5)

No.	検出位置	規模 (cm) 深さ	口径	中端	底径	形状の特徴	出土遺物	備考
9	P－10	363	395	104	60	大きく外反するロート状。	㊥ 小皿８～10　内耳　小型壺 ㊦ 自然木　竹片	５号溝より後出 礫を多量に出土 中位に透水層あり。
10	P-7・8	185	116		63	円筒形の断面。		５号溝より後出 11号井戸と重複
11	P－7	248	140		51	上面に大きく外反する円筒状を呈する。透水層の下にあぐり。		５号溝より後出
12	Q・R-16	311	75		55	平面は楕円形を呈する。		５号溝より後出
13	N－24	395	330	135	68	上面が大きく開くロート状を呈する。	㊥ 陶磁器16　小皿11～14　内耳 埴輪　㊧ 石臼34　砥石41・42　板碑1～3　㊦ 桶　㊩ 炭化果核・米	上層からスラグ・スケールを多量に出土する。
14	V－5	〔420〕				ロート状を呈すると思われる。	㊥ 内耳　円筒埴輪	未完掘 21号溝と重複
15	W・X-6	〔520〕				ロート状を呈すると思われる。	㊥ 小皿　内耳　円筒埴輪	未完掘
16	K・L-7	501	298	102	45	ロート状の断面。中位にあぐり。	㊥ 小皿15　内耳２	
17	O－6	417	115	105	100	円筒形の断面。あぐり著しい。		
18	O－6	123	79		70	円筒形の断面、浅い。		さく井が停止された可能性あり。
19	O－7	258	117		70	平面は楕円形。断面は円筒形。		
20	H・I-8	267	315	150	112	楕円形の大きな掘り方を有する。	㊥ 陶器　円筒埴輪　須恵器片 ㊧ 石臼35～37・112・113　板碑４ ㊦ 桶	２号井戸より前出 礫を多量に出土。
21	L－16	157	132		106	平面は円形、断面は円筒形。	㊩ 炭化米	
22	G・H-17	285	235	121	90	ロート状の断面形を呈する。	㊥ 陶磁器47　小皿　㊧ 石臼10・	上層から礫多数出土
23	E－17	287	266		100	上面は楕円形、筒状に開く断面。	㊥ 小皿16・17　内耳　㊧ 板碑	炭化物を少量混入
24	F-18・19	238	360	117	56	大きな上面に比して底面は極端に小さく円錐形を呈する。	㊥ 青磁３・９　小皿18～24　内耳１・14　㊧ 石臼16・114　板碑６～８ ㊩ 羽口１	
25	H－19	222	255		70	上面はロート状に開く。下位に小さなあぐりあり。	㊥ 陶器　内耳15　小皿25・26　埴輪 ㊧ 石臼１・39～41・115・116　板碑９～14　㊩ 羽口２	遺物は埋没土の上層に集中していた。
26	J－18	218	132		75	径は小さく断面は円筒形	㊥ 内耳　円筒埴輪	16号溝より後出
27	J－22	231	85		58	径は小さく断面は円筒形	㊥ 陶磁器48　内耳　擂鉢　㊧ 石臼42　石擂鉢１	埋没土中より礫を多数出土。
28	P－28	395	320	234	135	ロート状を呈し、中位の径も大		５号溝より後出
29	U・P-27・28	370	280	112	106	底面は砂層であぐりがある。	㊥ 小皿28・29～31　内耳16　㊧ 石臼17　板碑15	砂層が透水層
30	O－7	228	213	56	36	上面が大きく開くロート状		
31	F-23・24	245	125		79	円筒状で小さなあぐりあり。	㊥ 陶器２片　小皿32　円筒埴輪	中位に透水層

No.	検出位置	規模 (cm) 深さ	口径	中端	底径	形状の特徴	出土遺物	備考
32	G-24・25	183	122		63	上方でやや開く円筒形。		18号溝より後出
33	I－23	244	221		82	上面にむかって開く円筒形。	㊥ 陶器32　小皿33　内耳　円筒埴輪	中位に透水層
34	L・M-22	209	212		50	円錐状を呈し中位で括れる。	㊥ 内耳　円筒埴輪　㊨ 石臼43	
35	L－20	305	225	125	70	ロート状を呈し中位で括れる。	㊨ 石臼44　板碑16	最下層に礫
36	L－20	195	136		88	円筒形、下位でややえぐれる。	㊨ 板碑17	
37	K・L-20	207	96		72	円筒形、下位でややえぐれる。	㊨ 石臼　砥石43	
38	N-20・21	194	175	105	45	ロート状を呈する。	㊥ 内耳　㊨ 石臼2・45～47・118・板碑18	最下層が透水層
39	N・O-22	222	220	176	80	上面の大きな円錐形を呈する。東側は崩落が著しい。	㊥ 小皿34～38　内耳2　円筒埴輪　㊨ 石臼48　石擂鉢　板碑19	
40	R－15	464	305	65	50	ロート状を呈しあぐりが2ヵ所にある。透水層も砂層が2層上下にある。	㊥ 陶器1　小皿39～41　内耳　擂鉢　土師器　須恵器　㊨ 石臼3・11・12・35・49～54・119　石擂鉢2　砥石44・45　板碑20～40　五輪塔5　㊩ 炭化米　羽口3	7号溝より後出、埋没土の上層から礫を多量に出土。
41	R－15	450	290	135	50	ロート状を呈する。下層に大きなあぐりがある。	㊨ 石臼13・55・56　板碑	7号溝より後出
42	S－15	358	142	82	76	上層はロート状、以下は円筒形。	㊥ 小皿42・43　内耳17	中位に透水層
43	T－18	178	225	145	40	上面の大きな円錐形を呈す。	㊥ 内耳18　㊨ 石臼20・57～59・120～122　砥石　板碑42～44	6号溝より後出
44	V・W-13	267	157		55	ロート状を呈す。	㊥ 陶器2片　小皿44～49　内耳3・19　円筒埴輪　㊨ 石臼61～66・123～227　石擂鉢　五輪塔2・3・16　板碑45・46　㊩ 羽口	45号井戸より後出
45	S－13	360	148	82	62	上面はやや開き以下は円筒形。	㊨ 板碑47～49	44号井戸より前出
46	T・U-13	328	230	103	90	上面はロート状に開き以下は円筒形を呈する。小さなあぐりがある。	㊥ 小皿50～52　内耳20　円筒埴輪　土師器　須恵器　陶磁器55　㊨ 石臼21・60・67～71・128　五輪塔6　板碑50～57　砥石4・5	遺物は埋没土上層に集中する。中位に透水層
47	R・S-12	380	238	121	93	上面はロート状に開く以下は円筒形を呈す。中位の透水層部分と底面にあぐりがある。	㊥ 陶磁器42　内耳　㊨ 石臼72・129　砥石6　板碑58～59	6号溝より後出
48	T－19	430	353	180	60	上面が著しく開くロート状	㊥ 埴輪　㊨ 板碑60～63　五輪塔18・19	礫を多量に出土
49	V・W-17	471	295	96	78	上面が著しく開く。下位には大きなあぐりがある。	㊥ 小皿53～57　内耳21　㊨ 石臼59　砥石7　板碑64・65	
50	X－17	458	191	126	59	細い円筒形を呈す。下位にあぐり。		

No.	検出位置	規模（cm）				形状の特徴	出土遺物	備考
		深さ	口径	中端	底径			
51	S－6	258	97		65	小径の円筒形		礫を少量含む
52	X-10・11	510	420	160	100	上面はロート状に大きく外反する。中位に大きなあぐり、下位は円筒形を呈する。	㊥ 陶器46・82 小皿58～60 内耳4・5・22 形象埴輪 ㊧ 石臼17・73～77・130・131 板碑66 ㊦ 曲物4・5・6・7 自然木 竹片	大型の礫を多量に出土。
53	X－12	316	280	99	66	ロート状の断面形	㊥ 小皿61～65 ㊧ 石臼148 石擂鉢4 砥石8 板碑67～76	円礫を多量に混入
54	W－19	416	190	87	50	上面がやや開く円筒形。底面に小さなあぐりがある。	㊥ 小皿66 擂鉢 円筒埴輪 須恵器 ㊧ 石臼132 板碑77～79	64号井戸より前出。下層から竹片出土。
55	Z－15	555	156	104	38	円筒形を呈し中位に大きなあぐりがある。	㊥ 小皿 内耳23 ㊦ 曲物3 竹・篠	中位に透水層
56	Y・Z-15・16	606	203	82	45	上面がやや開く。円筒形。中位にあぐりがある。底面は小径。	㊥ 陶器26 小皿67 内耳6・24 ㊧ 石臼79 石擂鉢5 板碑 ㊦ 曲物	円礫を少量含入 中位に透水層
57	Y－16	320	187	95	75	底面の南よりに小ピットがある。	㊥ 陶器 小皿68・69 内耳57 擂鉢	
58	Y－19	357	237	91	51	上面が大きく開くロート状	㊥ 小皿70 円筒埴輪 土師器 ㊦ 杭状の木片	25号溝より前出
59	T・U-24	385	307	129	104	大径の円筒形、下位で段がつき小径になる。	㊥ 小皿4片 内耳 ㊧ 板碑80 ㊦ 曲物	
60	Q－28	379	197		84	円筒形	㊥ 陶器 小皿71 内耳 ㊧ 砥石9 ㊦ 曲物	
61	X－19	435	344	132	58	上面が著しく開くロート状。	㊥ 陶器 小皿72・73 擂鉢 埴輪	26号溝より後出
62	B′－13	332	215		65	上面にむかって開いた円筒状を呈する。	㊥ 陶器 小皿74・75 内耳25 ㊧ 石臼 砥石 板碑81～83 ㊦ 曲物 ㊨ 炭化果核	中位に透水層
63	X・Y-22	390	201		55	上面がやや開く円筒形。	㊥ 円筒埴輪	25号溝より前出
64	W－20	351	257	98	72	円筒形。		54号井戸より後出
65	Y－27	307	131		45	円筒形。	㊥ 内耳 円筒埴輪	
66	O・P-27	396	224	91	101	中～下位はあぐりが著しい。	㊥ 陶器92 小皿76 内耳 円筒埴輪 ㊧ 石臼133～134 石擂鉢 板碑84・85 ㊦ 杭状の木片2点	下位に透水層

3　土　　壙　（第14～19図，図版16～20）

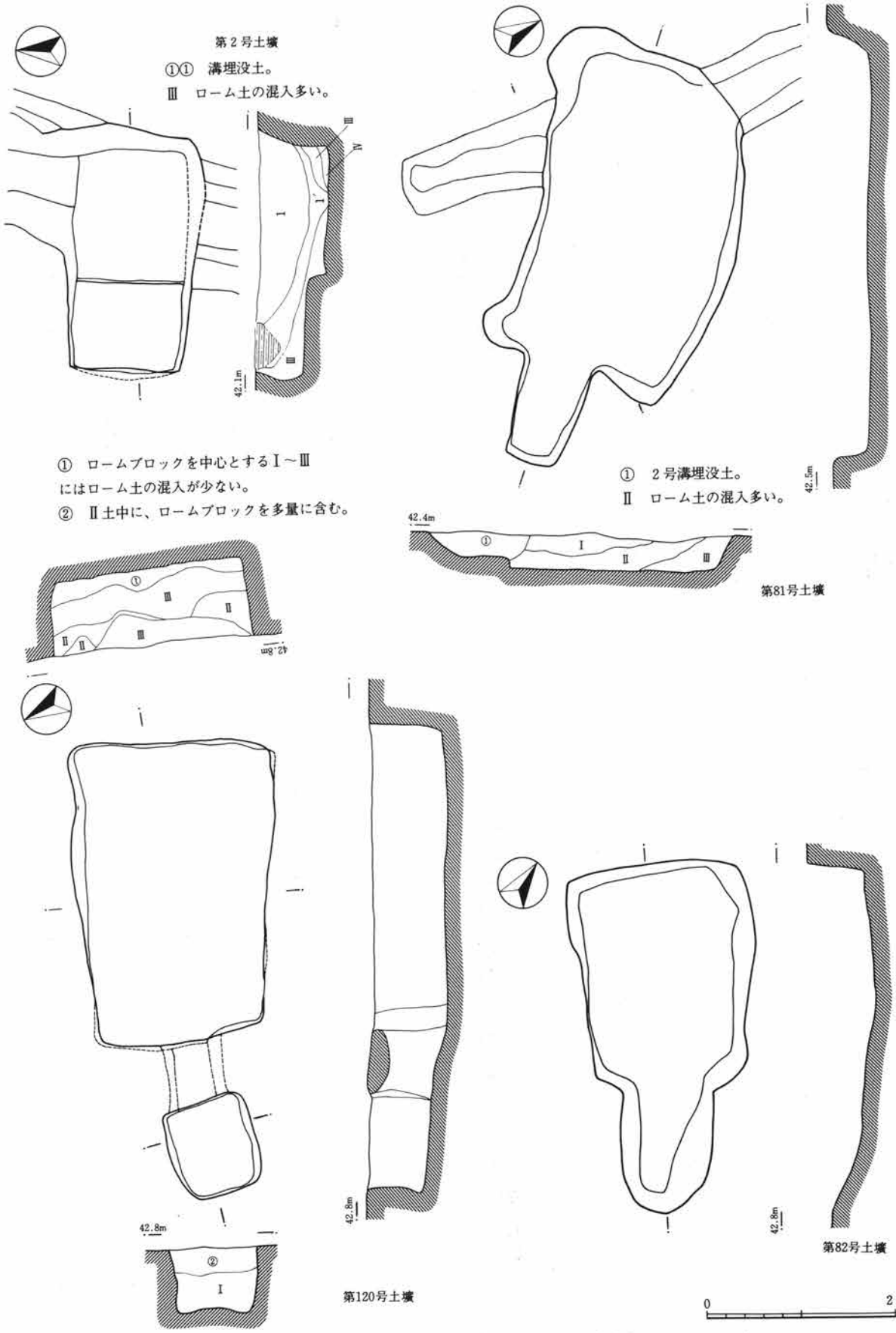
検出総数は427基と多いが、性格が類推できたものはごく少ない。特に、種イモ貯蔵用に近年掘った穴でも、上面から強い塡圧を受け埋没土が固くしまり、江戸時代以前の土壙との識別は難しかった。発掘の結果、明治時代以後の遺物が出土した土壙は全体図や一覧表から除外したが、近年の種イモ貯蔵穴も混在してしまったようだ。なお、調査現場で付けた517までの番号をそのまま使用したため、欠番を生じている。

渡来銭を出土した土壙に45壙（４枚）と136壙（11枚）がある。古銭の出土は底面から浮いた状態だったがまとまっており、副葬した六道銭と考え、両者を墓壙とするのは妥当であろう。プランは不整だが、小型で底面が平坦なことが共通している。完形のかわらけを出土する土壙も墓壙の可能性が強い。20・166・182・194・272・273・275・376・392・399・517壙から完形、またはほぼ完形のかわらけを出土し、小型で底面が平坦なものは、長方形の20・182・194・272壙や、さらに小型の273・399壙が該当する。これらも墓壙と推定できよう。長方形の墓壙で長軸１～２ｍ、短軸0.7～1.4ｍ、ローム面からの深さ30～50㎝である。275壙は、底面が傾斜している以外は長方形墓壙と共通している。392・517壙は大型で浅い。136壙との共通点もあるが、重複のため不明瞭であった。

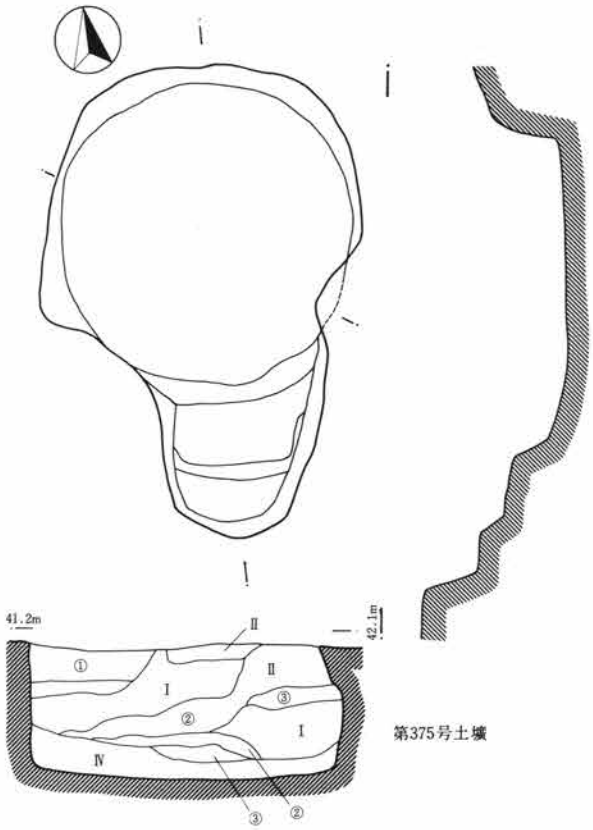
種イモ貯蔵穴は、底面が平坦なこと・人為的な埋没土であること等、長方形墓壙と類似点が多く、遺物出土のない場合は両者の区別が困難である。本遺跡の長方形を呈す土壙の多くは、遺跡地が農地に変わる江戸時代以後の貯蔵穴と考えたい。種イモ貯蔵穴は畑地の区画から制約を受けるため軸方向に企画性があらわれ、掘り返しが頻繁で著しい重複を示すことが考えられる。また、埋没土中のロームブロックも小粒になることが予想される。212～226壙・299～305壙・317～322壙・444～450壙のような重複例がこれに該当しよう。

遺跡東端の466～472壙のような、50㎝前後の短軸に対し、２ｍ前後の長軸を示す細長い土壙群は、貯蔵穴には不向きであろう。ゴボウのような根菜類の収穫時の掘り込みが、このような痕跡を示したものと考えるが、きわめて小規模であり、疑問点が多い。

入口施設を持つ土壙に、81・82・120・375壙がある。81・82壙は近似したプランで並んでおり、同時存在したものと思われる。両者は入口部に差異があり、81壙は平坦なまま主室部へつながるが、82壙は主室部へ向って傾斜している。120壙は入口部が長く、中央にトンネル状に掘り残した羨道状の通路がある。375壙は円形の主室部に階段状の入口部を設けた柄鏡状のプランを呈す。これらの４基は、北もしくは北西側を向って入口部が作られている。近年、地下式（土）壙という名称が定着し、集成作業や性格検討が行われているが、本遺跡の４例も地下式壙の典型である。各地の地下式壙に人骨出土例があり、墓壙としての使用例は確実であるが、本遺跡でも120壙から渡来銭を一枚出土し、375壙からは完形に近いかわらけを出土し、墓壙的な性格を示唆している。各土壙とも主室内埋没土中に厚さ10～30㎝ほどのローム土が不均等に混入している。ローム土の天井部が想定されるが、主室部の規模（２ｍ×３ｍ）が大きく、横穴状に掘り残したローム土の天井部とは思えない。竪壙状に掘り込んだ後、渡し板で蓋をした上に土を盛ったと考えるのが妥当であろう。この場合、主室部埋没土の最下層が黒色土であっても、入口部からの流入土とは限らないと言えよう。375壙の主室部内北壁下にはウサギの巣跡と思われる径約20㎝、長さ１ｍ以上の水平の横穴があり、黒色土で埋まっていた。この土壙が掘削後すぐに埋め戻されていないことの証左となっている。439壙も地下式壙と思われるが、入口部を平坦なものから階段状のものへ拡張した可能性がある。２号土壙は長方形の平面プランだが、底面は二段になり入口部の可能性がある。２号溝と大きく重複し埋没土から天井部の存在を確認することはできなかった。203・378壙も形状は著しく異なるが、入口施設を持つ可能性がある。

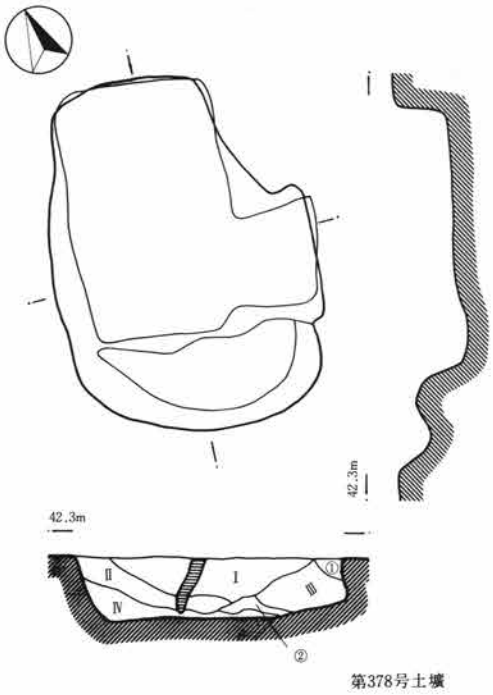

第2号土壙
①① 溝埋没土。
Ⅲ ローム土の混入多い。
① ロームブロックを中心とするⅠ～Ⅲにはローム土の混入が少ない。
② Ⅱ土中に、ロームブロックを多量に含む。
① 2号溝埋没土。
Ⅱ ローム土の混入多い。
第81号土壙
第120号土壙
第82号土壙
0
2m

第14図 土　壙(1)



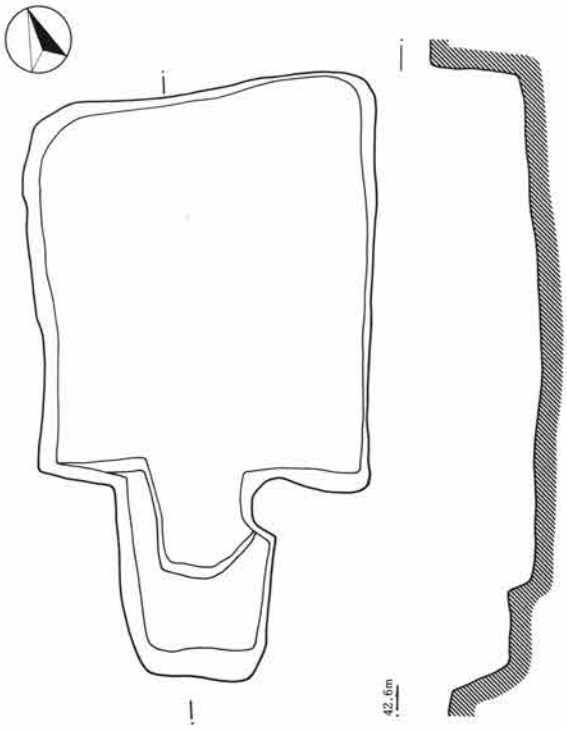
第375号土壙

① ロームブロック。
② Ⅰ土に多量のローム土を含む。
③ 灰白色粘土を多量に含む。

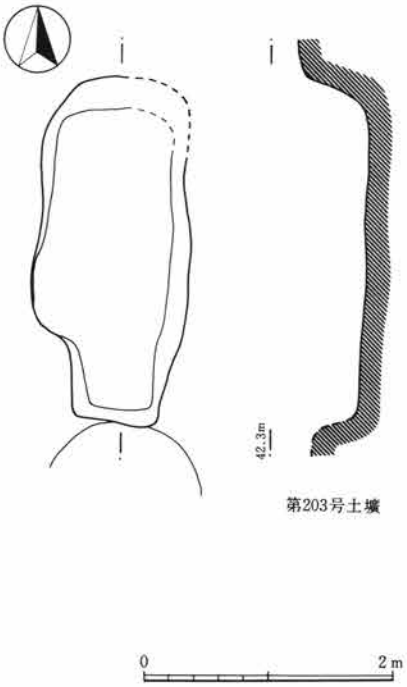


第378号土壙

① ロームブロック。
② Ⅲ～Ⅳの漸移層。

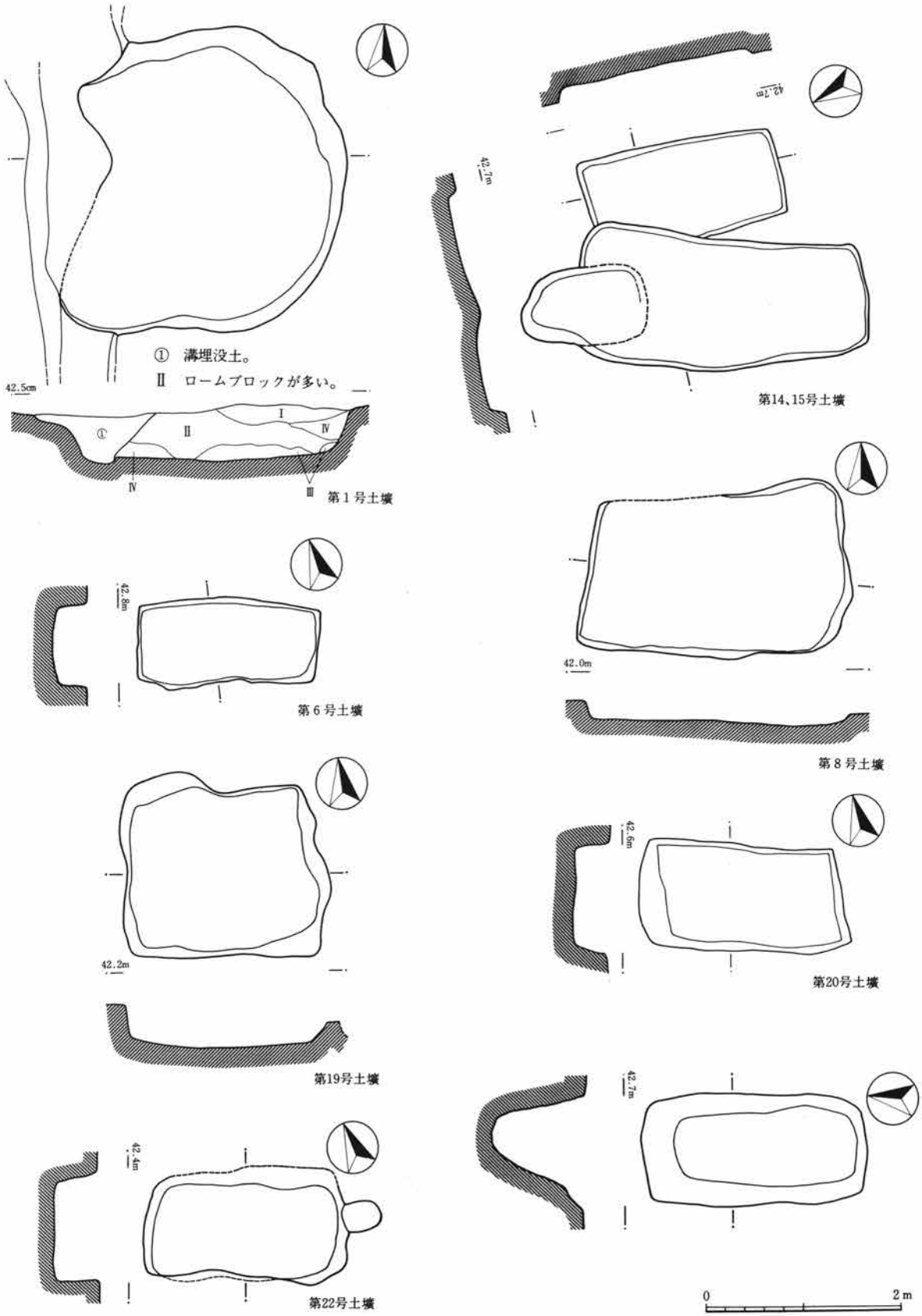


第439号土壙

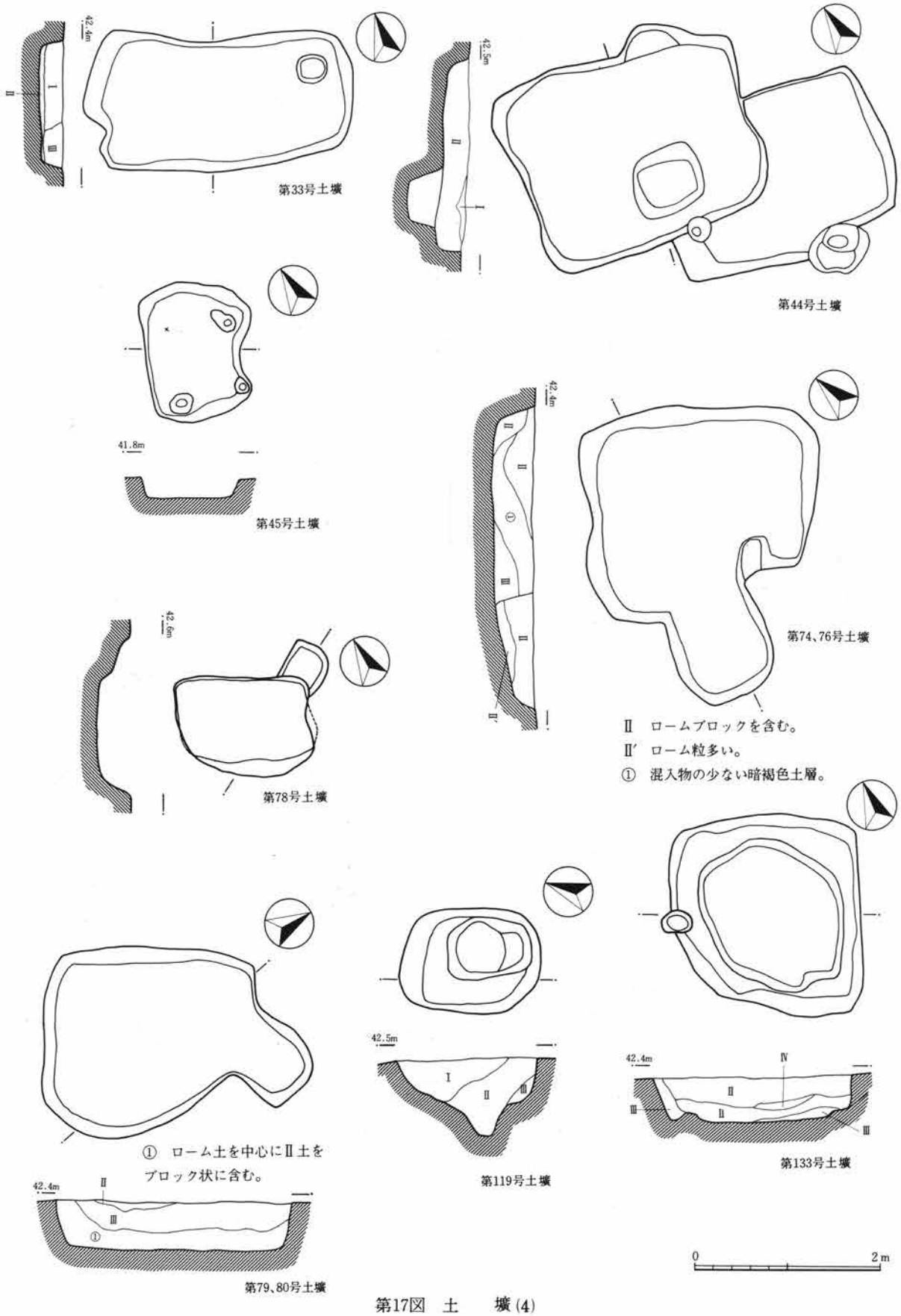


第203号土壙

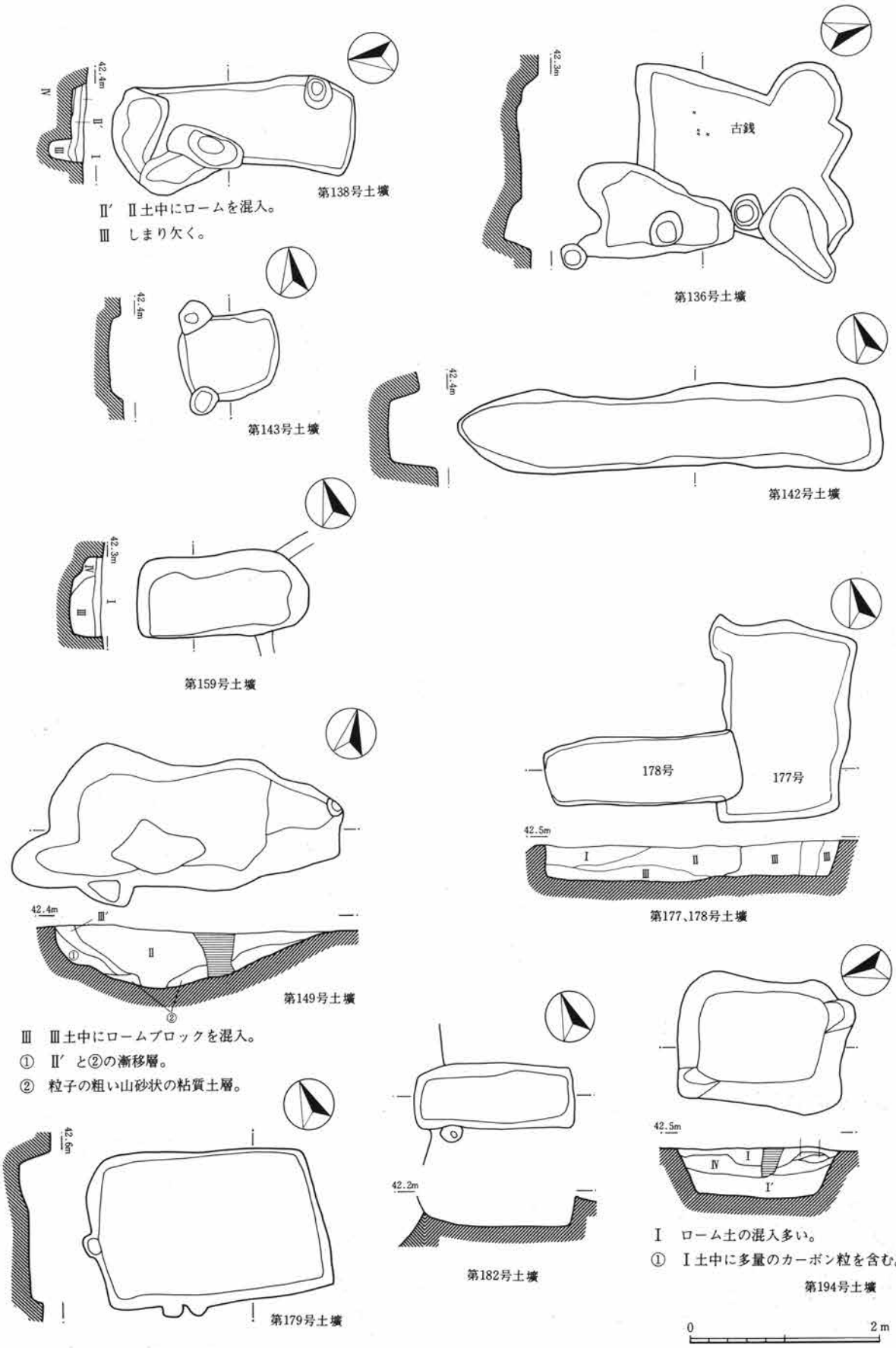
第15図　土　　壙(2)


① 溝埋没土。
Ⅱ ロームブロックが多い。
42.5cm
第1号土壙
第14、15号土壙
42.8m
第6号土壙
42.0m
第8号土壙
42.2m
第19号土壙
42.6m
第20号土壙
42.4m
第22号土壙
42.7m
0
2m

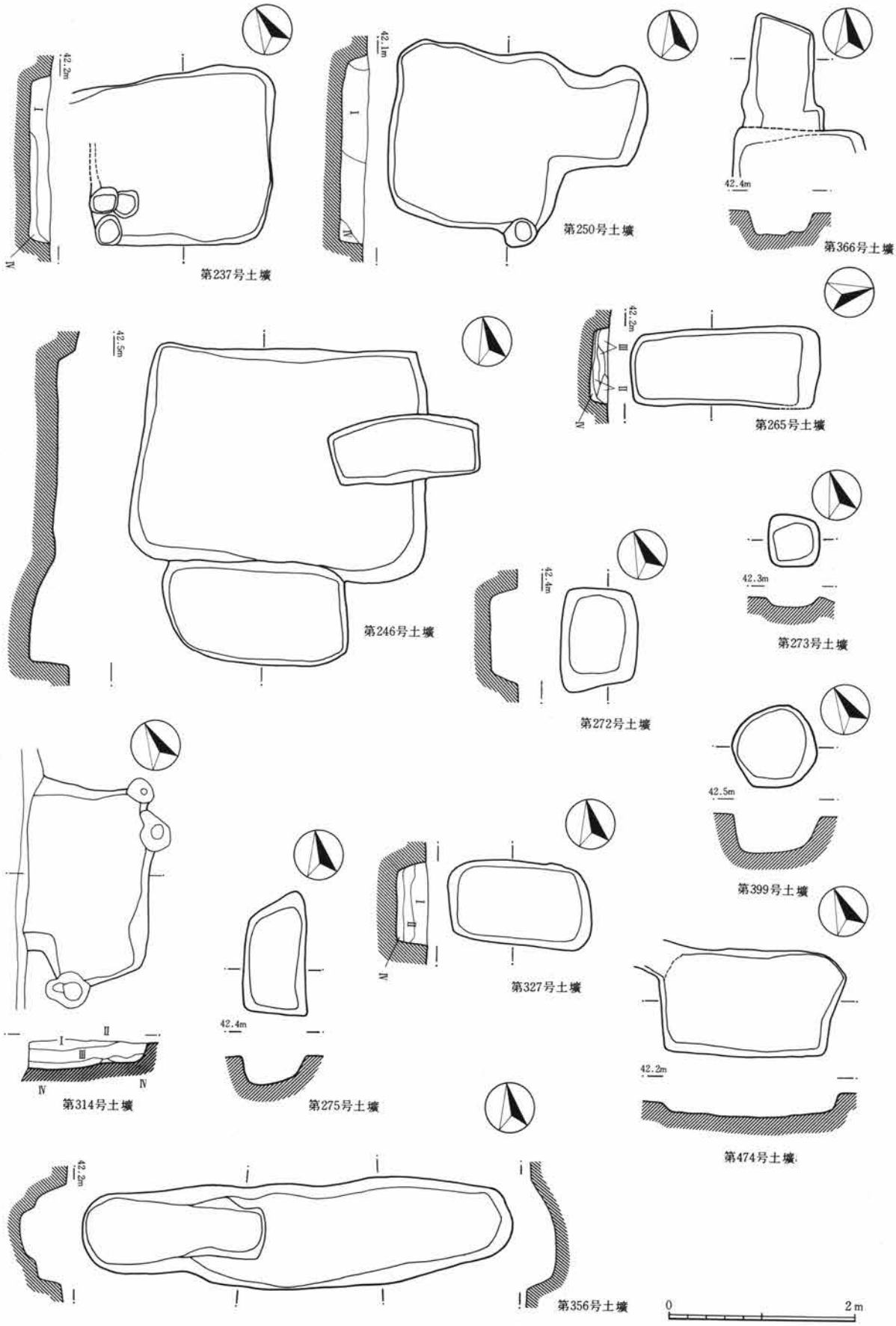
第16図　土　　壙(3)


42.4m
Ⅱ
Ⅰ
Ⅲ
第33号土壙
42.5m
Ⅱ
Ⅰ
第44号土壙
41.8m
第45号土壙
42.4m
Ⅱ
Ⅱ
①
Ⅲ
Ⅱ
Ⅱ′
第74、76号土壙
Ⅱ　ロームブロックを含む。
Ⅱ′　ローム粒多い。
①　混入物の少ない暗褐色土層。
42.6m
第78号土壙
①　ローム土を中心にⅡ土を
ブロック状に含む。
42.4m
Ⅱ
Ⅲ
①
第79、80号土壙
42.5m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
第119号土壙
42.4m
Ⅳ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅱ
Ⅲ
第133号土壙
0
2m

第17図　土　　壙(4)


42.4m
Ⅳ
Ⅱ′
Ⅲ
Ⅰ
第138号土壙
Ⅱ′　Ⅱ土中にロームを混入。
Ⅲ　しまり欠く。
42.3m
古銭
第136号土壙
42.4m
第143号土壙
42.4m
第142号土壙
42.3m
Ⅳ
Ⅰ
Ⅲ
第159号土壙
178号
177号
42.5m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
第177、178号土壙
42.4m
Ⅲ′
Ⅱ
①
②
第149号土壙
Ⅲ　Ⅲ土中にロームブロックを混入。
①　Ⅱ′と②の漸移層。
②　粒子の粗い山砂状の粘質土層。
42.6m
第179号土壙
42.2m
第182号土壙
42.5m
Ⅳ
Ⅰ
Ⅰ′
Ⅰ　ローム土の混入多い。
①　Ⅰ土中に多量のカーボン粒を含む。
第194号土壙
0
2m

第18図　土　壙(5)


第237号土壙
第250号土壙
第366号土壙
第265号土壙
第246号土壙
第273号土壙
第272号土壙
第399号土壙
第327号土壙
第314号土壙
第275号土壙
第474号土壙
第356号土壙
0
2m

第19図　土　　壙(6)

表3 土 壙 一 覧

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
1	B—16	円形		332×306	63		1号溝に先行。
2	C—14	方形	N—89°—E	252×134	89		2号溝に先行。床面は二段になる。
3	F—11	方形	N—21°—E	660×240	32	陶磁器8	16号土壙と重複。
4	F—13	方形	N—77°—W	204×115	21		
5	H—12	正方形	N—4°—E	158×144	43	陶磁器18・91	
6	G—14	方形	N—73°—W	182× 82	36	陶磁器80	
7	H—15	隅円方形	N—77°—W	230×130	55		
8	H—14	隅円方形	N—89°—W	270×166	22		
9	G—14	隅円正方形	N—1°—E	255×228	51		
10	K—12	方形	N—5°—E	222×126	42		26・109号土壙と重複
11	C—D—14	方形	N—89°—E	(180)× 96	41		2号溝と重複。
12	F-14・15		N—16°—E	180×106	25		
13	E-14・15	方形	N—26°—E	240×158	10		
14	E・F-15	方形	N—13°—E	202×104	18		15号土壙と重複。
15	E—15—16	方形	N—28°—E	298×136	10		14号土壙と重複
16	G—10	不整方形	N—21°—E	320×170	18		3・22号土壙と重複。
17	F—12	方形	N—5°—E	135×100	35		
18	G—9	方形	N—74°—W	185×(100)	33		
19	H—10	方形	N—82°—W	207×165	47		
20	E・F-11	方形	N—74°—W	210×110	37	かわらけ79。陶磁器	
21	B—14	方形	N—89°—W	153× 94	29	「41	
22	G—10	隅円方形	N—68°—W	210×(115)	51	砥石12。	16号土壙と重複。
23	C—14		N—90°—E	—×100	35		2号溝と重複。
24	D—14		N—81°—W	290×145	51		
25	I—13	長方形	N—3°—W	228×112	89	かわらけ80	
26	K—13	長方形	N—83°—W	151×93	50		角礫を中層に含む。ロームブロック多量混入。
27	I—14	円形	N—26°—E	130×117	20		ロームブロックの混入多い。
28	I-15・16	長方形	N—31°—E	180× 90	17		攪乱が多い。掘り直しの痕跡がある。
29	K—16	長方形	N—78°—W	183× 95	11		
30	K—16	長方形	N—81°—W	200× 90	18		
33	I—17	長方形	N—84°—W	282×140	23	石臼39。	
34	H—17	台形	N—73°—W	130×115	(7)		プラン不明瞭。
35	G—16	隅円方形	N—78°—W	104× 85	18		ロームブロックの混入多い。
36	I—16	正方形	N—12°—E	196×166	19		) 重複。
37	J—16	方形	N—83°—W	206×142	23		
38	K—16		N—80°—W	103×—	11		
39	K—16	長方形	N—83°—W	—×108	12		
41	U・V-13		N—34°—E	(420×298)	5		
42	U—5		N—90°—E	252×107	64 34		
43	U—6	隅円方形	N—12°—E	155×154	17		
44	U—7	方形	N—83°—W	250—204	34	かわらけ81	53号土壙と重複。
45	Y—7		N—26°—E	150×102	20	かわらけ82・古銭1	
46	W—6		N—79°—E	313×193	17	「～4	) 重複。
47	W—7		N—13°—E	—× 64	20		

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
48	V—6	方形	N—84°—W	150×100	30		) 重複。
49	V—6		N—9°—W	—×95	27	石臼135。	
50	X—8・7		N—72°—W	280×194	33		) 重複。
51	X—8・7		N—9°—E	160×—	33		
52	Y—7		N—9°—E	75×—	23		
53	V—7	方形	N—83°—E	255×186	16		44号土壙と重複。
54	X—7		N—55°—E	—×98	34		
55	Y—7		N—18°—E	—×68	14		
56	Y—7		—	—×—	8		調査区外にかかり完掘できず。
57	X—7		N—34°—W	433×189	15	陶磁器50	
58	V—6		N—2°—W	—×85	18		
59	T—7		N—77°—W	252×90	19	砥石59。陶磁器13	46～49号土壙と重複。
60	U—9	方形	N—90°—E	114×73	9		
61	U—9	方形	N—90°—E	111×90	17		
71	K—16	方形	N—83°—W	122×77	20		
72	J—17		N—13°—E	—×150	35		15号溝と重複。
73	G・H—18	正方形	N—17°—E	188×185	21		15号溝に後行。
74	F—17	方形	N—26°—E	—×105	39		14号土壙に後行。
75	F—16		N—12°—E	—×91	35		
76	F—17		N—49°—W	260×220/170	44		76号土壙に先行。) 重複。
77	F・G-16		N—47°—W	375×280	48		
78	G—17	隅円台形	N—26°—E	138×105	38	陶磁器4	
79	E—19		——	—×79	41		
80	E—19		——	—×204	61		
81	C—17・18	(地下式壙)	N—42°—W	450×213	55	石臼135。土師器1	1号溝に先行。入口部幅75cm。
82	D—17・18	(地下式壙)	N—37°—W	365×163	65		入口部幅95cmで主室部へ向って傾斜する。
83	H—19	隅円方形	N—77°—W	217×95	24		25号井戸と重複。
84	F—19	隅円方形	N—86°—W	152×93	29		
85	G—20	方形	N—84°—W	125×81	43		
86	G—19	小判形	N—26°—W	160×115	35		
87	G—20	隅円方形	N—47°—W	190×108	29		} 重複。
88	G—20	方形	N—25°—E	170×80	53		87号土壙に先行。
90	D—20		——	265×270	59		
94	E—20		——	—×100	14		
95	E—20		——	—×90	5		
99	G—19	方形	N—4°—E	(85)×60	46		
101	J—9	方形	N—99°—E	160×—	3		3号溝北端と重複。
102	I-9・10	長方形	N—18°—E	370×130	20		
103	I-9・10		N—88°—W	—×170	19		
104	H・I-10	正方形	N—7°—E	175×145	41		
105	J—11	方形	N—26°—E	150×96	36		
106	J—10	隅円方形	N—82°—W	175×109	22		
107	J—14	長方形	N—15°—E	195×92	45		
108	J—13	隅円方形	N—1°—E	145×126	38		
109	J・K-12	方形	N—89°—W	—×98	42		10・26号土壙と重複。
111	N・O-4	方形	N—88°—W	202×128	20		13溝と重複。
112	N—3	方形	N—11°—E	218×69	16		
113	O—3		N—72°—W	—×62	14		
114	O—4	長方形	N—16°—E	316×94	50		ロームブロックの混入多い。
115	O—2	隅円台形	N—52°—W	96×90	10		
116	N—2		N—22°—E	110×92	8		13号溝と重複。
117	O—3	方形	N—26°—E	116×86	18		
119	M—2	小判形	N—16°—W	146×113	46		
120	M—3	(地下式壙)	N—23°—E	320×218	82	古銭5。	入口部はトンネル状で幅94cm。トンネル内に「段差あり。
121	K—5	正方形	N—16°—E	190×170	18		
122	J—5	小判形	N—76°—W	263×110	44		
123	L—6	方形	N—71°—W	340×250	15		12・14号溝と重複、同時存在か？
124	M—4		N—74°—W	210×80	11		) 重複。
125	L—4	長方形	N—26°—E	130×84	61		

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
126	P—3		N—14°—E	317×—	44	石製擂鉢6。	5号溝と重複。
127	P—3	長方形	N—32°—E	325× 72	35		
128	J-7・8		N—25°—W	215×160	24 50	陶磁器58	
131	P-13・14		N—71°—W	112× 95	40		上層ほどローム土の混入多い。
132	O—13	卵形	N—8°—W	245×166	19		
133	O—12	隅円台形	N—18°—E	106×102	36 51		
134	N—13		N—54°—E	90× 80	15		下層にローム土の混入多い。
135	L—11	隅円方形	N—85°—W	164×116	43		
136	O-7・8		N—36°—E	230×—	17	古銭6～16	
137	M・N-11		N—20°—E	142× 90	31		
138	N—9	長方形	N—1°—E	265× 92	25	陶磁器23	
139	O—10		——	—×—	29	砥石13	
140	N—9	長方形	N—7°—E	183×129	44		
142	O—9		N—68°—W	445× 85	48	内耳ほうろく21、砥	
143	P—10		N—87°—W	105× 90	15	「石14　陶磁器51	
144	P—8	小判形	N—71°—W	134× 93	24		
145	N—9	隅円方形	N—75°—W	122× 86	20		
147	O—8		N—64°—W	100× 65	28 39		
148	M・N-7	小判形	N—80°—E	187×154	20		
149	M—7		N—73°—E	304×128	42		
150	O—7		N—34°—E	—× 90	17		
151	O—6		N—84°—W	222× 56	16		
152	O・P-5・6	長方形	N—26°—E	722× 70	18		17号井戸、153号土壙に後行。
153	P—6		N—78°—E	205× 90	32		18号井戸に先行。
154	P-5・6	長方形	N—30°—E	100× 64	15		
155	O—5	隅円方形	N—86°—W	183× 64	20		
156	N—6	方形	N—85°—W	105× 90	15		
157	O—7	方形	N—19°—E	96× 65	37		
158	N—8		N—80°—W	128× 83	10		
159	O—11	方形	N—77°—W	180× 85	36		
160	M・N-13		N—82°—W	240× 50	40	五輪塔10。	1号掘立柱建物か。
161	K-9・10	方形	N—87°—E	78× 60	21		
162	P—13	長方形	N—65°—W	164× 64	24		
163	O—9		N—6°—E	260×—	10		
164	P—9		N—10°—E	255×—	22		
166	O—9	隅円方形	N—82°—W	256×200	7	かわらけ83	
167	O—9		N—72°—W	—× 95	9		
171	R—4	隅円長方形	N—21°—E	340×146	35		
172	R—6	長方形	N—64°—W	123× 92	23		
173	R—6		N—82°—W	—×—	29		
174	Q・R-6	隅円方形	N—15°—E	166×122	41		
175	Q—6	方形	N—77°—W	—×135	45		
176	Q・R-7	長方形	N—11°—E	201× 71	28		
177	R—8		N—15°—E	210×132	36		) 重複。
178	R—8	長方形	N—78°—W	204× 72	34		
179	Q—8	長方形	N—75°—W	240×160	16		
180	Q—7		N—71°—W	—×140	12		
181	R—6		N—80°—W	—× 90	38		
182	Q—7	長方形	N—69°—W	170× 70	43	かわらけ84～87	
183	Q—7	方形	N—71°—W	94× 58	18		
184	Q—7		N—14°—E	200×—	16		
185	Q—8	長方形	N—16°—E	150× 54	17		
187	R-8・9	長方形	N—16°—E	287× 68	45		
188	Q—9	隅円方形	N—23°—E	106× 94	15		
189	R—9		N—13°—E	90×—	22		
190	R—9		N—81°—W	195×—	14		
191	R—9		——	—×—	14		
192	R-9・10		N—5°—E	198× 96	30		
193	Q—9		N—84°—E	—× 60	10		

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
194	R—11	隅円方形	N—20°—E	176×128	49	かわらけ88	
195	R—12		N—43°—W	—× 70	37		
201	G—24	長方形	N—47°—W	—×109	63		
202	G—24		——	—×—	52		31号井戸に先行。) 重複。
203	F—24		N—3°—W	270×120	50		
204	G—25	長方形	N—22°—E	—× 95	41		ローム土の混入多い。
206	G—23	長方形	N—15°—E	159× 85	36		
207	H—23	長方形	N—79°—W	252× 88	31		
208	H—22—23	長方形	N—68°—W	170× 92	31		) 重複。208(古)→209(新)
209	H—22	方形	N—86°—E	177×128	26		
210	J—23	長方形	N—19°—E	265×128	26		
211	G—22		N—82°—W	205× 67	24		
212	H—22	方形	N—12°—E	—× 70	—		212(古)→213(新)
213	H—22	方形	N—26°—E	—× 85	56		
214	G—21	台形	N—16°—E	125× 90/70	33		
215	H—21	方形	N—78°—W	—× 70	24		} 重複。
216	H—21	方形	N—70°—W	107× 65	29		
217	G—21	長方形	N—20°—E	200×(80)	29		
218	G—21	方形	N—19°—E	—× 70	16		
219	H—21		N—10°—E	93×(47)	32		
220	H—21		N—67°—W	128×(50)	13		
221	G・H-21		N—71°—W	220×—	35		} 重複。
222	G・H-21	方形	N—74°—W	160×—	23		
223	G・H-20	隅円方形	N—16°—E	192×115	10		
224	G—20	隅円方形	N—71°—W	220×—	38		
225	H—20	長方形	N—72°—W	300×(120)	7		) 重複。
226	G—20						
228	H—20	方形	N—10°—E	154× 86	30		
229	O・P-21		N—21°—E	112× 64	20		
230	P-21・22	正方形	N—27°—E	185×175	32/24		
231	P—20	小判形	N—14°—E	220×100	17		
232	O—22	小判形	N—90°—E	130× 61	9		
234	J—20	長方形	N—70°—W	145×—	27		
235	J—20		N—22°—E	—×—	17		
236	I—20		N—23°—E	315×—	26		
237	J—20	方形	N—70°—W	195×180	40		} 重複。
238	J—19	隅円方形	N—69°—W	110× 60	15		
239	J—19	方形	N—7°—E	195× 94	32		
240	J—19	長方形	N—18°—E	143× 90	14		} 重複。
241	J—19	隅円方形	N—86°—W	122× 80	17		
242	J—19	長方形	N—84°—W	134× 58	1		) 重複。
243	J—19	台形	N—82°—W	134×110	33		
244	I—19	長方形	N—83°—W	157× 70	25		
245	I—19	長方形	N—75°—W	193×110	25		) 重複。
246	I—19	長方形	N—72°—W	307×242	16	石臼4、五輪塔1	
247	K—19		N—22°—E	96× 62	29		
248	K—19	小判形・方形	N—82°—W	153× 75	26		
249	K—23		N—13°—E	100× 91	22		
250	K—23	正方形	N—14°—E	195×190	32		
251	J—22		N—23°—W	240×183	28		
252	I—21	隅円方形	N—20°—E	310×184	19		
253	I—22		N—75°—W	155× 80	15		人為的埋没。) 重複。
254	H—21	長方形	N—77°—W	126× 75	14		
255	J—23	台形	N—64°—W	176×164	15		27号井戸・256号土壙と重複。
256	J—23		N——°—E	—×—	44		255号土壙と重複。
257	L—23	方形	N—80°—W	275×140	16		
258	N—22		N—32°—E	210×110	12		
259	O—23	長方形	N—69°—W	212× 72	11		
260	O—22	方形	N—9°—E	172× 56	12		

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
261	P—23	正方形	N—87°—E	132×108	18		
262	P—22	小判形	N—54°—E	120× 76	18		
263	N—19		N—86°—W	305×145	20		
264	M—19	方形	N—12°—E	168× 70	19		
265	M—19	長方形	N—11°—E	203×80	20		
266	J—21		N—81°—W	245×90/110	26		ロームブロックの混入多い。
267	J・K-21		N—86°—E	270×105	26		
268	K—20		N—12°—E	385×136	24		人為的埋没。
269	K—20		N—12°—E	206×83	18		
270	H・I-20	方形	N—76°—W	260×106	23		
271	I—21		N—77°—W	—×103	18/9		
272	G—22	方形	N—23°—E	102× 82	34	かわらけ91・92	
273	E—21	正方形	N—74°—W	56× 56	10	かわらけ93～96	
274	E—21		N—69°—W	180× 74	18		
275	F—21	台形	N—16°—E	130× 66	29	かわらけ97	
276	F—21	方形	N—72°—W	157× 85	20		) 重複。
277	F—20	小判形	N—20°—E	(165)×112	18		
278	X—15		N—68°—W	202× 57	19		
279	R—26		N—30°—E	240×135	30		
280	R—27	隅円方形	N—10°—W	316×242	17		
282	E-21・22	小判形・方形	N—13°—E	180×108	27		
283	F—21	台形	N—68°—W	330×197	21		} 重複。
284	F—22	方形	N—75°—W	180×114	40		
285	G—21	方形	N—5°—E	202× 98	10		
286	F—22	隅円方形	N—23°—E	95×48	20		
287	F—22	隅円方形	——	80× 76	16		
289	G—22	長方形	N—74°—W	82× 58	16		
290	F—22	隅円方形	N—20°—E	78× 58	15		
291	N—22		a N-90°-E b N-88°-E	173× 92 173×125	10 10		
292	M-23・24		N—0°—E	—×88/100	9		
293	M—23	隅円方形	N—74°—W	198× 78	10		底面の凹凸が多い。) 重複。
294	K—24	隅円正方形	N—22°—E	189×189	23		
295	L—24		N—71°—W	240×—	19		
296	K—20	隅円方形	N—16°—E	200× 93	12		
297	M—21	小判形	N—20°—E	106× 62	15		
298	L—20	隅円方形	N—1°—E	250× 78	29		
299	T—4		N—23°—E	—× 82	28		
300	T—4		N—77°—E	142× 60	24		
301	S—5		N—77°—E	122×—	33		302号土壙に先行。
302	S—5		N—69°—W	—×250	26		
303	S—4		N—64°—W	—×—	17		重複。
304	T—4	方形	N—23°—E	262×110	25		305号土壙に先行。
305	S・T-4	方形	N—21°—E	225×276	32		
306	T—5	小判形	N—64°—W	130× 88	50		
307	S—6	方形	N—1°—E	155× 65	19/9		
308	S—6		N—18°—E	—×202	14		
309	S—6	方形	N—13°—E	278× 84	13		
310	S—5		N—69°—W	—× 64	39		6号溝と重複。
311	S—6		N—11°—E	—×—	22		6号溝と重複。
312	T—6	長方形	N—14°—E	157× 82	10		
313	S—8	方形	N—20°—E	199× 92	29		
314	S—8		N—24°—E	202×—	21		6号溝と重複。
315	T—8		N—7°—E	336×45 195×145	24		
316	S—9	方形	N—19°—E	200× 60	16		
317	S—9		N—9°—E	—× 70	22		小穴群に先行。
318	S—10	小判形	N—30°—E	180×112	16		
319	S—10		N—9—E	—×107	18		重複。
320	T—10		N—79°—W	117× 75	19		320号土壙に先行。
321	T—10	長方形	N—82°—W	185×100	29		

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
322	S—9		N—64°—W	—× 80	15		317・318・319・320・321と重複。
323	T—9	隅円方形	N—84°—W	155× 80	22		
324	V—9	方形	N—64°—W	220× 70	24		
325	V—10		N—72°—E	176× 88	18		
326	S—11		N—26°—E	370×—	34		
327	S—12	隅円方形	N—76°—W	152× 89	—		
329	U-11・12		N—21°—E	285×103	20	石臼81　陶磁器39	) 重複。
330	U—11	隅円方形	N—64°—W	250×90	11		
331	R—32		N—4°—E	200×130			
332	R・S—32		N—16°—E	170× 60			
333	S—33	長方形	N—10°—E	300×120			
340	V—12	方形	N—73°—W	453×210	21		
341	V—12	方形	N—25°—E	170× 82	30		
342	V—11			—×—	19		
343	V—11		N—8°—E	—×106	10		重複。
344	W—11・12		N—15°—E	442×—	20		
345	W—11	隅円方形	N—16°—E	228×129	15		
346	V—13		N—23°—E	418×220	6		44・45号井戸と重複。
347	W—14	方形	N—89°—W	191×148	33		) 重複。
348	W—14		N—11°—E	175×116	26		
349	V—12	方形	N—77°—W	112×76	11		340号土壙の中に重複。
350	V—13	方形	N—30°—E	94× 56	—		
355	T—11	隅円方形	N—18°—E	150× 80	28		
356	U—15		N—82°—W	460×110	47 30		
358	U—17	長方形	N—67°—W	107× 72	28		
359	T・U-16		——	420×385	6		底部凹凸多く形状不安定。
360	U—17	長方形	N—79°—W	250×112	18		
361	U—18		N—20°—E	180×50	60		) 重複。
362	U—18		N—20°—E	(156)× 92	25		
363	V—18	ほぼ円形	N—7°—E	196×184	62		) 重複。同時存在か。
364	V—18		N—18°—E	306×149	12		
365	V—16		N—20°—E	153×—	20	かわらけ98	
366	V—17		N—12°—E	—× 66	17	かわらけ99	
367	V—17		N—86°—W	145×—	23		
368	V—16	長方形	N—75°—W	137× 38	6		
369	V—16		N—81°—W	197× 60	18		
370	W—15	隅円方形	N—65°—W	205×88	18		
371	X—16		N—40°—E	200×—	14		373号土壙と重複。
372	W—16	隅円方形	N—31°—E	162× 56	12		
373	X—16		N—64°—W	—× 75	21		371号土壙と重複。
375	I—25	(地下式壙)	N—8°—E	380×252	107	かわらけ100	幅138cmの階段状入口部。19号溝と重複。
376	K—27	長方形	N—83°—E	—×122	20	かわらけ101	
377	K—27	方形	N—86°—E	260×—	37		
378	J—26		N—15°—E	285×215	49		
380	J—26		N—83°—W	121×—	16		
381	K・L-27	隅円台形	N—19°—E	204×186	29		
382	K—26	方形	N—89°—E	214×108	39		
383	K—26		N——°—E	—×—	18		
385	L—26	小判形	N—11°—E	172× 93	10		
386	M—26	隅円方形	N—23°—E	275×150	24		) 重複。
387	M・N-26		N—74°—W	400×130	22		
389	L・M-25・26		N—69°—E	270 190×150	19		
390	L—26		N—25°—E	(140)×75	11		
392	X—13	台形	N—31°—W	250×195	15	かわらけ102・103	
393	Y-13・14		N—12°—W	250×188	30		
394	X—18	隅円方形	N—26°—E	292×140	31		
395	X—18		N—66°—W	—×77	21		
396	W—18		N—84°—W	215×—	48		

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
397	W—18	方形	N—88°—W	280×180	58		
398	V—18		N—20°—E	177×—	18		
399	X—18	円形	—	86× 81	34	かわらけ104・石擂鉢7	
400	W—18		N—25°—E	151×—	11	陶磁器38	
401	W—18		N—70°—W	—× 95	28		
402	W—18		N—25°—E	165× 75	26		
403	V—16	長方形	N—16°—E	—× 75	30		
404	V—18		N—10°—E	(235)×—	20		
405	V—19		N—10°—E	173×—	20		
406	U—20	方形	N—54°—W	130× 93	13		
407	U—19	台形	N—27°—W	102× 93	5		
408	V—20	小判形	N—60°—E	168× 70	15		
409	N—27	正方形	N—23°—E	124×111	16		
410	L・M-27・28	隅円方形	N—10°—E	210×102	24		重複。
411	M-27・28	隅円方形	N—10°—E	206× 96	23		
412	M-28	長方形	N—73°—W	193× 98	13		
413	N—28	隅円方形	N—18°—E	174×124	20		
414	Z—11・12	方形	N—14°—E	148×93	21		人為的埋没。
415	Z—12	方形	N—37°—E	316×252	29		ロームブロックの混入多い。人為的埋没。
416	Z—10		N—70°—W	660×474	12		439号土壙の中に重複。
417	V・W—19		N—77°—W	—× 95	49		
418	V-18・19	長方形	N—10°—E	542×101	48		上層にローム土の混入多い。重複。
419	V—19		N—83°—W	—× 91	44		
420	V—20	方形	N—14°—E	204× 86	19		
421	U—21・22	方形	N—28°—E	144× 86	23		
422	U—21		N—86°—W	120× 84	23		
423	W—29		N—79°—W	—×110	24		54・64号井戸と重複。54号井戸に先行。
424	U—20		N—77°—W	(105)× 96	37		
425	V—21	長方形	N—73°—W	170× 64	43		
426	V—21	長方形	N—76°—W	148× 58	19		
427	V—21	方形	N—77°—E	168× 56	25		
428	U—21		N—13°—E	—×—	18		
429	T—20	方形	N—80°—W	141× 70	29		
430	U・V—22		N—70°—W	—× 60	21		6号溝と重複。
431	T—21	方形	N—76°—W	—×—	17		6・26号溝と重複。
432	V—22		N—24°—E	—× 81	27		
434	Y—9・10		N—62°—W	320×200	59		
435	Y・Z-10・11	方形	N—40°—W	276×130	27		
436	Z—11		N—69°—W	185×—			重複。
437	Y・Z-11	方形	N—65°—W	242×—	41		
438	X・Y-9		N—65°—W	382×110	53	かわらけ105	
439	Z-9・10		N—16°—E	452×$^{276}_{129}$	83		416号土壙と重複。幅110cmの階段状入口施設「を持つ。
440	V—21		N—26°—E	175×72	18		
441	W—21		N—17°—E	202×102	20		440号土壙に先行。重複。
442	W—21		N—64°—W	113×94	11		
443	W—21	隅円方形	N—67°—W	196×102	12		
444	X・W-21	隅円方形	N—80°—W	95×75	13		
445	W・X-20		N—18°—E	85× 70	25		
446	X-20・21		N—10°—E	—×255	15		重複。
448	X—21		N—70°—W	—× 72	30		
449	X—21			—×—	19		
450	X—21		N—22°—E	—× 55	31		
451	W—21		N—18°—E	—×92	16		
452	W—23		N—70°—W	295×$^{210}_{155}$	31	陶磁器89	
454	V—23		N—23°—E	364×—	30	砥石16・陶磁器63・「88	
455	Z—13		N—26°—E	162× 50	49		6・28号溝と重複。
456	T—26		N—74°—W	(320)×170	30	砥石10	
457	T—25		N—13°—E	332×137	10		
458	T—27		N—88°—W	—× 82	12		

No.	グリッド	平面形	長軸方向	規模、深さ(cm)		出土遺物	備考
459	Q-25・26		N—16°—E	238×106	30		
460	Q—25		N—27°—E	171× 70	20		人為的埋没。
461	Q—25		N—64°—W	178×104	10		
462	U—25	隅円長方形	N—21°—E	276× 54	46		ロームブロックの混入多い。
463	U—25	隅円方形	N—80°—W	124× 63	26		
464	T—22		N—7°—E	—×118	20		465号土壙と同時存在か。
465	T—22		N—76°—W	—×148	30		6号溝と重複。 重複。
466	Z—14	長方形	N—29°—E	331× 58	47		
467	A′—14	長方形	N—26°—E	227× 63	26		
468	A′-13・14	隅円長方形	N—33°—E	250× 52	38		
469	A′—14	隅円長方形	N—31°—E	185× 42	28		
470	A′—14	隅円長方形	N—27°—E	150× 51	28		
471	A-14・15	長方形	N—31°—E	273× 64	19		
472	A′—15	長方形	N—39°—E	—× 52	17		
473	A′—14	長方形	N—29°—E	—× 56	16		
474	A′—15	台形	N—66°—W	198×125	17		
475	X—8		N—21°—E	193× 81	20		ローム土の混入多い。
476	Y—8		N—79°—W	—×112	10		
477	Y—8		N—16°—E	120× 84	10		479号土壙と重複。
478	Y—8		N—151°—E N—34°—E	133× 98 —× 63	10 17		
479	Z—8		N—21°—E	123× 63	14		477号土壙と重複。
480	B′—11		N—39°—E	334× 84	47		482号土壙に先行。
481	B′—11		N—44°—E	218×—	43		重複。
482	B′—11		N—38°—E	—×68	13		
483	A′—11		——	—×—	12		上層にローム土の混入多い。
484	B′—11		N—41°—E	—× 80	21		
485	A′—12	隅円方形	N—36°—E	253× 70	30		
486	B′—12		N—61°—W	230×123	27		
487	B′—12	隅円方形	N—34°—E	152×81	30		
488	B′—13		N—61°—W	116×88	25		
489	B′—13	隅円方形	N—54°—W	132× 56	23		重複。
490	B′—13		N—34°—E	—× 49	15		
491	W—26		N—66°—W	—×146	14		6号溝と重複。
492	V・W-10		N—6°—E	—×160	39		52号井戸と重複。
493	X・Y-23		N—66°—W	174× 70	18		
494	X—24	隅円正方形	N—21°—E	117×115	67		重複土壙中一番新しい。 重複。
495	X—23		N—69°—W	158×—	21		493号土壙に先行。
496	V・W-23・24	隅円方形	N—64°—W	190×130	17		掘り直しの痕跡がある。
497	V・W-24	方形	N—70°—W	194× 76	39		
498	V・W-24		N—86°—W	91× 80	48		
499	X・Y-24		N—88°—W	238×154	24		ロームブロックの混入多い。
500	X-24・25	長方形	N—30°—E	179× 88	25		
501	X・Y-26	長方形	N—71°—W	205×89	10		黒ボク土にロームブロック散見、埋没土近似。
502	X—26	長方形	N—70°—W	188×80	28		
503	W—25		N—8°—E	—×115	10		重複。
504	V—25	方形	N—80°—W	170× 98	37		
505	V—25	方形	N—80°—W	162× 98	33		
506	V—25	長方形	N—72°—W	152× 74	23		
507	W—24		N—25°—W	168×104	14		
508	W—25		N—66°—W	—× 90	12		
509	V—26		N—27°—E	129× 99	17		
510	X—9		N—72°—W	320 235×—	46		
511	Z—11	ほぼ正方形	N—46°—E	104× 91	32		
512	W—24	台形	N—38°—E	135 100×122	39		
513	W—26・27		N—27°—E	265×—	9		6号溝と重複。
514	N—28	方形	N—30°—E	136× 54	13		
515	M—28	長方形	N—17°—E	220×130	33		
516	N—28	方形	N—64°—W	157× 70	7		
517	O—25		N—9°—E	360×298	19	かわらけ106	

4　掘立柱建物・柱列及び小穴群　（第20～22図，図版21）

掘立柱建物

第１号掘立柱建物（第20図上・図版21）

発掘区ほぼ中央のＬ・Ｍ・Ｎ―12～15グリッドに位置する。南側に７号溝、西側に浅い４号溝をまたいで３号溝がある。東西４間、南北２間ないし３間の建物で、南面に庇をもっている。各ピットの計測値及びピット間の距離は表４に示す。

160号土壙が、建物の北側列中にある。この土壙はピット１―14を結ぶ線上にその中心が位置しており、ピット17―Ｃ：2.14ｍ、Ｃ―16：2.14ｍと全く同じ計測値を示すこと、Ｃ―７・16―８・14―10のピットをそれぞれ結ぶ線はほぼ平行な関係にあることなどから、少なくとも160号土壙中のピットＣは本建物に関連する柱穴と考えられる。また、ピットｅはＣ―16のほぼ中央にあり、これも同様に考えられる。160号土壙中のピットａ部分からは、五輪塔（火輪）が出土している。

周辺の遺構では、庇に南接して７号溝が東西に平行して走り、多量の遺物を出土している。本建物との同時期存在が考えられる。また４号井戸は本建物の西側の至近距離（最短距離75㎝）に位置しており、この建物に付属していたものであったかもしれない。

７号溝は出土遺物から室町時代（16世紀代）と見られており、これとの平行関係を重視すれば、本建物の時期もその前後と考えられるが、建物の性格は不明である。

第２号掘立柱建物（第20図下・図版21）

発掘区北端のＭ・Ｎ―１・２グリッドに位置する。浅い13号溝をまたぐように各柱穴が存在する。東西方向に棟をもつ１間×１間の建物である。各ピットの形状は、次のとおりである。

各ピット間の距離は、桁行１―４：3.60ｍ、２―３：3.66ｍ、梁行１―２：2.07ｍ、３―４：2.18ｍである。主軸方向は第１号と同様にして、Ｎ―80°―Ｗを示す。各ピットからの出土遺物はない。

第２号掘立柱建物計測値　単位㎝

	上　パ	下　パ	深　さ
1	28×25	14×9	38
2	35×31	18×16	46
3	27×25	径　16	39
4	27×22	径　14	22
平均	29.3×25.8	15.5×13.8	38.8

柱列

ピットを列状に配す遺構を「柱列」と呼び、ここに一括した。柵状の施設が考えられる。同様の遺構がＥ・Ｆ―21・22グリッドやＴ・Ｕ―23・24グリッドも認められるが、不明瞭であった。

第１柱列（第21図上・図版21）

発掘区西端のＢ・Ｃ・Ｄ―13～17グリッドに位置する。北方へ向って扇形にひろがる浅い窪地の壁際に、南北方向に２列検出された。２号溝の南側延長線上に概ね配置している。西側では80㎝前後の間隔で比較的

密に、東側ではこれよりも粗く位置する。各ピットの形状は上面径22～60㎝、底面径15～30㎝、深さは７～63㎝である。

第２柱列（第21図下・図版21）

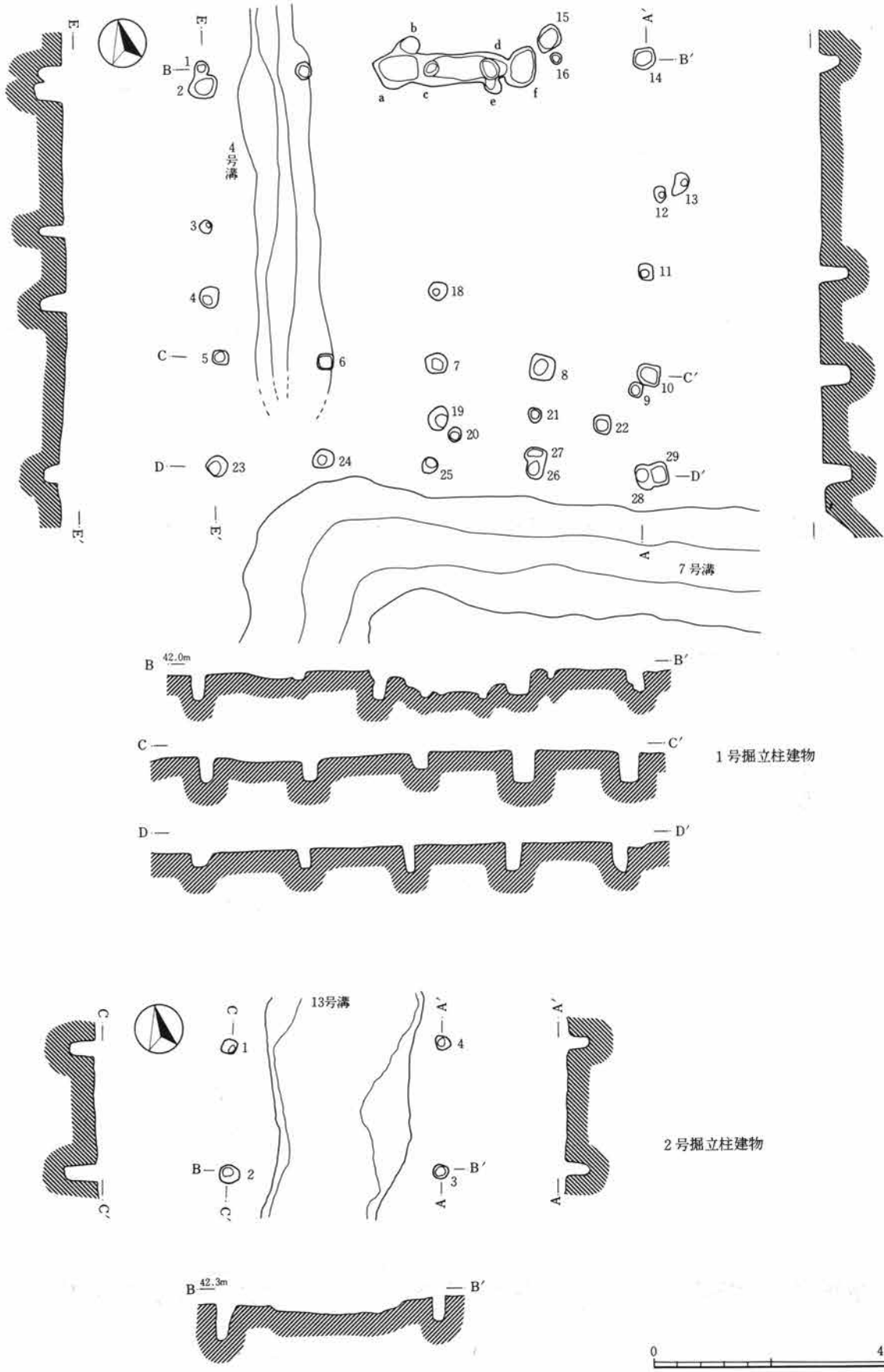
発掘区南側のＲ・Ｓ・Ｔ―28・29グリッドに位置する。東西方向に走る大溝の壁の中位（溝底面から100㎝ほど上方で確認）に検出したもので、南岸に５個、北岸に５個がある。北岸の５個は比較的揃っており、上面径40～64㎝、底面径20～30㎝、深さ31～63㎝である。ほぼ等間隔に並ぶ。南岸は乱れていて東側２個が離れ、西側３個がほぼ等間隔で並ぶ。南岸の５個は上面径26～44㎝、底面径20～25㎝、深さ26～33㎝である。各ピットはほぼ垂直に掘られているが、柱痕は検出されなかった。柱列の性格は不明だが、溝を渡るための橋・堰・舟着き場などの施設が考えられる。

小穴群（第22図）

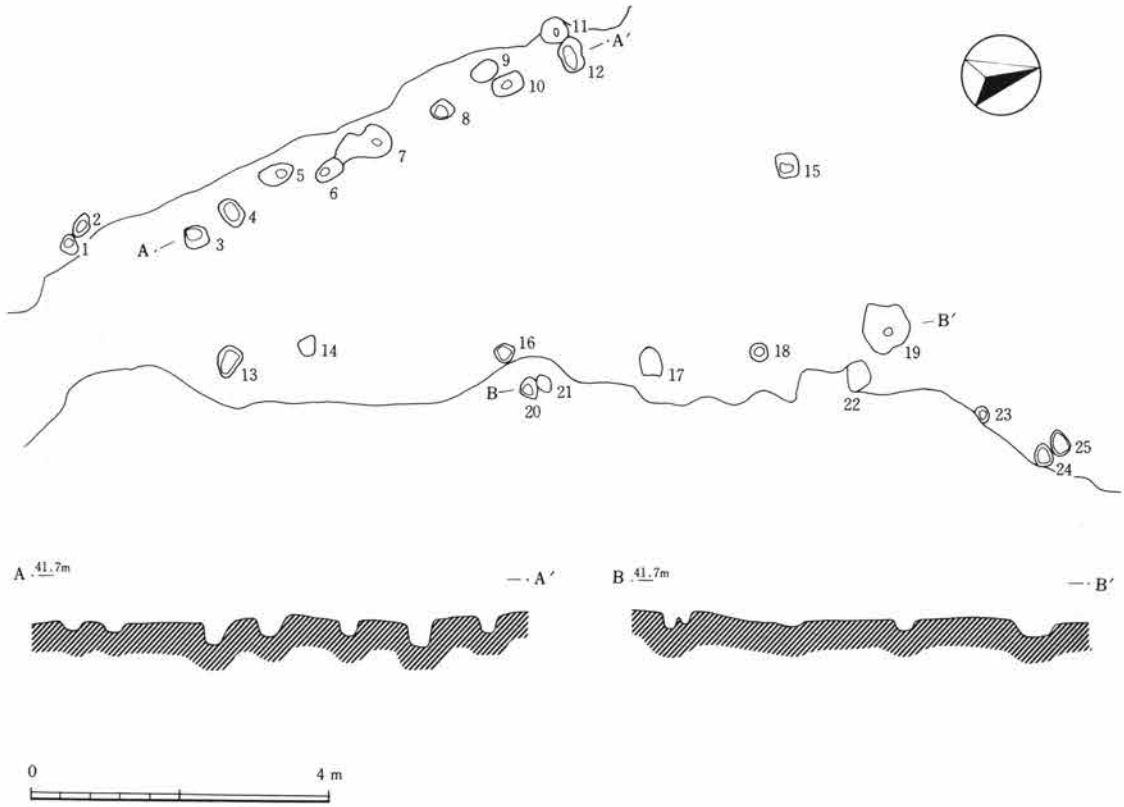
発掘区北半で建物や柱列などの様な規則性がなく、まとまった遺構としてはとらえられなかったピットの集中部が数ヶ所あり、何らかの施設の痕跡と考えられ、これらを「小穴群」としてあげておく。なお、挿図中の数値はローム上面からのピットの深さである。

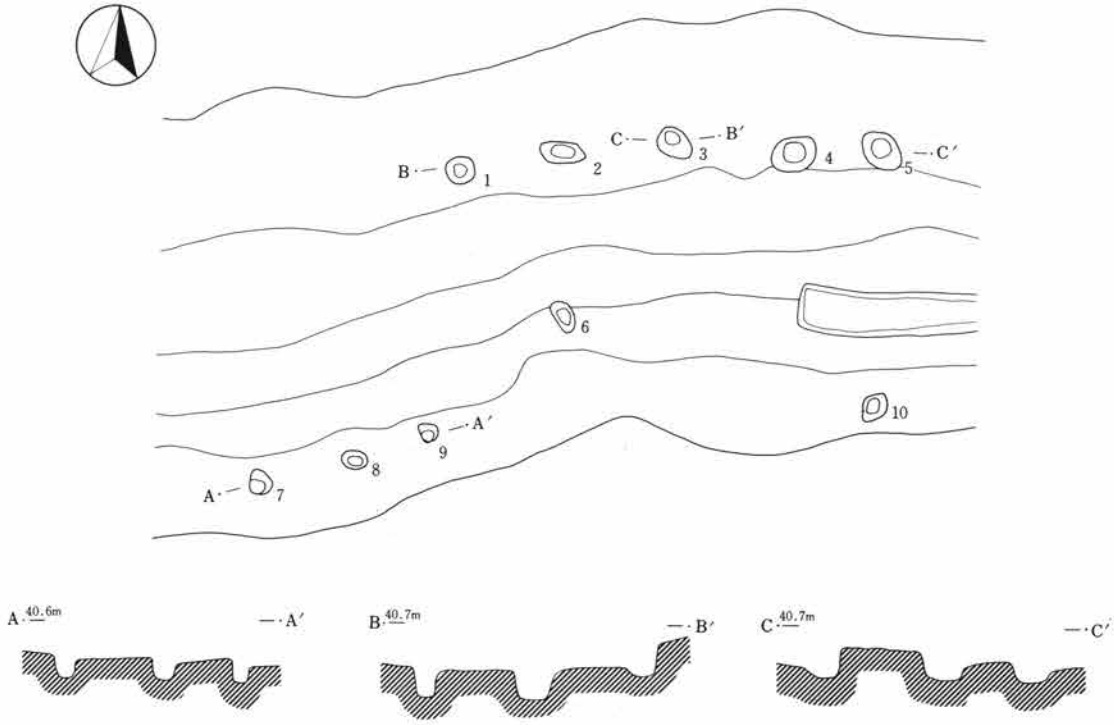
第21図上はＥ～Ｊ―７～13グリッドのあいだにあり、３・４号溝と11号溝との間にピットの集中部がある。ここは、四面を浅い溝で囲まれた“方形区画”の北東部に位置し、建物の存在した可能性が高い。各ピットの形状は一様でなく、数度の建て替えを行ったことも考えられる。規模は上面径18～50㎝、底面径５～30㎝、深さ11～40㎝である。

第21図下は、５号溝をはさんだＬ～Ｖ―５～12グリッドのあいだに東西に広く分布する小穴群である。第１号掘立柱建物と、第２号掘立柱建物との間に位置し、建物の存在が考えられる。ピットが最も密集する６号溝の東側、Ｒ～Ｕ―７～９グリッド付近は、井戸の分布が途切れる一画である。また、ピットは重複が著しい。特に315号土壙の周辺に集中部がある。規模は上面径20～52㎝、底面径12～26㎝、深さ14～50㎝である。

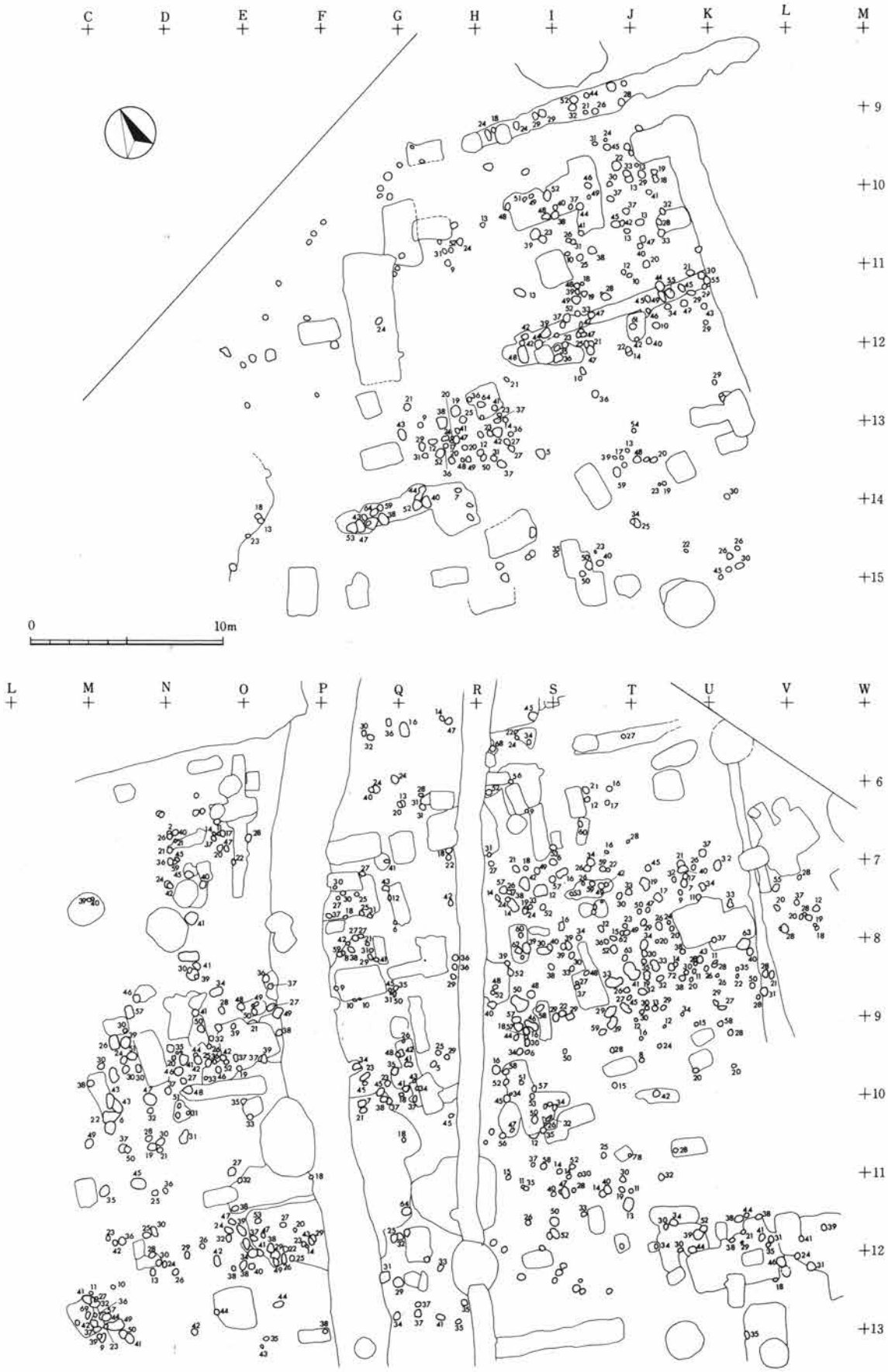


第20図　掘立柱建物





第21図　柱列(上第１柱列・下第２柱列)


C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
+9
+10
+11
+12
+13
+14
+15
0
10m
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
+6
+7
+8
+9
+10
+11
+12
+13

第22図　小　穴　群

表4　掘立柱建物・柱列計測値一覧

主軸方向	桁　行 m	梁　行 m	桁行柱間 m	梁行柱間 m	庇　柱間 m
N—77°—W	1—14：7.58 5—10：7.34 23—28：7.26	1—5：4.90 17—6：4.92 C—7：4.97 16—8：5.20 14—10：5.37	1—17：1.77 17—C：2.14 C—16：2.14 16—14：1.56 5—6：1.80 6—7：1.92 7—8：1.78 8—10：1.84	1—3：2.66 3—5：2.24 平均④　2.45 参　考 3—4：1.28 4—5：0.97 1—4：3.94 C—18：3.77 平均⑤　3.86 18—7：1.20 14—11：3.65 11—10：1.73	23　24：1.82 24　25：1.85 25　26：1.77 26　28：1.84 平均⑥　1.82 母屋—庇柱間 5　23：1.87 6　24：1.64 7　25：1.62 8　26：1.71 10　28：1.68 平均⑦　1.70
平均①	7.39				
平均②		5.07			
平均③			1.87		

※1　計測値は⅙。原図から起した数字である。
2　柱穴間の距離は心心で計測した。
3　主軸方向は1—5・14—10の心心距離のそれぞれの中点を結ぶ線が、磁北方向と交わる角度である。

ラインを通るピット形状の平均	上　バ cm 長径×短径	下　バ cm 長径×短径	深　さ cm
1—5—10—14	32.0×29.5	20.5×17.0	43.0
23—24—25—26—28	35.2×29.6	20.4×18.4	38.6
1—2—3—4—5	32.4×28.8	19.6×16.2	46.6
14—11—10	34.0×31.3	21.0×17.0	44.7
5—6—7—8—10	34.6×31.6	23.2×20.0	42.6
1—17—c—d—16—14	29.3×26.2	20.0×15.0	33.2

第1号掘立柱建物計測値

番号	形　状 上バ cm 長径×短径	下バ cm 長径×短径	深　さ cm
1	27×25	15×14	43
2	49×40	35×27	51
3	径21	10×7	48
4	38×35	20×17	48
5	27×23	18×16	43
6	26×25	21×20	39
7	40×34	20×18	27
8	42×41	28×22	52
9	24×20	18×15	46
10	38×35	29×24	52
11	28×24	14×13	48
12	27×21	11×9	28
13	41×24	13×10	26
14	36×35	20×14	34
15	50×37	25×16	33
16	19×17	13×10	14
17	28×26	径18	13
18	33×30	径11	50
19	43×32	23×22	47
20	24×21	16×14	4
21	径21	径15	45
22	33×30中段径15	径10	47
23	34×32	23×20	25
24	36×31	径15	35
25	28×26	径15	43
26	34×31	26×21	45
27	39×20	28×11	46
28	44×28	23×21	45
29	39×26	28×23	10
a	85×56	66×43	44
b	33×29	16×11	44
c	28×23	21×15	46
d	38×31	33×19	49
e	30×27	20×18	42
f	70×48	58×38	39
平均	35.8×29.1	22.1×17.5	38.6

第1柱列計測値

番号	長径×短径 cm	深さ cm	9	37×26	22	18	24×24	11
1	22×22	10.5	10	41×27	35.5	19	97×62	17.5
2	34×18	6.5	11	35×35	63	20	29×23	17.5
3	33×29	12.5	12	47×26	22.5	21	24×19	7.5
4	38×26	6.5	13	41×28	6.5	22	41×34	21.5
5	48×26	33	14	26×21	9	23	22×21	17.3
6	40×22	33	15	33×30	35	24	29×25	5
7	35×25	30	16	28×26	11	25	30×27	8
8	31×25	29.5	17	36×27	6.5	平均	36×27	19.1

第2柱列計測値

番号	長径×短径 cm	深さ cm
1	40×36	50
2	60×30	62.5
3	50×40	46.5
4	64×46	43
5	63×42	54
6	48×25	47
7	34×30	29.5
8	36×24	26
9	32×23	32.5
10	44×34	31.5
平均	47.1×33	42.2

Ⅲ 調査の内容・遺物

1 陶 磁 器

(1) 陶・磁器の選択について

当遺跡における中世遺構の陶・磁器の出土総量は508点であった。これらは調査区内から出土したものを主体とし、排土中からの表採資料も、僅かながら含んでいる。その年代幅は13世紀と見られる舶載陶・磁器から、近世～現代に至るまでの長期に亘るものである。

これらの破片すべてを掲載することは紙面と整理労力の都合上出来ず、選択を余儀なくされた。そこで、中世陶・磁器と考えられる破片は、すべて掲載し、近世遺物は、江戸時代前期と考えられる破片と、稀少性の高い破片についてのみ掲載した。掲載総数は全体の約２割に当る93点を扱い、選択に当っては一括性の高い組合せも重要視した。

(2) 観察について

観察に当っては、一率、均等な意識で観察する意図から、一覧表を作成した。それが表５陶磁器一覧である。項目立ては、出土陶・磁器の特徴が現れるよう配慮したつもりである。Noは図版内の実測図番号、写真番号に一致し通番とした。土器種は、磁器・陶器という焼物種名称と、器種・釉種とを併記した。出土位置は、出土層位も明記した。量目の項に記入された数値の大半は、復元測値である。胎土は、陶・磁胎中の夾雑鉱物粒の量を観察した。磁胎の場合、胎土中の鉱物粒が目立つのは黒色～灰色の鉱物粒であり、白色の鉱物については確実な観察ができなかった。白色の長石・石英などは磁胎中に隔着してしまうためである。陶胎の場合は、白色、灰色、黒色の鉱物粒の量をさしている。その量については少ない方から、なし、微、少ない、含む、多いの順である。夾雑鉱物粒の次に色調の記入があるが、胎土の色調をさしている。磁器の場合、胎土の定義は、純白でなくてはならないが、陶質の個体の中に灰色～褐色を呈した胎土の個体があり、それらについては、磁器を焼造する製作意図が認められれば磁器とした。色調は、基調をなす釉の色調や釉調を記入したが、その中の若葉色、砧手、透明釉、白磁釉など伝統的に呼称されている名称は、一般理解の便のため使用した。特徴の項目は釉の細かい説明が前項目でなされていない場合に記入したり、文様、意匠、技法なども併せて記入した。摘要欄は製作地の推定ないしは、作調から見た製作地系統を記入した。

(3) 観察の結果について

93点のうち中国青磁は第23図に示した14点があり、鎬手蓮弁文碗が１・２・３で、いずれも編年観[1]にしたがえば中国南宋代で13世紀の龍泉窯製と考えられるものであった。南宋代と考えられる青磁は、６・９の皿があり、６は猫掻手でいわゆる同安窯系の珠光青磁である。14世紀の元代の製品は14の鉢、８の碗があり、特に14は砧手の発色を呈し釉掛も厚く、出来のすぐれた龍泉窯製品である。南宋あるいは元と考えられるが判断に迷う青磁碗が４・５である。15・16世紀の明代と考えられる例は、蓮弁文碗の10・11があり、稜花皿の７・12・13がある。７・13の高台部は明代以降に多い高台内面を蛇目に釉落した破片である。

中国製白磁は第24図に示した15～18まで小皿、皿の４点がある。製作年代[2]は18が15・16世紀の明代と見えるほか、南宋～元代、つまり13・14世紀であろう。

中国製青花（染付）は第24図19～27の９点がある。いずれも16世紀後半[3]の明代、龍泉窯系の製品である。発色は明代後半以降、景徳鎮窯の青花特有の藍色の呉須と青白磁釉も淡くしたような白磁釉が施こされてい

る。高台部を残す21～25の端部は、施釉を削り落した素地、釉の境目が明瞭で、生掛の手法が認められる。

舶載と考えられる黒色釉の製品は第24図28・29がある。厚い天目釉が施釉され出来のすぐれた製品である。28は体部の轆轤目条痕と施釉の厚さや、安定した釉から見て、中国南宋代の四耳壺体部下半と考えられる。29も釉調から中国製であろう。

国産の焼締陶器は第25図30～37の８点があり、渥美焼は32～35の４点で、31・36・37が常滑焼と考えられる。30は常滑焼の特徴である石英粒の多さ、渥美焼の素地の荒さの両特徴にあてはまらず判断に迷う。このため、あるいは東海地方の小規模窯業生産地域の製品であるかもしれない。製作年代[4]は、口作りの特徴などから、36が14世紀後半、30が15世紀末期の頃、31が16世紀前半、37が15世紀中頃と考えられる。

国産施釉陶器は中世と近世の接点前後にある個体があり、それらを含め次に中世国産施釉陶器に触れたい。

国産の中世施釉陶器には、13・14世紀の目が詰み、重みのある胎土の瀬戸焼片は一点も認められず、やや目の詰んではいるものの後出の瀬戸焼であるのか美濃焼であるのか判然としない瀬戸・美濃の一群と、胎土の粗な美濃焼とが存在する。

瀬戸、美濃の一群は、第26図38～44・46・47・50～52の13点である。製作年代[5]は38～40・42・43・48のおろし皿．仏花瓶などが15世紀前半、41・46・47の皿、平鉢などが15世紀後半、50の碗が15世紀後半から16世紀前半、51の碗が16世紀後半、54の碗が16世紀後半から17世紀にかけてと考えられる。器種には皿・おろし皿・平鉢があり特殊な器種に香炉・仏花瓶・天目形の碗など儀器的な器種も含まれる。

美濃焼の一群は第27図55～61・64・第26図49の９点がある。製作年代[5]は55～59の皿類が16世紀前半、49の稜花皿が16世紀中頃、60・61・64の皿類が16世紀後半と考えられた。器種には皿類が極立って多く、美濃大窯出現に併う量産化を出土量の多さから窺うことができる。

近世陶・磁器のうち、江戸時代前期を示す遺物類は前代に比べ激減し、中期以降、序々に増加の傾向が認められた。したがって出土した陶・磁器片約500点のうち約400点は、江戸時代中期以降から現代に至る間の所産と考えてよい。江戸時代前半の陶・磁器類のうち、17世紀代と考えられる磁器類はまったくなく、陶器主体で、美濃・瀬戸系の陶器、唐津系の陶器であった。

美濃・瀬戸系は第27図62・63・65・67・69・72・73があり、唐津系に68の碗がある。18世紀の後半を一つの頂点にして伊万里系の磁器類の多出が認められ、その頃に相当する個体が第28図、76～80であり、いずれも山呉須と称される沈んだ色調の染付けである。

第28図の74・75・81～84・86以降は、稀少性の高いものと遺構内から出土した例を掲げた。

74は油壺の口縁部で、伊万里系である。当遺跡における油壺片はこれ一点である。

75は磁胎の人形で、赤絵付が施こされる。磁胎の人形の出土は寡聞であり、稀少例として掲げた。江戸時代中期の所産であろう。

81は伊万里系の染付磁器碗で18世紀末から19世紀前半の伊万里系の磁器である。

82は磁胎でありながら褐色の下絵付を施こす。19世紀から明治時代の製作と考えられる。

83は伊万里系の俗にいうくらわんか[7]手の皿である。18世紀後半から19世紀前半の製作と考えられる。

84は伊万里系染付赤絵の碗片である。当遺跡における近世磁器（近代・現代を除く）のうち、赤絵付は75と本例の２点に限られる。江戸時代庶民磁器の中で赤絵の存在が、いかに少なかったか理解される例である。

86は伊万里系の染付の深碗で、諸遺跡から出土した庶民磁器の中では少ない出土例である。18世紀後半から19世紀前半の製作であろう。

87は伊万里系の染付磁器碗であるが、内面に青磁釉が施こされ、外面に染付施文される。青磁釉は、初期・

中期の伊万里の系統的な青磁色ではなく、もっと明るい青磁色を呈し、クローム青磁色でもない。この種は、各遺跡で時折り見かけるが施釉の施し方が特殊なので、将来的に製地が固定されるかもしれないため、例として掲げておいた。製作は19世紀後半から20世紀前半であろうか。

88は伊万里系の白磁の猪口である。製作は18世紀半から19世紀後半であろうか。

89は染付磁器の小坏である。製作は19世紀であろうか。

90は染付磁器皿である。呉須は山呉須を用いており18世紀から19世紀前半である。

91は型紙印判の磁器皿である。呉須はベロ藍を用いており20世紀後半の製作である。

92は染付磁器皿である。呉須はベロ藍を用いており、20世紀後半の製作である。

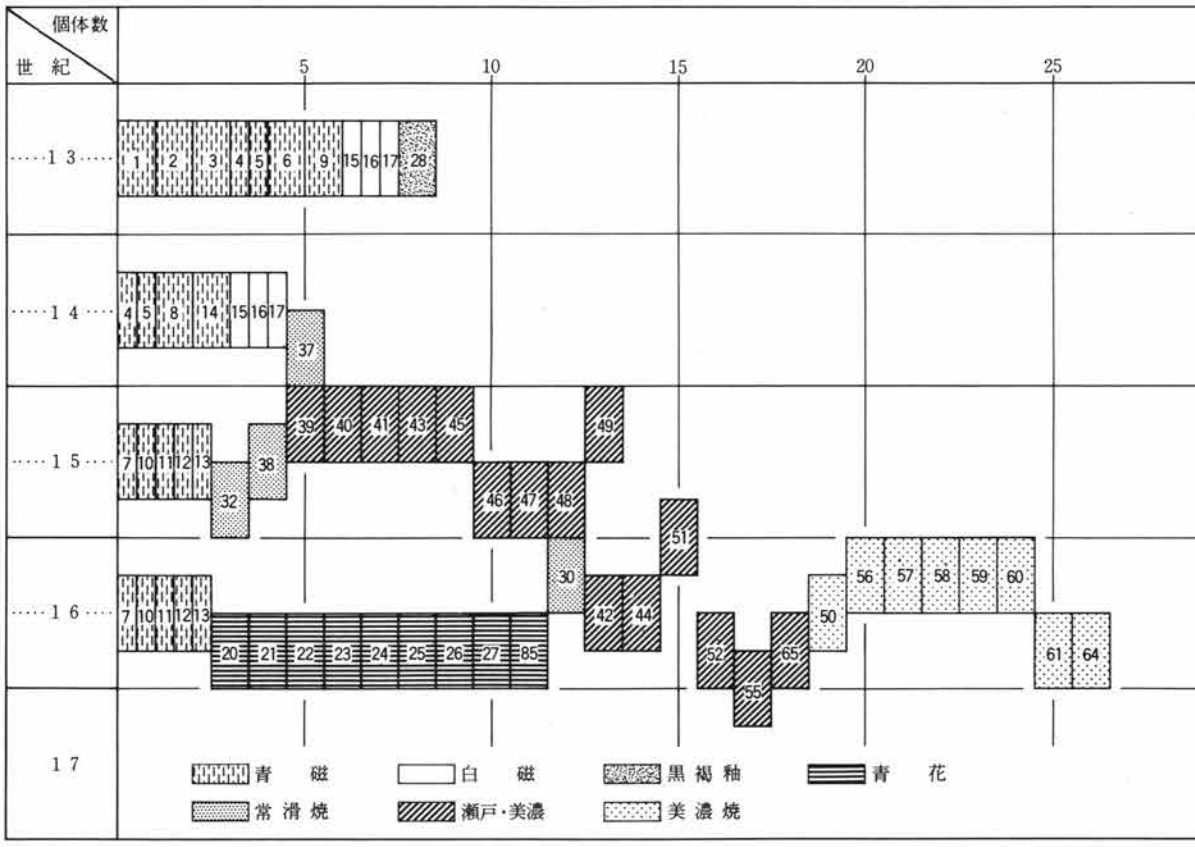
93染付磁器碗である。器形が一般的でないので掲げた。呉須は、山呉須を用いており、18世紀後半から19世紀の間の製作であろう。

(4)　出土陶・磁器の傾向と出土陶・磁器から見た遺跡の消長

浜町屋敷内遺跡の性格付けは、遺構様相・時期が単一でないために理解しがたい側面をもっている。本項は整理担当から陶・磁器の分析によるアプローチをもって、特に中世における性格付けに寄与せよとの申し入れがあったので、それを目的とし、以下に触れたい。

遺跡の消長を知るために付表のグラフを作成した。年代軸を上・下に置き、出土量を左・右に取った。グラフの作成にあたり苦慮した点は次のとおりである。

扱った幅は、整理担当から申し入れのとおり、主体を中世に置き、世紀区分とし、さらに各世紀を前半・後半に細分して記入した。資料は、中世遺物の64個体のうち、時期不明の29・32～35・52・53の８個体を除



付表　　中世陶磁器の世紀別出土量グラフ

く56点について行なった。記入の方法は、世紀の前半・後半に区分しうる既編年観の成立している常滑[4]・美濃[5]・瀬戸焼については、それらを拠所としたが、舶載陶磁器の編年観については、明瞭でない部分も多く、概括的な表記とならざるを得なかったが、青花については、当遺跡青花とほぼ同じ一群が16世紀後半代に搬入[3]されたとして時期が示され、それにしたがった。このため青花を除く舶載陶磁器は、おおまかな区分とならざるを得ず各世紀の中央に記入し、13・14世紀のように２世紀にまたがる例は、それぞれの世紀の中央に0.5個体づつ配分した。たとえば15・16のようにである。また、37・49の年代観は前者が15世紀中頃、後者が16世紀中頃であるため中頃を世紀の中央に位置させた。こうして作成したのが付表である。

13世紀代は、青磁６個分、白磁は1.5個体、黒釉は１個体である。中世前半に一つの頂点があることが判かり、14世紀代には減少傾向が認められた。13世紀代の器種は、碗・皿・壺類であった。県内におけるこれらの器種揃えは生活に伴う場合が多く、長楽寺[8]例などに見るとうりで、生活があったとしても在地の軟質陶器の出土が微弱であるので、小規模であったと察せられる。またⅢの８（P133）において墓石の検討がなされ、その結果、14世紀終末から周辺に墓地が存在し、その造立は15世紀初頭を頂点にして、その直後、人為破壊されたのではないかとの、墓地説が出されている。13世紀の陶・磁器の組合せは、生活に伴うと考えられるものであり、墓址関連の追証は得られなかった。この時期における県内古墓[13]例は円福寺古墓の白磁四耳壺の１点の例を除き、他例において中国陶磁器の出土は皆無に等しく、当地域にあっては、中国陶・磁の骨蔵器の使用、供献は一般的でなかったとすることができる。

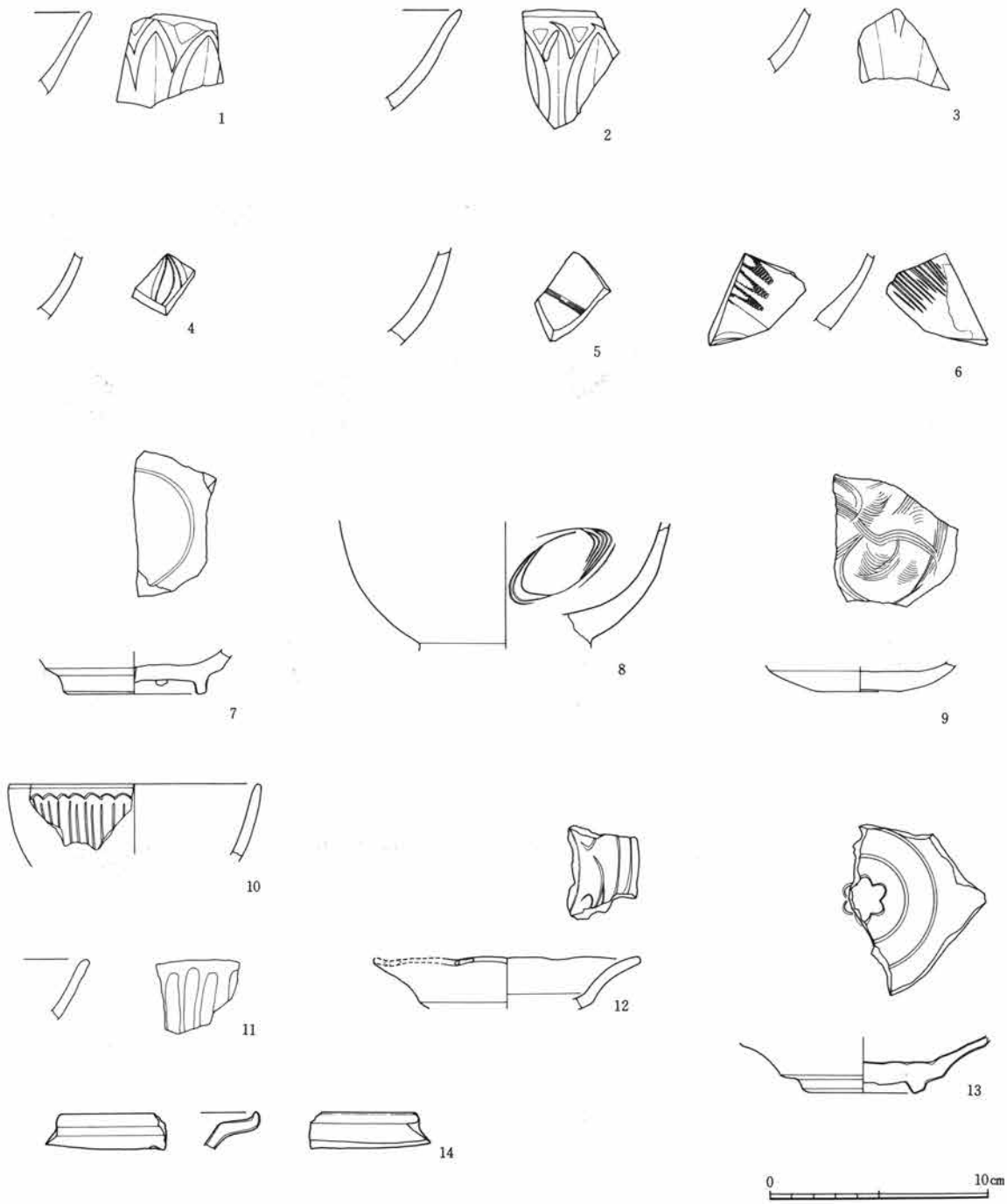
14世紀代は８・14などの中国元代と考えられる青磁があり、前代からの生活が何んらかの形で存在したと見られる。４・５・15・16などは13世紀に属す可能性もあるがその根拠がなく、信憑性に欠けよう。14世紀の中に36の常滑焼大甕が含まれるが、貯蔵用の大甕であり、県内出土の骨蔵器にこの種の大甕が用いられた類例はない。

15世紀代は青磁5.5個体分、常滑焼２、瀬戸・美濃9.5、計17個体分が存在し、前半から、急に活況を呈している。このことは前代と別な形での生活の盛り上りと感じられ、その状況は16世紀後半まで存続する。15世紀に出土率が高まるのは流通機構の完備、それを受けての生産地域での量産によることも考えられるが、国内産の施釉陶器の生産からしてみれば美濃大窯の量産は16世紀になってからで、当遺跡出土陶・磁の量的に多出の15世紀とは一世紀のひらきがあるので、当遺跡の15世紀における量的な頂点は、そうした量産等の外的な要因ではなく、当遺跡において新らたな生活が大規模に展開し始めた内的な成因によると推考される。

16世紀代は、青磁2.5、青花９、常滑焼１、瀬戸・美濃５、美濃焼８、計25.5個体分である。16世紀に至っては、美濃焼が大窯段階に入るので、当遺跡においても反映を認めて良いかもしれない。15・16世紀の国産施釉陶器の県内出土例では、最も多い。最も多いのは青花についても同様で、大胡城[9]址から１点、歌舞伎遺跡[10]から１点、後田遺跡[11]から１点、薮田遺跡[12]から５点の出土があり、現在までに30例以上を数えた中国陶・磁出土の遺跡数と比較して中国青花の存在がいかに少ないか理解される。当遺跡の中国青花のうち27の端折皿は今のところ県内唯一の例である。16世紀代も前代からの生活の延長はあったと認められ、他に15・16世紀の日常什器の土鍋・擂鉢などの一群があり、それらから一般的な生活形態が想定され、15世紀段階の仏花瓶や、15・16世紀の香炉、15世紀の土製火鉢など、特定の職能や階層を示す遺物があることからそれらを日常的に使用することの出来た人々の存在も示唆されるのである。

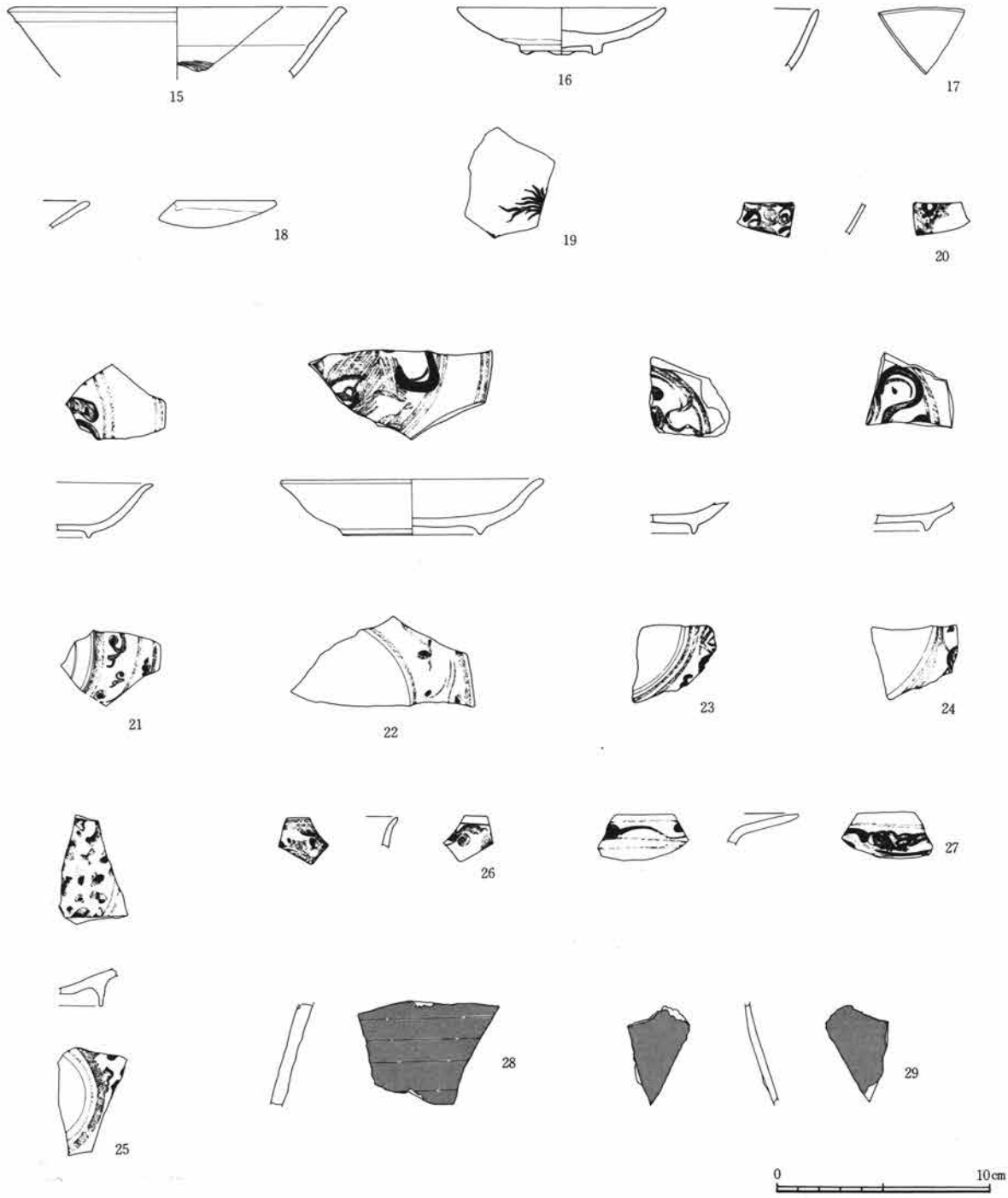
17世紀初頭以降から17世紀中頃にかけては、16世紀終末から17世紀前半の所産としうる瀬戸・美濃の皿55があるのみで後出の一群との間に空白が生じた。この空白は太田浜町屋敷内遺跡における生活の廃絶を直接的に物語ると同時に、遺跡周辺も生活領域でなくなったことが示唆さる。

この後、現代に至るまでの陶磁器片は大片がすこぶる少なく、割れ口の摩耗も部分的に認められる。発掘調査された民家跡に伴う、陶・磁器片中の大片は大きな比重を占めて存在しており、それらと当遺跡から出土した陶・磁器片とを比較すれば、生活に伴い破損し、直接廃棄された製品とは思えず、二次的な廃棄、つまり、廃棄された陶・磁器片がここまで及んだと解釈される。



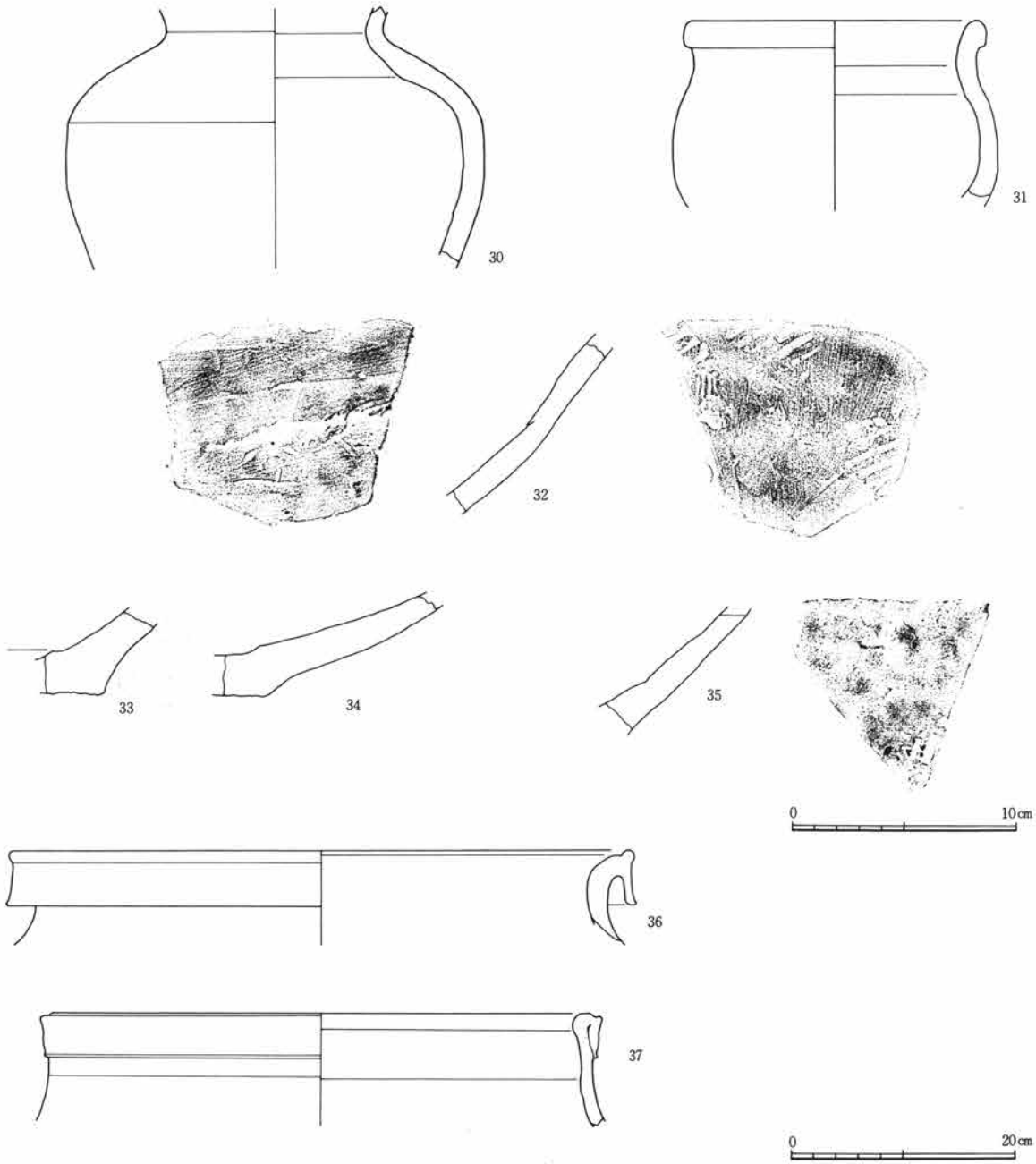
第23図 舶 載 陶 磁 器 (1)

1．亀井明徳　「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」『考古学雑誌　58巻　4号』　1973
　上田秀夫　「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究　No. 2』（日本貿易陶磁研究会）　1982
2．森田　勉　「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究　No. 2』（日本貿易陶磁研究会）　1982
3．小野正敏　「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究　No. 2』（日本貿易陶磁研究会）　1982
4．赤羽一郎　「常滑」『世界陶磁全集3日本中世』　1977
5．楢崎彰一　「美濃古陶のながれ」『美濃古陶』　1980
6．狭義のくらわんかは見込に釉掻の蛇目のある碗・皿をさして呼ばれているが、広義では粗製の庶民雑器をさして呼ばれている。ここでは広義の意である。

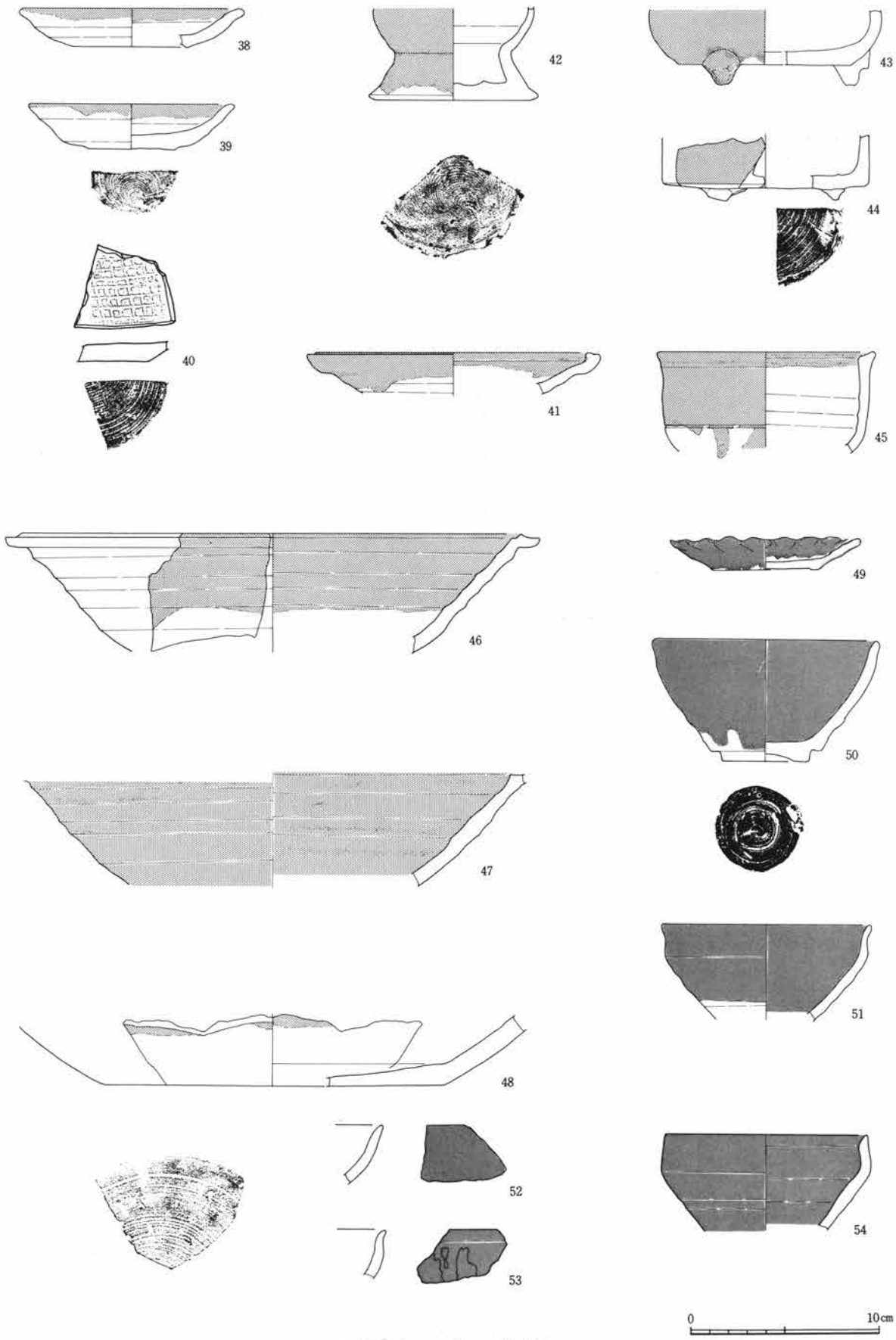


第24図　舶載陶磁器(2)

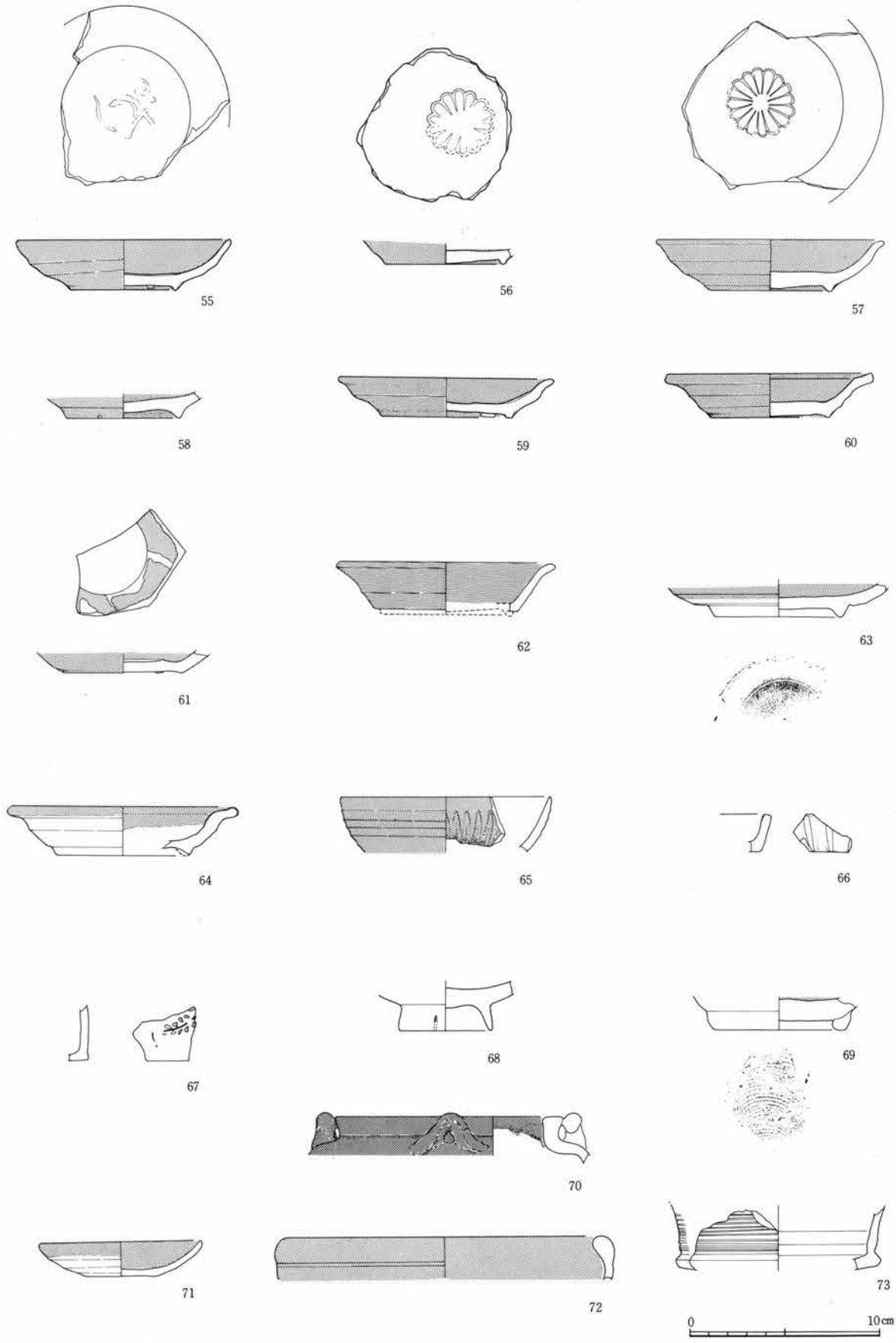
7．近世磁器の年代観は大橋康二ほか　「肥前陶・磁の変遷と出土分布」『国内出土肥前陶磁』（九州陶磁文化館）　1984による。
8．（尾島町教育委員会）『長楽寺遺跡』　1978
9．大江正行・飯田陽一　「群馬県出土の中国陶磁」『関東の中国陶磁』（群馬県立歴史博物館）　1982
10.（群馬県埋蔵文化財調査事業団）『歌舞伎遺跡』　1982
11.（群馬県埋蔵文化財調査事業団）『後田遺跡見学会資料』　1982
12. 群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査し、目下整理中である。下城正・関晴彦氏教示による。
13.（群馬歴史考古同人会）『火葬墓分科会研究資料　No. 1』1982　に集成されている。



第25図　陶　磁　器 (1)



第26図　陶　磁　器(2)



第27図 陶 磁 器 (3)

第28図　陶　磁　器(4)

表5 陶 磁 器 一 覧

No.	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	摘要
1	磁器（青磁碗）	E～H―10～13グリッド	口縁部小片	黒色鉱物粒微。淡灰色。釉は青緑色で若葉色を呈す。	鎬手青磁碗の体部小片である。外面に蓮弁と間弁がある。釉は厚く、細かい気泡を多く含み乳濁する。内面は滑らかで削りによる再調整痕が釉下に見える。	龍泉窯
2	磁器（青磁碗）	表採	口縁部小片	黒色鉱物粒微。淡灰色。釉は砧手。	鎬手青磁碗の体部小片である。外面に蓮弁と間弁がある。釉は厚く、細かい気泡を多く含み乳濁する。内面は滑らかで削りによる再調整痕が釉下に見える。	龍泉窯
3	磁器（青磁碗）	24号井戸上層	体部小片	夾雑鉱物粒微。淡灰色。釉は青緑色。	鎬手青磁碗の体部小片である。外面に蓮弁と間弁がある。釉は厚く細かい気泡を多く含むが透明感は強い。内面は滑らかで施文はない。	龍泉窯系
4	磁器（青磁碗）	78号土壙埋土	体部小片	夾雑鉱物なし。灰色。釉は淡褐色。	青磁碗の体部小片である。釉は薄く施釉され、貫入が入る。釉に若干の気泡があり、わずか乳濁する。内面に片切りによる劃花の施文あり。	龍泉窯系
5	磁器（青磁碗）	E～H―10～13グリッド	体部片	夾雑鉱物なし。灰色。釉は青緑色。	青磁碗の体部片である。釉は薄く施釉され、貫入が入る。外面には鎬手状の凹凸が入るが顕著でない。釉の気泡は少なく透明感強い。内面には劃花による施文あり。	龍泉窯系
6	磁器（青磁碗）	M・N―1～4グリッド	体部片	夾雑鉱物なし。淡黄灰色。釉は淡褐色。	青磁碗の体部小片である。外面に櫛掻きによる施文あり、露胎と施釉部分あり、釉下に篦削りによる調整痕あり、釉は気泡が少なく透明感あり、内面は猫掻きによる施文あり、内面底に劃文あり。	同安窯系
7	磁器（青磁皿）	表採	底部片	夾雑鉱物粒微。暗灰色。釉は青緑色。	稜花皿の底部片である。釉は細かな気泡がわずかに立ち、透明感が強い。内・外の釉面にはおおまかな貫入があり、外面の主貫入は右上りとなる。外面は体部下半に稜がつく。内面底に一条の圏線があり、中央に円形の印文あり、高台は外面から端部に至るまで施釉され、内面の釉は削り取られている。削りの走行は轆轤左廻り。	龍泉窯系
8	磁器（青磁碗）	3号土壙埋土	体部片	夾雑鉱物粒微。淡黄灰色。釉は青緑色。	青磁碗の体部片である。釉は厚く施釉され、細貫入が多く入る。外面の主貫入は右上り。釉の気泡は少なく、透明感が強い。内面には渦文の劃文が見られる。	龍泉窯系
9	磁器（青磁皿）	24号井戸上層	底径3.7㎝	夾雑鉱物なし。淡灰色。釉は淡緑色。	上げ底気味の底部を持つ。底部外面は施釉なく露胎となり素地と釉の境目に鉄足状の酸化あり。底外面は篦削りの再調整を受け轆轤の回転方向左回りを示す。釉は薄く掛けられ、気泡は極めて少なく透明感が強い。内面に櫛書施文あり。	龍泉窯系
10	磁器（青磁碗）	表採	口縁部片	夾雑物粒微。淡灰色。釉は淡褐色。	青磁碗の口縁部小片である。外面に篦書きによる刻文の蓮弁がある。その単位はおよそ0.7㎜である。釉はおおまかな気泡を多く含み透明感がある。内外共に細貫入が入り、内面は滑らかである。	龍泉窯系
11	磁器（青磁碗）	表採	口縁部片	夾雑鉱物なし。淡灰色。釉は淡緑色。	外面に簡略化した蓮弁文あり。釉は厚い。乳濁する。気泡は細かい。内面に左上りの貫入あり、その方向から轆轤は左廻り。	龍泉窯系
12	磁器（青磁皿）	遺跡東端表採	口縁部～体部片	夾雑鉱物粒微。灰色。釉は青緑色。	青磁稜花皿の体部から口縁部にかけての破片である。釉は細い気泡を多く含み貫入多い。体部外面下方に稜が付く。内面は劃文あり。	龍泉窯系
13	磁器（青磁皿）	59号土壙埋土	底部片（⅓残存）	夾雑鉱物粒微。暗灰色。釉は青緑色。	稜花皿の体部から底部にかけての破片である。釉は薄く気泡が少ない。透明感あり。内外面の釉面におおまかな貫入あり、外面の主貫入は右上りとなる。外面は体部下半に稜がつく、内面底に二条の圏線があり、中央に梅花の印文あり、高台は外面から端部に至るまで施釉され、内面の釉は削り取れ、その削りの走行は轆轤左回り。	龍泉窯系
14	磁器（青磁鉢）	5号溝南端埋土	口縁部片	夾雑鉱物なし。淡灰色。釉は青緑色。	青磁鉢の口縁部小片である。釉は厚く細かい気泡を含み乳濁する。色調は砧手。口縁端部は釉が薄く紫口状を呈す。	龍泉窯
15	磁器（白磁碗）	表採	口縁部片	夾雑鉱物なし。白色。釉は乳灰色。	白磁碗の体部片である。釉は薄く施釉され、貫入が入る。釉に若干の気泡が入り、わずか乳濁する。内面に片切り劃花の施文あり。	中国製

No.	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	摘要
16	陶・磁質（白磁皿）	13号井戸埋土	¼残存	夾雑鉱物粒微。白色。釉は乳白色。	白磁小皿片である。釉は薄く施釉され、透明感あり。内面は全面に施釉され、トチン痕あり。外面は体部下半から高台部全面が露胎となる。露胎部は箆削りされ、轆轤の走行左回りである。高台端部は浅い切り込みがなされている。	舶載
17	磁器（白磁皿）	表採	口縁部片	夾雑鉱物なし。淡灰色。釉は淡灰色。	白磁碗の口縁部片である。釉は薄く施釉され、微気泡を含む。口縁は尖る。内・外面は平滑で施文はない。	舶載
18	磁器（白磁皿）	5号土壙埋土	口縁部片	夾雑鉱物なし。白色。釉は乳白色。	白磁皿の口縁部片である。釉は薄く施釉され、微気泡を含む。外面は釉掛の境目があり一部露胎となる。露胎部は全面、箆削り目となっている。	舶載
19	磁器（青花皿）	6号溝埋土	底部片	夾雑鉱物粒微。乳白色。釉は染付と透明釉。	底部の破片であり、外面側に器肉調整の削り落しと見られる痕跡が残り、内面にわずかに轆轤目が入る。内面側には草文と思われる染付が施されている。呉須は独特な淡い青色を呈す、釉掛の前に器肉調整で薄作りとする。外面の釉中に気泡が破れ穴が空き、生掛けと思われる。赤、さらに釉が景徳鎮窯系独特の青色を呈していることから、明末から清初の舶載の染付の可能性がある。	景徳鎮窯系
20	磁器（青花皿）	表採	体部片	夾雑鉱物粒微。白色。釉は染付と透明釉。	皿の体部片である。釉は染付部分で青色から藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおびる。文様は内面に意匠不明の文様が、外面に渦状文が描れている。	景徳鎮窯系
21	磁器（青花皿）	表採	底～口縁部片	夾雑鉱物微。白灰色。釉は染付と透明釉。	端折れ皿の口縁部から底部にかけての破片である。釉は染付部分で淡青色から藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおびる。文様は見込部分で珠追い獅子、外面に宝珠を欠くが関連の唐草が描れている。高台端部に釉はなく、外面底は薄く釉掛される。	景徳鎮窯系
22	磁器（青花皿）	表採	底～口縁部片 ⅓残存	夾雑鉱物粒微。白色。釉は染付と透明釉。	端折れ皿の口縁部から底部にかけての破片である。釉は染付部分で淡青色から藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおびる。文様は見込部分で珠追い獅子、外面に宝珠を欠くが関連の唐草が描れている。高台端部は釉なく、外面底は釉が薄く掛られ、部分的に鉄足状に酸化する。	景徳鎮窯系
23	磁器（青花皿）	138号土壙。覆土。	底部片	夾雑鉱物粒微。白色。釉は染付と透明釉。	皿の底部片である。釉は染付部分で淡青色から藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおびる。文様は見込部分で珠追い獅子、外面に宝珠を欠くが関連の唐草が描れている。高台端部に釉はなく。外面底は薄く釉掛される。	景徳鎮窯系
24	磁器（青花皿）	表採	底部片	夾雑鉱物粒微。白色。釉は染付と透明釉。	皿の底部片である。釉は染付部分で淡青色から藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおびる。文様は見込部分で珠追い獅子・外面に施文があるが意匠は不明。高台端部に釉はなく、外面底は薄く釉掛られ、わずかながら虫食状の小穴あり。	景徳鎮窯系
25	磁器（青花皿）	表採	底部片	夾雑鉱物粒微。白色。釉は染付と透明釉。	皿の底部片である。釉は呉須と透明釉がにじみあう。釉色は淡い青色から明るい藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおび青磁色がかる。高台端部は釉がなく、部分的に虫食状にちぢみがある。染付は、内面底、体部外面に意匠不明の文様が施される。	景徳鎮窯系
26	磁器（青花皿）	56号井戸埋土	口縁部小片	夾雑鉱物粒微。乳白色。釉は染付と透明釉。	皿の口縁部片である。釉は染付部分で青色から藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおびる。口縁部は大きく外反する。文様は内面に意匠不明の文様が、外面に渦状文が描かれている。	景徳鎮窯系
27	磁器（青花中皿）	5号溝北側	口縁部片	夾雑鉱物粒微。白色。釉は染付と透明釉。	皿の口縁部片である。釉は呉須と透明釉とがにじむ。釉色は淡い青色から藍色を呈し、透明釉部分で淡い青色をおびる。口縁部は大きく外傾する。文様は内・外ともに意匠不明。	景徳鎮窯系
28	陶磁（黒釉壺）	E～H―10～13グリッド	体部片	夾雑鉱物粒含む。灰色。釉は黒釉。	壺の体部片である。釉は、鉄釉と考えられる黒釉で、外面のみ施釉される。内面は、酸化気味の茶褐色を呈す。外面は轆轤による凹凸がある。形態は四耳壺か。	中国製

No.	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	摘要
29	陶器（黒釉瓶）	表採	体部片	夾雑鉱物粒なし。灰色。 釉は黒釉。	瓶類の口縁部と思われる。施釉は厚く、黒色ガラス状を呈す。器肉薄く、内面の一部に轆轤目あり。	舶載
30	焼締陶器（小型壺）	8号溝東側	最大径18.6cm	夾雑鉱物粒多い。 黒灰色。	筋壺形の小壺であるが筋に当る条痕はない。外面は肩部に回転篦調整痕と自然釉あり。内面は紐作りによる接合痕と指などによる圧痕・撫痕あり。割れ口には紐作りによる粘土走行あり。外面酸化気味。	常滑焼か渥美焼
31	焼締陶器（壺）	8号溝東側	口径（13.5cm）	夾雑鉱物粒多い。 暗灰色。	壺の体部から口縁部にかけての破片である。内面は紐作りによる接合痕と指・手などの圧痕あり。外面は自然釉が厚くかかる。口縁部は肥厚し、口縁部外面は段をなす。	舶載か常滑焼
32	焼締陶器（大甕）	33号井戸上層	体部片	夾雑鉱物粒含む。 灰色。	大甕の体部片である。外面は櫛目状の調整痕あり、格子目叩が部分的に施される。内面は紐作りに伴う接合痕と工具による整形痕がある。還元気味。	渥美焼
33	焼締陶器（大甕）	22 H・P 2	底部際片	夾雑鉱物粒含む。 灰色。	大甕の体部下方の底部際破片。外面は工具による調整痕と格子目叩痕あり。内面は自然釉がかかり、指などによる圧痕、紐作りの接合面あり、還元気味。	渥美焼
34	焼締陶器（大甕）	7号溝東端	底部片	夾雑鉱物粒含む。 灰色。	大甕の体部下方の底部際破片。外面は工具による調整痕あり、内面は自然釉がかかり、指などによる圧痕・粘土の接合面がある。還元気味。	渥美焼
35	焼締陶器（大甕）	2号溝埋土	底部片	夾雑鉱物粒含む。 黒灰色。	大甕の底部片である。外面は粘土紐痕があり、横撫がある。内面は自然釉がかかり、釉下の状態不明瞭。底部外面はあばた状の凹凸があり、わずか砂粒が付着する。還元気味。	渥美焼
36	焼締陶器（大甕）	7号溝東側	口縁部片	白色鉱物粒多い。黒灰色。	大甕の口縁部片である。内・外ともに横撫痕がある。割れ口に粘土紐作による接合痕あり。酸化気味。	常滑焼
37	焼締陶器（大甕）	7号溝 5号溝際	口縁部片	白色鉱物粒多い。黒灰色。	大甕の口縁部片である。内・外ともに横撫である。割れ口に粘土紐作による接合痕あり。焼成は酸化気味。	常滑焼
38	陶器（灰釉皿）	400号土壙P—1埋土	口径（11.9）	夾雑鉱物粒含。 黄灰色。 釉は淡緑色。	皿の口縁部破片。口縁部周辺に灰釉あり。釉と露胎部との境がやや酸化気味。内面、轆轤に伴う横撫あり。外面、篦削りによる再調整あり、砂粒の移動は轆轤右廻り。内面に重ね焼痕あり。	美濃焼
39	陶器（灰釉皿）	329号土壙埋土	口径（10.9）	夾雑鉱物粒微。 灰色。 釉は淡緑色。	皿で半穴。口縁部周辺に灰釉あり。釉と露胎部との境がやや酸化気味。内・外面、轆轤に伴う凹凸と横撫あり。底面は糸切となり轆轤右回転である。	美濃焼
40	陶器（灰釉卸ろし皿）	6号溝中央埋土	底部片	夾雑鉱物粒含。 灰色。	卸ろし皿で内面に篦による格子目の刻みあり。施釉部分は残存しない。底面に糸切痕があるが轆轤回転方向不詳。	美濃焼か
41	陶器（灰釉卸ろし皿）	20号土壙埋土	口径（15.6）	夾雑鉱物粒微。 灰色。 釉は淡緑色。	卸ろし皿で内面下半に篦による格子の刻目あり。口縁部内面に返りあり。口縁部周辺のみ施釉される。内・外面に轆轤による凹凸、横撫痕あり。	美濃焼か
42	陶器（灰釉花生）	47号井戸埋土	底部径（8.9）	夾雑鉱物粒微。 灰色。 釉は淡緑色。	花生の体部下半の破片である。施釉は底面を除き厚く施釉される。内面は轆轤に伴う凹凸と、撫痕あり、底面は轆轤右回転の糸切痕あり。	瀬戸・美濃焼
43	陶器（灰釉香炉）	7号溝東側埋土	底部径（9.1）	夾雑鉱物含。灰色。 釉は淡緑色。	脚は香炉片。外面は脚端まで施釉され、内面・外面は無釉。内面は、轆轤による凹凸と、それに伴う横撫あり。底面に糸切痕が残るが、轆轤走行不明瞭。	瀬戸焼
44	陶器（灰釉香炉）	13号溝埋土	底部径（10.5）	夾雑鉱物粒含。 灰色。 釉は黄褐色。	脚付筒形香炉片。施釉は外面露胎部と、内面底面を除いて施釉。外面底・外面ともに篦による再調整あり。内面は轆轤に伴う横撫痕あり。	瀬戸・美濃焼
45	陶器（灰釉香炉）	表採	口径（11.6）	夾雑鉱物粒微。 灰色。 釉は淡緑色。	香炉の体部から口縁部にかけての破片。外面下半が露胎となり上半、口縁部まで施釉されている。外面下方の露胎部と施釉部間に沈線が入る。内面は轆轤による凹凸を伴う横撫あり。	美濃焼

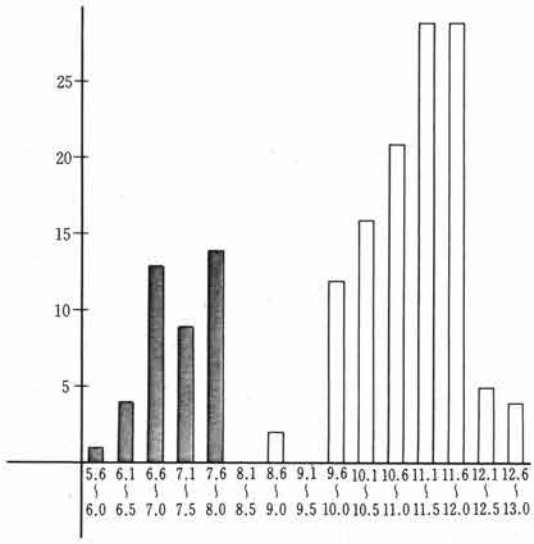
No.	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	摘要
46	陶器（灰釉鉢）	52号井戸埋土	口径（28.4）	夾雑鉱物粒含。灰色。釉は淡黄緑色。	折り口平鉢片で、体部上半の内・外面に施釉あり。外面は轆轤による顕著な凹凸があり、体部下半が篦削りとなる。	瀬戸・美濃焼
47	陶器（灰釉鉢）	22号井戸上層	最大径（23.1）	夾雑鉱物粒含。灰色。釉は淡緑色。	折り口平鉢片で、残存部分の内・外はすべて施釉される。体部の内・外面は轆轤による凹凸あり。	瀬戸・美濃焼
48	陶器（灰釉鉢）	27号井戸埋土	底径（18.0）	夾雑鉱物粒含。淡黄灰色。釉は淡緑色。	折り口鉢の底から体部片。釉は破片上方の内・外にわずか見られる。外面・底面は篦削りによる調整が行われており、内面は、轆轤による凹凸と、横撫あり。篦削り目は、轆轤左廻り。	美濃焼か
49	陶器（鉄釉皿）	表採	口径（10.2）底径（5.7）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は黒褐色。	底部から口縁部片。釉は黒色味おびる。口縁部は花弁の刻みあり。底面は削り出し高台で、轆轤の回転方向、右廻り。	美濃焼か
50	陶器（天目釉茶碗）	57号土壙埋土	器高（12.0）底径（6.4）	夾雑鉱物粒微。灰色。釉は黒褐色。	底部から口縁部までの破片で、全形の約⅓残存。釉は天目釉で、やや褐色をおび、体部最下半が露胎となり、外面底も釉掛されていない。高台は削り出し、砂粒の移動は轆轤右回転である。	瀬戸・美濃焼
51	陶器（天目釉茶碗）	142号土壙埋土	口径（11.5）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は黒褐色。	口縁部から体部片。釉は光沢感強い黒色味おびた鉄釉。口縁部は丸みをおび体部側につれ器肉を増す。	瀬戸・美濃焼か
52	陶器（天目釉茶碗）	10号溝埋土	口縁部片	夾雑鉱物粒含む。淡灰色。釉は黒褐色。	口縁部の破片。釉は褐色味が強い鉄釉。口縁部は尖り器肉取りは薄い。	瀬戸・美濃焼
53	陶器（天目釉茶碗）	5号溝中央埋土	口縁部片	夾雑鉱物粒含む。灰色。釉は黒褐色。	口縁部片。釉は褐色味が強い鉄釉。口縁部は尖り気味に外反する。体部の肉取りは厚い。	美濃焼か
54	陶器（天目釉茶碗）	8号溝西側	口径（10.7）	夾雑鉱物粒含む。灰色。釉は茶褐色。	口縁部片。釉は茶味が強い。口縁部は尖り気味に外反する。体部の肉取りは厚い。	美濃焼か
55	陶器（灰釉皿）	46号井戸上層	口径（11.4）底径（5.7）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は淡緑色。	半欠。釉は淡緑色で荒い貫入が入る。内面に意匠不詳の印文あり。底面は削り出し高台で、輪トチン痕付着する。釉は高台内面も施釉。	美濃焼か
56	陶器（灰釉皿）	表採	底径（6.3）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は淡緑色。	底部片。釉は淡緑色で荒い貫入が入る。内面には菊の印花文あり。底面は高台を削り出す。トチン痕あり。釉は高台内面も施釉。	美濃焼か
57	陶器（灰釉皿）	3号溝北側		夾雑鉱物なし。淡黄灰色。釉は灰黄緑色。	釉は灰釉で、底部外面に残るトチン痕部分をのぞいて全面に施釉、釉は厚くかかり、大まかな貫入が生じる。内面底に16弁菊花文の印花あり。高台は削り出し高台。	
58	陶器（灰釉皿）	128号土壙埋土	底径（6.0）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は淡緑色。	底部から体部にかけての破片。釉は厚く荒い貫入入る。底面は削り出し高台。底面に輪トチン痕あり。高台の内面に施釉あり。	美濃焼
59	陶器（灰釉皿）	表採	口径（11.1）底径（6.2）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は淡緑色。	底部から口縁部にかけての破片。底面は削り出し高台。底面に輪トチン痕あり。釉は厚く、荒い貫入あり。高台の内面に施釉あり。	美濃焼
60	陶器（灰釉皿）	遺跡南西隅	口径（11.3）底径（6.9）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は淡緑色。	底部から口縁部にかけての破片。釉は厚く細い貫入入る。底面は削り出し高台。底面に輪トチン痕あり。高台の内面に施釉あり。	美濃焼
61	陶器（灰釉皿）	M—18グリッド	底径（6.2）	夾雑鉱物粒少ない。黄灰色。釉は淡緑色。	底部片。釉は厚く、細い貫入入る。底面は削り出し高台。底面に輪トチン痕あり。高台の内面に施釉あり。	美濃焼
62	陶器（灰釉皿）	L・M—5～7グリッド	口径（11.6）	夾雑鉱物粒少ない。灰釉。釉は灰色。	体部から口縁部にかけての破片。釉は薄い。体部の中位に轆轤目およぶ。釉は薄く。体部下半の一部は露胎となる。	瀬戸・美濃焼

No.	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	摘要
63	陶器（灰釉皿）	454号土壙埋土	底径(6.6)	夾雑鉱物粒少ない。灰釉。釉は淡緑色。	底部破片。内面・外面体部上半に施釉される。高台は断面三角形を呈し、削り出しの方向性は轆轤右廻りである。	
64	陶器（灰釉皿）	表採	口縁部から体部片	夾雑鉱物粒含む。灰色。釉は淡黄灰色。	皿の口縁部から体部にかけての破片である。釉は薄く、体部の内外を除き施釉され、以下露胎となる。口縁は口折れとなり外反する。体部外面には轆轤目が入る。	美濃焼
65	陶器（灰釉碗）	表採	口径(11.2)	夾雑鉱物粒微。灰色。釉は淡黄灰色。	碗の口縁から体部にかけての破片である。釉は薄く、全面に施釉される。内面に押圧された花弁があり、体部外面には轆轤目が入る。	瀬戸・美濃焼
66	陶器（灰釉）	表採	口縁部から体部片	夾雑鉱物粒微。灰色。釉は淡灰色。	皿状の器形であるが、立ち上がりが急で器種不明。釉は薄く全面に施釉される。外面に押圧で文様施文がある。内面には轆轤に伴う条痕が認められる。	瀬戸・美濃焼
67	陶器（灰釉）	表採	体部片	夾雑鉱物粒微。灰色。釉は淡灰色。	器種不明である。外面に薄い施釉あり。さらに型紙刷絵か、筆書か明瞭でないが鉄絵が入る。部分的に鉄絵のこぼれた痕跡が認められる。	瀬戸・美濃焼
68	陶器（透明釉碗）	表採	底部片	夾雑鉱物粒微。灰色。釉は淡黄色。	碗の底部片である。高台端部を除いて、内・外施釉される。釉は薄く、細かい貫入入る。高台部を除いて器肉の肥厚化が目立つ。内面に轆轤条痕あり。	唐津系
69	陶器（灰釉碗か）	表採	底部片	夾雑鉱物粒含む。淡黄灰色。釉は黄灰色。	碗にしては高台部が大きすぎるので疑問あり、釉は薄く内面のみ施釉。高台は貼付高台。内面に轆轤条痕あり。	瀬戸・美濃焼
70	陶器（黒褐釉壺）	20号井戸上層	口径(12.2)	夾雑鉱物粒含む。灰色。釉は黒褐色。	四耳壺の口縁部片で、頸部に耳を2単位残す。内面を除き施釉。内面轆轤条痕あり。	唐津系
71	陶器（鉄釉皿）	表採	口径(8.7) 器高(1.9)	夾雑鉱物粒微。灰色。釉は鉄錆色。	いわゆる燈明皿である。釉は鉄錆色を呈し、外面底と体部下半を除き施釉される。体部外面の露胎部には轆轤回転による篦削り痕あり。	
72	陶器（灰釉鉢）	表採	口径(17.5)	夾雑鉱物粒含む。灰色。釉は暗緑色。	片口鉢片と思われる。口縁部内面は内湾し、口縁部外面に一条の沈線入る。釉は薄く内・外に施釉されている。	
73	陶器（灰釉香炉）	表採	体部片	夾雑鉱物粒含む。灰色。釉は黄灰色。	香炉の体部片で、外面に、工具による轆轤条痕が入り、内面に轆轤目が立つ。外面のみ施釉され、内面は施釉なし。	瀬戸・美濃焼
74	磁器（油壺）	6号溝埋土	口縁部片	夾雑鉱物なし。白色。釉は白磁釉。	口縁部の形状から見て、油壺の破片。釉は白磁釉が薄くかかり、釉面の光沢はあまりない。	伊万里系
75	磁器（赤絵人形）	表採	顔面部片	夾雑鉱物なし。淡灰色。釉は白磁釉。	人形の顔面部と首の部分にかけての破片。内面に型押しと見られるよじれが残っている。表面側には鼻の高まりが表現され、口・着物の襟元部分が赤絵付されている。	伊万里系
76	磁器（染付碗）	4号溝埋土	口径(10.0) 器高(5.3)	夾雑鉱物なし。白色。釉は乳白色。	体部外面に印判による菊花様の染付が施される。高台と体部外面との間に染付による1条の圏線がある。釉は高台端部をのぞき、全面に施釉。白磁釉は幾分乳濁し、やや青味がかる。呉須の調子はくすんだ青色で山呉須。	伊万里系
77	磁器（染付碗）	27号溝埋土	底径(3.8)	夾雑鉱物粒微。淡灰色。釉は白磁釉。	碗の体部下半の破片、高台と体部外面下方に3条の圏線が染付けで施される。釉は白磁釉であるが、わずかに青味がかり、青白磁の色調を呈す。高台端部を除き施釉。高台端部にわずか砂が付着。呉須は青味の発色が鮮やかだが、その調子は山呉須と考えられる。	伊万里系
78	磁器（染付碗）	15号溝埋土	口縁部片	夾雑鉱物粒含む。乳白色。釉は淡灰色。	碗の口縁部の破片。外面に網代文の染付あり。呉須はややくすんだ青色を呈し、山呉須と考えられる。器面にかかる釉は、白磁釉であるが乳濁している。	伊万里系

No.	土器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	摘要
79	磁器（染付碗）	4号溝埋土	口径(10.2)	夾雑鉱物粒少ない。白灰色。釉は乳灰色。	碗の口縁部片で、体部外面に桐文が印判により染付されている。呉須の調子は幾分酸化気味のくすんだ青色を呈しいかにも山呉須である。白磁釉はやや乳濁している。	伊万里系
80	磁器（染付皿）	6号土壙埋土	口縁部片	夾雑鉱物粒なし。白色。釉は乳白色。	口縁部の破片。体部外面に草文様の意匠が施されている。呉須の色調は山呉須。釉は白磁釉でやや乳濁している。	伊万里系
81	磁器（染付碗）	表採	径(7.3)	微鉱物粒微。白灰色。釉の淡灰色。	体部下半の破片、体部外面に菊花文の染付が施され、呉須の様子は山呉須。見込部に呉須の圏線と中央に花文が施され、釉は白磁釉でやや乳濁している。	伊万里系
82	磁器（染付猪口）	52号井戸埋土	細片・口縁部片	夾雑鉱物なし。純白。釉は白磁。	口縁部の破片。葉の様な意匠による鉄絵と考えられる。鉄色の絵付を下絵とする。器面にかかる釉は透明感が強い。	伊万里系
83	磁器（染付皿）	19号溝埋土	口縁部片	夾雑鉱物なし。白色。釉は白磁釉。	口縁部の破片。見込側に草文を呉須で施し、外面に唐草を施す。呉須はややダミが入り山呉須。器面にかかる釉は白磁釉。	伊万里系
84	磁器（染付赤絵）	表採	口縁部片	夾雑鉱物なし。白色。釉は白磁釉。	口縁部片である。口唇端部の無釉の部分をのぞいて全面に施釉されている。内面側は白磁釉、外面側に双円窓風の輪郭と壁と思われる部分に赤絵が上絵付され、窓内部の柳風の意匠は呉須で施される。赤絵の縁どりにそってさらに、黒色の上絵が施されている。呉須は山呉須。赤絵はあまり明るくない赤褐色。	伊万里系
85	磁器（白磁皿）	4溝埋土	高台部片	夾雑鉱物なし。白色。釉は乳白色。	白磁皿の高台部から体部にかけての破片である。釉は細い気泡を多く含む。見込は蛇目となり、施釉部分が削り取られる。外面は施釉部分と露胎部分があり、露胎部分には箆削痕があり、轆轤の回転方向右廻りである。	伊万里系
86	磁器（染付碗）	表採		夾雑鉱物なし。白色。釉は白磁釉。	口縁部から底部にかけての破片。高台内面をのぞき全面に施釉される。見込側は花文状の意匠と雲状の意匠が呉須で施されている。呉須の色合いはダミが入っており山呉須である。	伊万里系
87	磁器（染付碗）	表採	体部片	夾雑鉱物なし。白色。釉は淡い緑色。	体部片である。釉はやや厚く、青白磁釉の色調を呈す。内外に施釉。外面は呉須により麦わら手風の意匠を施す。呉須の発色は、青色が強く明治以降のベロ藍の可能性がある。	伊万里系
88	磁器（白磁猪口）	454号土壙埋土	口径(5.3) 器高(4.1)	夾雑鉱物なし。白色。釉は透明。	口縁部から底部にかけて⅓個体、釉は高台端部をのぞいて白磁釉を全面にかける。高台端部に微細な粒子の砂粒状の鉱物が付着している。	伊万里系
89	磁器（染付猪口）	452号土壙埋土	口径(7.0) 器高(4.4)	夾雑鉱物なし。白色。釉は白磁釉。	⅔個体。釉は高台端部をのぞいて全面施釉している。外面の文様は竹と花の意匠。漢詩と思われる五文字の記入があり、口唇部内・外と外面高台部周辺に染付の圏線が巡っている。高台の外面側に「天啓年製」とあり清朝の初期の元号を記入。	伊万里系
90	磁器（染付皿）	表採	体部～底部片	微細な夾雑鉱物を含む。白色。釉は白色。	底部の破片。高台端部をのぞいて内外に施釉。内面に染付による意匠と2条の圏線、外面に圏線と花文風の意匠がある。また、高台外面にも2条の圏線が巡る。呉須の色はダミが入り発色がすぐれていないので、山呉須である。	伊万里系
91	磁器（染付皿）	5号土壙埋土	口径(9.9) 器高(1.9)	夾雑鉱物粒微。白色。釉は白色。	底部から口縁部にかけての破片。高台端部をのぞき施釉。見込側に型紙印判による染付が入る。意匠は青海波と桜花とが施され、呉須の色合いは強い藍色をおび、ベロ藍を用入る。	
92	磁器（皿）	66号井戸埋土	体部～底部片	夾雑鉱物微。白色。釉は白色。	体部から底部にかけての破片で、高台部分は蛇の目であり、蛇の目の端部は無釉となる。見込側には2条の圏線、中央文様、螺施状の意匠が呉須で施される。釉の色調はベロ藍である。	
93	磁器（染付碗）	表採	体部～底部片	鉱物粒なし。乳白色。釉は白灰色。	体部から高台部の破片。高台端部をかいている。釉は全面に施釉。見込側に2条の圏線と中央文様が呉須描かれ、外面には風景が呉須により描かれる。呉須の色調は山呉須。	伊万里系

2　かわらけ　（第29～37図，図版24～26）

かわらけ[註1]は中世から近世にかけての遺跡でほぼ普遍的に出土する。本遺跡でも量的に最も多く、検出遺構も多岐にわたる遺物である。また、完形個体の出土が際立って多いことも大きな特徴である。



かわらけが大型と小型とに二分されることは青戸葛西城で報告され、赤塚遺跡でも確認されている。右表のように、本遺跡出土かわらけの口径からも大小に二分されることは明瞭であった。反面。大小の群の中で口径値がバラつくこともわかる。なを、口径と器高の比から、かわらけを杯形と、皿形に分ける作業も行われているが、算術平均値をもって器形分類にあてることは、妥当とは思えない。

製作技法の特徴としては、ほとんどの土器がロクロ成形と思われる。ロクロの回転方向は左がやや多く全体の56％を占める。底部切り離し痕が確認できたものはすべて回転糸切りである。底部には板目状の圧痕を持つものが多い。従来、板目は土器乾燥時の台の圧痕と考えられてきたが、本遺跡出土品の中には、器形が歪むほど強い板目や、片寄って付く板目などがあり、板目をかわらけの自重による圧痕とは考えにくいものが多い。板目の強いものには見込のナデも強いことが観察できた。これらのことから、かわらけ底部の板目は、糸切り後に別の台上で施される見込部の強いナデによるものと考えるべきであろう。[註2]

次に、本遺跡出土のかわらけについて形態的な特徴による大まかな分類を行った。器形の多様性に加え、胎土、焼成などにも差が多く、全体を網羅することはできなかったが、今後増加する資料との対比の目安となることを意図した分類である。計測値より、口径９㎝以下のものを小型かわらけとして一括し、Ａ～Ｉ類まで区分し、９㎝以上のものを大型かわらけとして、Ｊ類以後に分類した。

Ａ類　口縁端部が内傾（上方へ屈曲）し、外側に稜のあるもので、小型かわらけの中では最も多い。左回転ロクロ成形で、板目やロクロ痕は弱い。焼成がきわめて良好なことが特徴である。１・２・20は口径約７㎝、７・25は５㎝強で、この類の典型であり、大きさによる細分が可能と思われる。27・112は色調・焼成が異なるが、形態的にはＡ類の典型と同一である。12・17・24・40・121などもＡ類として捉えられよう。175は口径が８㎝近くあり、Ａ類では最も大きなかわらけである。

Ｂ類　口縁部が緩く、内彎気味になるもので、端部が若干肥厚する一群である。左回転ロクロ成形で、ロクロ痕は弱い。36・42・54などが該当するが、胎土・焼成などは一様でない。

Ｃ類　口縁部が直線的に延びる一群で、器高のやや低いのが特徴である。右回転ロクロ成形でロクロ痕はやや強い。板目痕は明瞭でない。30・111・117～119が該当し、３号溝からの出土が顕著である。

Ｄ類　口径に比して器高の高い一群であり、板目の強いものが多い。良好な焼成で、色調は白色味が強い。35・127・150が該当する。

Ｅ類　Ｄ類とは対照的に、器高の低い一群である。底径が大きいため盤状を呈す。ロクロ成形の104・138、型造りと思われる80、不明瞭な22が該当する。焼成・胎土等もまちまちであり、さらに大別が可能である。

F類　内外面に渦巻状の強い右回転ロクロ成形痕が残るもので57の一例である。器形はC類に近い。

G類　部厚い土器で特に底部の厚さは顕著な繊細さに欠けるもので、70の一例のみである。

H類　口縁端部はA類と同様だが、見込が広く平坦なもので、23の一例のみである。

I類　B類に近い器形だが、薄手でシャープであり、焼成も良好である。後述するJ類の小型品の可能性もあるが、143の一例しか出土していない。

J類　口縁部は、小さな底部から上方へ立ち上がった後に大きく内彎気味に開き、端部でふたたび上方へ向かう土器である。口縁部外端に稜のある場合がある。左回転ロクロ成形である。薄手でシャープな器形と、良好な胎土・焼成は、大型かわらけ中、最も目立つ特徴である。45・46・49の44号井戸出土品を典型とする。58・69・161・162は若干シャープさに欠け、68・115・129は幾分小ぶりである。31・123は胎土が粗く、見込縁辺がリング状に窪むのが特徴である。

K類　J類に近いが、やや小型で、内彎の度の弱い一群である。4・8・65・76・144・166・168が該当する。

L類　J類に類似するが器高が低く、K類を偏平にしたような一群である。16・29・71・132・141・147・148・155が該当する。胎土などの細かな特徴は一様でない。

M類　やはりJ類に近いが、口縁部外端に強い稜のあるもので、15の一例である。

N類　口縁部が直線的に立ち上がり、内外面に強いロクロ痕のあるやや薄手の土器である。ロクロ回転には左右両者があり、胎土などの特徴も一様ではないが、焼成は全体に良好である。見込に強いナデを施す11・59・103と、渦巻状のロクロ痕のある34が典型で、47・102・140・146なども該当する。160はモグサ土のような胎土で、厚手だが軽量であり、他に例のない土器である。

O類　直線的な口縁部だがロクロ痕は弱く、見込縁辺がリング状に窪むもので、N類とJ類31等との中間的な一群である。6・78・174が該当する。また、器高の高いものに163がある。

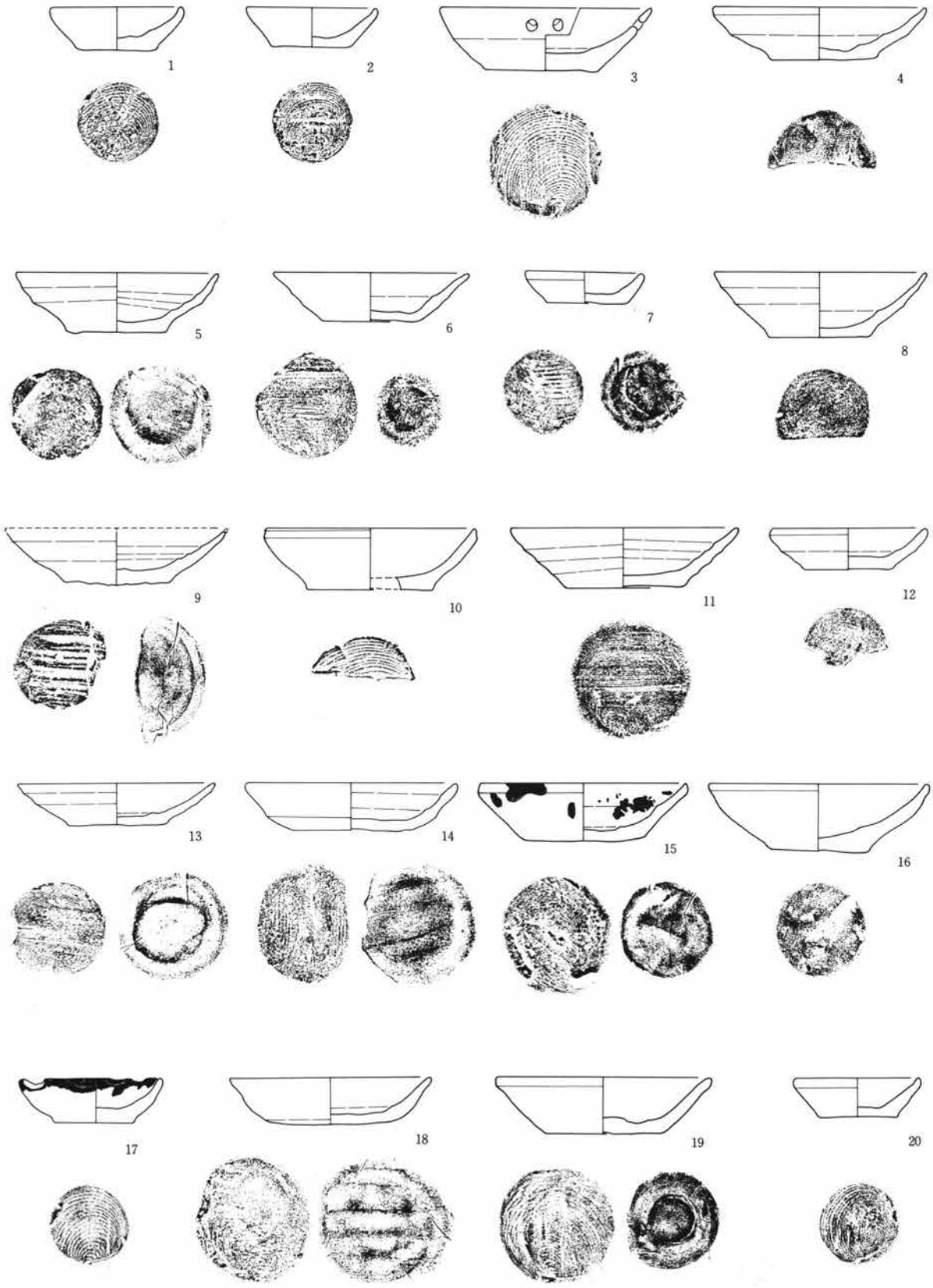
P類　口縁部外面下位に稜があり、器高・底径が小さく、皿状を呈す。胎土に砂粒が多く、白色味が強いことが特徴である。67・135・156が該当する。

Q類　底部が広く、器高の低い一群で、粗い胎土と橙色味の色調が共通する。器形は若干異なるが、見込を一方向にナデて平坦に仕上げるものが多い。薄手の18・64・73・106・107とやや厚手の122・159が該当する。

R類　盤状を呈すもので、E類に対応する大型かわらけである。66の一例である。

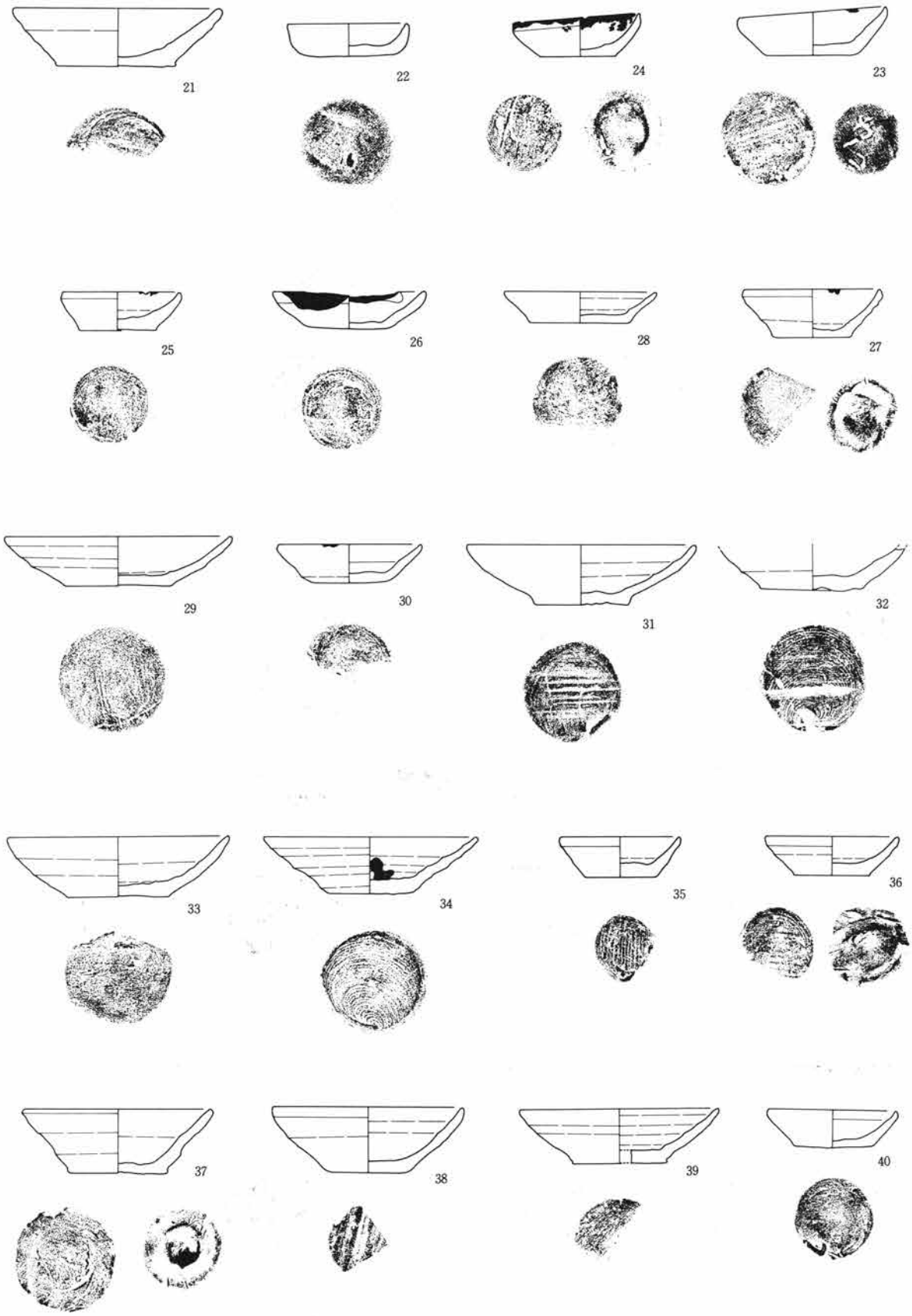
S類　D類を大きくしたように器高が高く、碗状を呈すもので、中型の38と大型の51とが該当する。

T類　平坦な口端部が特徴である。厚手で、見込に強いナデを施す。特異な土器で172の一例である。

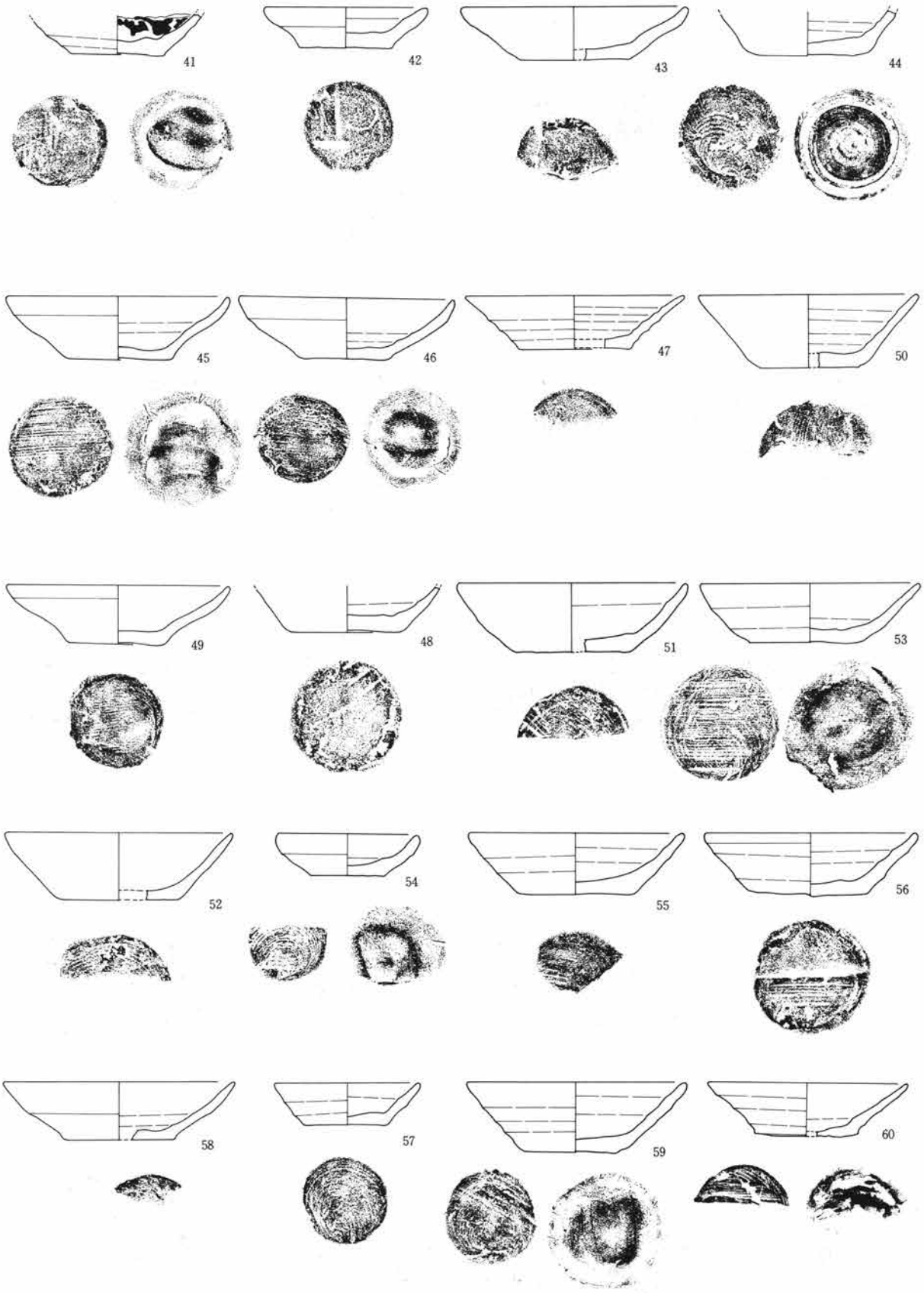


第29図 かわらけ(1)

0 10cm

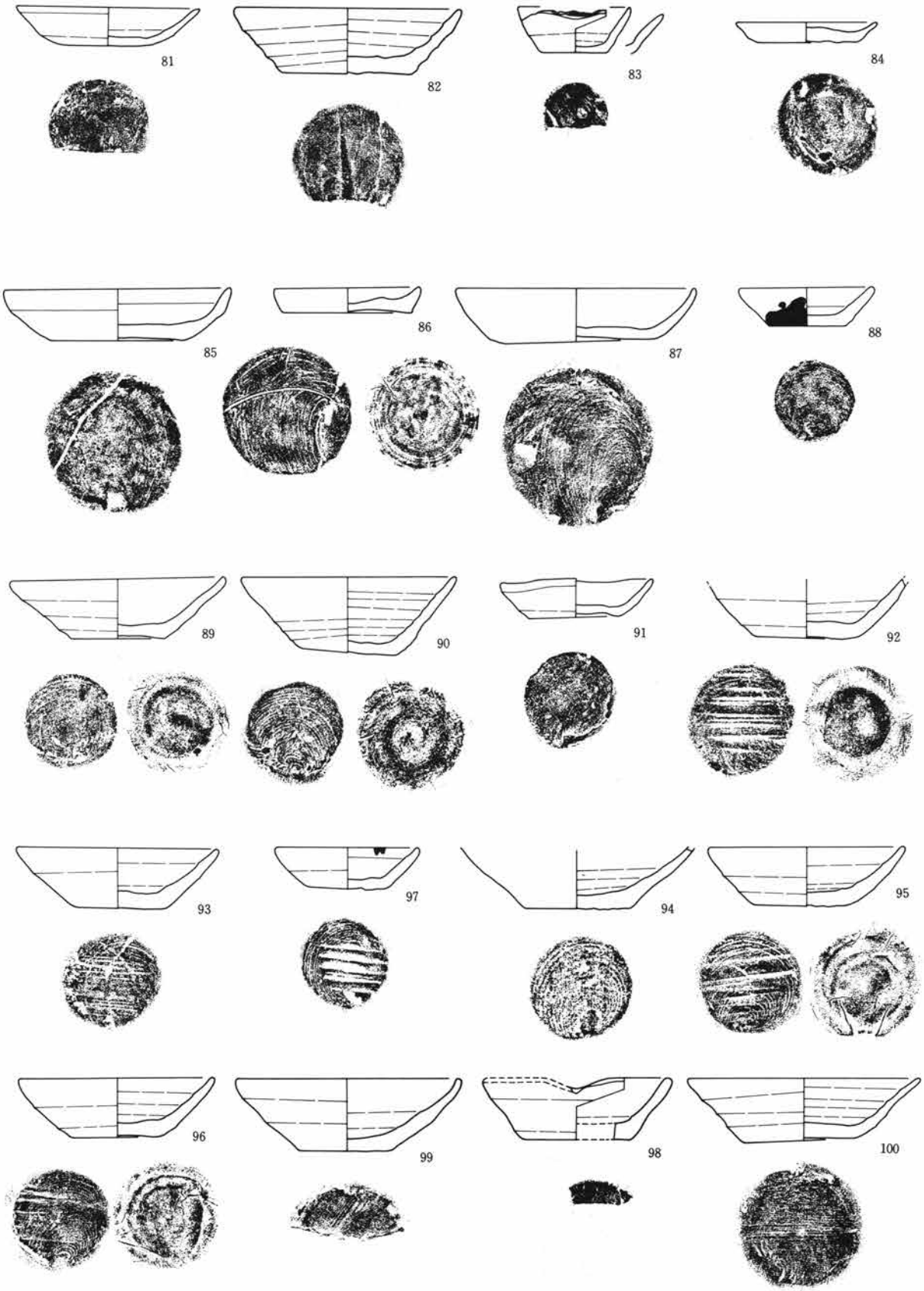


第30図　か　わ　ら　け (2)

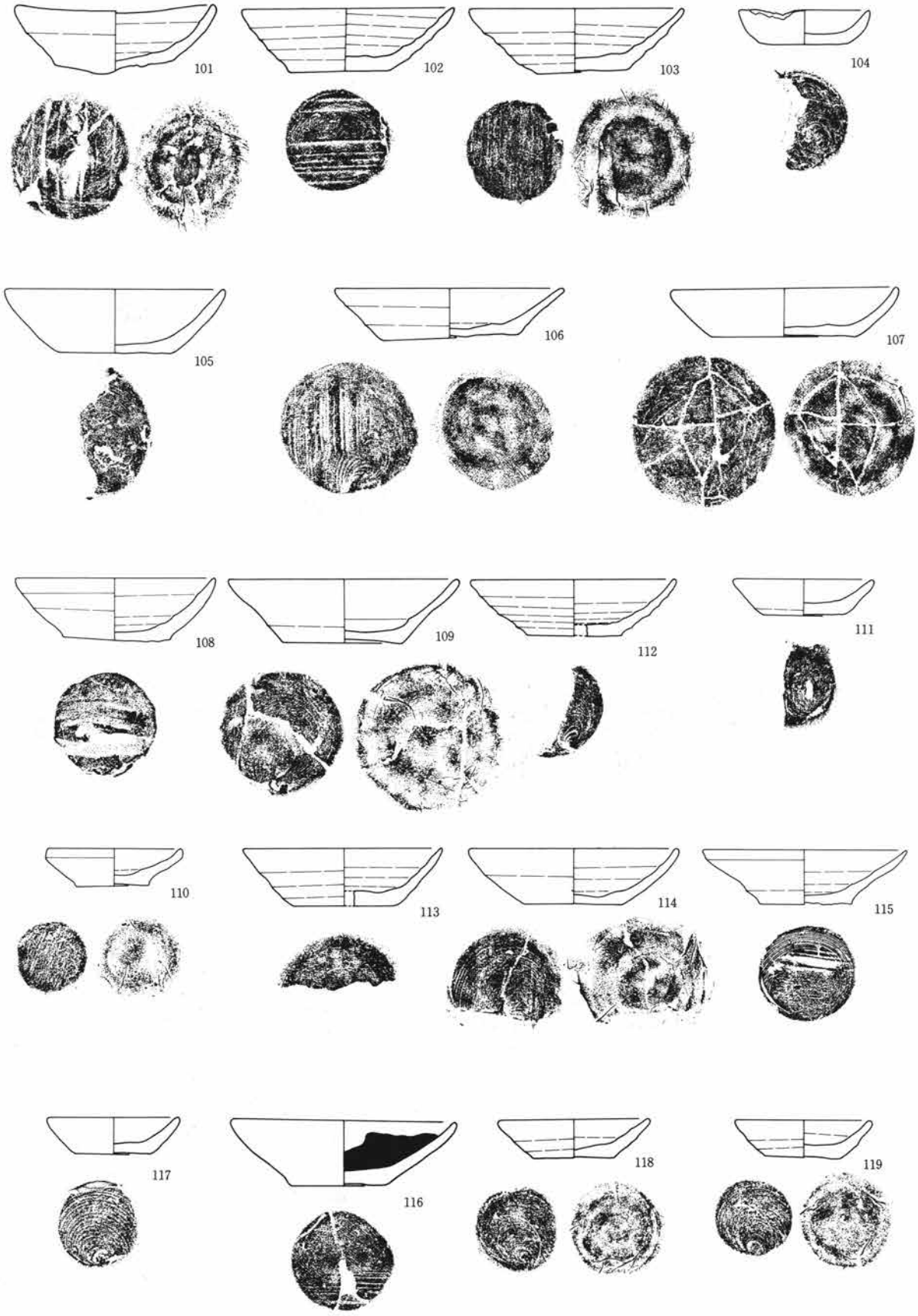


第31図　か　わ　ら　け (3)

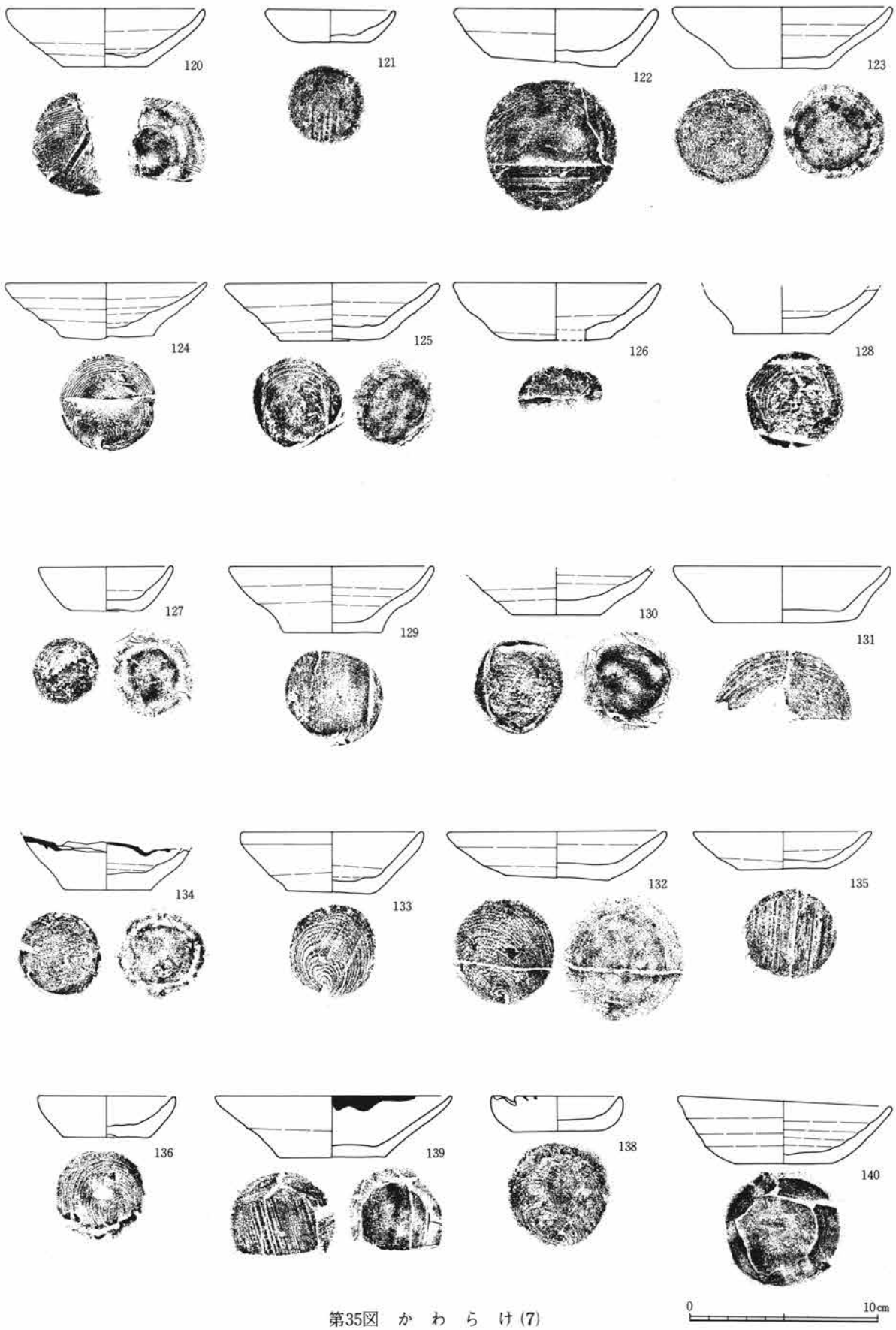
第32図　か　わ　ら　け (4)



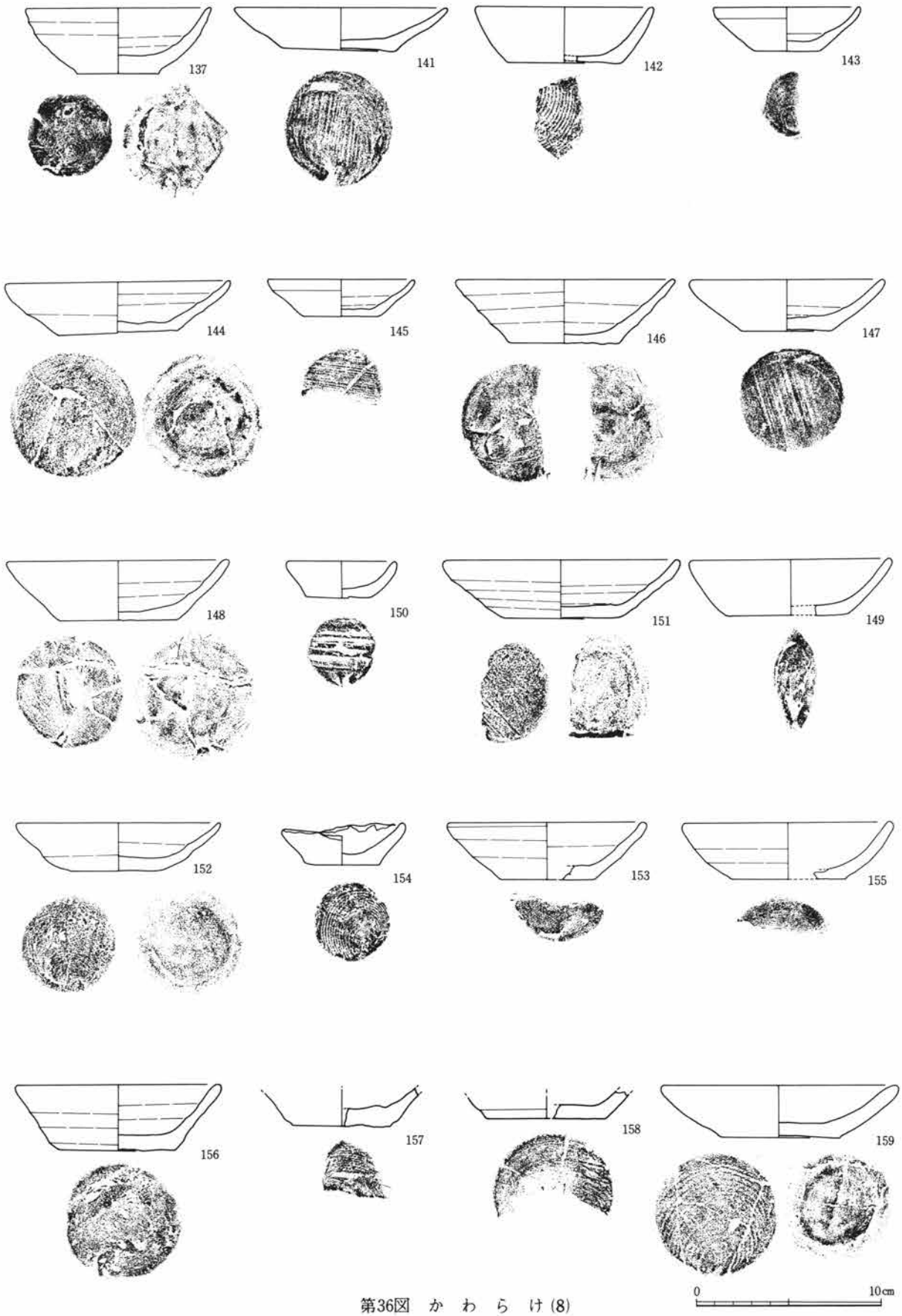
第33図　か　わ　ら　け (5)


101
102
103
104
105
106
107
108
109
112
111
110
113
114
115
117
116
118
119
0
10cm

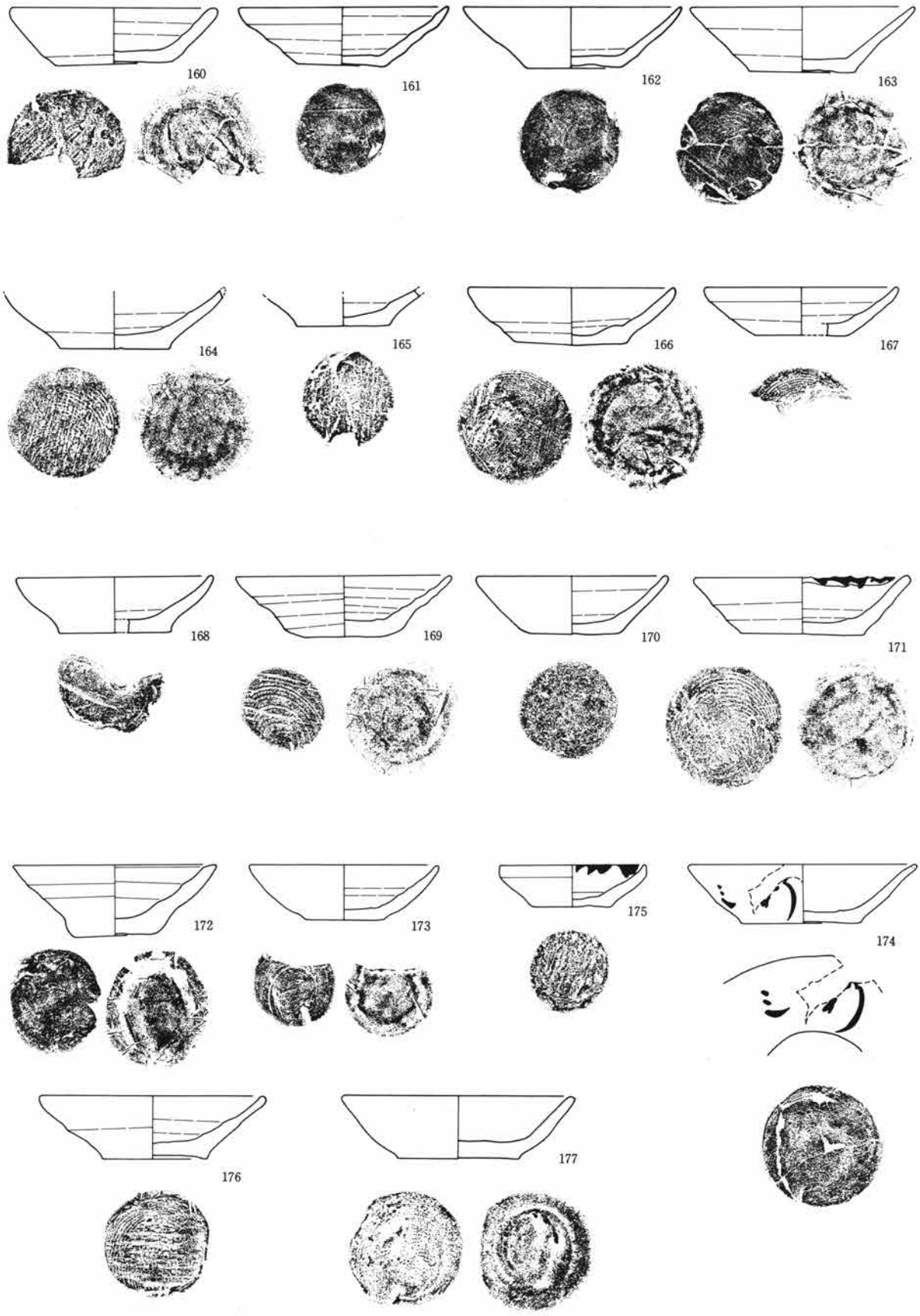
第34図　か　わ　ら　け (6)


120
121
122
123
124
125
126
128
127
129
130
131
134
133
132
135
136
139
138
140
0
10cm

第35図 かわらけ(7)


137
141
142
143
144
145
146
147
148
150
151
149
152
154
153
155
156
157
158
159
0
10cm

第36図　か　わ　ら　け (8)


160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
175
174
176
177
0
10cm

第37図　か　わ　ら　け (9)

Ⅲ　調査の内容・遺物

土器観察表について

観察表記述中の部位名称には、考古学用語と陶芸用語が混存するところがある。すなわち、見込は底部内面を示し、単に底部と呼ぶ場合は外面もしくは底部全体をさす。また、杯皿類は底部から直線的に口縁部へつながる器形という理解より、かわらけには体部という名称は使用していない。

以下、かわらけ観察表では次のような方法で記載を行った。「内耳」や「擂鉢」の観察表についても共通する点が多い。

No.　出土遺構の順に並べた通し番号であり、遺構は、井戸、土壙、溝、その他の順である。各遺構の一覧表に記した番号や写真図版に記した番号と一致する。

計測値　口径―底径―器高の順で記した。径はいずれも外径で、単位はcmである。（　）は復元値を示す。また、計測値の後に遺存状態を記した。なお、「内耳土器」「擂鉢」では㊐→口径、㊡→底径、㊟→器高、の省略記号を使用した。

製作技法　「左ロクロ」は左回転利用の成形を示す。「回糸」は回転糸切りの略である。

備考　㊟＝胎土、㊟＝焼成、㊟＝色調、㊟＝その他、の省略記号を使用した。胎土中の砂粒について国際土壌学会の分類方法を大まかな目安として、細砂→0.2mm以下、粗砂→0.2mm～2mm、細礫→2mm以上、という表現を用いた。ベンガラは従来、赤色または赤褐色鉱物と呼ばれていた夾雑物であるが、本遺跡No. 29の資料について、群馬県工業試験場、花岡紘一氏の分析の結果、αFe_2O_3 を主成分とするものであることが確認された。ガラス質の細長い黒色鉱物粒を輝石として扱かった。この中には角閃石も含まれるが、肉眼では識別し得なかった。なお、備考については、「内耳土器」「擂鉢」についても共通する。

註

註1　かわらけは、関西地方では土師器皿と呼ばれており、これに対し、古代の土器との混同を避けるため草戸千軒では土師質土器の名称を提唱している。群馬県でも土師質土器皿という名称での論考（大江　1982）があり、汎日本的な名称の統一は今後の大きな課題と言えよう。本書では、近隣遺跡との比較資料となりうることを第一義におき、伝統的なかわらけの名称を使用した。

註2　第3回中世土器研究集会での服部実喜氏の報告によると、鎌倉では13世紀前半代（第Ⅱ期のかわらけ）より、見込のナデと板圧痕が認められる（服部　1984）。板目は、出現段階より見込のナデと関連が強いことがわかる。

表6　からわけ一覧

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
1	1号井戸	6.9-4.2-2.4。完形。	見込の押さえ強い。口縁端部内傾。	左ロクロ→回糸無調整。見込に軽いナデ。	㊟粗砂の混入多く粗い。㊟強い焼締りの酸化焰。㊟白色味の淡褐色で内面一様。
2	1号井戸	7.0-4.1-1.9　～1.7。完形。	1に同じ。	1に同巧。板目やや強い。	㊟㊟㊟1に同じ。
3	1号井戸	11.0-5.5-3.2。口縁部上半の⅓を欠く。	口縁部上位に焼成前の穿孔。2ヶと1ヶの対になる。見込平滑。	左ロクロ→回糸→板目(弱い)。見込のナデは弱い。	㊟砂粒やや多い。ベンガラ・石英・輝石等を含む。㊟やや硬調。㊟淡褐色、外面暗褐色。

No.	出土 遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備考
4	3号井戸	(10.1)-5.5-2.6。口縁部⅓、底部½残存。	口縁部上半内彎。	左ロクロ→回糸。底部にナデ？糸切り痕不明瞭。見込のナデ強い。	⑮砂粒多い。輝石・ベンガラ等混入。⑯やや軟調。⑭淡褐色ほぼ一様。
5	3号井戸	(10.4)-5.0-3.2。口縁部上半の⅔を欠く。	口縁部上半強く内彎、底部厚いが軽量。	右ロクロ→回糸→板目。見込にやや強いナデ。ロクロ痕内面で強い。	⑮砂粒・輝石を若干含む。やや緻密。⑯やや軟調でしまり欠く。⑭白色味の淡褐色。内面に黒褐色の広いムラがある。
6	3号井戸	(10.2)-5.1-2.4。口縁部の¾を欠く。	口縁部弱く外反。見込は平滑で広い。	右ロクロ→回糸→板目（板状とゴザ状が混じる）。見込は丁寧な弱いナデ。	⑮粗砂・パミス・ベンガラ・石英を含む。やや粗い。⑯やや軟調でしまり欠く。⑭橙色味をおびた淡褐色。
7	3号井戸	6.2-4.2-1.7。完形。	1にほぼ同じ。見込の凹凸強い。	1に同巧。見込のナデが強い。	⑮1にほぼ同じ。ベンガラを散見する。⑯⑭1に同じ。
8	9号井戸	(11.0)-5.3-3.3。⅔個体。	5に近似する。底部やや薄い。	5に同巧。見込のナデはやや弱い。外面でもロクロ痕強い。	⑮⑯5に同じ。⑭5に近い。見込付近は暗褐色。⑱底部に墨痕と思われる付着物。
9	9号井戸	(11.2)-5.4。口縁部の½を欠く。	口縁部内彎。底部厚い。底部の凹凸強く、不安定。	右ロクロ→回糸→板目(強い)。見込のナデ一方向で強い。ロクロ痕内面で強い。	⑮砂粒・輝石・ベンガラ散見。やや緻密。⑯やや硬調。⑭暗褐色。断面灰色味をおびた淡褐色。
10	9号井戸	(11.0) - (6.5)-3.0。¼個体。	口縁端部のつまみ強く、外面のみ若干内傾。	左ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕弱い。	⑮粗砂・輝石散見。やや緻密。⑯やや硬調の酸化焔。⑭淡褐色一様。
11	13号井戸	(11.8) -6.0 ～ 6.3-3.0。¾個体。	口縁部は直線的に開く。	右ロクロ→回糸→板目（ゴザ状）。内面のロクロ痕強い。見込に軽いナデ。	⑮砂粒・輝石混入。やや粗い。⑯やや硬調の酸化焔。⑭淡褐色一様。⑱底部外面縁辺が磨耗。
12	13号井戸	(8.0) - (4.4)-2.0。¼個体。	口縁端部内傾。	左ロクロ？→切離法不明。ロクロ痕弱い。見込にナデ。	⑮石英やや多い。⑯やや硬調の酸化焔。⑭淡橙褐色ほぼ一様。⑱底部外面磨耗。
13	13号井戸	(10.1)-5.0-2.1。⅔個体。	口縁部内彎。見込中央が押圧で窪み、二段底となる。	左ロクロ→回糸→板目（中央のみ）。	⑮砂粒・輝石を若干混入。やや緻密。⑯硬調。環元焔の可能性。⑭淡褐色～灰褐色で一様でない。断面灰色味強い。
14	13号井戸	(10.9) -6.0-(2.3)。⅔個体。	口縁部わずかに肥厚し外反する。見込広い。	左ロクロ？→回糸→板目（ゴザ状）。見込全体に一方向のナデをくり返す。	⑮砂粒若干・輝石・石英散見。やや緻密。⑯やや硬調の酸化焔。⑭淡褐色一様。
15	16号井戸	10.8-6.0-2.7 ～ 3.6。完形。	口縁部外反、端部は直立に立つ。底部は若干丸味をおびる。	左ロクロ→回糸→底部に粘土が多数付着。見込の一端に軽いナデ。	⑮輝石・石英散見。緻密。⑯硬調。還元焔の可能性。⑭白色味強い淡褐色。黒色味のムラ有り。⑱タール状のスス付着。
16	23号井戸	10.3-4.8-3.0。ほぼ完形。	口縁部内彎。見込には平坦部がない。口縁外端にやや強い稜。	右ロクロ？→回糸？→板目(ゴザ状)。見込に強いナデ。一方向3回。	⑮輝石・石英散見・ベンガラやや多い。⑯固く焼きしまる。酸化焔。⑭淡褐色で断面まで一様。
17	23号井戸	(7.4)-4.1-2.2。口縁部の¼を欠く。	口縁端部内傾。	左ロクロ→回糸→無調整。見込の端に軽いナデ。	⑮雲母やや多、細砂含む。きわめて緻密。⑯やや軟調。⑭赤味のある淡褐色。⑱口縁端部スス付着。一部タール状の光沢。
18	24号井戸	(11.1)-6.0-2.9。口縁部の⅓を欠く。	口縁部は弱く外反。ねじれた歪みあり。	左ロクロ→回糸→不規則なナデ。ロクロ痕弱い。見込に一方向数回の丁寧なナデ。	⑮砂粒・石英やや多。やや粗い。⑯固く焼きしまる。酸化焔。⑭黄色味のある淡褐色で一様。
19	24号井戸	(11.1)-6.0-2.9。口縁部の⅔を欠く。	口縁部は直線的に開く。見込端で押さえ強く、中央は平坦に突出。	右ロクロ→回糸。弱い板目。ロクロ痕弱いが、不規則な布状の擦痕が残る。	⑮砂粒若干多いが、やや緻密。⑯焼きしまり硬調。還元焔の可能性。⑭白色味のある淡褐色。一部暗灰色の色ムラ。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
20	24号井戸	6.6-4.0-2.0。完形。	1に同じ。	1に同巧。	胎1に近いが、砂粒が多く、やや大粒で、器表面はザラつく。焼色1に同じ。
21	24号井戸	(5.9) - (6.2) -3.0。	口縁上半若干内彎。内面平滑。	左ロクロ→回糸→板目（不鮮明)、見込のナデやや弱い。	胎砂粒・石英・パミス散見。焼やや軟調でしまり欠く。色橙褐色で一様。
22	24号井戸	6.4-5.0-1.7。完形。	ロクロ成形とは思えないが形状は整い器壁も均質。器面平滑。	手づくね？見込にやや弱いナデ。底部にも板目状の不明瞭な圧痕が残る。	胎ローム土多く、ボソボソしている。ベンガラ・石英散見。焼硬調だがややしまり欠く。色白色味強い淡褐色。
23	24号井戸	7.7-4.8-1.9 ～ 2.5。ほぼ完形。	口縁端部若干内傾。見込平坦。縁辺の押さえ強い。口縁部歪む。	左ロクロ→回糸→板目(弱い)。見込に焼成前刻書「カヨ？」。	胎石英目立つ。細砂・輝石含みやや粗い。焼やや硬調。色橙褐色で断面まで一様。他口縁端部に燈芯状スス付着一ヶ所。
24	24号井戸	6.7-4.0-2.2。完形。	1にほぼ同じ。口縁部下半外面が、内彎気味になる。	1にほぼ同じ。見込のナデ強い。糸切り痕不明瞭。	胎1に近い。輝石がやや多い。焼色1にほぼ同じ。他口縁部にスス付着。一部で厚く、タール状。口縁端部一部剝落する。
25	24号井戸	6.2-4.0-2.0。完形。	1にほぼ同じ。やや小型。内面の稜が強い。	1にほぼ同じ。見込のナデやや強い。	胎焼20に近い。色若干黄色味をおびた淡褐色。他口縁部に燈芯状のスス付着。
26	24号井戸	7.9-4.3-2.0。口縁部を若干欠く。	口縁端部内傾。見込縁辺が窪む。歪みが著しい。	左ロクロ→回糸無調整。見込縁辺に不規則なナデ。ロクロ痕はやや弱い。	胎粗砂・ベンガラ等の混入物多い。輝石散見。焼やや硬調。色橙褐色～黒褐色。一様でない。他一方に片寄ってスス付着。
27	25号井戸	(7.4) - (4.1) -2.6。½個体。	口縁端部内傾。底部平坦。	左ロクロ。底部に不規則な擦痕多く切り離し不明。見込にきわめて強いナデ。	胎砂粒多い。輝石散見。焼やや硬調。色淡褐色でほぼ一様。他口縁部に燈芯状のススが弱く付着。
28	25号井戸	8.0-5.2-1.6。口縁部½、底部若干欠く。	口縁部外反。底部は広く平坦。	右ロクロ。底部はナデで切り離し痕不明。内面にラセン状の強いロクロ痕残る。	胎砂粒・輝石を若干含む。石英散見。焼やや硬調。色淡褐色一様。他口縁部外端が若干磨耗する。
29	29号井戸	(12.0)-5.6-2.6。口縁部½を欠く。	口縁部外面半位に稜があり、上半は若干内彎。薄手で軽量。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状)。見込縁辺に強いナデ。	胎砂粒・細礫多く粗い。ベンガラ目立つ。焼硬調で焼きしまる。色橙褐色。一部で白色味が強いムラ。
30	29号井戸	7.6-3.8-2.0。½個体。	口縁部内面中位に稜があり、上半は若干外反。見込平坦。	右ロクロ。底部はナデで切り離し不明。ロクロ痕やや弱い。	胎砂粒若干含む。混入物少ない。焼やや硬調。色白色味の強い淡褐色。外面は若干暗い。他口縁端部に燈芯状の弱いスス。
31	29号井戸	11.9-5.0-2.8 ～ 3.0。口縁部の½を欠く。	口縁部若干内彎。見込はリング状の窪み。口縁の歪み著しい。	左ロクロ→回糸→板目痕強い。ロクロ痕弱い。	胎石英・ベンガラ散見。粗砂多く粗い。焼やや軟調、ムラのある酸化焔。色淡褐色。外面黒色のムラ。他内面磨耗。
32	52号井戸・29号井戸	-5.3- 口縁端部を欠く。	見込がやや広い。口縁端部の割れ口は平坦になる。	左ロクロ→回糸→幅広の板目。見込に強いナデ。	胎石英散見。砂粒多く粗い。焼軟調の酸化焔。色黒色と淡褐色でムラ。他二次火熱の影響強く、脆弱。
33	31号井戸	(11.5)-5.5-3.1。½個体。	口縁部若干内彎。見込はリング状になる。	左ロクロ→回糸→弱い板目(ゴザ状)。	胎細砂多い。輝石散見。焼硬調の酸化焔。色橙色味の淡褐色。断面中央白色味。
34	33号井戸	(2.9)-5.0-2.9。口縁部の⅓を欠く。	口縁部は直線的に開く。見込は平坦。	右ロクロ→回糸。無調整。ロクロ痕は強く明瞭で、内外面とも渦巻状に連続する。	胎砂粒やや多。雲母散見。焼硬調で焼きしまる酸化焔。色淡褐色。部分的に灰色味のムラ。他内面に薄くスス付着。
35	39号井戸	(6.3) - (3.7) -2.2。⅔個体。	口縁部は直線的に開き端部外面で内傾。見込に小さな凹凸あり。	右ロクロ？→切り離し不明。板目は付着粘土の上で単位は細かい。見込ナデ方向不定。	胎輝石・ベンガラ散見。緻密。焼やや軟調の酸化焔。色白色味の淡褐色で断面は若干灰色味をおびる。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
36	39号井戸	(7.0)-4.0-2.0。⅔個体。	口縁部は若干内彎、端部外面で内傾。	左ロクロ→回糸。見込に一方向2～3回の強いナデ。ロクロ痕は弱い。	⑥輝石・石英散見。混入物少なく緻密。㊧やや軟調の酸化焔。㊨白色味の淡褐色で一様。㊩34にやや似ている。
37	39号井戸	(10.0)-5.2-3.2。口縁部の¾を欠く。	口縁部は直線的に開き、端部は平坦で歪み著しい。	右ロクロ→回糸。ロクロ目は弱く同心円状。	⑥石英散見。砂粒多くやや粗い。㊧やや硬調の酸化焔。㊨外面白色味の淡褐色。内面は見込を中心に黒色味が強い。
38	39号井戸	(9.6) - (4.5)-3.4。	口縁端部内傾。	右ロクロ→切り離し不明→幅広の板目。見込に弱いナデ。	⑥ベンガラ含む。㊧やや硬調の酸化焔。㊨白色味の淡褐色でムラあり。
39	39号井戸	(10.2) - (4.8)-2.8。	口縁部中位で肥厚し、端部はやや尖る。見込と底部は平坦。	左ロクロ→回糸？→不規則なナデ。見込に一方向のナデ。ロクロ痕やや強い。	⑥輝石・ベンガラ多いが緻密。㊧やや硬調。㊨白色味の強い淡褐色、一様でない。
40	40号井戸	6.8-4.0-1.8。ほぼ完形。	口縁端部内傾。歪み著しい。	左ロクロ→回糸→不規則なナデ？見込に弱いナデ。	⑥ベンガラ散見。砂粒多い。やや粗い。㊧やや硬調の酸化焔。㊨橙色味の淡褐色。
41	40号井戸	-4.9 ～ 5.2。口縁端部を欠く。	口縁は内彎するものと思われる。	左ロクロ→回糸？→全面に不規則なナデ。見込に強いナデ。	⑥輝石・雲母・砂粒を含む。㊧やや硬調の酸化焔？㊨内面淡灰褐色。外面淡褐色。㊩口縁部内面に部分的にスス付着。
42	40号井戸	(4.7)-5.0-2.1。口縁部の⅔を欠く。	口縁部は厚く、端部でやや内傾。見込は平坦で広い。	左ロクロ→回糸？→板目。ロクロ痕は弱い。見込にきわめて軽いナデ。	⑥石英・粗砂の混入多く粗い。㊧やや硬調の酸化焔。㊨橙色味の淡褐色一様。
43	42号井戸	(12.0) - (5.6)-2.8。⅓個体。	口縁下半で外反、端部内傾。	右ロクロ→切り離し不明。見込に軽いナデ。	⑥ベンガラ多い。やや粗。㊧軟調。二次火熱を受け脆弱。㊨茶褐色。白色味のムラ多い。
44	42号井戸	-6.0-　。口縁上半を欠く。	部厚く重い底部から、口縁部は直線的に立つ。	右ロクロ→回糸。ロクロ痕はラセン状で、内面のみ強い。	⑥輝石・石英散見。やや緻密。㊧やや硬調の酸化焔。㊨淡褐色で断面まで一様。
45	44号井戸	11.8-5.6-3.3。ほぼ完形。	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部で内傾する。	左ロクロ→回糸。板目（ゴザ状）。ロクロ痕弱い。見込は弧状の丁寧なナデ。	⑥砂粒やや多。雲母・チャート・ベンガラ散見。やや緻密。㊧硬調酸化焔。㊨橙色味の淡褐色。内面やや白い。
46	44号井戸	11.4-4.5-3.3。完形。	44と同じ。	44と同巧。	㊧㊨44に同じ。⑥混入物少なく緻密。
47	44号井戸	(11.6) - (6.0)-2.8。⅙破片。	口縁部はやや外反気味に開く。見込は平坦。	右ロクロ→切り離し不明。ロクロ痕強い。	⑥粗砂の混入多く粗い。輝石・石英散見。㊧やや硬調。㊨淡褐色。ムラ多い。
48	44号井戸	-5.8-　。口縁部上半を欠く。	口縁部は直線的に開く。見込端で押さえ強く、中央は平坦。	ロクロ方向・切り離し不明。板目？焼成後の切り傷の可能性。ロクロ痕弱い。	⑥砂礫の混入多く粗悪。㊧軟調でしまり欠く。㊨白色味の淡褐色。内面一部に暗いムラ。断面一部暗褐色。㊩全体に磨耗
49	44号井戸	11.8-5.0-3.1。完形。	44と同じ。	44と同巧。	⑥㊧44に同じ。㊨やや赤味が強く、外面一部に黒斑あり。
50	44号井戸	(11.6)-5.2-3.8。⅓個体。	口縁部は直線的に開き、端部は若干外反。見込は平坦。	右ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕は内面のみ強い。	⑥砂粒若干混入、輝石散見、やや粗い。㊧やや硬調の酸化焔。㊨淡褐色内外面一様。㊩底部の磨耗すすむ。
51	46号井戸	(12.2)-6.0-3.6。口縁部の⅙を欠く。	口縁部ほぼ直線的に開き端部やや尖る。	左ロクロ→回糸→板目(弱い)。見込に不規則なナデ。ロクロ痕弱い。	⑥砂粒・輝石・ベンガラ・パミスを含む。㊧やや硬調。㊨淡褐色一様。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
52	46号井戸	(12.0) - (6.5) -3.5。　個体。	口縁部は直線的に開き、端部で若干内彎。	右ロクロ→回糸。底部に粘土粒付着。ロクロ痕弱い。	㊙細砂・輝石を含む。器表面ザラつく。㊥やや硬調。㊐白色味の強い淡褐色一様。
53	46号井戸	11.6-6.3-3.1。口縁部の¼を欠く。	口縁端部やや尖る。口縁の歪み大きい。見込に凹凸あり。	右ロクロ→回糸→板目。見込に不規則で強いナデ。	㊙砂粒若干含む。輝石・ベンガラ散見。やや緻密。㊥やや硬調。㊐淡褐色基調。黒色味、灰色味の色ムラあり一様でない。
54	49号井戸	7.7-3.8-2.2。½個体。	口縁部上半で大きく内屈し、端部肥厚する。	右ロクロ→回糸→板目。見込に強いナデ。	㊙砂粒を含む。パミスやや多い。㊥やや軟調。㊐淡褐色。内面に黒色のムラあり。
55	49号井戸	(11.5) - (6.0) -3.3。¼個体。	口縁部は直線的に開く。底部は凹レンズ状。	右ロクロ。底部に不規則なナデと板目状の凹凸あり。	㊙砂粒多い。輝石・パミス散見。㊥硬調。㊐暗褐色。淡褐色、黒色のムラあり。
56	49号井戸	11.3-6.2-3.3。完形。	口縁端部弱く内傾。見込は平滑さ欠く。	左ロクロ→回糸→板目(強い)。見込に方向不定のやや強いナデ。	㊙砂粒多くややざらつく。輝石・ベンガラ多い。㊥硬調で焼きしまる。㊐橙色味の淡褐色で一様。
57	49号井戸	7.8-4.5-2.3。ほぼ完形。	口縁部は直線的に開く。見込平坦。	右ロクロ→回糸無調整。見込に同心円状、口縁部外面下半にラセン状ロクロ痕。	㊙砂粒・パミス・輝石を含む。㊥やや硬調。㊐橙色味をおびた淡褐色で一様。
58	49号井戸	(12.3)-6.0-3.0。⅓個体。	口縁部上半弱く内彎。	右ロクロ→回糸？不明瞭。ロクロ痕やや弱い。	㊙砂粒・輝石・ベンガラを含む。㊥やや軟調。㊐橙味おびた淡褐色。内面白色味。
59	52号井戸	11.7-4.4-3.7。ほぼ完形。	口縁部は直線的に開き、端部は内面で外反する。厚手で重量感あり。	右ロクロ→回糸→板目(弱い)。ロクロ痕はラセン状で強い。見込に強いナデ。	㊙細砂多い。雲母・ベンガラ散見。5㎜大の細礫を含む。㊥やや硬調だが若干しまり欠く。㊐茶褐色で一様。
60	52号井戸	(10.6) - (5.5) -2.8。⅓個体。	口縁端部わずかに内傾。底部は凹凸多い。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状で強い)。見込に強いナデ。	㊙砂粒・輝石散見。緻密。㊥やや硬調。㊐淡褐色で断面まで一様
61	52号井戸	10.0-5.0-2.6 ～3.0。ほぼ完形。	口縁部直線的に開き端部若干内傾。やや歪む。	左ロクロ→回糸→板目（ごく弱い)。見込に弱いナデ。	㊙粗砂多い。ベンガラ散見。粗い。㊥軟調。㊐淡褐殻色。内面一部で白色味強い。
62	52号井戸	(　　)-4.1-2.1。口縁部の¾欠く。	口縁端部若干内傾。見込は比較的平坦。	左ロクロ→回糸無調整。見込に一方向の布状擦痕が残る。	㊙粗砂多く石英目立つ。㊥やや硬調。㊐橙褐色。見込黒褐色。㊞橙芯状スス付着。
63	53号井戸	11.5-7.0-(2.5～3.8)。口縁部の½を欠く。	口縁端部若干内傾。歪み著しい。	右ロクロ→回糸→板目（二方向)。ロクロ痕は内面でやや強い。	㊙細砂やや多、輝石散見、やや緻密。㊥やや軟調の酸化焔。㊐暗褐色で断面まで一様。㊞見込の磨耗すすむ。
64	53号井戸	11.5-7.7-2.7。口縁部の¼を欠く。	口縁部は直線的に開く。見込は平坦で広い。口縁部若干歪む。	左ロクロ→回糸→板目（ごく弱い)。ロクロ痕弱い。	㊙砂粒・パミス若干含む。やや緻密。㊥硬調の酸化焔。㊐白色味の淡褐色。内面一部やや赤味をおびる。
65	53号井戸	11.5-5.5-3.4。口縁部の⅔を欠く。	口縁端部若干内彎。	右ロクロ→回糸→幅広の板目。ロクロ痕弱い。見込に一方向のナデ3回。	㊙砂粒多い。石英散見。粗い。㊥軟調酸化焔でしまり欠く。㊐暗褐色。口縁部外面やや明るい。
66	53号井戸	10.0-7.2-1.9。⅚個体。	口縁部は短かく、端部やや尖る。見込は平坦。	左ロクロ→回糸→無調整。ロクロ痕は弱い。	㊙細砂多い。パミス・ベンガラ散見。やや粗い。㊥やや硬調。㊐淡褐色で一様。
67	53号井戸	10.4-4.5-2.7。口縁部の¼を欠く。	口縁部下半で大きな段を持ち、上半は直線的に開く。	左ロクロ→回糸→粘土粒付着。見込に弱いナデ。	㊙砂粒やや多い。石英散見。やや緻密。㊥やや硬調の酸化焔。㊐白色味の強い淡褐色で内外面一様。
68	54号井戸	10.5-5.2-3.3。口縁端部の½を欠く。	口縁端部内彎する。口縁部は楕円形に歪む。	右ロクロ→切り離し不明。底部不規則なナデ。見込の片側に強いナデ。	㊙砂粒・ベンガラ若干含む。白色粘土が帯状に見える。緻密。㊥硬調焼きしまる。㊐白色味の淡褐色。底部白色味強い。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
69	56号井戸	11.8-5.1-(2.8～3.4)。口縁部の¼を欠く。	口縁端部内傾する。見込は狭く、縁の押さえが強い。	左ロクロ→切り離し不明。板目（ゴザ状）。見込に強く雑なナデ1回。	⑱砂粒多い。輝石・パミスを含む。やや粗い。⑱やや硬調の酸化焔。⑳淡褐色。口縁内面ややススける。断面白色味強い。
70	59号井戸	7.8-4.3-2.2。口縁端部の⅓を欠く。	口縁端部若干内傾。底部厚い。	左ロクロ→回糸→無調整。ロクロ痕弱い。	⑱砂粒含む。大粒の石英を見る。やや粗い。⑱やや軟調の酸化焔。⑳茶褐色で断面まで一様。
71	57号井戸	(9.9)-5.0-2.8。½個体。	口縁部外面中位に小さな稜があり、端部内傾。	左ロクロ→回糸→弱い板目。見込に弱いナデ。	⑱砂粒含む。ベンガラ散見。やや緻密。⑱やや軟調の酸化焔。⑳白色味の淡褐色。
72	58号井戸	(10.2) -5.4-2.7～3.1。口縁部の⅓を欠く。	口縁部上半弱く内彎。見込は窪む。歪みあり。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状）。見込にやや強いナデ。ロクロ痕内面で強い。	⑱輝石・ベンガラを含む。粗い。⑱やや硬調の酸化焔。⑳橙色味の淡褐色。白色粘土の渦状のムラがある。
73	60号井戸	11.7-6.0-3.2。¾個体。	斜めに切離したため、底部器厚、器高に著しい歪みがある。	左ロクロ？→回糸→板目。ロクロ痕やや弱い。	⑱砂粒多い。やや粗い。⑱軟調の酸化焔でしまり欠く。⑳橙色味の淡褐色で断面まで一様。
74	61号井戸	11.3-6.3-3.2。口縁部の⅓を欠く。	口縁部上半若干内彎。歪み強い。	左ロクロ→回糸。見込にきわめて強いナデ。ロクロ痕やや弱い。	⑱細礫の混入多く器表面はザラつく。⑱焼きしまり強い。還元焔の可能性。⑳灰褐色。断面一部灰色味強い。
75	61号井戸	(11.5) - (6.6) -2.3。⅓個体。	口縁部上半内彎。底部は広く平滑。	左ロクロ→回糸。見込に弱いナデ。	⑱砂粒・輝石・ベンガラを含む。⑱やや軟調でしまり欠く。⑳橙味の淡褐色一様。
76	62号井戸	(11.4)-5.0-3.1。口縁部上半の⅚を欠く。	口縁部内彎。やや歪み口縁部の開きは一様でない。	左ロクロ→見込に弱いナデ。	⑱チャートを含む細礫混入。輝石散見。やや粗い。⑱やや硬調。⑳白色味のある淡褐色。外面やや暗い。
77	62号井戸	-4.5-　。口縁部の上半を欠く。	見込はやや平坦。	右ロクロ→回糸→糸切り痕を雑にナデ消す。見込に弱いナデ。内面ロクロ痕やや強い。	⑱砂粒・輝石混入。やや粗い。⑱焼きしまりやや強い酸化焔。⑳白色味の強い淡褐色で内外面一様。
78	66号井戸	(11.2)-5.4-3.0。口縁部の⅓を欠く。	口縁部上半弱く外反。	左ロクロ→回糸無調整。見込縁辺に強いナデ。見込中央にも軽いナデ。	⑱砂粒多い。輝石・ベンガラ散見。⑱やや軟調。⑳暗褐色。口縁部橙褐色。
79	20号土壙	10.2-5.1-3.2。ほぼ完形。	口縁部はほぼ直線的に開き、端部は若干肥厚。	左ロクロ→回糸無調整。見込に強いナデ。	⑱輝石・砂粒やや多い。⑱やや硬調。⑳淡褐色。暗褐色のムラあり。
80	25号土壙	(9.0) - (8.2) -1.5。½個体。	形状・器厚等一定でない。見込は平滑。	手づくね？底部無調整で凹凸あり、砂粒付着する。見込は丁寧なナデ。	⑱砂粒・輝石やや多い。⑱強く焼きしまり硬調。⑳橙褐色基調。色ムラ多く一様でない。
81	44号土壙	(9.6)-4.8-2.0。⅔個体。	口縁部内端が強く外反する。	左ロクロ→回糸か？切り離し痕不明瞭。底部・見込にナデ？ロクロ痕弱い。	⑱砂粒・石英・ベンガラ等、混入物多い。⑱やや軟調。⑳淡褐色。暗褐色のムラあり。
82	45号土壙	12.0-7.0-3.4。¾個体。	口縁部は直線的に開く。底部は厚く重量感がある。	右ロクロ→回糸→板目。見込に弱いナデ。内面に渦巻状のやや強いロクロ痕が残る。	⑱砂粒・輝石多い。石英・パミス散見。ボソボソして粗い。⑱硬調。⑳淡褐色。底部黒褐色。㊱口縁部内端磨耗する。
83	166号土壙	(6.0) - (3.3) -2.4。口縁部½、底部⅔残存。	口縁部の一端が片口状に突出する。見込縁辺に凹線が巡る。	右ロクロ→板目（ゴザ状）。見込にきわめて強いナデ。片口部の窪みは親指大。	⑱砂粒・輝石を含む。ややザラつく。⑱硬調。⑳白色味の強い淡褐色で一様。㊱片口部分に濃いススが付着。
84	182号土壙	7.4-5.2-1.0。ほぼ完形。	口縁部外反。見込はレンズ状。	右ロクロ→回糸。底部に粘土粒付着。ロクロ痕弱い。	⑱細砂多い。輝石・雲母散見。⑱やや硬調。⑳淡褐色で断面まで一様。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
85	182号土壙	12.0-6.9-2.7。完形。	口縁部外面の屈曲が強く、上半は直立する。	右ロクロ→回糸→不規則なナデ、見込同心円状のロクロ痕。	㊫砂粒多い。㊫硬調で強く焼きしまる。㊫淡褐色。内面は若干灰色味をおびる。
86	182号土壙	7.7-6.8-1.3。完形。	口縁部短かく、端部やや尖る。見込縁辺が窪む。全体に歪み強い。	左ロクロ→回糸？無調整。見込中央にロクロ痕を認めないが、縁辺には強い擦痕を残す。	㊫細砂を含む。雲母散見。やや緻密。㊫硬調で焼きしまる。㊫淡褐色で断面まで一様。
87	182号土壙	12.6-8.6-2.8。口縁部の¼を欠く。	口縁端部弱く内彎する。底部厚手だが軽量。	右ロクロ→回糸無調整。見込のロクロ痕は同心円状。	㊫砂粒多くザラつく。輝石・石英散見。㊫やや軟調でしまりに欠く。㊫淡褐色一様。㊫内面が磨耗する。
88	194号土壙	7.0-4.0-2.0。完形。	口縁端部は外方へやや肥厚する。見込平坦。	左ロクロ→回糸（底部磨耗し不明瞭）。ロクロ痕弱い。	㊫砂粒多い。㊫軟調。㊫淡褐色。外面一部黒色部分があるが、スス付着か色ムラか区別できない。㊫内面の剝落進む。
89	272号土壙	11.3-5.0-2.7 ～ 3.2。完形。	口縁部上半内彎する。口縁部やや歪む。	左ロクロ→回糸無調整。見込に弱いナデ。	㊫砂粒多い。輝石・石英・ベンガラ混入。㊫硬調。㊫橙色。内面は黄色味をおびる。
90	272号土壙	11.3-5.0-3.4 ～ 3.8。ほぼ完形。	口縁部はほぼ直線的に開き、端部はわずかに内彎する。	右ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕は見込で同心円状、口縁部はラセン状で細かい。	㊫砂粒・石英等を含む。㊫やや硬調。㊫淡褐色。外面一部赤色味をおびる。
91	272号土壙	7.6-4.6-1.8。完形。	口縁端部弱く内傾。底部中央肥厚。歪み強い。	左ロクロ→回糸→不規則なナデ？見込のナデは弱い。	㊫砂粒・輝石散見。㊫しまり欠く。㊫黒色で一様。㊫口縁端部スス付着。
92	272号土壙	-5.5- 図示部完存。	見込縁辺に強いナデで見込中央は凸レンズ状になる。	左ロクロ→回糸→板目(強い)。見込に一方向のナデ。	㊫砂粒多い。輝石散見。㊫やや硬調。㊫淡褐色。外面は若干橙色味をおびる。
93	273号土壙	10.6-4.8-3.0。完形。	口縁部上半若干内彎。厚手で重量感あり。	左ロクロ→回糸→板目。見込縁辺に弧状、中央に一方向のナデ。ロクロ痕弱い。	㊫砂粒・石英やや多い。輝石散見。やや粗い。㊫やや軟調。㊫赤褐色で断面まで一様。
94	273号土壙	—5.4—口縁部上半を欠く。	薄手。口縁部は弱く内彎するものと思われる。見込平坦。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状）。見込に弱いナデ。ロクロ痕は内面でやや弱い。	㊫砂粒多くザラつく。輝石・長石・ベンガラ散見。㊫硬調。㊫淡橙褐色。断面と底部は若干赤色味をおびる。
95	273号土壙	(10.3)-5.0-3.0。口縁の⅓を欠く。	93に同じ。	93に同巧。	93に同じ。
96	273号土壙	(10.3)-4.8-3.0。ほぼ完形。	93に同じ。	93に同巧。	93に同じ。
97	275号土壙	7.6-4.4-1.5 ～ 2.1。ほぼ完形。	口縁部若干内傾。口縁部の開きの歪み強い。	左ロクロ→回糸→板目(強い)。見込に強いナデ。	㊫細砂やや多い。石英散見。粗い。㊫やや硬調だがしまり欠く。㊫橙褐色で一様。㊫口縁部内面に燈芯状のスス付着。
98	365号土壙	(10.0)-5.7-3.0。図示部の⅓残存。	口縁部に波状の歪みあり。片口の可能性。口縁端部の肥厚強い。	左ロクロ→切り離し不明。ロクロ痕きわめて弱い。	㊫輝石・ベンガラを含む。やや緻密。㊫厚手としては硬調。㊫橙褐色で一様。
99	356号土壙 366号土壙	(11.8) - (4.8) -3.4。¼個体。	口縁部上半大きく内彎。端部ほぼ直立。底部の凹凸多い。	左ロクロ？→板目。見込縁辺にリング状の弱い押圧痕。中央にナデ。	㊫砂粒・ベンガラやや多い。粗い。㊫やや硬調。㊫灰黄褐色。底部黒褐色。
100	375号土壙	12.1-5.9-3.0。口縁部上半の¼を欠く。	口縁部は薄く外反。底部のみやや厚手。	右ロクロ→回糸→板目（ゴザ状）。ロクロ痕はラセン状で強い。見込のナデは弱い。	㊫砂粒・輝石・ベンガラを含み器表面ザラつく。㊫硬調で強く焼きしまる。㊫白色味の強い淡褐色でほぼ一様。

No.	出土 遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備考
101	376号土壙	10.6-6.0-4.2。ほぼ完形。	歪み著しく、平面形は卵形で、底部の凹凸も激しく、不安定。	右ロクロ→回糸→板目。ロクロ痕はラセン状でやや強い。見込のナデは強い。	⑮砂粒・細礫多く器表面ザラつく。石英散見。⑯やや硬調。⑰橙褐色で一様。
102	392号土壙	11.0-5.1-3.1 ～3.7。口縁部の¼を欠く。	口縁部は薄く、直線的に延びる。歪み強い。	右ロクロ→回糸→板目。ロクロ痕は細かく、外面で強い。見込のナデはやや強い。	⑮細砂含む。雲母散見。混入物少ない。⑯硬調で焼きしまる。⑰淡褐色で一様。
103	392号土壙	11.2-5.0-3.2 ～3.5。完形。	口縁部はほぼ直線的に開く。薄手で軽量。	右ロクロ→回糸→板目(弱い)。見込のナデは一方向、強く丁寧。ロクロ痕は同心円状。	⑮細砂やや多い。雲母を含む。緻密。⑯硬調で強く焼きしまる。⑰淡褐色。内面やや暗い。
104	399号土壙	6.8-4.7-1.8。⅔個体。	口縁部は内彎し端部やや尖る。見込は平滑だが、底部は平滑さ欠く。	右ロクロ？→回糸。底部に不規則なナデ。見込のナデも弱い。	⑮砂粒を若干含む。⑯軟調。しまり欠く。⑰外面、断面黒色。内面淡褐色で一部橙色味をおびる。
105	438号土壙	(11.5) - (5.7) -3.2。¼個体。	口縁端部わずかに内彎する。薄手で稜に底部中央が薄い。	左ロクロ→回糸→板目（不規則な凹凸)。見込に弱いナデ。ロクロ痕は弱い。	⑮砂粒やや多くザラつく。輝石・ベンガラ散見。⑯硬調。⑰白色味の強い淡褐色。⑱底部若干磨耗する。
106	517号土壙	11.5-7.0-2.5。口縁部の¼を欠く。	口縁部は外反する。見込周縁部やや窪む。見込の凹凸やや多い。	左ロクロ→回糸→板目（中央のみ)。見込中央に弱いナデ。ロクロ痕は弱い。	⑮砂粒・輝石・ベンガラを多く含む。⑯やや硬調。⑰淡褐色で一様。
107	517号土壙	11.9-7.5-2.2。完形。	口縁部上半弱く内彎する。見込は広く、縁辺が若干窪む。	左ロクロ。底部磨耗し、切り離し不明。見込に不規則なナデで、縁辺でやや強い。	⑮砂粒・輝石を含む。石英散見。⑯やや硬調。橙色味の強い淡褐色で一様。
108	1号溝	10.4-5.4-3.2。口縁部の¼を欠く。	口縁部やや内彎し、端部は若干尖る。見込、底部の凹凸強い。	左ロクロ→回糸→板目(強い)。見込に段状の強いナデ2回。ロクロ痕は弱い。	⑮粗砂含みザラつく。輝石・ベンガラ散見。⑯硬調で強く焼きしまる。⑰白色味の強い淡褐色。部分的に赤色味おびる。
109	3号溝 北隅	(12.1)-6.2-3.5。口縁部上半の⅔を欠く。	口縁部上半は内彎し、端部は弱く内傾する。内面に強い稜がある。	左ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕は弱く、同心円状を呈す。	⑮砂粒多い。輝石・雲母散見。やや粗い。⑯やや軟調。ムラがある。⑰淡褐色～暗褐色で一様でない。
110	3号溝 北隅	10.9-(4.9)-3.1。口縁部¾、底部⅓残存。	口縁部内彎。内面の口縁部から見込には境がない。	左ロクロ→回糸。ロクロ痕やや強くラセン状となる。	⑮細砂やや多い。雲母散見。やや緻密。⑯やや硬調。⑰内面やや灰色味をおびた淡褐色。外面淡褐色～暗褐色。
111	3号溝 北側	(7.4)-4.0-1.8。口縁部¼、底部½残存。	口縁部弱く外反。見込平坦。	右ロクロ？切り離し不明。底部に弱いナデの可能性。ロクロ痕は弱い。	⑮砂粒含み、ザクザクしている。輝石散見。⑯やや硬調。⑰橙色味をおびた淡褐色で断面まで一様。
112	3号溝 北側	7.1-3.6-1.7 ～2.1。口縁部の¼を欠く。	1に同じ。口縁部の歪み大きい。	1に同巧。見込のナデがやや強く、ゴザ状の板目が残る。	⑮1に近いがベンガラの混入目立つ。⑯やや軟調。⑰やや橙色味をおびた淡褐色で断面まで一様。
113	3号溝 北側	(5.5) - (5.5) -3.0。⅓個体。	口縁部は直線的に開き端部はやや尖る。見込中央はやや厚く平坦。	右ロクロ→切り離し不明→全面雑なナデ。ロクロ痕強い。	⑮砂粒が多い。輝石・石英目立つ。やや粗くザラつく。⑯硬調。⑰淡橙褐色。外面白色味。
114	3号溝 中央	(11.2)-5.2-3.0。口縁部の¾を欠く。	口縁端部内傾。口縁内面下端が肥厚し、見込中央は薄い。	左ロクロ→回糸→幅狭の弱い板目。見込に弱いナデ。外面のロクロ痕弱い。	⑮砂粒・細礫を含み粗い。⑯やや硬調の酸化焔。⑰淡褐色。内面部分的に橙色味。
115	3号溝 中央	(10.8)-5.0-2.8。口縁部の⅓を欠く。	口縁部上半内彎。端部での内傾も強い。見込は狭く、凹凸がある。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状)。見込に強いナデ。	⑮夾雑物少なく緻密。⑯強い焼きしまりを示す。還元焔の可能性。⑰灰色味のある暗褐色。外面一部淡褐色になる。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
116	3号溝 中央	12.0-4.7-3.5。 口縁部の¼を欠く。	口縁部上半内彎。見込は平坦。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状、片寄る）。見込に弱いナデ。	㊙砂粒多い。やや粗い。㊙酸化焰。しまり欠く。二次火熱による？㊐黒褐色。口縁部淡褐色。㊗見込中心に広くスス付着。
117	3号溝 中央	(7.0)-4.0-1.9。 口縁部の¾を欠く。	口縁部は厚く、直線的に開く。見込は平坦。	右ロクロ→回糸→無調整。ロクロ痕は弱い。	㊙砂粒やや多い。ベンガラ散見。やや粗い。㊙やや硬調酸化焰。㊐淡褐色でほぼ一様。
118	3号溝 南隅	8.0-4.4-2.0。ほぼ完形。	口縁部上半は弱く外反。見込中央若干窪む。	右ロクロ→回糸→無調整？。見込中央に強い押圧。	㊙砂粒多い。輝石・チャート混入。やや粗い。㊙硬調酸化焰で強い焼きしまり。㊐淡橙褐色で一様。㊗口縁端部磨耗。
119	3号溝 南隅	7.2-4.0-2.0。ほぼ完形。	口縁部は直線的にのびる。見込は平坦。	右ロクロ→回糸→無調整。ロクロ痕やや強い。	㊙115に近似。㊙やや硬調の酸化焰。㊐白色味の淡褐色で一様。
120	3号溝 南隅	(10.8) - (4.6) -3.1。½個体。	口縁部上半で内彎。見込は狭く凹凸多い。	左ロクロ→回糸→板目。見込中央に強いナデ。	㊙砂粒やや多い。輝石・ベンガラ散見。やや粗い。㊙やや軟調酸化焰。㊐淡褐色。
121	3号溝 南隅	7.0-4.0-1.8。完形。	口縁端部内傾気味に立つ。	右ロクロ？→切り離し不明→板目（ゴザ状）。見込に強いナデ。ロクロ痕弱い。	㊙細礫・砂粒多く粗い。㊙やや硬調の酸化焰。㊐橙褐色で内外面一様。
122	5号溝	11.4-7.2-2.7。 完形。	口縁部厚く直線的に開く。見込は広く平坦。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状）。見込に方向不定のナデ。	㊙砂粒・ベンガラやや多い。㊙やや軟調。㊐淡褐色一様。㊗見込は磨耗する。
123	5号溝	11.8-5.1-3.3。 口縁部の¼を欠く。	口縁部上半内彎する。見込縁辺はやや窪む。	左ロクロ→回糸？→板目（ごく弱い）。ロクロ痕は内面で弱い。	㊙砂粒多くザラつく。輝石散見。㊙硬調で強い焼きしまり。㊐淡褐色。外面一部橙色味をおびる。断面一部黒色味強い。
124	6号溝 中央	(10.9)-5.2-3.0。 口縁部上半の½を欠く。	口縁部は薄手で端正な作りである。見込中央窪む。	左ロクロ→回糸→板目(強い)。見込に強いナデ。ロクロ痕やや強い。	㊙混入物少なく緻密。㊙軟調でしまり欠く。㊐淡褐色。口縁部内面上半はやや暗い。
125	6号溝 中央	(11.6)-5.4-3.0。 口縁部の⅔を欠く。	口縁部は直線的に開き、端部はやや肥厚する。	右ロクロ→回糸→板目(弱い)。見込に一方向の丁寧なナデ。ロクロ痕は渦巻状に巡る。	㊙砂粒・パミス・ベンガラ散見。㊙硬調。㊐やや橙色味をおびた淡褐色。口縁端部で赤色味が強い。
126	6号溝	(11.2) - (5.6) -3.0。½個体。	口縁端部やや内彎。見込縁辺窪む。厚手。	左ロクロ。底部磨耗し切り離し不明。ロクロ痕弱い。	㊙粗砂多い。輝石散見。㊙やや硬調。㊐白色味をおびた淡褐色。
127	7号溝 中央	(7.3) - (4.8) -2.4。口縁部上半の¾を欠く。	口縁部弱く内彎。見込平坦。薄手で軽量。	右ロクロ→回糸。見込に一方向の丁寧なナデ。ロクロ痕きわめて弱い。糸切り痕不明瞭。	㊙細砂・輝石散見。緻密。㊙硬調で焼きしまり強い。㊐淡褐色。一部で白色味が強くなる。
128	7号溝 中央	-2.7-　。 口縁部上半を欠く。	口縁部は弱く内彎するものと思われる。底部凹凸多い。	右ロクロ→回糸→板目(強い)。見込のナデは強く細かく、削りに近い。	㊙砂粒・輝石やや多い。ローム土まじりでやや粗い。㊙硬調。㊐淡褐色。断面は赤色味をおびる。
129	7号溝 西側	(11.0)-5.4-3.5。 口縁部の⅔を欠く。	口縁部上半強く内彎し、内面に強い稜がある。	右ロクロ→回糸→板目（やや強い）。見込に一方向の強く丁寧なナデ。	㊙砂粒・輝石を散見する。混入物少なく緻密。㊙やや硬調。㊐白色味をおびた淡褐色でほぼ一様。
130	7号溝 西側	-2.7-　。 口縁部上半を欠く。	口縁部内彎するものと思われる。	右ロクロ→回糸（不明瞭）→板目。見込は一方向の強いナデ。	㊙砂粒・輝石・ベンガラ等を含む。ややザラつく。㊙やや硬調。㊐やや白色味をおびた淡褐色でほぼ一様。
131	7号溝 東側	(11.7)-7.7-3.0。 ½個体。	口縁部中位で外方へ開き、上半はやや内彎する。見込縁辺やや窪む。	左ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕弱い。	㊙砂粒・輝石を含む。㊙やや硬調だがしまり欠く。㊐淡褐色。㊗口縁端部若干磨耗する。

No.	出土 遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備考
132	7号溝 東側	11.8-5.6-2.8。 ほぼ完形。	口縁部は直線的に開く。見込は広く平坦。部厚く重量感あり。	右ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕は弱い。	⑰砂粒含む。輝石・雲母・石英散見。ややボソボソする。⑱硬調だが、ややしまり欠く。⑳赤色味をおびた淡褐色。
133	7号溝 東側	(9.8)-4.8-3.3。 口縁部上半の大半を欠く。	口縁端部若干内傾。見込は比較的平坦。	右ロクロ→回糸→板目。ロクロ痕弱い。見込のナデやや弱い。	⑰砂粒を若干含む。輝石散見。⑱やや軟調でしまり欠く。還元焔の可能性。⑳灰褐色。断面の黒色味強い。
134	7号溝 東側	-4.7- 。 口縁端部をほとんど欠く。	見込縁辺がリング状に若干窪む。	右ロクロ→回糸。ロクロ痕・見込のナデ弱い。	⑰細砂・輝石を含む。緻密。⑱やや軟調。⑳白色味の強い淡褐色。底部に黒色のムラ。㉑口縁部の割れ口にスス付着。一部タール状。器表面一部剝落。
135	7号溝 東側	(9.6)-7.8-2.0。 口縁部の½を欠く。	薄手。口縁部上半は直線的に延びる。見込は広く平坦。	右ロクロ？→回糸→板目。ロクロ痕弱い。見込に方向不定の弱いナデ。	⑰砂粒やや多い。ベンガラ・雲母散見。⑱やや硬調。⑳白色味のある淡褐色で一様。
136	7号溝 東側	(7.5)-4.5-2.2。 口縁端部をほとんど欠く。	口縁部弱く内彎。底部肉厚。	左ロクロ→回糸無調整。見込に弱いラセン状の弱いロクロ痕。	⑰砂粒やや多い。石英散見。⑱やや軟調。⑳内面黒褐色。外面・断面黒色。
137	7号溝 東隅	(10.0)-4.5-3.5。 口縁部の¾を欠く。	口縁部内彎。端部やや尖る。底部の厚さ一様でない。	左ロクロ→回糸→板目？。ロクロ痕やや強い。見込に強いナデ。	⑰細砂含む。混入物少ない。⑱硬調で焼きしまる。⑳淡褐色。口縁部外面上半黒色味をおびる。
138	7号溝 東隅	7.1-5.0-1.9。完形。	底部肉厚。口縁部のV字状切れ込みは焼成後。	右ロクロ→回糸無調整。見込のロクロ痕は同心円状。	⑰砂粒・輝石・ベンガラ・石英を含む。⑱硬調で焼きしまる。⑳淡褐色で一様。
139	7号溝 東隅	(12.8)-5.7-3.3。 口縁部½、底部¾残存。	口縁部はほぼ直線的に開き、端部で弱く内傾する。見込狭い。	右ロクロ→板目。見込縁辺にアテ。中央に一方向ナデ。	⑰砂粒多くザラつく。輝石・ベンガラ散見。⑱やや硬調。⑳淡橙褐色。断面白色味強い。㉑口縁部内面に薄くスス付着。
140	7号溝 東隅	(11.8) - (5.3) -3.1～3.7。口縁½、底部¾残存。	口縁部ほぼ直線的に開き、ロクロ痕の凹凸強い。見込平坦。	右ロクロ→回糸無調整。見込にごく弱いナデ。口縁部でロクロ痕強い。	⑰細砂多い。輝石散見。⑱やや硬調。⑳淡褐色で断面まで一様。㉑底部中心に器表面の磨耗すすむ。
141	7号溝	(11.6)-6.2-2.4。 口縁部の½を欠く。	口縁部上半わずかに内彎。口径に比べて、きわめて器高低い。	右ロクロ→回糸→板目。見込のナデは弱く不規則。ロクロ痕弱い。	⑰砂粒きわめて多い。石英やや目立つ。器表面ザラつく。⑱やや硬調。⑳外面淡褐色、内面暗褐色。
142	8号溝 西側	(9.9) - (6.2) -3.0。⅙破片。	口縁部は部厚く、やや内彎する。底部薄い。	右ロクロ→回糸無調整。見込に同心円状のロクロ痕。	⑰砂粒・パミス・輝石を含む。⑱やや硬調。⑳橙色味の淡褐色で内外面一様。
143	8号溝 西側	(8.0) - (3.8) -2.4。⅓個体。	薄手。口縁端部内傾。口縁下半内面に稜。	右ロクロ→回糸→無調整。ロクロ痕弱い。	⑰砂粒やや多、輝石・パミス散見。やや粗い。⑱やや硬調酸化焔。⑳淡褐色一様。
144	8号溝 西側	12.2-6.6-2.7。 口縁部の¼を欠く。	口縁部はほぼ直線的に開くが、端部で若干内傾。歪みあり。	左ロクロ→回糸→無調整。見込に同心円状のロクロ痕。	⑰夾雑物多く粗悪。⑱二次火熱を受け脆弱化。⑳内面黒褐色。外面暗褐色基調だが一様でない。㉑内面剝落すすむ。
145	8号溝 西側	(8.0) - (4.0) -2.0。½個体。	口縁部は直線的に開き、端部は尖る。	左ロクロ？→切り離し不明→板目（ゴザ状）。見込にナデ。	⑰⑱⑳115に類似する。
146	8号溝 西側	(12.0)-6.0-3.4。 ½個体。	口縁部は直線的に開く。見込は平坦。	右ロクロ→回糸→無調整。ロクロ痕はやや強く、渦巻状に続く。	⑰砂粒やや多い。輝石・ベンガラ散見。やや粗い。⑱硬調酸化焔で焼きしまる。⑳淡橙褐色でほぼ一様。
147	8号溝 西側	(10.8)-5.0-2.8。	口縁部上半で若干内彎。見込に凹凸あり。	右ロクロ→切り離し不明→板目（ゴザ状）。見込中央に強いナデ3回。	⑰砂粒やや多、輝石・パミス・ベンガラなどの混入目立つ。やや粗い。⑱やや硬調の酸化焔。⑳淡褐色ほぼ一様。

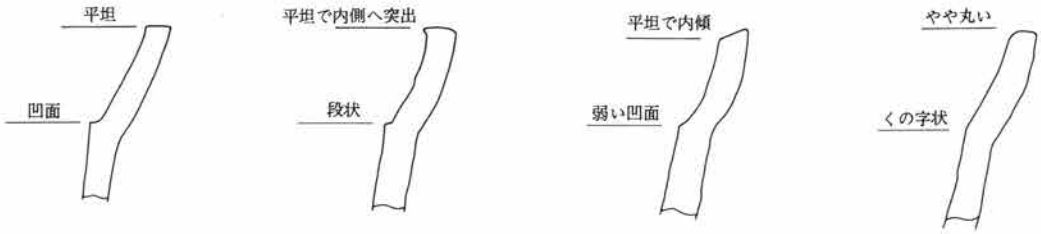
No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
148	8号溝 西側	(12.0)-6.4-3.2。口縁部の⅔を欠く。	口縁部は部厚く、ほぼ直線的に開く。見込中央が窪む。	右ロクロ→回糸→板目（中央のみ）。見込にやや強いナデ。	⑭砂粒・輝石やや多。石英散見。やや粗い。㊧やや硬調の酸化焔。㊨淡褐色ほぼ一様。
149	8号溝 西側	(11.0) - (6.6)-3.0。口縁の⅓、底部の⅔を欠く。	口縁部は若干内彎する。見込広い。	左ロクロ→回糸。見込に弱いナデ。ロクロ痕弱い。	⑭細砂やや多い。ベンガラ目立つ。やや粗い。㊧やや硬調の酸化焔。㊩口縁端部内側のみ磨耗。
150	8号溝 東側	6.0-3.5-1.9。口縁の⅓、底部の⅔を欠く。	口縁部は強く内彎する。口縁部は波状に歪み、上面観は隅円三角形。	右ロクロ→回糸→強い板目。ロクロ痕きわめて弱い。見込に弱いナデ。	⑭砂粒・輝石散見。緻密。㊧強く焼きしまる。還元焔の可能性。㊨内面橙白味、外面白色味強い。
151	8号溝 東側	(12.8) - (6.4)-3.2。½個体。	口縁部上半内彎。端部は立つ。見込縁辺の押さえ強い。	左ロクロ→回糸→板目（片寄る）。見込に方向不定のナデ。ロクロ痕やや強い。	⑭砂粒等の夾雑物多く粗悪。㊧酸化焔。しまり欠く。㊨黄色味の褐色。㊩内面を中心に器表にヒビが多い。
152	8号溝 東側	(11.2)-5.0-2.6。口縁部上半¾を欠く。	65と類似するが、若干大きく、内面に小さな稜を持つ。	65に同巧。見込のナデは不明瞭。	⑭㊧㊨65とほぼ同じ。砂粒の混入が若干多い。
153	8号溝 東側	(10.8) - (5.6)-3.1。図示部の⅙。	口縁部上半若干内彎。端部は外方へやや肥厚する。	左ロクロ→回糸。ロクロ痕やや強い。	⑭砂粒・輝石を含む。㊧やや軟調。しまり欠く。㊨淡褐色で内外面一様。
154	8号溝	(6.7)-4.1-2.3。口縁端部をほとんど欠く。	口縁端部内傾。口縁部やや歪む。	左ロクロ→回糸。見込に強いナデ。ロクロ痕やや弱い。	⑭砂粒やや多い。㊧やや軟調。㊨白色味の強い淡褐色。底部と断面は黒褐色。㊩器表面の一部が大きく剝落する。
155	8号溝	(11.5) - (6.2)-3.0。⅓破片。	口縁部やや内彎。全体に部厚い。	左ロクロの底部に雑なナデで切り離し痕不明。	⑭細砂を含む。ベンガラ散見。㊧硬調で焼きしまる。橙味の淡褐色で内外面一様。
156	10号溝	11.2-6.4-3.5。口縁部上半の⅔を欠く。	口縁部上半は外反気味に開き、端部は若干肥厚する。底部厚い。	左ロクロ→回糸→板目(弱い)。見込に弱いナデ。底部に粘土粒付着する。	⑭砂粒やや多い。輝石・雲母・ベンガラ散見。㊧やや軟調。㊨赤褐色。底部付近はやや淡い。
157	14号溝	- (5.4) -。図示部の⅓残存。	底部厚い。見込縁辺の押さえ強く、リング状の凸部ができる。	左ロクロ？→回糸→板目。見込中央に強いナデ。	⑭砂粒・輝石やや多い。器表面ガサつく。㊧硬調で強く焼きしまる。㊨白色味の強い淡褐色。一部赤色味をおびる。
158	14号溝	(6.4)-　。図示部の½残存。	見込は広く平坦。	右ロクロ→回糸。見込に一方向のナデ。底部に若干粘土粒付着。	⑭砂粒やや多い。輝石散見。㊧硬調で焼きしまる。㊨淡褐色で一様。
159	15号溝	(13.0)-6.5-2.8。口縁部の½を欠く。	口縁部は直線的に開き端部内面は外反気味。全体に部厚い。	左ロクロ→回糸→板目。見込に一方向の強く丁寧なナデ。ロクロ痕弱い。	⑭粗砂の混入多い。輝石・石英・ベンガラ散見。㊧やや硬調。㊨橙色味の淡褐色。
160	15号溝	11.0-6.2-2.8 ～3.0。⅔個体。	口縁部は直線的に開く。端部やや肥厚。	左ロクロ→回糸→板目(弱い)。底部に粘土粒付着。見込のナデは弧状。	⑭ボソボソした粘土。砂粒やや多い。㊧やや硬調。㊨白色味の強い淡褐色で一様。
161	16号溝	11.2-4.6-2.9 ～3.2。完形。	口縁部上半内彎。見込に狭く平坦。口縁部若干歪む。	左ロクロ→回糸→板目(弱い)。見込に方向不定の軽いナデ。	⑭砂粒やや多い。金雲母散見。㊧硬調で焼きしまる。㊨白色味の強い淡褐色で一様。
162	17号溝	(11.6)-5.2-3.2。口縁部上半の½を欠く。	口縁部上半内彎。内面やや平滑。歪み大きい。	右ロクロ→回糸→雑なナデ？見込にやや強いナデ。ロクロ痕弱い。	⑭細砂やや多い。輝石散見。㊧やや硬調。㊨橙色味の淡褐色でほぼ一様。

No.	出土 遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備考
163	17号溝	(11.8)-5.7-3.4。口縁部の⅔を欠く。	口縁部若干外反。	右ロクロ→回糸→板目（幅広で不規則）。見込に弱い不規則なナデ。	⑯砂粒やや多。ベンガラ目立つ。やや粗い。⑱やや軟調の酸化焔。⑮赤味の橙褐色で断面まで一様。
164	17号溝	-5.5- 。口縁上半の⅞を欠く。	口縁部上半内彎。見込は平坦。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状で全面）。見込に一方向のナデ4回。	⑯砂粒やや多、輝石・石英散見。やや粗い。⑱硬調の酸化焔。⑮淡褐色で断面まで一様。
165	21号溝	-5.0- 。口縁部の¾を欠く。	口縁部は開き気味に立ち上がる。端部不明。	ロクロ方向・切り離し不明→板目（ゴザ状）。見込に円弧を描くナデ。	⑯輝石・石英・ベンガラ散見。砂粒少なくやや緻密。⑱やや硬調。還元焔の可能性。⑮白色の淡褐色。外面に灰味おびる。
166	21号溝	11.1-6.1-3.0。完形。	口縁端部若干内傾。見込の凹凸強い。口縁部片側折れるように歪む。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状で一部）。底部に粘土付着。見込に強い雑なナデ。	⑯砂粒やや多い。やや粗い。⑱硬調酸化焔で焼きしまる。⑮橙色味の淡褐色。黒褐色の斑状色ムラが内外にある。
167	21号溝	(10.2) - (4.8) -2.6。⅓個体。	口縁部は部厚く、開き気味。端部若干内傾し、外側に弱い稜あり。	右ロクロ→回糸→無調整。ロクロ痕は内面でやや強い。	⑯砂粒多い。石英・パミス目立つ。粗い。⑱やや硬調の酸化焔。⑮黄色味の淡褐色。内面若干赤色味をおびる。
168	21号溝	(10.5)-6.0-2.9。½個体。	口縁部上半内彎。見込は平坦。	左ロクロ→回糸→無調整（拓本の沈線は傷）。ロクロ痕強く鋭い擦痕が残る。	⑯砂粒多い。ベンガラ目立つ。粗い。⑱硬調の酸化焔。⑮淡褐色。灰褐色のムラ等、一様でない。
169	Q-11 グリッド	(11.5)-4.2-3.2。口縁部上半の½を欠く。	口縁部はほぼ直線的に開く。底部は小さい。	右ロクロ→回糸→板目（ゴザ状）。ロクロ痕強く、ラセン状に続く。	⑯砂粒多い。輝石目立つ。やや粗い。⑱やや硬調の酸化焔。⑮橙褐色で一様。⑲口縁端部の磨耗すすむ。
170	A'-13 グリッド	10.2-4.8-3.0。完形。	口縁部は直線的に開く。底部縁辺に丸味あり。	左ロクロ？→切り離し不明。→板目？見込に一方向のナデ。	⑯砂粒混入多く粗悪。⑱強く焼きしまり、還元焔の可能性。⑮淡褐色～灰褐色。一様でない。⑲全体に磨耗すすむ。
171	表採	(11.5)-6.5-3.1。口縁上半の½を欠く。	口縁部は部厚く、直線的に開く。見込は広く平坦。	左ロクロ→回糸→板目。（ゴザ状）。底部に粘土付着。見込全体に一方向丁寧なナデ。	⑯砂粒やや多、輝石・ベンガラ散見。やや粗い。⑱やや硬調の酸化焔。⑮淡褐色一様。⑲口縁端部の割口上にスス付着。
172	表採	(10.8)-2.3-3.8。口縁端部の½を欠く。	口縁部は部厚く、端部は面を作る。見込は鋭く窪む。	右ロクロ？→切り離し不明。底部不規則なナデ。見込に強いナデ。	⑯ベンガラやや多い。やや緻密。白色粘土を縞状に押込む。⑱酸化焔。強い焼きしまり。⑮橙褐色。外面は白色味強い。
173	表採	(9.9)-4.4-2.9。口縁部上半の½を欠く。	口縁部上半弱く内彎。見込狭い。底部不安定。	左ロクロ→回糸→板目？底部やや弱いナデ。ロクロ痕内面でやや強い。	⑯砂粒やや多い。輝石目立つ。⑱硬調だがややしまり欠く。⑮白色味の強い淡褐色。底部黒色味をおびる。
174	表採	11.9-6.2-3.0。口縁部上半の⅓を欠く。	口縁部上半弱く外反。見込・底部平坦。	左ロクロ→回糸無調整。見込は弧状の不規則な軽いナデ。	⑯砂粒を若干含む。緻密。⑱やや軟調。⑮赤褐色で一様。⑳外面に墨書。「三新」？
175	表採	7.7-4.2-2.2。ほぼ完形。	口縁端部強く内傾し、外面に稜。口縁部に焼成後のV字形切り込み。	左ロクロ→回糸→板目。見込にやや弱いナデ。ロクロ痕も弱い。	⑯砂粒やや多い。輝石散見。粗い。⑱やや硬調。⑮淡褐色ほぼ一様。⑲口縁端部に燈芯状スス付着。器表面の磨耗著しい。
176	表採	11.9-5.5-3.2。口縁部の⅓を欠く。	口縁部上半内彎。端部若干肥厚。部厚く重量感がある。	左ロクロ→回糸→板目（ゴザ状）。見込にやや強いナデ。ロクロ痕強い。	⑯砂粒・ベンガラ・輝石を含む。⑱やや硬調。⑮橙色味の淡褐色で一様。
177	表採	-5.5-	見込に凹凸多く、中央と縁辺が窪む。厚手で重量感あり。	右ロクロ→回糸→板目（不規則）。見込中央にナデ。ロクロ痕は内面でラセン状。	⑯砂粒・輝石を含む。やや大粒のベンガラ目立つ。⑱硬調だがややしまり欠く。⑮淡褐色で断面まで一様。

3　内耳土器　（第38～41，図版27～29）

内耳土器は、かわらけや石臼に次いで数多く出土した遺物である。煮沸形態土器の出土は、本遺跡の居住域としての性格を示唆するもので、検出される遺構は溝と井戸に集中し、土壙出土例はごく少ない。

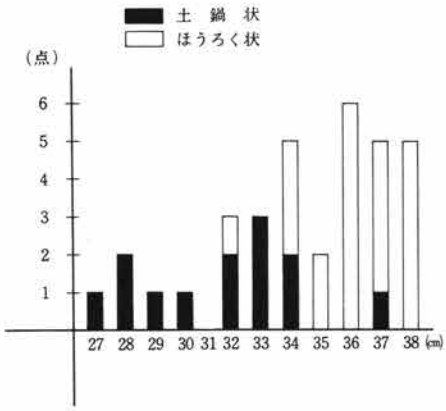
内耳土器には土鍋状のものとほうろく状のものがある。観察の視点としては口縁部形態について下表のような定義付けを行った。特に、口縁部と体部を画す内面の稜には“内稜”と呼称した。



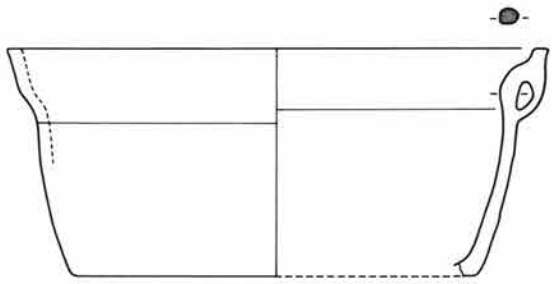
内稜がくの字状の土器は、土鍋にのみ認められた。段を有するものは圧倒的にほうろくに多い。底部外面には細かなヒビの入ったものが多いが、このヒビを“ちぢれ目”、ちぢれ目のある底部を“ちぢれ底”と呼称する。また、砂粒の付着した底部を“砂底”と呼称したが、これは陶芸用語の砂底と同一のものではない。幅広の板目圧痕を有するものもあったが、これはちぢれ目と重複する。

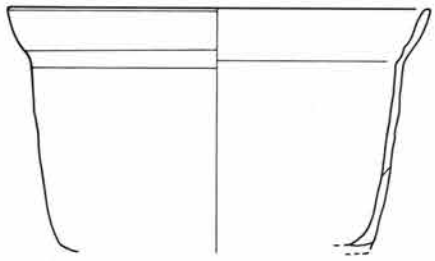
内耳部分は、つり下げるための機能と考えられており、本遺跡出土の内耳土器も、耳を欠失したり、耳からこわれたものが大半である。反面、耳の側面の磨耗はきわめて少なかった。耳の使用は、運搬時等、ごく限られたものではなかろうか。特に土鍋は重量があり、常時この耳に全重量をかけたとは考えられない。

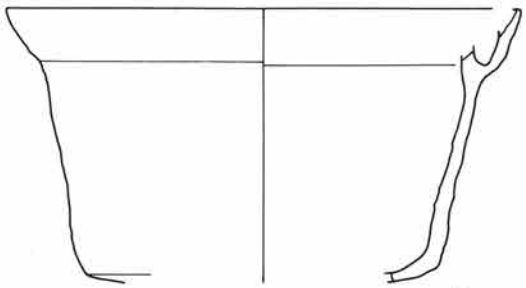
内耳土器の大きさについて、口径の分布を示したものが右表である。復元値をもとにしたものが大半であり、歪みもあり、誤差もあるが、ほうろくの方が土鍋より若干大きくなることは明確である。他方、口径にバラつきのあることは、企画があまり厳格でないことも示している。ほうろくは大むね一尺二寸となっている。土鍋の平均値はほぼ一尺となる。

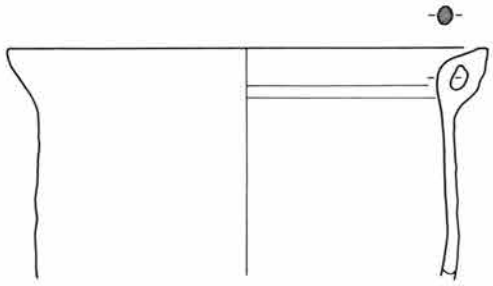


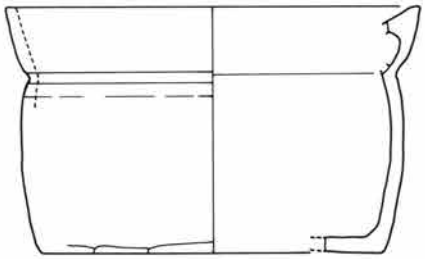
成形の特徴としては、明らかなロクロ成形の土器は一点もなく、土鍋には粘土紐を積んだ痕跡のあるものが多かった。体部外面に、内面の丁寧なナデに対応するナデの痕跡が認められない。平底の内耳土器見込部には細かな凹凸も認められないほど平坦である。口縁端部の平坦さや、段状となる内稜は、アテ具の痕跡と考えられる。これらのことから内耳土器は型造り成形された土器の可能性が高い。外面体部下端にヘラ削りを施す土器は14・17・22・30のほうろく４点と７・９の土鍋である。ほうろくは古式の様相が顕著な17と22が含まれることから、このヘラ削りを古手の目安と置くことは妥当と考えられ、14・30の特徴より、口縁端部が丸いこと、内稜が段状とならないこと、器高が高いことが、古手のほうろくの指標となろう。

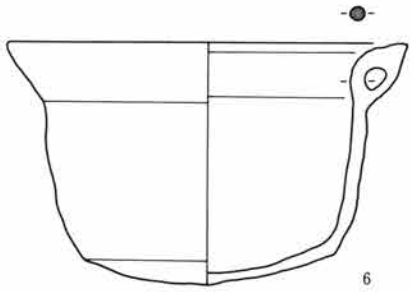

1


2

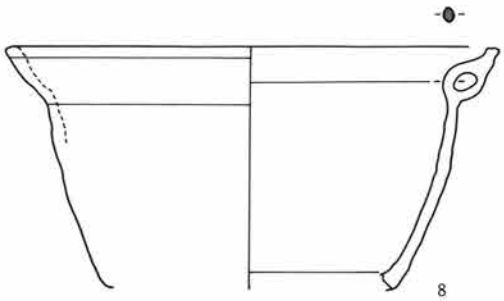

3


4

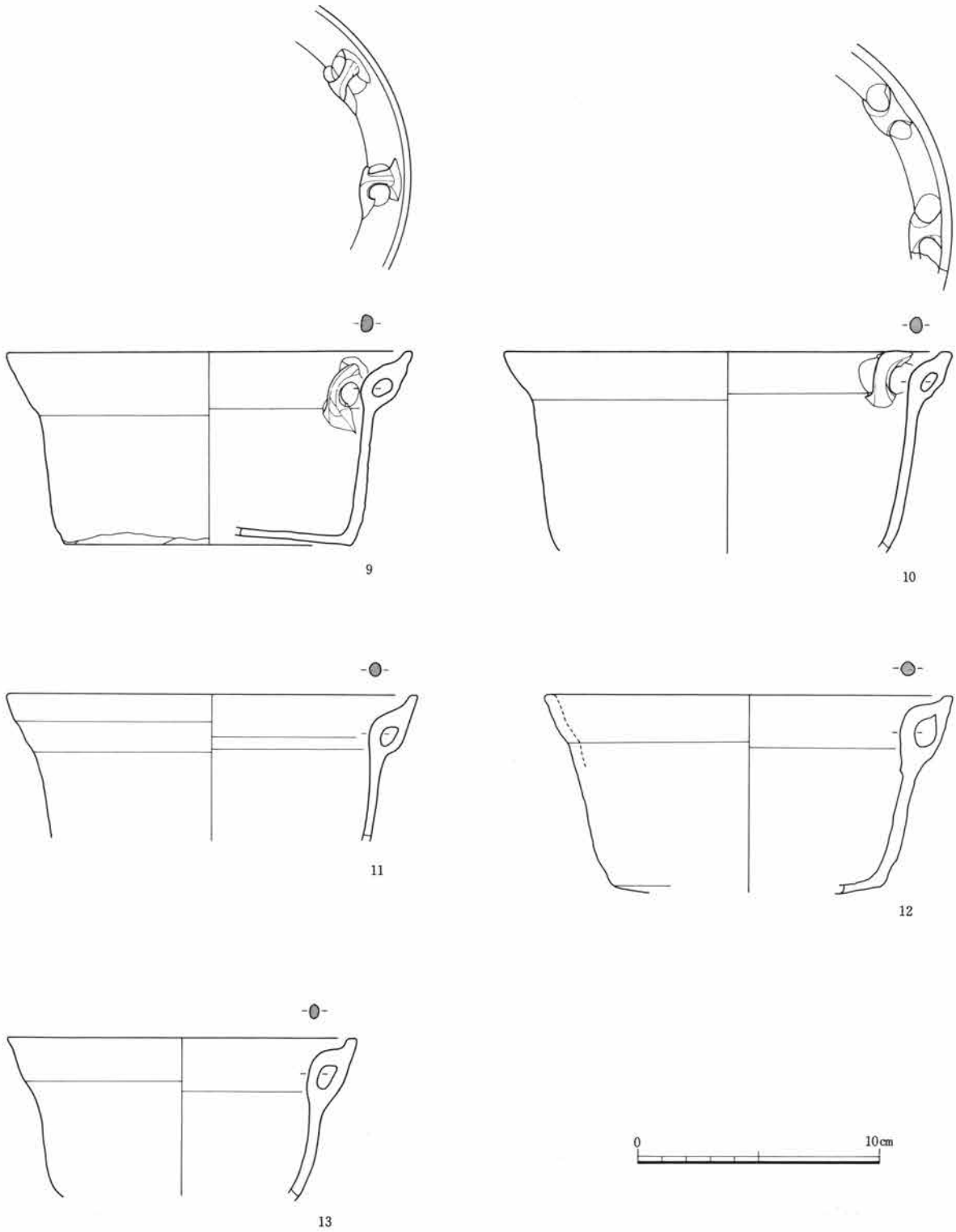

5


6

7

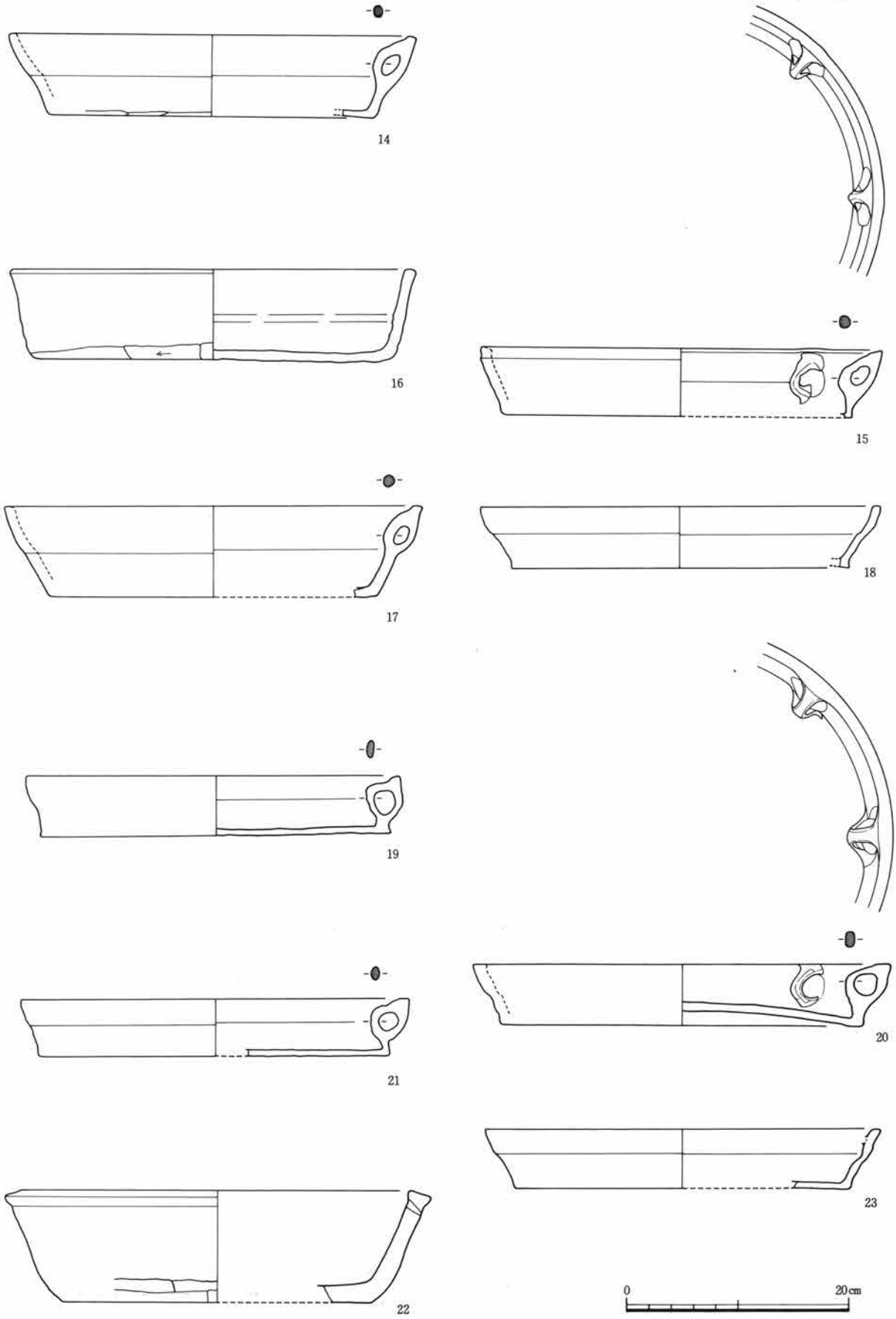

8

第38図　土　　鍋 (1)

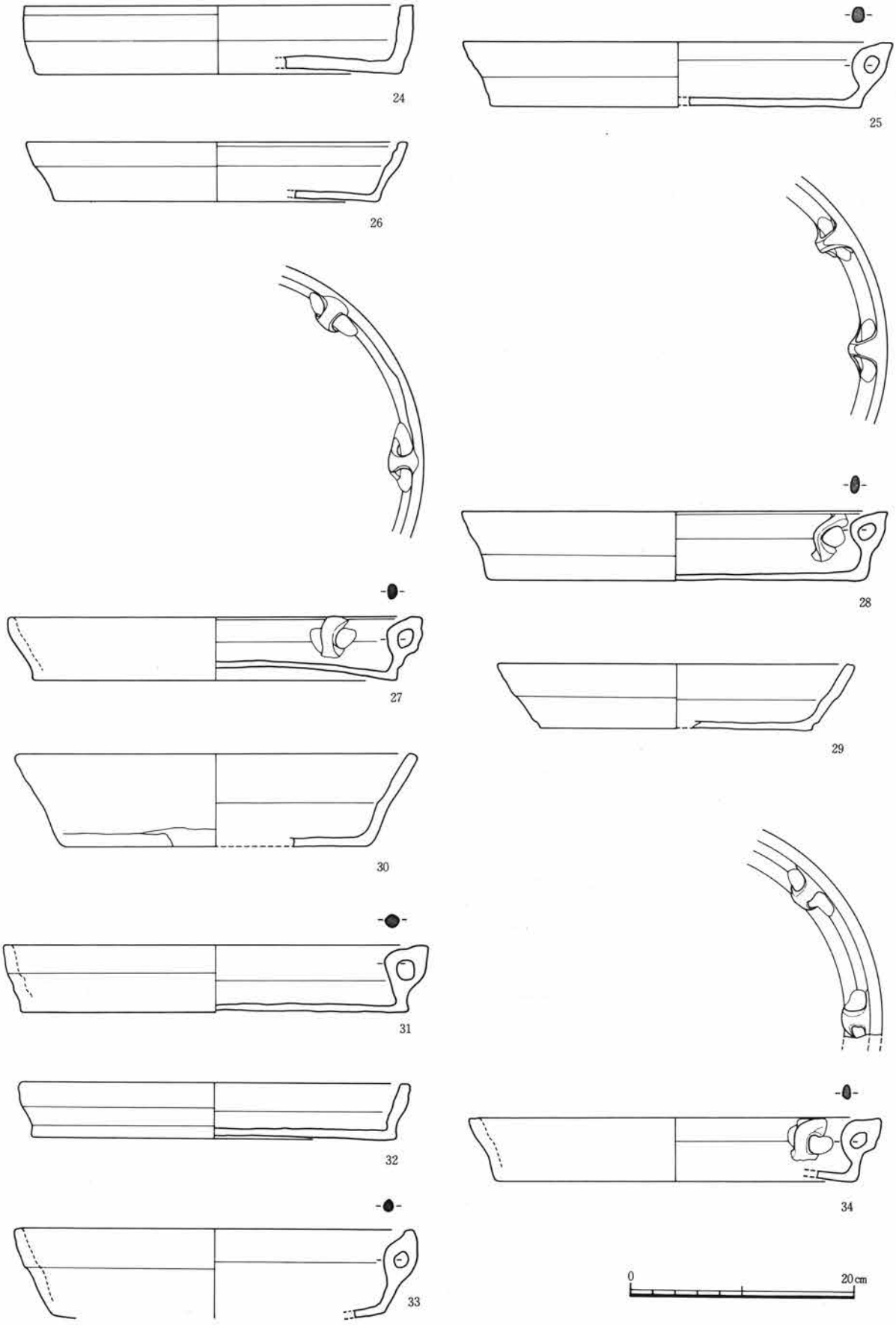


第39図　土　　鍋 (2)

3　内耳土器



第40図　ほ　う　ろ　く(1)



第41図　ほ　う　ろ　く(2)

表7　内耳土器一覧

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
1	24号井戸 図示部の¼ 破片。	㊐(29.8) ㊝(17.0) ㊟16.4	口縁端部平坦。内稜はくの字状。耳は一ヶ残存し、丁寧に装着。	断面体部下端に接合痕あり。外面体部に輪積み状の凹凸。内面は弧状のナデの擦痕が残る。	㊫砂粒・ベンガラ等混入物多く粗悪。気泡含む。㊫しまり欠く。㊫黒褐色。内面淡く橙色味をおびる。㊫外面にスス付着。体部内面は剝落すすむ。
2	39号井戸 図示部の⅓、 下端は細片。	㊐(28.2)	口縁端部やや丸い。内稜はごく弱い凹面で、外側はナデによる明瞭な凹面。	体部下端の段面に明瞭な接合痕が残る。内面横位のナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	㊫砂粒含む。ベンガラ・細礫散見。㊫やや硬調。㊫黒褐色。内面やや淡く。断面は橙色味。㊫体部外面にスス強く付着。
3	44号井戸 口縁部の⅓ と底部を欠 く。	㊐34.2	口縁端部平坦。内稜は凹面。底部は緩い丸底。耳は一ヶ残存。口縁部の窪みより3ヶ想定。	外面に輪積み状の凹凸。底部は遺存悪いがちぢれ目あり。内面横位ナデで平滑に仕上げる。	㊫砂粒含みややザラつく。ベンガラ・輝石散見。㊫やや硬調。㊫外面黒褐色。内面灰褐色～橙褐色。断面黒色。㊫底部二次火熱で剝落著しい。外面スス付着。見込み磨耗。
4	52号井戸 図示部の⅓ 破片。	㊐(31.8)	口縁端部平坦。内稜は弱い凹面。外面に輪積み状の凹凸。耳は一ヶ残存。	口縁部は横位ナデ。内面平滑。耳の装着はやや雑で、接合痕を残す。	㊫砂粒含む。輝石散見。気泡あり。㊫やや硬調で焼きしまる。㊫灰褐色。内面は淡い。断面中央灰黒色。㊫外面下半にスス付着。
5	52号井戸 口縁部⅓、 体部～底部 ¼破片。	㊐(27.5) ㊝(22.3) ㊟16.1	口縁部平坦、やや内傾。内稜はくの字状で、外面はナデにより凹面ができる。内面体部下端が厚い。	底部若干ちぢれ目あり。体部は丁寧な横位ナデで平滑。体部下端に弱い手持ちヘラ削り。	㊫砂粒多くややザラつく。金雲母を含む。㊫やや軟調。㊫内面・断面灰黒色。外面黒褐色。底部は橙色味をおびる。㊫底部に二次火熱を受ける。
6	56号井戸 完形。	㊐26.5 ㊝16.6 ㊟16.1	口縁端部平坦でやや内傾。内稜はくの字状。耳は2ヶ。内面平滑。底部は丸底。	底部弱いちぢれ目。中央に板目状の凹凸あり。体部外面は輪積み状の強い凹凸。見込は渦巻状のナデ。	㊫砂粒やや多い。ベンガラ・石英散見。㊫やや硬調。㊫黒褐色。内面は淡い。断面の橙色味強い。㊫底部に二次火熱。体部外面にスス付着。耳は側面が若干磨耗。
7	57号井戸 図示部の⅓ 破片。	㊐32.3 ㊝23.4 ㊟32.2	口縁端部丸く、外方へ若干肥厚。内稜はくの字状で、外面に強いナデの稜がある。耳は一ヶ残存。	底部に平行の凹凸があり。板目の可能性。体部外面輪積み状の凹凸で、下端に叩き目。内面は横位のナデ。	㊫砂粒多く粗い。ベンガラ目立つ。石英散見。㊫硬調。㊫淡褐色。外面は黒褐色のムラ多い。断面灰褐色。㊫底部に強い二次火熱。体部外面スス付着。内面下端磨耗。
8	3号溝 ⅓個体。	㊐(32.8)	口縁端部平坦で内外両側へ突出する。内稜は凹面。底部は丸味を持つと思われる。耳は一ヶ残存。	輪積み？体部外面に凹凸あり。内面はナデで平滑に仕上げるが、擦痕は弧状でロクロは不使用。	㊫砂粒含むがやや緻密。輝石散見。㊫硬調に焼きしまる。㊫内面灰色。外面灰褐色。断面白色味強く、中央に灰黒色。㊫外面に部分的にスス付着。
9	7号溝 底部～体部 下半の⅓を 欠く。	㊐33.3 ㊝23.6 ㊟15.6	口縁端部やや丸い。内稜は弱い凹面。三耳が完存。耳は曲って装着される。外面のくびれはダレる。	底部は砂が付着し、ちぢれ目なし。体部外面と底部は輪積み状の弱い凹凸。見込は同心円状のナデ。	㊫砂粒多くザラつき粗悪。細礫散見。㊫硬調だがややしまり欠く。㊫外面黒褐色。内面淡い。断面黒色。㊫二次火熱により底部中央脆弱化。内面体部に擦痕多い。
10	7号溝 図示部の⅓ 破片。	㊐(36.8)	口縁端部やや丸く、内側へ突出する。内稜は緩い段状。丁寧に装着した耳が2ヶ残存。	内面に左回転のナデ痕。擦痕は不規則で、ロクロ使用とは思えないが、平滑に仕上げる。	㊫砂粒多くザラつく。ベンガラ・石英も目立つ。㊫やや硬調。㊫外面黄色味おびた淡褐色。内面断面黒褐色。㊫外面下半に二次火熱を受ける。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
11	7号溝 図示部の¼ 破片。	㊐(33.8)	口縁端部平坦で内側へ若干突出する。内稜は凹面。小さな耳が一ヶ残存。	口縁部に横位ナデ。体部内面はやや不規則。耳は丁寧に装着される。体部は平滑。	㊟砂粒やや多く、雲母・ベンガラ散見。㊧やや軟調。㊥暗褐色。断面黒褐色。㊦外面に若干スス付着。耳の外側が著しく磨耗。
12	8号溝 ⅔個体。	㊐(33.4)	口縁端部平坦。内稜は緩い段状。太い耳が1ヶ残存。内面の窪みより3ヶ想定。底部薄い。	底部ちぢれ目。体部に左回転の雑なナデ。見込のナデは同心円状で強い。体部外面に輪積み痕状の凹凸あり。	㊟砂粒やや多く、輝石・ベンガラ散見。㊧やや硬調。㊥内面灰白色。外面淡褐色～暗褐色。断面中央黒色。㊦体部外面下半にスス付着。
13	21号溝 体部以上の ⅔個体。	㊐28.7	口縁端部は平坦でやや外へ開くが一部丸い。内稜は凹面。耳は一ヶ所残存。	外面に左回転の強いナデ痕。耳下の指頭押圧はきわめて弱い。	㊟砂粒やや多くザラつく。輝石・ベンガラ散見。㊧やや硬調。㊥外面黒褐色。内面灰褐色。㊦外面に若干スス付着。
14	24号井戸 図示部の⅛ 破片。	㊐(36.5) ㊀(29.2) ㊁7.3	口縁端部やや丸い。内稜は弱い凹面。耳は一ヶ残存。指頭の窪みは小さく耳は裾が広い。	底部ちぢれ目？細かな凹凸の上にごく雑なナデ。耳の装着は丁寧。口縁部上半に横位ナデ、外面下端手持ちヘラ削り。	㊟砂粒含むがやや緻密。ベンガラ散見。㊧やや硬調。㊥外面黒褐色。内面暗灰褐色。断面黒色。㊦口縁外端にスス付着。耳の磨耗は認められない。
15	25号井戸 図示部の⅓ 破片。	㊐(35.8) ㊀(31.2) ㊁6.0	口縁端部平坦で内傾し、内側へ突出。内稜はごく弱い凹面。耳は2ヶ残存。	底部はちぢれ目と思われる。口縁部外面のナデは上端のみ。耳の装着は雑で接合痕が残る。	㊟砂粒・ベンガラ多い。輝石散見。㊧やや軟調。㊥内面淡灰褐色、外面黒褐色。断面の中央は黒色。㊦耳の側面は磨耗。
16	29号井戸 口縁部⅙、 底部½残存。	㊐(36.3) ㊀32.2 ㊁8.0	口縁端部やや丸い。口縁部内面に稜を持たず、外面は若干開く。底部はやや上げ底状。	口縁部内面に右方向の回転利用ナデ痕があり、中位で凹線状の部分が巡る。体部下端に弱い手持ちヘラ削り。	㊟砂粒・石英・ベンガラを含む。内面は滑らかで化粧粘土使用の可能性。㊧やや軟調でしまり欠く。㊥外面黒褐色。底部橙色味が強い。内面は淡く、断面は灰色味。㊦底部に二次火熱を受ける。見込は全体に磨耗。
17	42号井戸 図示部の⅛ 破片。	㊐(37.5) ㊀(29.5) ㊁8.1	口縁端部平坦。内稜はごく弱い段状。耳は一ヶ残存し、小型で裾が広い。	底部縁辺に弱い手持ちヘラ削りを施し、小さな稜ができる。口縁外面に左回転利用のナデ。耳の装着は丁寧。	㊟砂粒を含む。石英散見。㊧やや軟調。㊥内面淡灰褐色。外面黒褐色。断面の外側は橙色味をおびる。㊦耳の側面が若干磨耗する。外面一部にスス付着。
18	43号井戸 図示部の⅙ 破片。	㊐(35.8) ㊀(30.3) ㊁5.5	口縁端部平坦で、内側へ若干突出する。内稜は段状。耳は残存しない。	底部ちぢれ目？口縁部外面に左回転ナデ。	㊟砂粒やや多くベンガラ目立つ。㊧硬調に焼きしまる。㊥内面灰色。外面黒褐色。断面黒色。㊦外面にススやや多く付着。
19	44号井戸	㊐33.7 ㊀31.6 ㊁5.5	口縁部平坦。内稜は段状だが均一でない。底部には小さな波状の歪みが多い。耳は一ヶ残存。	底部ちぢれ目で、板目状の細かな窪みが並ぶ。口縁部左回転利用のナデ痕。	㊟砂粒を若干含む。内面は稜に緻密で化粧粘土使用の可能性。㊧軟調でややしまり欠く。㊥外面黒褐色。底部赤色味おびる。内面灰褐色で見込は白色味強い。㊦底部二次火熱。
20	46号井戸 完形。	㊐37.3 ㊀32.5 ㊁5.4	口縁端部平坦で内側へ若干突出する。内稜は凹面耳は3ヶ残存。底部は大きく上げ底状。	底部ちぢれ目。口縁部外面に左回転ナデ痕。耳の装着は丁寧。	㊟砂粒多くザラつく。輝石・ベンガラ散見。㊧硬調。㊥内面淡褐色。外面黒褐色。底部橙褐色。断面中央黒色。㊦底部二次火熱。口縁部外面にスス付着。耳は側面磨耗。
21	49井戸 口縁部の½ を欠く。	㊐34.9 ㊀31.5 ㊁5.1	口縁端部平坦で内面は突出する。段状の内稜。歪み大きい。耳は一ヶ残存。口縁の窪みより三ヶ想定できる。	底部ちぢれ目、および幅広の板目痕。口縁部は右方向回転利用のナデ痕。	㊟砂粒やや多い。輝石・石英散見。㊧やや軟調。㊥暗褐色。見込は淡く、底部中央は橙色味をおびる。口縁部断面は黒色。㊦底部に二次火熱。口縁外面にスス付着。見込は磨耗著しい。
22	52号井戸 図示部の⅛ 破片。	㊐(38.2) ㊀(27.7) ㊁10.0	口縁端部平坦でやや開き、内外面へ若干突出する。均等に厚手。底部は若干上げ底状と思われる。	底部砂底、細砂付着。内面に右回転利用のナデ。内面に貼付物の剝落痕。口縁部に内面からの穿孔あり、貼付物と重複。体部下端手持ちヘラ削り。	㊟不均質の砂粒を含む。ベンガラ散見。大型品としては緻密。㊧厚手の器肉にムラなく焼きしまる。やや軟調。還元焰の可能性。㊥淡灰黄色。断面黄色味強い。㊦二次火熱は不明。

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
23	55号井戸 図示部の¼ 破片。	⑪(35.5) ㊀(31.0) ㊇5.3	口縁端部平坦。内稜は端正な段状。耳の欠損した痕跡が一つ残存。	底部ちぢれ目。口縁部外面に横位ナデ。下半に指頭状の弱い凹凸。耳下の指頭押圧痕は弱く、外形の歪みは小さい。	㊁砂粒を含む。輝石散見。㊂やや硬調。㊃内面淡灰褐色。外面黒褐色。断面中央黒色。㊄口縁部外面に一部スス付着。口縁部外端の剝落が多い。
24	56号井戸 図示部の⅛ 破片。	⑪(34.4) ㊀(32.5) ㊇6.0	口縁端部は平坦でやや内傾し、外方へ若干突出。内稜は弱い段状。	底部はちぢれ目あり。内面に右方向回転利用のナデ痕。外面は口縁部上端にのみ強いナデ痕。	㊁粗砂を含む。ベンガラやや目立つ。㊂硬調に焼きしまる。㊃淡灰白褐色。底部は橙色味をおびる。断面中央は帯状に灰色を呈す。㊄底部に二次火熱。見込磨耗。
25	62号井戸 口縁部⅔、 底部½残存。	⑪38.2 ㊀33.1 ㊇5.6	口縁端部は平坦でやや内傾。内稜は弱い凹線。耳は小さく貧弱。二ヶ残存。もう一つ付く可能性あり。	底部はちぢれ目。縁辺にナデ様の不規則な擦痕と横位のナデ痕。耳は裾が狭く、接合箇所を丁寧にナデ消す。	㊁砂粒・ベンガラ・金雲母等の混入物多い。㊂やや軟調。㊃外面黒褐色、底部やや淡い。内面淡褐色。㊄底部二次火熱受ける。耳には顕著な磨耗等の痕跡なし。
26	271号土壙 図示部の⅙ 破片。	⑪(33.9) ㊀(29.2) ㊇5.2	口縁端部平坦で内傾し、内側へ弱く突出する。内稜は弱い凹面。底部は若干上げ底状。	底部ちぢれ目。左回転のナデ痕が見込にも同心円状に明瞭に残る。口縁部外面下端に連続した指頭圧痕。	㊁砂粒多くザラつく。輝石・ベンガラ散見。㊂硬調に焼きしまる。㊃黒褐色。見込は淡褐色。断面は橙色味が強い。㊄底部に二次火熱。見込は磨耗し滑らか。
27	3号溝 口縁部⅓、 底部½残存。	⑪(36.9) ㊀32.5 ㊇5.5	口縁端部平坦で内傾し、内側へ突出する。内稜は弱い段状。底部は上げ底状。耳は二ヶ残存。	底部板目と不規則なナデ。口縁部左回転利用のナデ。耳の装着は荒く、外面著しくいびつになる。	㊁砂粒多い。輝石・ベンガラ散見。㊂やや硬調。㊃外面黒褐色で底部中央は橙色味。内面淡褐色で見込は黄色味。口縁部は灰色味をおびる。断面は黒色。㊄耳に磨耗なし。
28	5号溝 口縁部の⅓、 底部の¼を 欠く。	⑪37.8 ㊀34.0 ㊇6.0	口縁端部は平坦、、内側へ強く突出する。耳は小さく、3ヶ完存。内稜は弱い凹面。歪み大きい。	底部にはちぢれ目なく、砂底に近い。口縁部には左回転のナデ痕。耳の装着は弱く、口縁部の指頭状窪みも小さい。	㊁粗砂きわめて多い。石英・長石散見。㊂やや硬調。㊃淡褐色。外面黒褐色で底部中央は橙色味が強い。断面中央黒色。
29	7号溝 図示部の⅒ 破片。	⑪(31.8) ㊀(24.3) ㊇5.7	口縁端部は平坦だが、外側からの強いナデで変形する。内稜は弱い段状。	底部幅広の板目痕。口縁部と底部の境に明瞭な接合痕を残す。口縁部外面に右回転のナデ痕。	㊁砂粒多くザラつく。金雲母・石英散見。㊂やや軟調。㊃外面黒褐色。内面淡褐色。断面一部黒色。㊄底部二次火熱。内面は器面荒れる。
30	7号溝 図示部の⅛ 破片。	⑪(35.7) ㊀(28.0)	口縁端部はやや丸い。内稜は弱い凹面。外面は凹凸多い。	底部は幅広の板目痕。内面全面と口縁部上半に右方向回転利用のナデ痕。外面体部下端にごく弱い手持ちヘラ削り。	㊁砂粒含む。金雲母やや目立つ。㊂やや硬調。㊃黒褐色。底部は茶色味、見込は橙色味をおびる。断面は淡く、中央は帯状に黒色を呈す。㊄底部二次火熱、見込磨耗。
31	8号溝 ½個体。	⑪(37.8) ㊀34.6 ㊇5.9	口縁端部は平坦で内側へやや突出。内稜は段状。底部はちぢれ目。耳は一ヶ残存でやや大きい。	底部ちぢれ目。口縁部に左回転利用のナデ痕で、外面下半には指頭圧痕の弱い窪みが続く。	㊁粗砂やや多く、ザラつく。㊂やや軟調。㊃淡褐色。口縁部外面黒褐色。断面の一部は黒色。㊄見込中央に方向不定の擦痕が多い。底部二次火熱。
32	8号溝 口縁部⅙、 底部⅓残存。	⑪(34.9) ㊀(32.6) ㊇4.9	口縁端部平坦。内稜はごく弱い段。	底部は部分的にちぢれ目。口縁部は左回転のナデ。口縁部下半に接合痕が残る。	㊁砂粒を含む。輝石・ベンガラ散見。㊂やや硬調。㊃淡褐色。一部灰色味をおびる。外面黒褐色。底部は橙色味。㊄見込は若干磨耗。底部二次火熱。
33	21号溝 口縁部¼と 底部の大半 を欠く。	⑪35.6	口縁端部は平坦で開く。内稜は段状。耳は小形で一ヶ残存。指頭状の窪みは深い。三耳が想定。	底部残存部には弱い手持ちヘラ削り痕がある。口縁部に右回転利用のナデ痕。口縁下端に弱く雑なヘラ削り痕。	㊁砂粒多く、ややザラつく。輝石散見。㊂やや硬調で適度に焼きしまる。㊃淡褐色。口縁部外面黒褐色。㊄底部二次火熱。
34	142号土壙 図示部の¼ 破片。	⑪(36.5) ㊀(31.9) ㊇5.6	口縁端部は平坦で内傾。内稜は段状。耳はやや太く、口縁部の指頭状窪みはやや深い。	底部雑なナデ。外面に左回転のナデ痕。耳の装着は雑で、接合痕が明瞭に残り、外面の歪みも大きい。	㊁砂粒多くベンガラも目立つ。㊂硬調で強く焼きしまる。㊃内面淡褐色。見込は橙色味、口縁部は灰色味をおびる。外面黒褐色。㊄口縁部外面に若干スス付着。

4　擂　　鉢　（第42図，図版29図）

本遺跡の生活域としての性格を示唆する遺物であり、内耳土器とならぶ什器である。14点の擂鉢を図示し得た。出土遺構は溝に集中し、井戸からも若干検出する。３号溝を中心とした調査区北西側の方形区画付近に出土例が多い反面、内耳土器等の出土遺物が最も豊富な７・８号溝からの出土はなかった。

14点の擂鉢中、７だけがロクロ成形・施釉の陶器である。胎土はいわゆる「モグサ土」に近く、美濃の製品と思われる。楢崎編年[註1]によれば、口縁部を外面方向に折り返す大窯の段階（16世紀代）の特徴と合致する。口縁上端があまり平坦でなく、大窯Ⅱ～Ⅲの時期、16世紀中葉かやや古い年代観が得られる。

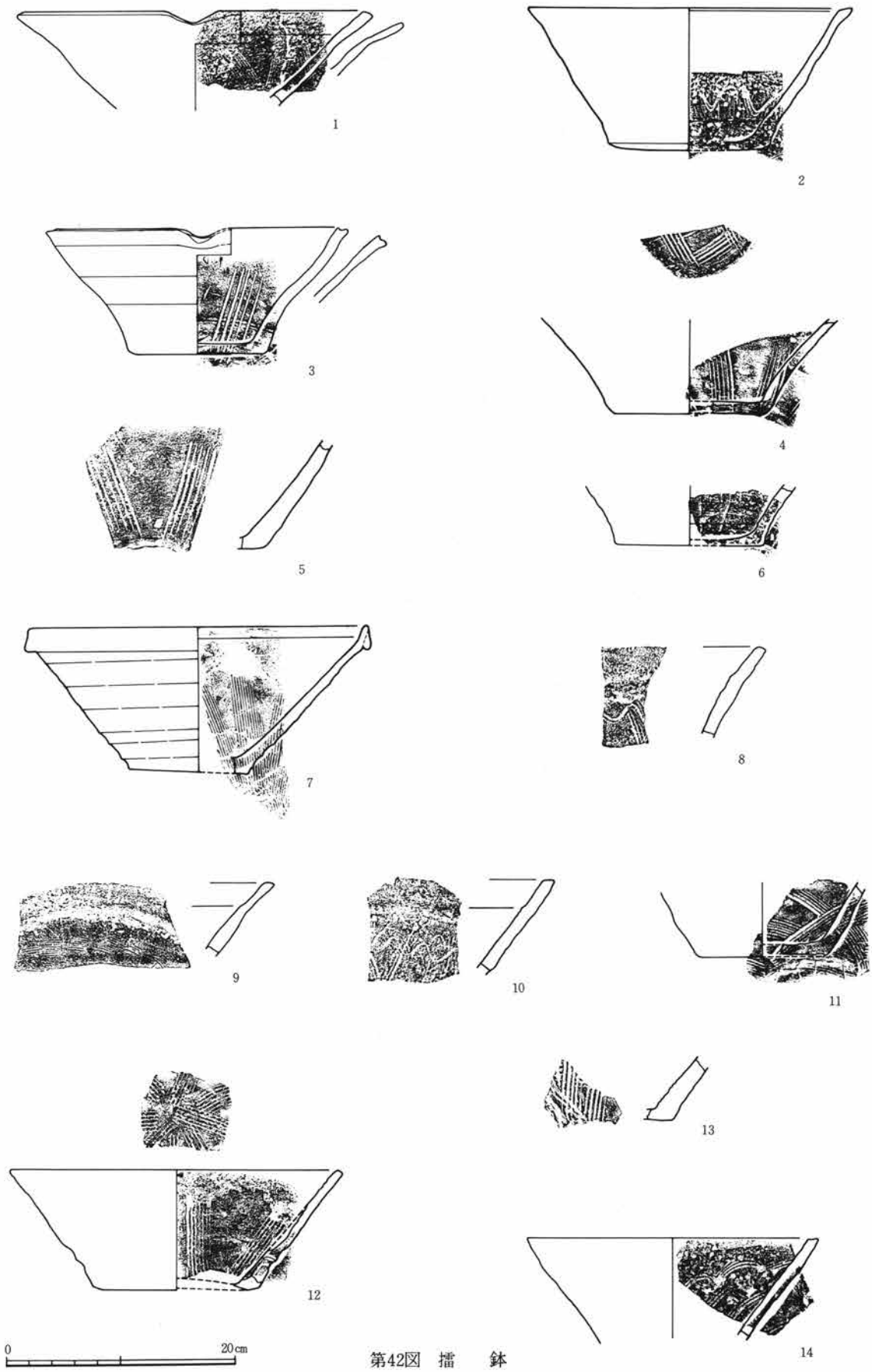
他の13点はロクロ使用の不明確な、無釉の擂鉢である。６・11・14は焼きしまりが強い。他は軟調で、断面が黒色味をおびる特徴は内耳土器と共通である。これら無釉の擂鉢は内耳土器とともに流通した地方の量産品であると思われる。器形や櫛目の特徴から下のような分類が可能である。

器形から見ると、A→底部から口縁部まではほぼ直線的に開くタイプ。５・12が該当する。B→体部中央から外方へ大きく開くタイプ。３・４・６が該当する。なお３の口縁端部にはV字状の強い沈線が巡っており、資料の蓄積があれば細分の大きな視点となると思われる。C→口縁部内面に小さな段があり、端部が平坦なタイプ。８・９・10・14が該当する。２は磨耗がすすみ、不明瞭だがこのタイプのものであろう。櫛目から見ると、放射状となるａ類に３・４・６・12・13がある。見込の櫛目から12のように放射状のａ―１類、４のように格子状のａ―２類とに区分できる。斜格子状となるｂ類に１・８・10・11・14がある。これらは櫛目上端を波状にしている。見込は不明瞭だが、11の例は格子状になるようである。９にはネコ描き風の櫛目があり、これをｃ類とする。

次に、器形と櫛目を合わせて見ると、器形のA・Bは櫛目のｂ、器形のCは櫛目のａ・ｃにそれぞれ対応するようである。

片口は１と３に存在し、９にもあったものと思われる。器形や櫛目に関係なく認められるようである。

註１　楢崎彰一　1980〔文献44〕による。



第42図　擂　　鉢

表8　擂　鉢　一　覧

No.	出土　遺構	計測値(cm)	器形の特徴	製作技法の特徴	備　　考
1	44号井戸 図示部の½ 破片。	⑪(31.0)	口縁端部弱い凹面で外方へ開き、内側へ突出。内面に弱い稜。幅広の片口。	器面は横位ナデ。節目は弱く、7～8本1単位で、残存部で鋸歯状になる。	⑭細礫多く粗悪。輝石・石英散見。⑭やや硬調。⑮外面橙褐色。内面に灰色～黒褐色のムラ。断面灰黒色。⑯器面全体に剥落著しい。
2	46号井戸 ⅓個体。	⑪(30.4) ⑫(12.8) ⑬(11.8)	口縁端部平坦で外方へ若干突出する。磨耗強く内稜不明。底部薄い。	外面に不規則な凹凸があり、輪積みと思われる。櫛目は波状と斜格子状か？	⑭砂粒多くザラつく。輝石散見。⑭やや硬調。⑮外面黒褐色。内面淡褐色で灰色のムラ。断面灰黒色。⑯内面上半著しい剥落。下位は磨耗。
3	54号井戸 口縁部上半 ⅓、下半～ 底部½	⑫(20.1)	口縁端部V字状の凹面で、外方の突出が強い。親指の太さの片口がつく。器面の凹凸少ない。	外面下半はザラザラの面に縦位の擦痕。内面横位ナデで平滑。櫛目は5本1単位で8～9単位。	⑭粗砂やや多い。金雲母・石英散見。⑭やや硬調。軟質陶器に類似。⑮灰色。外面若干黄色味をおびる。断面中央灰褐色。⑯見込～口縁部下半と底部縁辺磨耗。底部中央に若干スス付着。
4	54・61号井戸 口縁部下半 ～底部⅓	⑫(13.0)	器面は内外面とも凹凸あり。見込縁辺やや窪む。	輪積み？櫛目は6本1単位で12単位か。口縁部で放射状。見込は格子状。	⑭細砂・輝石を含むがやや緻密。⑭やや硬調。⑮灰白色。内面は暗い。断面灰黒色。⑯見込縁辺～口縁部下端の磨耗著しい。
5	265号土壙 図示部の⅙ 破片。	⑪(26.3) ⑫12.2 ⑬10.9	外面は細かな凹凸あり。全体に肉厚で重い。	器面は横位の雑なナデ。櫛目は強く6本1単位で7～8単位。	⑭細砂含みベンガラ散見。厚手としては緻密。断面に気泡あり。⑭硬調。⑮淡褐色で断面まで一様。⑯口縁部下端の磨耗が強い。
6	3号溝 図示部の⅓ 破片。	⑫(13.1)	底部きわめて薄い。外面の凹凸やや強い。	輪積み？櫛目は1単位5本以上で斜放射状。底部には若干砂粒が付着。	⑭砂粒・輝石を含む。⑭やや硬調で焼きしまる。⑮白色味の強い淡褐色。断面黒色。⑯内面磨耗強く、見込は殆ど剥落する。
7	10・14号溝 ⅓個体。	⑪(28.0) ⑫(11.1) ⑬(15.8)	口縁部は内側に弱く屈曲し、外側へ折り返す。外面ロクロ痕。内面はナデにより平滑。	右回転ロクロ成形→回糸無調整。櫛目は鋭く12本1単位で放射状。20単位前後になるか？	⑭長石散見。美濃のモグサ土と思われる。⑭硬調。⑮内面鉄釉で暗い鉛色。外面の大半は白橙色で釉の未発色か？⑯口縁部下半が、不均等に磨耗する。
8	3号溝 小片。		口縁端部平坦。内面に稜。外面器面の凹凸強い。	輪積みか？櫛目は10と同一モチーフと思われる。	⑭砂粒含み、細礫散見。⑭硬調。⑮淡褐色。断面は灰色。⑯口縁部内端強く磨耗。
9	3号溝 図示部の⅙ 破片。	⑪(27.0)	口縁部上半外反し、端部丸い。内面にやや強い稜。外面は指頭状の凹みあり。	輪積みか？櫛目は8本1単位で短かい。口縁部外面上位は横位ナデ。下位無調整。	⑭砂粒やや多く輝石も目立つ。⑭やや硬調。⑮淡褐色で内面は黄色味・外面灰色味をおびる。断面灰黒色。⑯内面の剥落著しい。
10	3号溝 図示部の⅛ 破片。	⑪(20.2)	口縁端部平坦。内面に弱い稜があり。外面器面には細かな凹凸がある。	輪積みか？櫛目は1単位6本以上で上端は波状、中位は斜格子状の可能性。	⑭砂粒多い。細礫・ベンガラ散見。⑭硬調で強く焼きしまる。⑮淡褐色で外面に黒色のムラがある。⑯内面は全体に磨耗。剥落する。
11	14号溝 図示部の½ 破片。	⑫11.2	体部外側器面の凹凸多い。底部は大きく剥落する。	輪積みか？内面は雑なナデの後、格子状の櫛目を施す。櫛目は8本1単位。	⑭砂粒多く輝石も目立つ。ベンガラ散見。⑭硬調で焼きしまる。⑮白色味のある淡褐色。断面灰黒色。⑯内面の磨耗少ない。二次火熱うける。
12	23号溝 小片。		底部きわめて薄い。	櫛目は強く、5本1単位の斜格子状。	⑭砂粒含む。ベンガラ・輝石散見。⑭やや硬調。⑮外面淡褐色。内面、断面黒褐色。⑯磨耗弱い。
13	21号溝 ⅔個体。	⑪(28.8) ⑫(15.5) ⑬(10.2)	口縁端部は丸い。外面は帯状凸部と指頭状凹部が著しい。内面も平滑さ欠く。底部接合せず。	輪積み。内面横位の雑なナデ。櫛目は強く7本1単位で8単位の斜放射状。	⑭砂粒多く粗悪。ベンガラ・金雲母・長石散見。⑭やや軟調でしまり欠く。⑮黒褐色。断面灰褐色。⑯口縁部内面上半が帯状に剥落。下半は若干磨耗し、見込の磨耗弱い。口縁上端も磨耗。
14	23号溝	⑪(24.9)	口縁端部は弱い凹面を作る。口縁部内面に小さな稜がある。	外面は方向不定の粗いナデ。櫛目は小さな弧状で、4本1単位。	⑭砂粒多い。輝石目立つ。⑭硬調で焼きしまる。⑮淡褐色。外面はやや暗い。断面黒色。⑯内面の磨耗は少ない。器面全体に凍てハゼ多い。

5 石　臼 （第43～59図，図版30～33）

本遺跡における出土数は総数157個である。これらは径の大きさをはじめとする形態の特徴から茶臼と粉挽き臼の２つに大分類できる。茶臼（後述のように本来的機能として粉砕物が茶葉であったことは限定できない）の上臼は12個、下臼は21個である。粉挽き臼は、上臼76個、下臼46個である。小破片も含まれ、石材も類似するため実際の個体数は不明である。

出土した遺構は井戸（80個、全体の50％）、溝（62個、38.7％）、土壙（６個、3.7％）である。他は遺構確認作業時の検出例（12個、7.5％）である。

(1) 茶　臼

上臼の特徴

直径は17.9～21.6㎝が復元される。高さ（臼の厚み）は完型のものが少なく11.1～14.5㎝であった。くぼみは皿状で中央に向かってやや深くなり、面は粉砕物の供給のためかやや磨耗している。芯棒の穴はくぼみの中央にあり供給口を兼ねている。径は1.6～３㎝、上下の両方から数回に分けて穿孔し貫通させている。内面はくぼみとすり合わせ面近くを除いてていねいな整形は施されていない。

外面の整形は石材の性質と関係するのか精緻とはいい難い。13は上縁部の表面のみ細かい仕上げがなされ、他の面には金属工具による敲打痕が残っており、意図的に装飾的効果をねらったものと思われる。25の外面及びレリーフ部分は精緻に磨き上げられている。

挽手穴は各１つと考えられる。中心に向って矩形の穴があり、内面は挽き木を打ち込むためか、再調整が加えられている。また、外面にはレリーフ状の装飾が施され、本遺跡では円形、菱形、矩形が認められた。

すり合わせ面は0.2～0.5㎝のふくみがある。７はやや例外である。周縁部から４㎝程に良好な磨擦痕があり光沢をもつものもある。分画は８分画が多数を占め、１が６分画と思われる。「目」の分画が不均等のものもあり、目たてなおしがなされた痕跡もある。副溝の間隔は４～８㎜である。

石材は安山岩であるが、３、８は多孔質である。他の臼についても全般的に粒子が粗く、また、硬度の不均衡な鉱物粒子が混在する石材が用いられている。

下臼の特徴

いずれもはんぎり（粉になった粉砕物を受ける部分）がつくものである。そのはんぎりの作り方と底面の状態に差異が認められる。14をはじめとした多くははんぎりの部分が大きく張り出している。10は外面が底面から緩やかに外反し、はんぎりの部分が形成されている。外面にはノミ状の工具痕が残る。

底部のえぐりこみはラッパ状のものと浅く凹状に施されるものがあるが、すり合わせ面の径は16、27～22.9㎝が復元できた。上臼同様、周縁部よりの磨耗が著しい。ふくみは0.3～0.5㎝である。分画は８分画が圧倒的に多い。副溝の間隔はやや異なるが10は６㎜のほぼ等間隔である。

はんぎりの径は26.8～41.6㎝、炭化物の付着しているものが２、３点認められた。

石材は23の１点のみ花崗岩、その他は安山岩である。

ま と め

これらの臼の「目」は粗く、分画も不均等であったり、主溝が中心をはずれていたりする。実際に茶葉を粉砕する機能を有していたか疑問視されている。このような例は福島県中村館跡出土のものにもみられ、報告では粉砕物は火薬製造の為の木炭粉砕が考えられている。

(2) 粉挽き臼

上臼の特徴

76個のうち½近い残存率を有するものは11個体である。復元の径は21～36㎝。径28㎝のものが13個体で最も多い。

上縁部の断面形状は大別して３種類が認められる。１はくぼみから直角に立ち上がるもの、２はくぼみ側の立ち上がりがきわめて緩やかなもの。３、全体的に丸味をもつものがある。高さは0.8～4.8㎝と数値の幅があるが2.5～3.5㎝に集中していた。幅は2.4～4.2㎝であった。

くぼみは中心に向って緩やかに深くなる。76・81はくぼみの中心に小さな浅い小穴がある。例外的なもので、製作上の基準点が仕上がり面に残ったものか、使用上の機能に関係する痕跡であるか性格は不明である。

供給口が残存していたものは24個、全て円形であった。製作はくぼみとすり合わせ面の両側から穿って貫通させている。工程上の誤りの為か、80のように中位で食い違っている例も多い。くぼみ側の縁部にはていねいな調整が施こされている。

供給口と挽手穴の位置関係であるがこれが検討できる資料は８例あったが共通した数値は得られなかった。臼の回転と手の動作という機能上の効果が必要とされる点であり、今後の検討課題としたい。

供給口と芯棒受けの位置関係には特に規則性は認められなかった。

挽き手穴が確認できたものは21例、１例を除くとＬ字の横木を打ち込んで挽き木としたものと考えられ側面にその為の小穴が穿ってある。穴は矩形が多いが使用時の欠損や磨耗により隅丸になっているものも多い。企画性は、特に認められないが、相対的に径の大きな臼は挽き手穴も大きく、奥行も深いものが多いと考えられる。穴の内面は茶臼と同様平滑になっている。54は上縁部の横に張り出した部分に縦方向の穿孔を施し、挽き木を差し込む方法をとるもので群馬県地方に民俗例の多いものである。石材が同質の破片が他に２例あり、同一個体か、同様の型式と考えられる。

すり合わせ面の分画は確認できた29例のうち１例が８分画で、他はこぼれ目等のない６分画で左まわりであった。分画が不均等のものが多い。「目」の刻み目の断面はＶ字、Ｕ字の両方が確認できるが識別は困難である。副溝の目たてなおしもおこなわれており56・76などは旧い副溝が痕跡をとどめている。片減りが著しいものも目だつ。これは長期の使用によりすり合わせ面や芯棒受けの穴の調整の不手際により生じたと思われる。80は副溝が明瞭に残っており、片べりをきたした後も使用されていた可能性が強い。

すり合わせ面は粉砕により、光沢のでるほど磨耗しているものもある。ふくみは0.7～２㎝で、茶臼よりもはるかに大きく、粉砕物が大粒であったことがわかる。また、87のようにふくみの内彎が著しく下臼との接地面が周縁部のみのものもある。

芯棒受けの穴は径2.9～4.5㎝である。長期間使用する場合でも再度掘り込んだ例は少なかったようで深さは1.0～3.5㎝と浅いものが多かった。臼の回転に伴い芯棒との接触で磨耗が著しく角がとれている。

特異なものとしては上縁部にくぼみと側面とを接続する小孔が１つないし２つ穿孔されているものが12例ある。これらの孔の径は２～３㎝程で両側から穿孔が加えられている。２つあるものは約12㎝と比較的近接している。挽き手との関係が考えられるが、穿孔の位置と挽手穴の間の角度に企画性はない。また、挽手穴が残存するものにこれらの小孔が存在する例もあり、挽き手の代用部品の設置とも直接の関連性を求めることはできない。

東京都葛西城址の出土の粉挽臼の上臼に類例がある。これについては重石としての二次利用に際しての付属施設と推定されている。

下臼の特徴

46個のうち½近く残存するものは9個体で、⅛以下の破片は22個体と多かった。

径は20～37cmの間で計測復元できるものが多く、径20、22cmは破片である。26～30cmが24個体で全体の52%を占め上臼の径の数値とほぼ合致している。芯棒穴はその多くが円形を呈している。120・128はすり合わせ面での形状が矩形を呈している。穴は全てが底面まで貫通する型式である。底面は芯棒穴からラッパ状に広がり大きく抉り込んでいるもの、浅い掘り込みのあるもの、平坦なものと3つの形状が認められる。ノミ状の工具による整形痕が残っており143などはその好例である。

すり合わせ面の分画が判別できたものは13個でそのすべてが6分画である。ふくみは0.3～2.4cmであった。

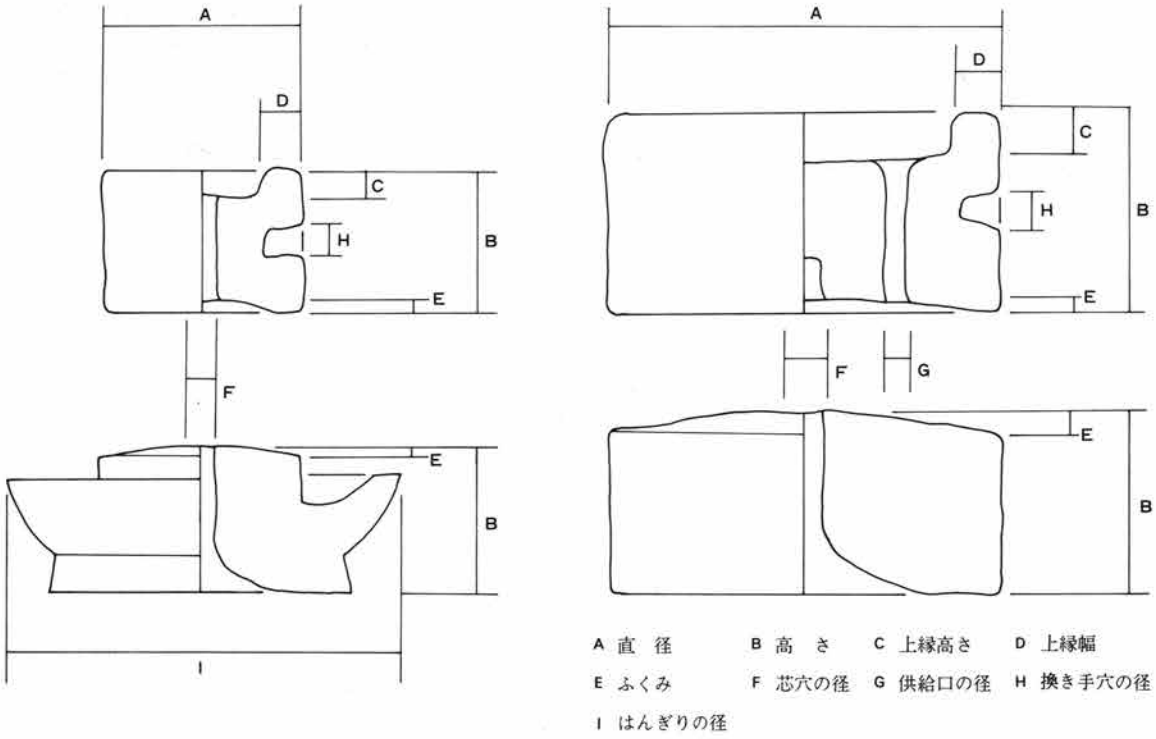
(3) **ま と め**

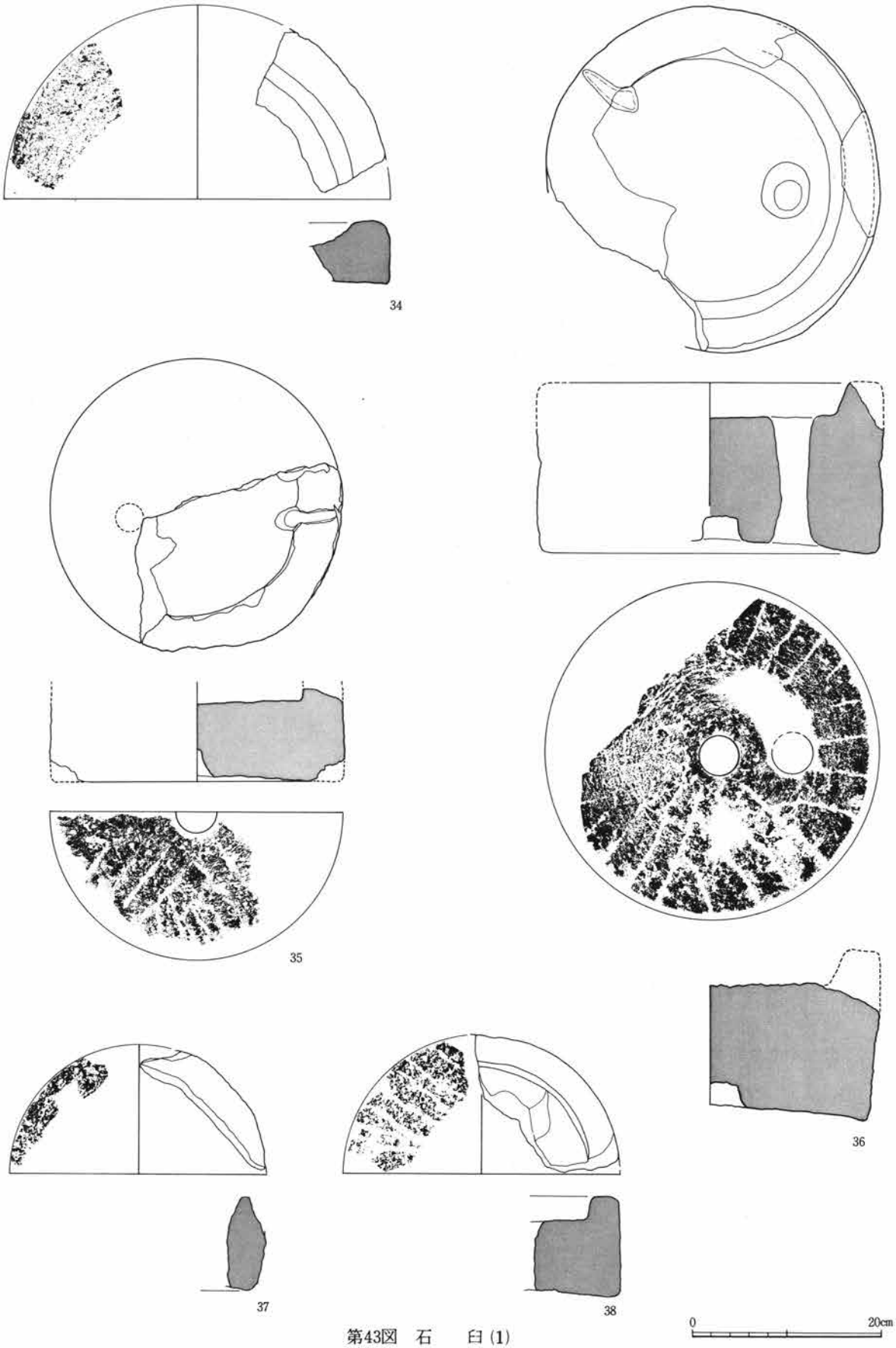
本遺跡出土の石臼には非常に薄いものも多い。これは長期間の使用、あるいは短期間に大量の粉砕物を生産した結果と思われ、それらは、目たてなおしの痕跡のあるものや挽手穴と、すり合わせ面が接してしまったものの存在からも類推しうる。また72は挽手穴の欠損部分をうるし様の接着剤で補修、使用している。

また、型式の区別なく、火熱を受けた痕跡変色、変質、炭化物の付着を残すものが多い。茶臼に11例（33%）粉挽き臼60例（49%）である。これらの中には欠損した割れ口にも火痕の認められるものもある。遺構調査の所見からは本遺跡が火災にあったことと類推しうる資料はえられなかったが、臼が使用、廃棄後に火災あるいは火熱を受けるような二次利用がなされ、井戸、溝等に廃棄されたと考えたい。

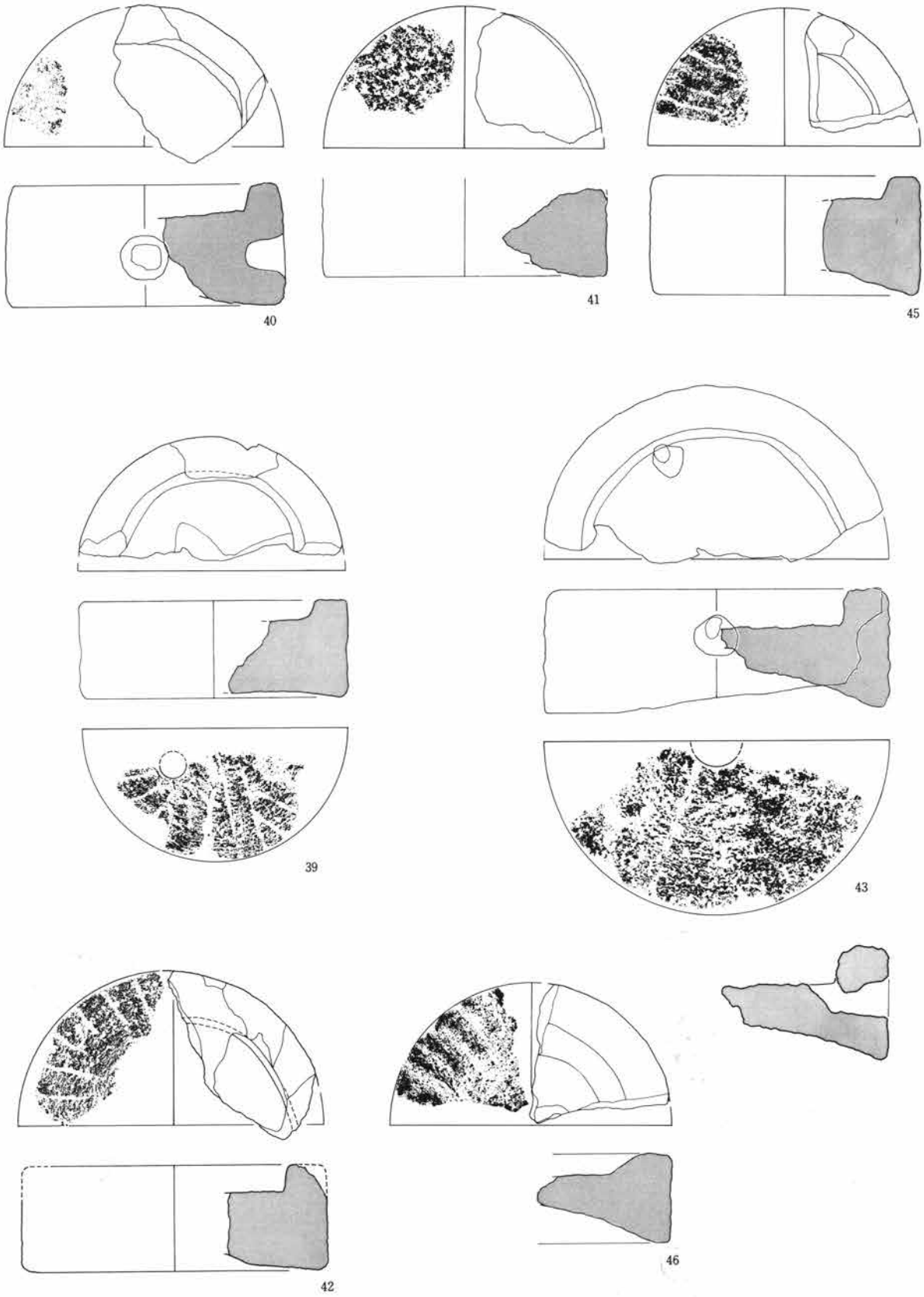
本遺跡資料は溝や井戸からの出土例であり遺構の性格上、これらの臼に編年等を試するだけの時期決定をおこなうまでに至らなかった。石臼を出土する遺構は他遺跡においても本遺跡と同様のように思われる。今後は共伴遺物の検討を通じて、大まかな時間的変遷と地域的特色を摘出することが課題となろう。

石臼模式図

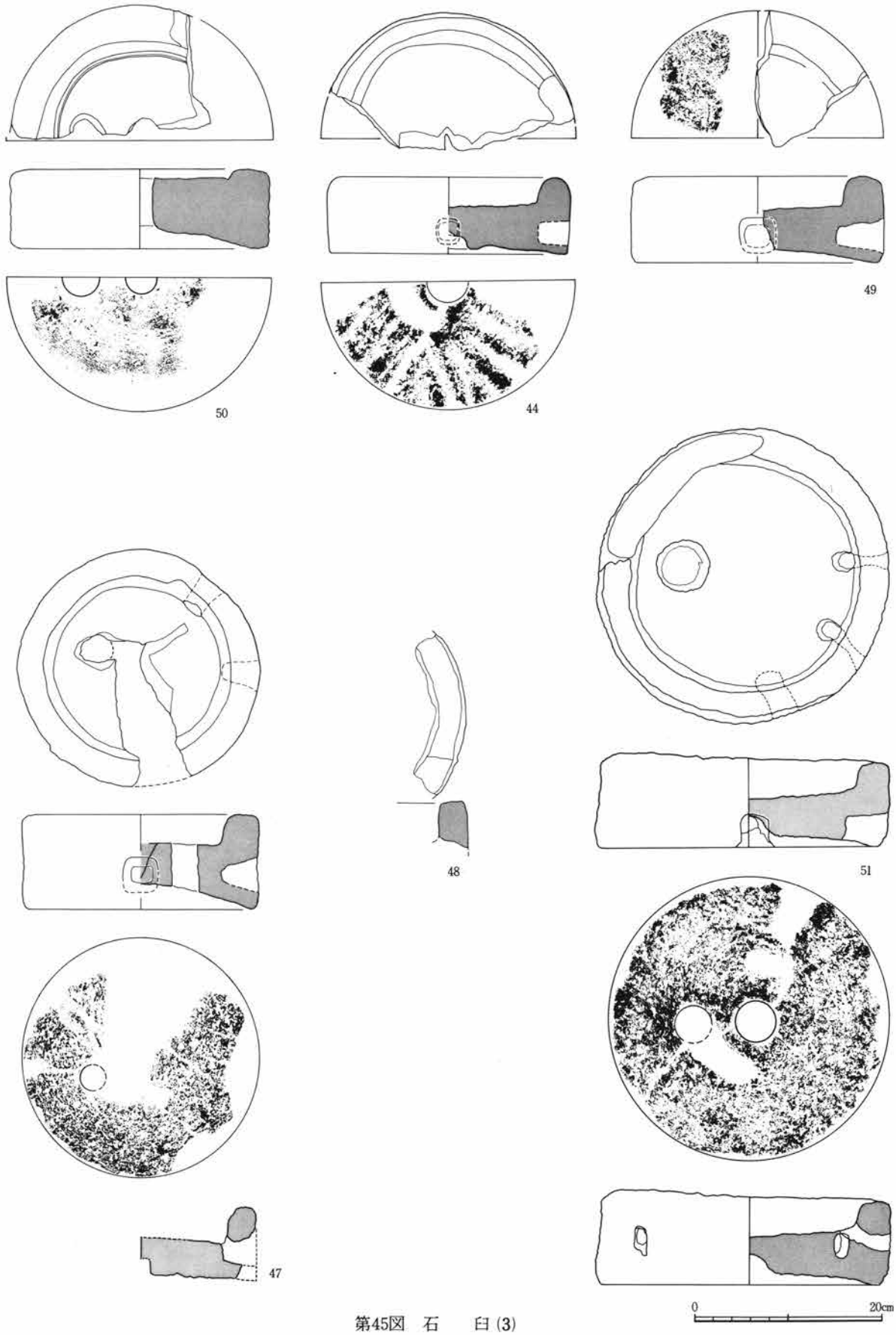




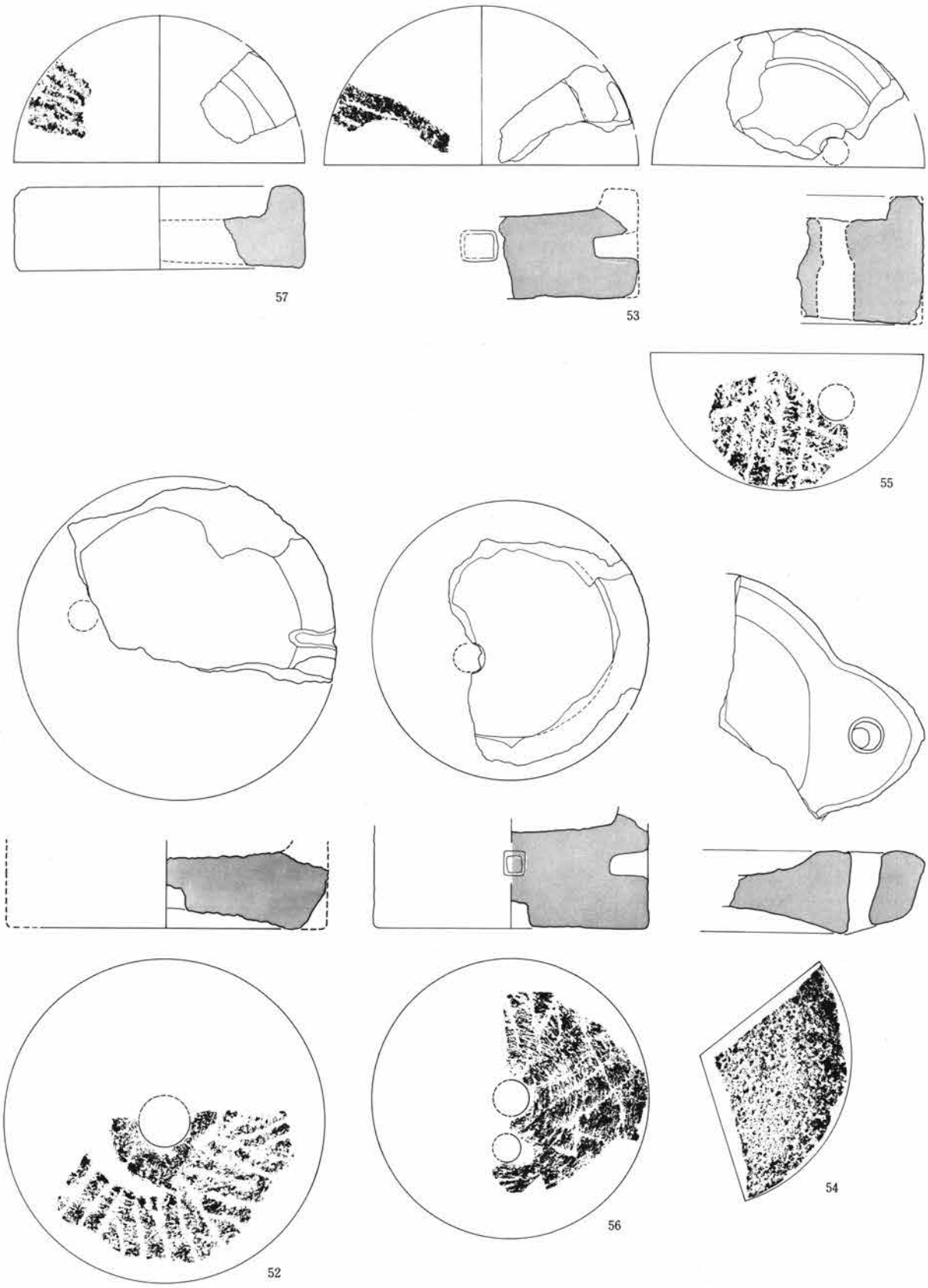
第43図　石　　臼 (1)



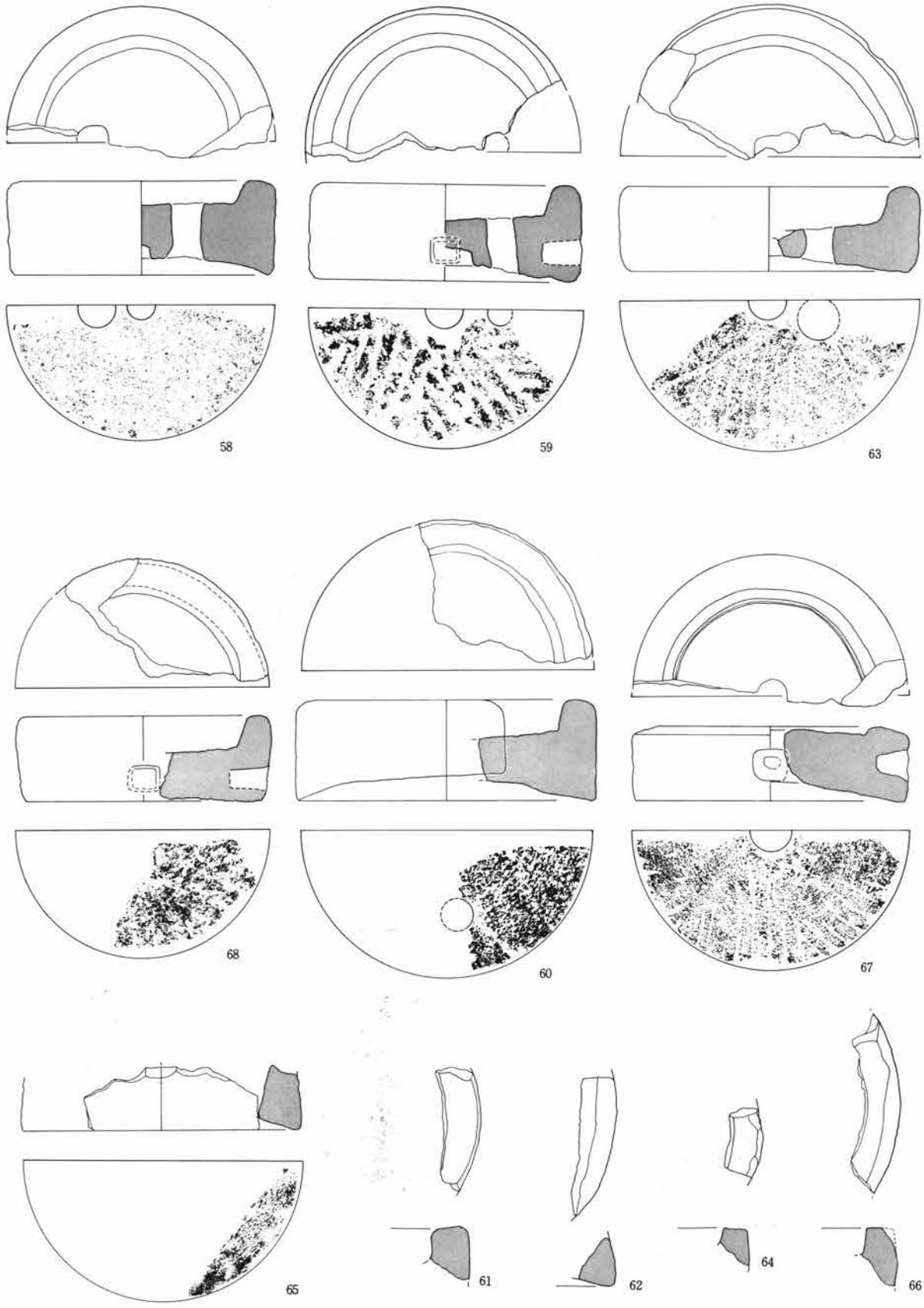
第44図　石　　臼 (2)



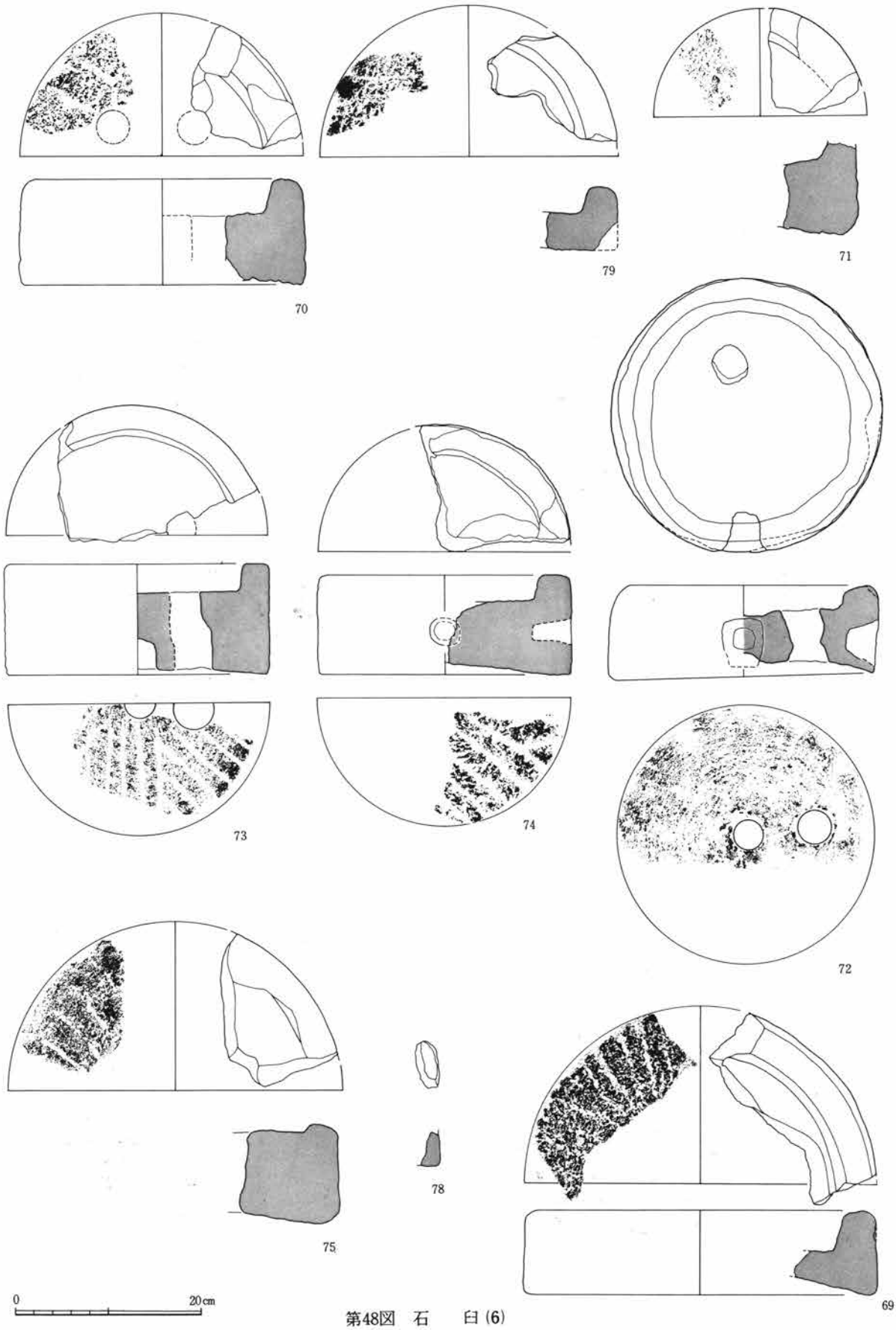
第45図　石　　臼 (3)



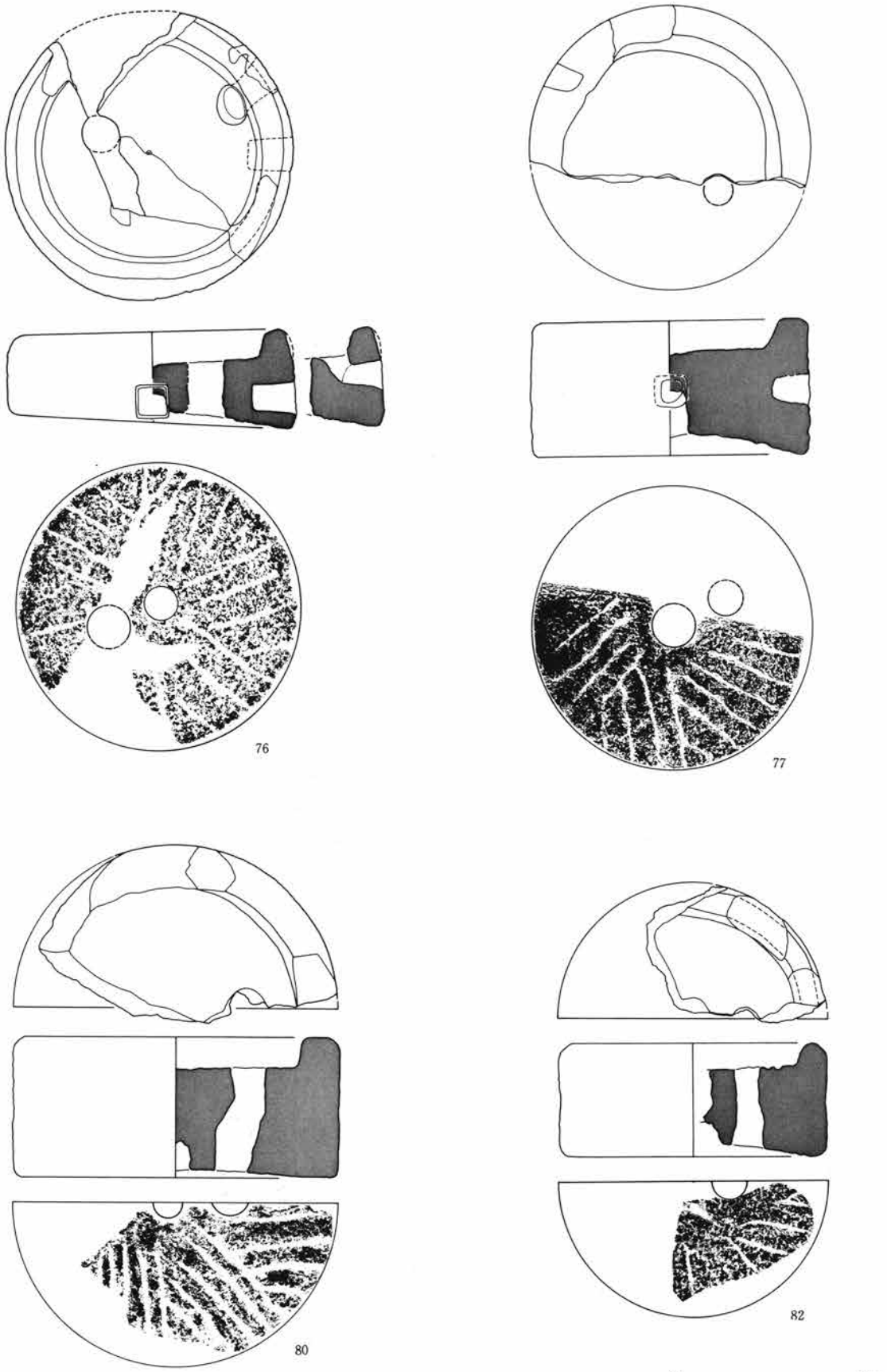
第46図　石　臼(4)



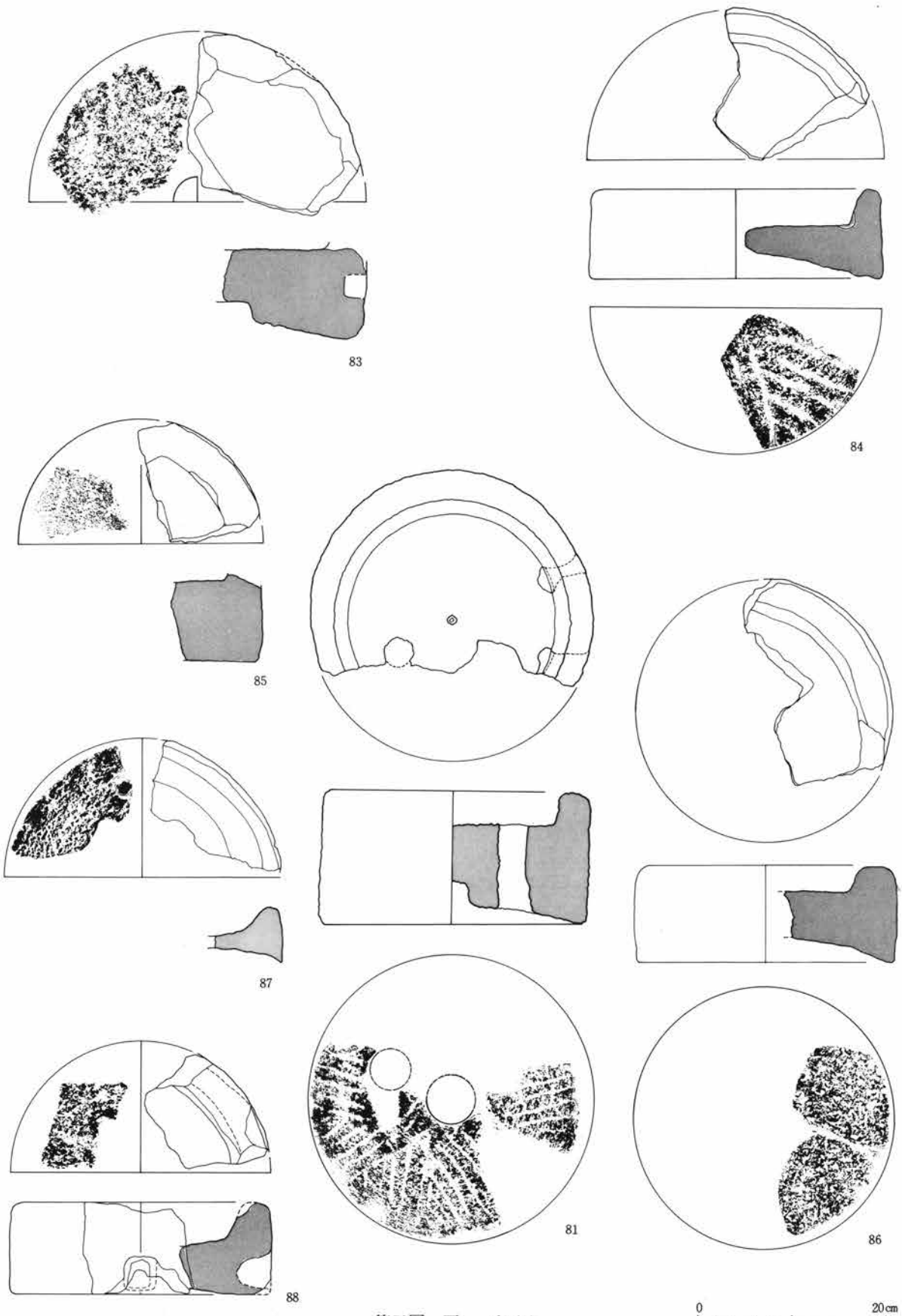
第47図　石　　臼 (5)



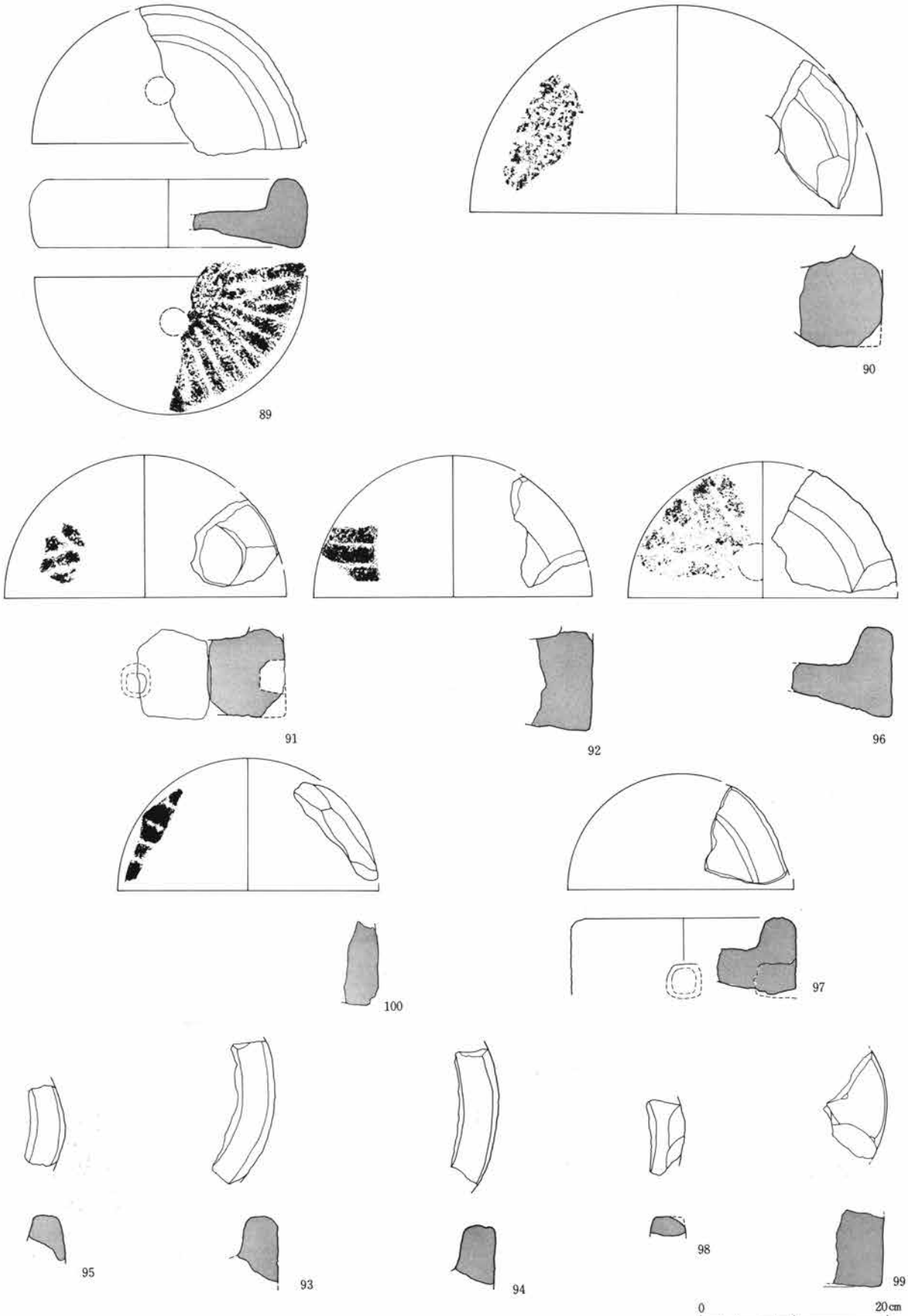
第48図　石　臼 (6)



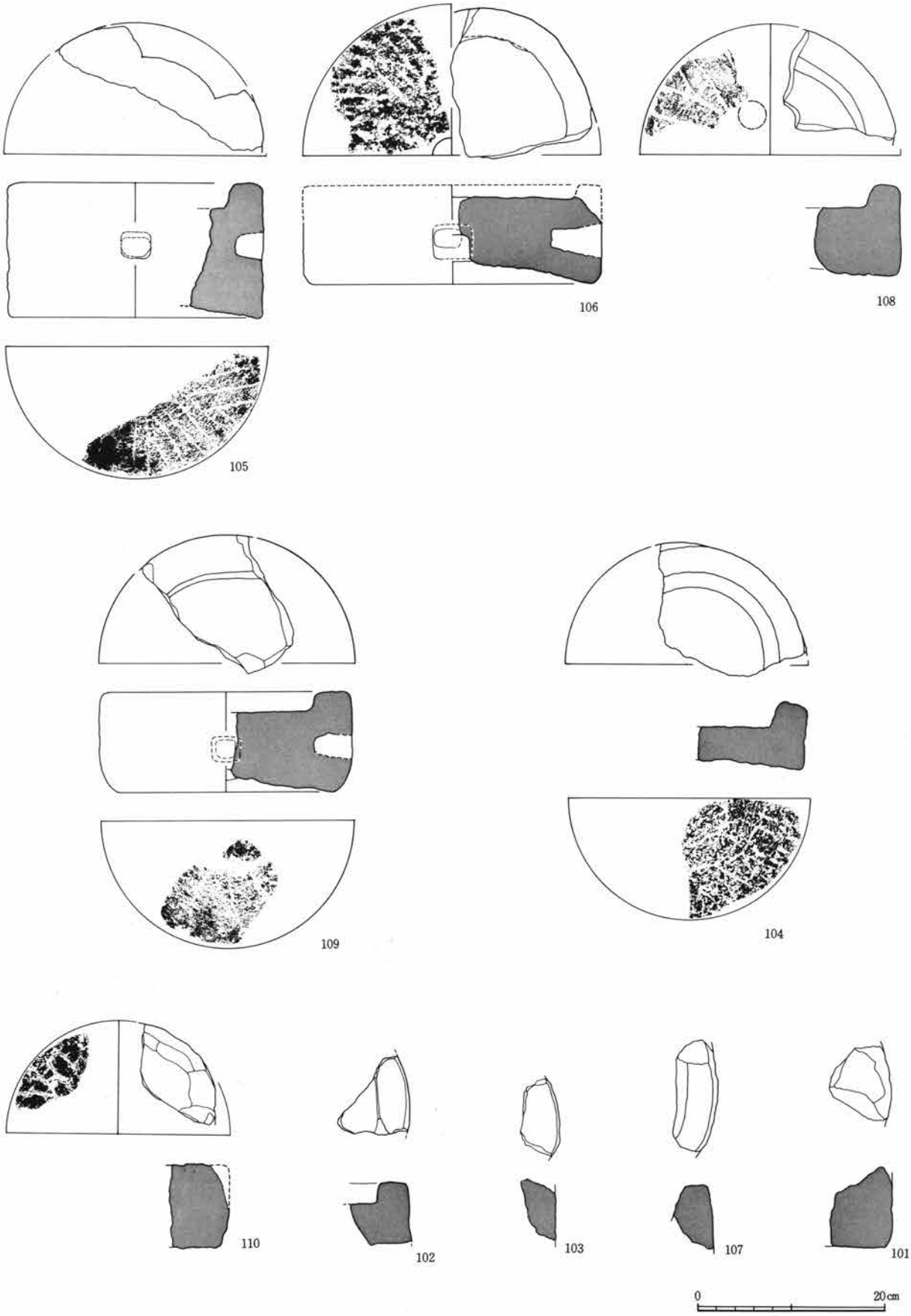
第49図　石　　臼 (7)



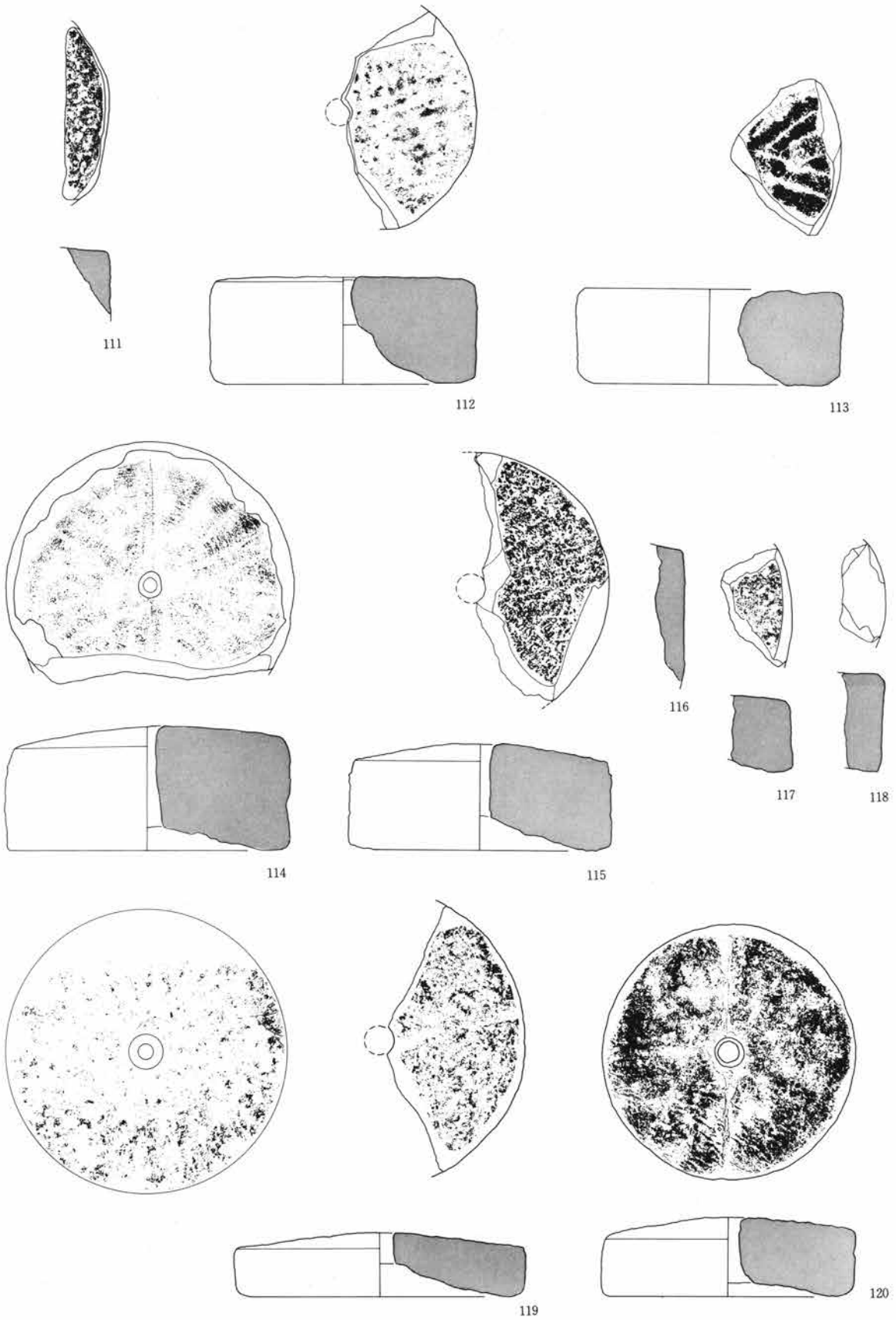
第50図　石　臼 (8)



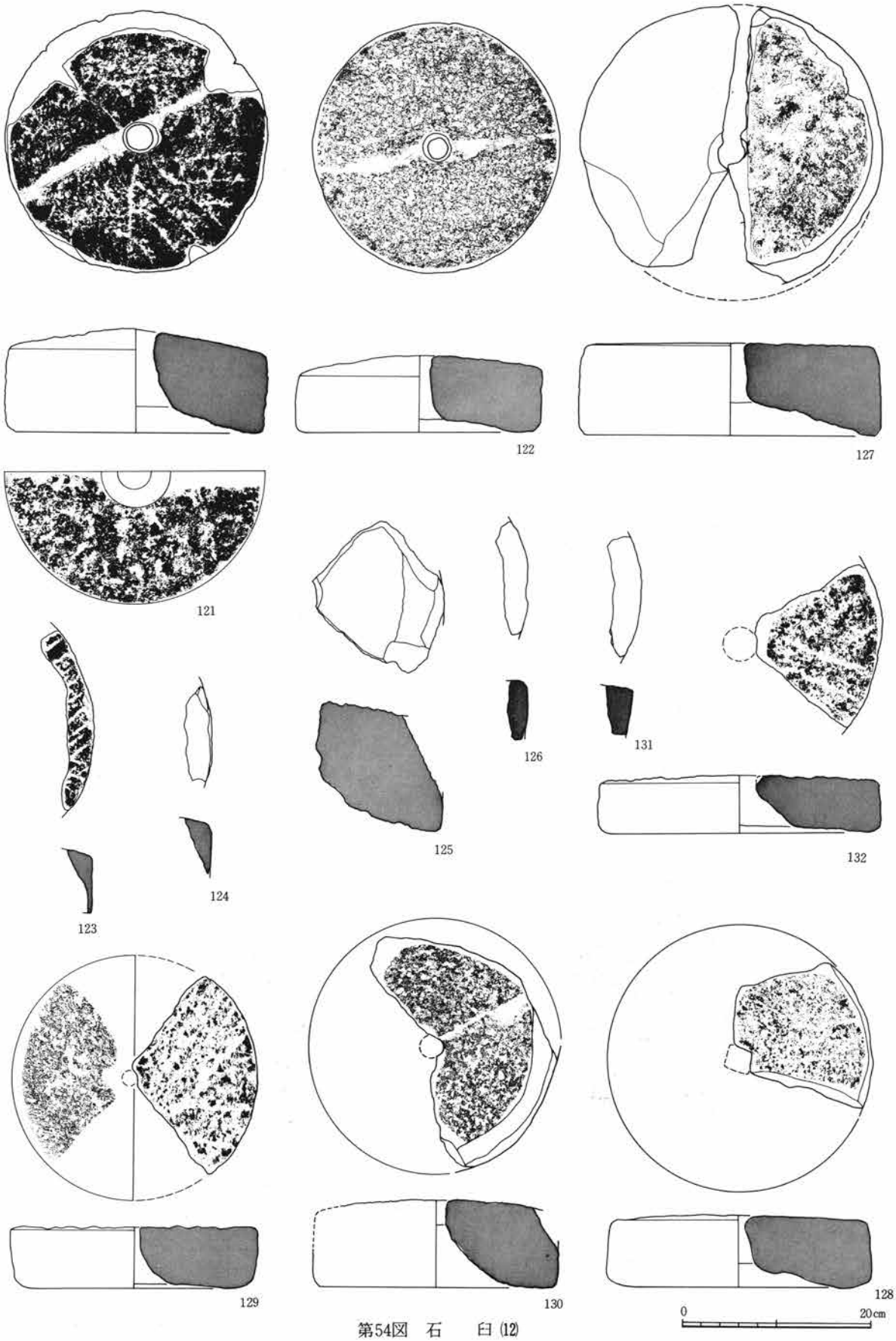
第51図　石　　臼 (9)



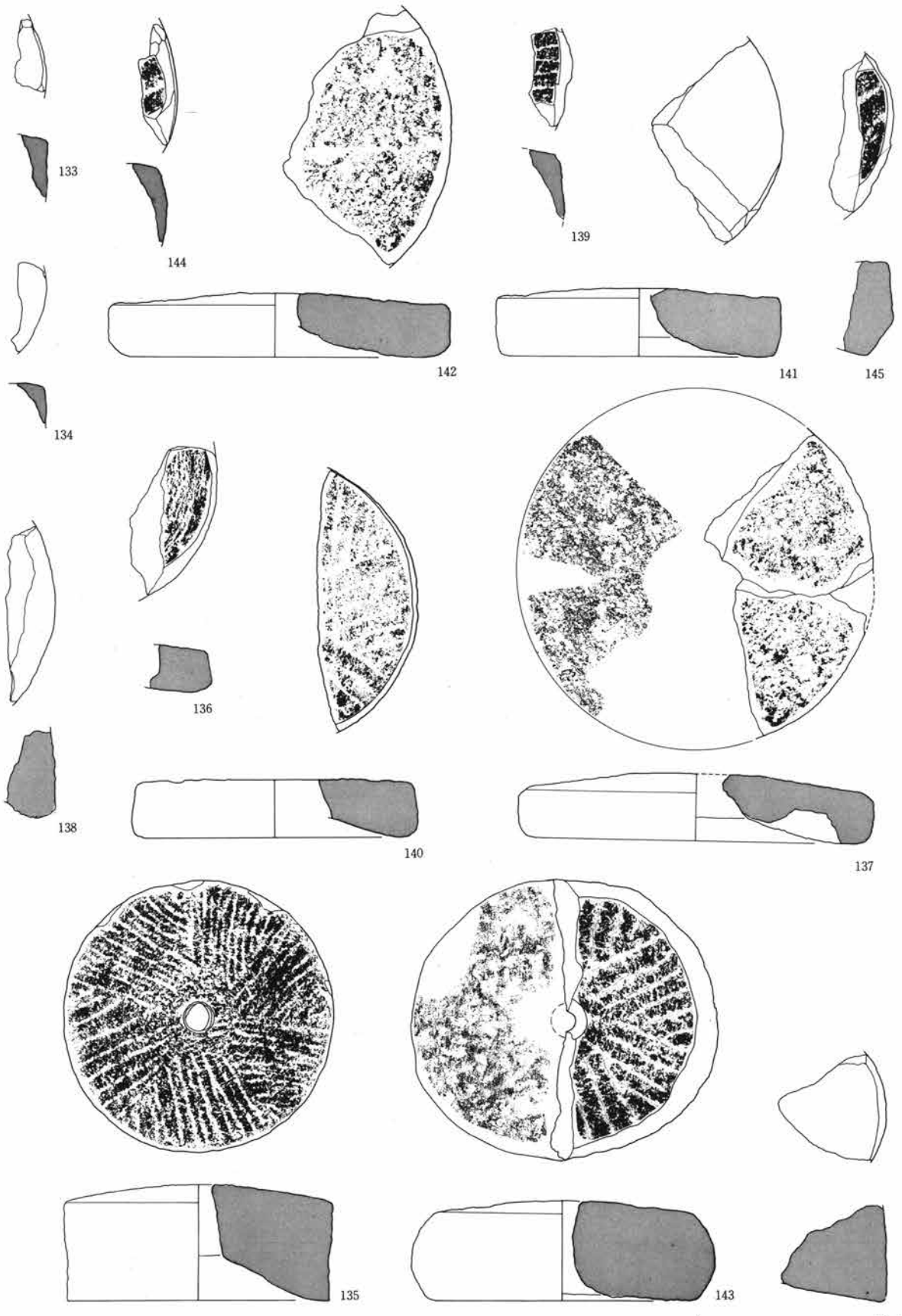
第52図　石　　臼(10)



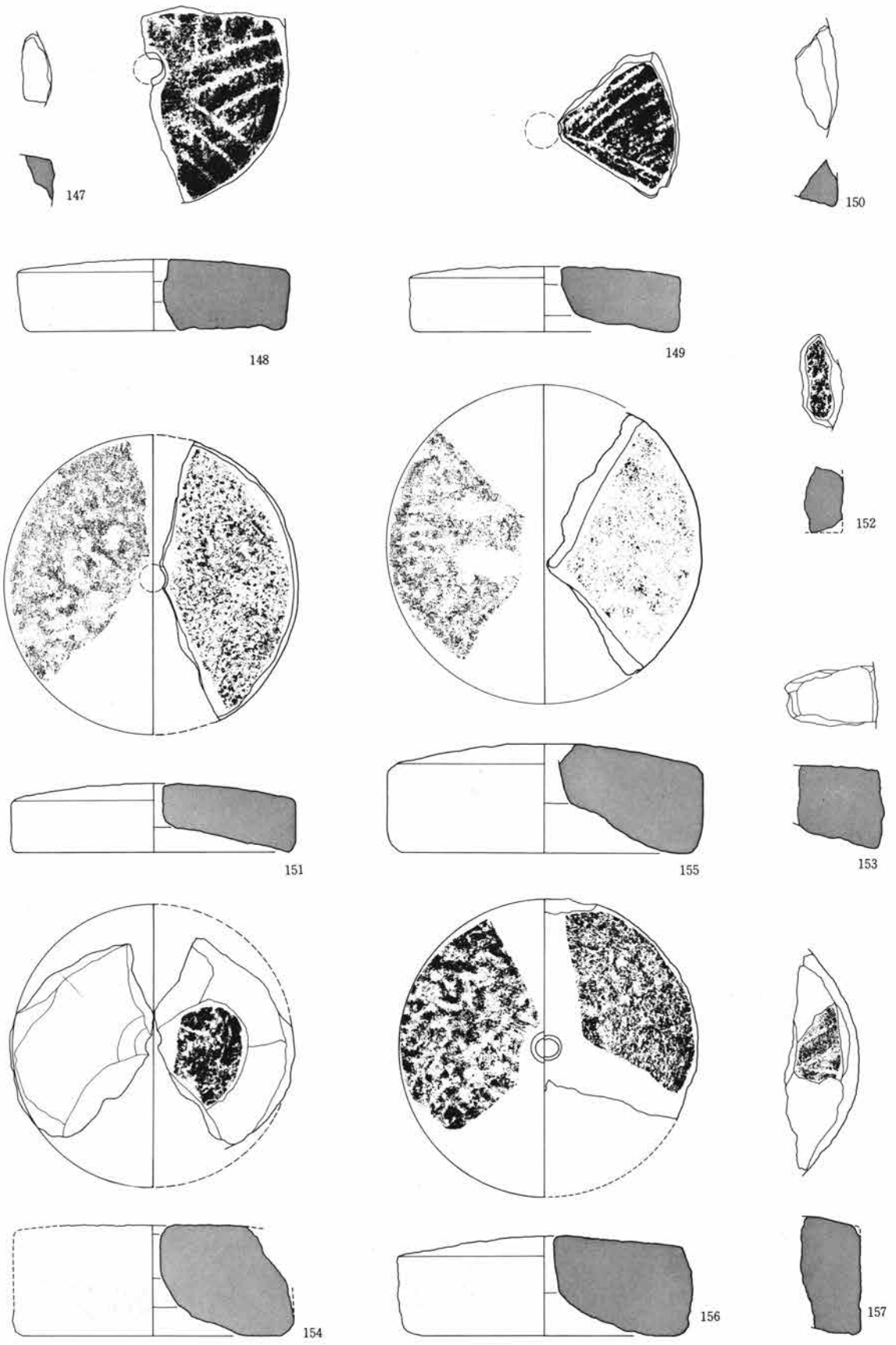
第53図　石　　臼 (11)



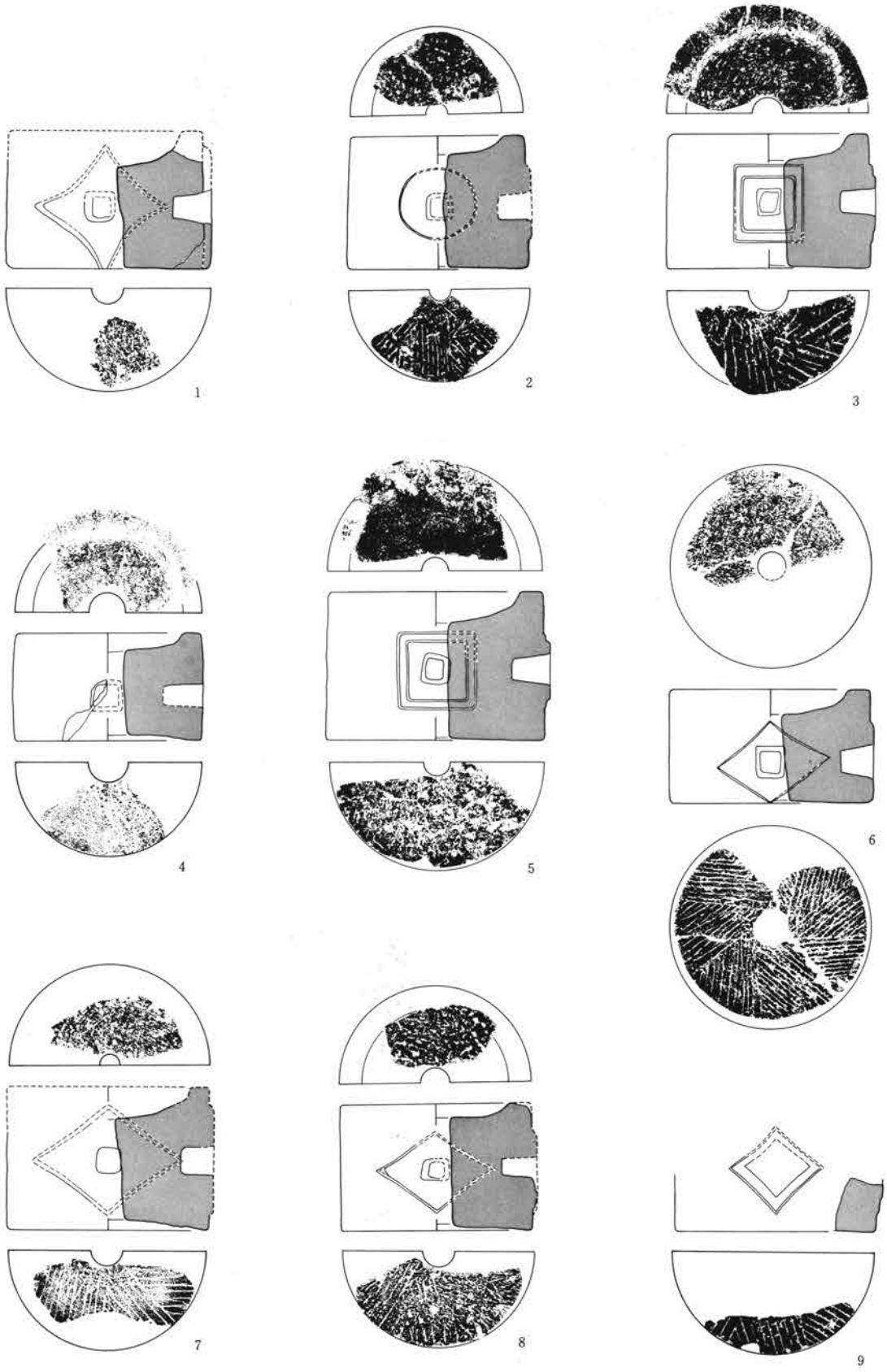
第54図　石　　臼 (12)



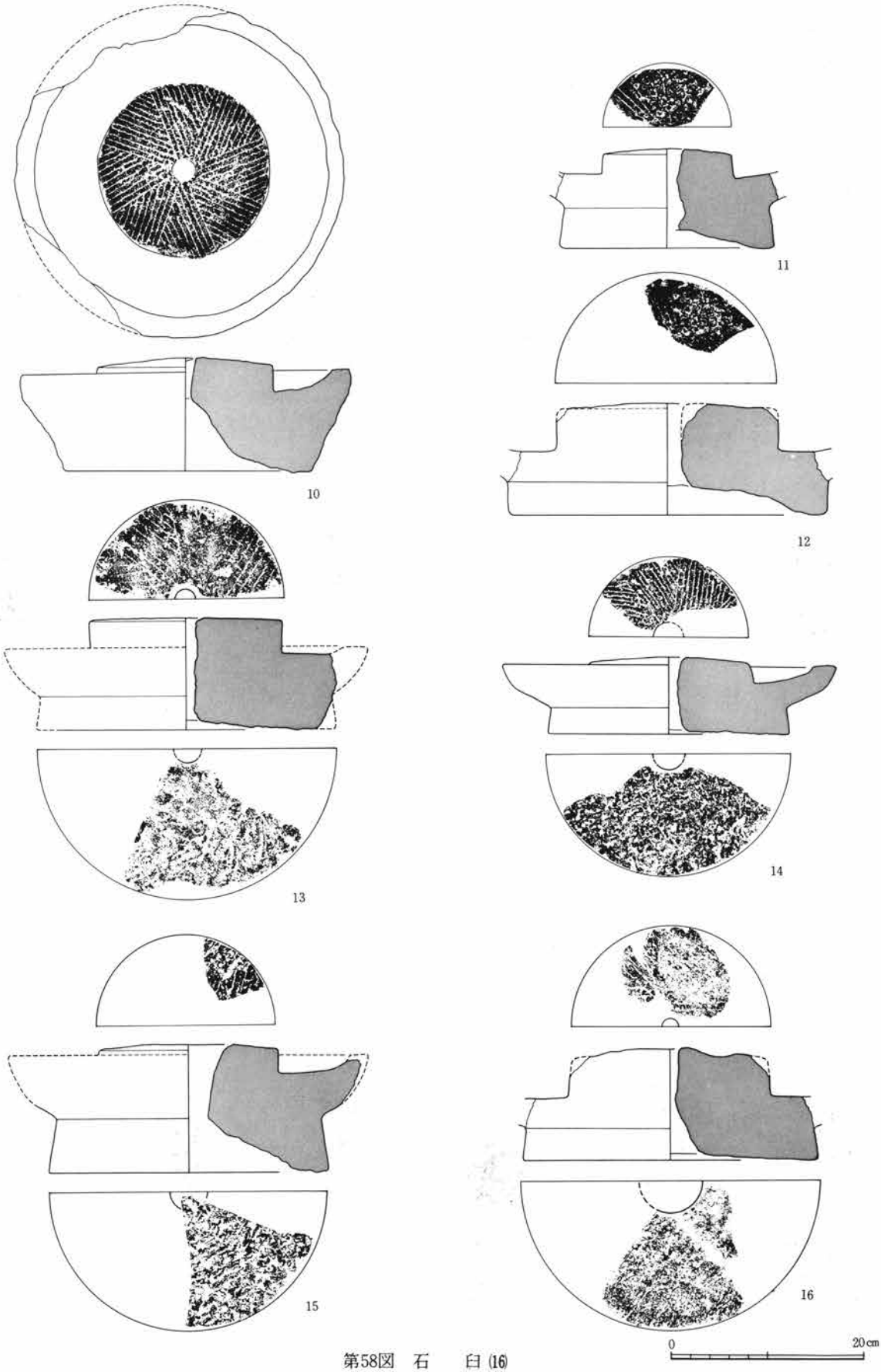
第55図　石　　臼 (13)



第56図　石　　臼 (14)



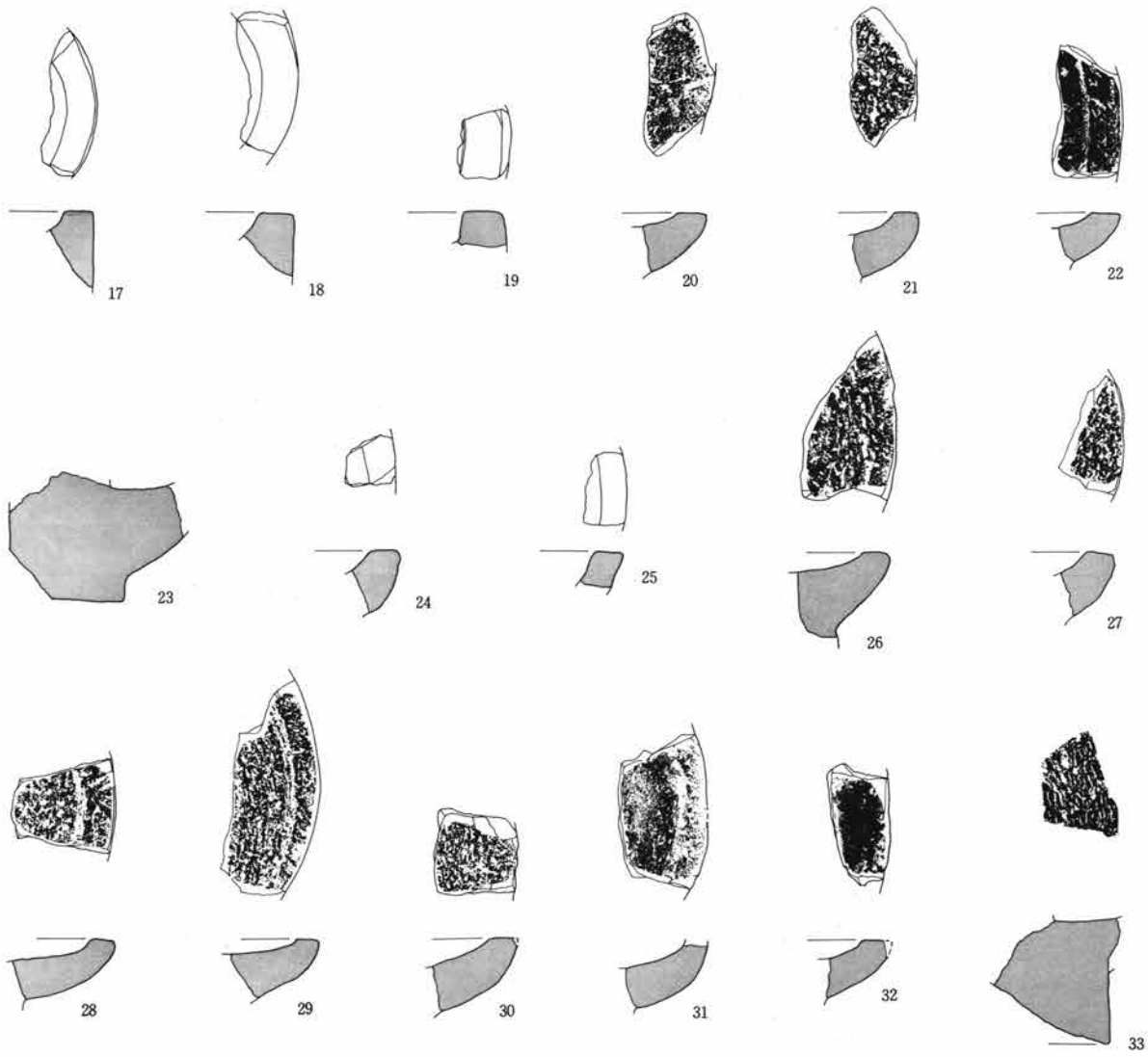
第57図　石　　臼 (15)



第58図　石　　臼 (16)

表9　石　臼　一　覧

No.	出土地点	直径 (cm)	高 (cm)	上縁高さ/幅 (cm)	ふくみと供給口 (cm)	分画×溝数	供給口の径	石材	特徴　㊟は形状　㊞は換手穴　㊢は整形　㊋は火熱を受けていること　㊟は備考を表す
1	25号井戸	(20.2)	〔12.1〕	欠　損	0.3	6×7以上	2.9	安山岩	㊟くぼみは皿状に落ち込む。㊞矩形、菱形の飾りがつく。㊋
2	38号井戸	(17.9)	13.1	1.9 ／ 2.0	0.3	8×5以上	2.0	安山岩	㊟すり合わせ面は磨滅、副溝不鮮明。㊢芯穴は数度に分けて貫通。㊞矩形、丸形の飾り。
3	40号井戸	(20.3)	13.1	2.15 ／ 2.0	0.3	8×6	3.0	安山岩	㊟くぼみ、すり合わせ面とも磨滅。㊢芯穴は上下から穿つ。㊞矩形、方形の2段の飾り。
4	246号竪穴	(18.6)	10.5	1.85 ／ 1.8	0.5	8×7	3.0	安山岩	㊟くぼみは皿状。㊢外面に工具痕を残す。芯穴は上下から穿つ。㊞矩形、飾り無し。㊋
5	3号溝B区	(21.6)	14.6	1.5 ／ 2.0	0.2	不明	2.4	安山岩	㊞矩形、2段の矩形の飾りがつく。



第59図　石　臼 (17)

No.	出土地点	直径(cm)	高(cm)	上縁高さ/幅(cm)	ふくみと供給口(cm)	分画×溝数	供給口の径	石材	特徴　㊐は形状　㊐は換手穴　㊐は整形　㊐は火熱を受けていること　㊐は備考を表す
6	3号溝	20.0	11.1	2.4 ／ 2.2	0.2	8×8～11	2.3	安山岩	㊐くぼみは皿状、すり合わせ面の分画は中心点からおこなわれていない。㊐矩形で菱形の飾りがある。㊐
7	3号溝	(20.0)	11.7	1.4／欠損	1.0	8 × 11 以上？	1.6	安山岩	㊐ふくみが他に比して大きい。㊐隅丸の矩形で菱形の飾りがつく。㊐
8	7号溝	(19.0)	12.3	1.4 ／ 2.2	0.5	不明	2.8	安山岩	㊐矩形で菱形の飾りがつく。
9	7号溝	(20.2)	[9.9]	欠　損	不明	8×8以上	不明	安山岩	㊐矩形で菱形の2段の飾りがつく。
10	22号井戸	18.3	11.7		0.7	8×8～10	—	安山岩	㊐最大径は34cmすり合わせ面の分画は一様でない。芯穴の径は2.5cm。㊐底面はえぐりこみがされるほか側面、底面とも工具痕を残す。
11	40号井戸	(20.1)	[10.3]		0.5	不明	—	安山岩	㊐すり合わせ面は剝離が著しい。底面は凹面状を呈する。㊐材質は粗い。破損後火熱を受けている。
12	40号井戸	(22.9)	[11.5]		0.5	不明×4以上	—	安山岩	㊐すり合わせ面は剝離が著しくほとんど残存しない。
13	41号井戸	(20.0)	11.5		0.3	8×8	—	安山岩	㊐芯穴の径2.0cm。
14	3号溝	(16.2)	8.0		0.5	8×10	—	安山岩	㊐すり合わせ面の副溝は刻みなおしがなされている。芯穴の径、2.0cm。㊐
15	7号溝	(18.6)	13.2		0.3	不明	—	安山岩	㊐芯穴部分は欠損している。㊐破損後火熱を受けている。
16	24号井戸	(20.0)	[11.5]		不明	8×4以上	—	安山岩	㊐芯穴の径は2.0cm。下位でラッパ状にひろがる。底面は平坦。㊐　㊐すり合わせ面には敲打による凹みがある。
17	52号井戸	(2.0)	不明	2.4 ／ 1.4	欠失損	欠失損	—	安山岩	㊐破片。㊐割れ口は砥石様に磨耗している。
18	7号溝	(2.1)	不明	2.8 ／ 2.0	欠失損	欠失損	—	安山岩	㊐破片。
19	8号溝	(1.9)	不明	3.8 ／ —	欠失損	欠失損	—	安山岩	㊐破片。
20	43号井戸								㊐はんぎり径26.8cm。㊐
21	45号井戸								㊐　㊐はんぎりの破片。
22	3号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径40.4cm。㊐　㊐上面に付着物があり炭化していた。
23	8号溝		[10.7]					花崗岩	㊐はんぎりは厚みがある。㊐火熱を受けて脆くなっている。
24	3号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径38.4cm。㊐
25	3号溝							安山岩	㊐はんぎりの小破片。径27.2cm。
26	3号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径40.8cm。㊐
27	3号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。やや厚さあり。
28	7号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径41.6cm。㊐
29	8号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径32.0cm。㊐
30	8号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径30.8cm。㊐鉄分が付着。
31	10号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径35.0cm。㊐　㊐受け部に付着物があり炭化している。
32	15号溝							安山岩	㊐はんぎりの破片。径39.2cm。㊐　㊐受け部には付着物があり炭化している。
33	表採	35.4	10.3					安山岩	㊐下面はえぐられている。㊐
34	13号井戸	(33.7)	6.7	2.0 ／ 6.0	0.3以上	不明	不明	砂　岩	㊐上縁部の高さが低く幅が広い。
35	20号井戸	(30.7)	[9.8]	1.2 ／ 4.2	0.6×7.0	6×4～5	不明	安山岩	㊐副溝の間隔は一定せず2.1～2.8cm。㊐　㊐くぼみには外面とを結ぶ小孔が2ヵ所穿ってある。すり合わせ部は二次使用がなされ砥石として使用された可能性もある。

No.	出土地点	直径(cm)	高(cm)	上縁高さ/幅(cm)	ふくみと供給口(cm)	分画×溝数	供給口の径	石材	特徴　形は形状　換は換手穴　整は整形　火は火熱を受けていること　備は備考を表す
36	20号井戸	35.5	17.5	3.5 ／ 3.0	0.7×8.0	6×3	5.0	安山岩	備くぼみから外縁に貫通する小孔がある。
37	20号井戸	(28.2)	〔9.7〕	不明	不明	不明		安山岩	火
38	Q−11G	(33.0)	10.4	2.4 ／ 2.7	不明	6×5以上	3.5	安山岩	形副溝は目の幅。方向が乱れている。備外面には付着物がある。
39	25号井戸 33号土壙	(27.8)	9.9	2.0 ／ 3.3	0.4×不明	6×5		安山岩	形すり合わせ面と換手穴の間1cmであった。副溝の目たては不均一である。換浅い。
40	25号井戸	(29.0)	12.5	2.2 ／ 3.0	1.5×不明	不明	不明	安山岩	換短形。火
41	25号井戸	(29.6)	〔8.8〕	不明	不明	不明		砂岩	火
42	27号井戸	(36.6)	10.5	4.3 ／ 4.2	0.7以上	6×不明	不明	安山岩	形副溝の幅は3cmと大きい。芯穴周辺は不鮮明。火上縁部には特に顕著。
43	34号井戸	(34.5)	12.5	4.0 ／ 4.0	3.4×不明	不明	不明	安山岩	形かたべりが著しい。備くぼみから外縁に貫通する小孔が2ヵ所ある。
44	35号井戸	(26.0)	8.2	2.6 ／ 3.0	1.2×不明	6×4以上	不明	安山岩	形かたべりが著しい。分画は乱れている。換すり合わせ面に接している。火
45	38号井戸	(30.0)	12.3	2.3 ／ 3.0	0.5×不明	6×？	不明	安山岩	備鉄分が付着する。割れ口を砥石に利用。
46	38号井戸	不明	9.1	2.4 ／ 4.5	3.8以上	不明	不明	砂岩	形上縁は緩やかな立ち上り、ふくみが大きい。火
47	38号井戸	(25.4)	10.2	3.1 ／ 3.1	1.3×4.0	不明	2.9	安山岩	形完型。円形を呈しない。かたべりが著しい。分画数はよみとれない。備くぼみと外縁を結ぶ小孔がある。
48	39号井戸	(26.6)	不明	4.8 ／ 3.5	不明	不明	不明	安山岩	形破片。
49	40号井戸	(27.2)	9.0	3..1 ／ 3.5	不明	不明	不明	安山岩	形上縁部は丸味がある。備くぼみから外縁に向って小孔が穿ってある。
50	40号井戸	(28.0)	8.5	1.0 ／ 4.0	1.6×6.6	不明	4.3	安山岩	形上縁部は低く、上面はやや磨滅している。また、くぼみとの接点には細い溝がある。芯棒受けは貫通している。径3.5cm。火
51	40号井戸	31.0	10.0	2.9 ／ 4.0	1.3×6.5	不明	4.0	安山岩	形上縁の割れ口は磨滅している。換すり合わせ面に接している。備くぼみから上縁を貫通する小孔が2つある。外面での径2.4cm。
52	40号井戸	(33.0)	〔7.9〕	不明	0.8×10.0	6×5	不明	安山岩	火欠損してから火熱を受ける。備くぼみから上縁を貫通する小孔が2つある。
53	40号井戸	(30.0)	〔9.2〕	不明	不明	不明	不明	安山岩	換矩形。奥へ4.4cm。
54	40号井戸	(31.6)	10.5	1.6 ／ 3.9	2.5×—	不明	不明	砂岩	形くぼみは中央にむかって緩やかに傾斜する。換つくりつけ式、差し込み穴はやや外傾する。
55	41号井戸	(26.2)	13.1	2.4 ／ 3.3	0.8×不明	6×4	3.8	安山岩	形供給口は上下両方から穿っており中位でくいちがっている。
56	41号井戸	(28.6)	〔11.9〕	不明／3.7	0.9×6.0	6×5？	不明	安山岩	形供給口は中位で大きくくいちがう。換方形で側面の高い位置にある。火
57	43号井戸	不明	8.5	2.8 ／ 3.4	不明	不明	不明	安山岩	火　備くぼみに工具痕がある。外面に付着物がある。
58	43号井戸	28.0	10.0	2.2 ／ 3.0	1.4×5.0	不明	4.0	安山岩	形ふくみは外面まじかで強く内彎している。副溝は鮮明であるが分画数は不明。火
59	43号井戸 49号井戸	(28.2)	10.0	3.1 ／ 2.7	1.5×2.0	6×6	不明	安山岩	形片べりしている。火すり合わせ面と側面の下部には炭化物の付着が著しい。割れ口も同様で欠損後火熱を受けたと考えられる。
60	46号井戸	(31.6)	10.0	不明	6×4〜5	不明	不明	安山岩	形片べりが著しい。
61	44号井戸	(27.0)	5.6	不明	2.9×3.8	不明	不明	安山岩	形破片。
62	44号井戸	不明	不明	不明	不明	不明	不明	安山岩	形副溝の幅は他に比して狭く1.7cmである。
63	44号井戸	不明	9.0	1.0 ／ 4.1	3.5×3.3	6(8)×6以上	不明	安山岩	形上縁部は丸味がある。分画は不均等。

No.	出土地点	直径(cm)	高(cm)	上縁高さ/幅(cm)	ふくみと供給口(cm)	分画×溝数	供給口の径	石材	特徴　㊫は形状　㊧は換手穴　㊨は整形　㊤は火熱を受けていること　㊥は備考を表す
64	44号井戸	不明	不明	3.8 ／ 2.5	不明	不明	不明	安山岩	㊫破片。上縁部のみ。㊤
65	44号井戸	(28.4)	〔6.8〕	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊤　㊥外縁に貫通する2つの小孔がある。
66	44号井戸	(32.8)	不明	3.8／不明	不明	不明	不明	安山岩	㊫破片、上縁部のみ残存。
67	46号井戸	(28.5)	7.6	0.8 ／ 3.0	1.5×7.0	6×10	3.3	安山岩	㊫くぼみの上縁は低く、細い溝がめぐっている。換手穴、芯棒受け、供給口はほぼ一線に並ぶ。芯棒受けは貫通している。㊤　㊥上縁は外縁に傾斜して磨滅している。砥石として使用された可能性がある。
68	46号井戸	(26.6)	9.1	3.5 ／ 2.5	1.0×不明	6×4以上	不明	安山岩	㊥外面には鉄分が付着している。
69	46号井戸	(36.4)	8.9	4.2 ／ 3.2	1.0×不明	6×不明	不明	安山岩	㊫やや片べりしている。上縁の高さがあり、当初は厚みもあったと思われる。
70	46号井戸	(30.8)	11.5	3.5 ／ 3.2	0.6以上	不明	3.6	安山岩	㊫副溝の間隔は他に比して大きい。
71	46号井戸	(22.8)	9.7	不明／4.0	0.8以上	不明	不明	安山岩	㊫破片。
72	47号井戸	29.0	11.5	2.4 ／ 4.0	2.0×7.0	6×3以上	3.5	安山岩	㊫片べりが著しい。ふくみは外縁真近かでの内彎が著しい。供給口は中位でややくいちがう。くぼみの中央に浅い小孔穴あり。㊤　㊥換手穴の上側は欠損部分をうるし様の接着剤で補修している。
73	52号井戸	(28.4)	11.6	2.5 ／ 2.8	1.0×6.0	6×6	4.5	安山岩	㊫芯棒受けは径3.5cm、1.5cm程の小穴を数個穿って大きな穴にしている。
74	52号井戸	(27.0)	10.7	2.8 ／ 3.0	0.6×不明	6×5	不明	安山岩	㊫やや片べりしている。㊤
75	52号井戸	(35.2)	10.7	0.8 ／ 3.4	1.5以上	不明	不明	安山岩	㊤
76	52号井戸	28.8	10.1	2.9 ／ 3.0	1.7×6.0	6×4	4.5	安山岩	㊫かたべりが著しい。芯棒受けは小径で整っている。㊥くぼみから外縁に貫通する小孔がある。
77	52号井戸	29.3	13.1	2.8 ／ 3.0	1.3×6.0	6×4～6	3.0	安山岩	㊫上縁部の内縁は傾きが著しい。くぼみの中心に浅い小孔穴がみられる。分割の割合は乱れている。供給口は中位で食い違っている。㊤
78	52号井戸	不明	不明	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊫破片。
79	56号井戸	不明	6.6	3.3 ／ 2.2	不明	不明	不明	安山岩	㊫破片。㊤　㊥外面に付着物がある。
80	82号土壙	(14.0)	14.0	3.0 ／ 3.3	0.7×7.0	6×5	4.0	安山岩	㊫供給口は中位で大きく食い違う。副溝は次の分画の主溝に接することなく刻まれている。㊤
81	329号土壙 6号溝	30.0	13.1	3.2 ／ 3.7	2.0×7.0	8×8以上	4.5	安山岩	㊫くぼみの中央には小さく浅い小穴がある。ものくばりは小さい。㊤　㊥くぼみから外縁に貫通する小孔が2つある。
82	517号土壙	(26.8)	11.4	2.4 ／ 2.1	0.9×6.0	6×3以上	3.6	安山岩	㊫芯棒受けはやや角ばっている。
83	3号溝	(31.6)	〔9.5〕	不　明	1.3×不明	6×不明	不明	安山岩	㊤
84	3号溝	(31.2)	9.5	4.5 ／ 3.0	2.5以上	6×5以上	不明	安山岩	㊥くぼみから外縁に貫通する小孔がある。
85	3号溝	(23.0)	〔9.3〕	不　明	0.3×不明	不明	不明	安山岩	㊤　㊥鉄分が付着している。
86	3号・17号溝	(28.0)	9.9	3.0 ／ 4.0	2.5×不明	6×4	不明	安山岩	㊫片べりしている。副溝は不鮮明。㊤
87	5号溝	(25.9)	5.7	不　明	1.7以上	不明	不明	安山岩	㊫上縁の内側は緩い傾斜をなす。ふくみは他に比して大きい。㊥くぼみから外縁に達する小孔がある。外縁での径2.5cm。
88	5号溝	(28.0)	9.3	3.0 × 5.0	0.6×不明	不明	不明	安山岩	㊫副溝自体の幅があり、間隔も広い。㊨すり合わせ面と接している。
89	5号溝	(30.0)	7.2	3.5 ／ 3.5	1.9×不明	6×4以上	不明	安山岩	㊫分画は不均等、副溝の刻みは丸味がある。
90	7号溝	不明	不明	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊫破片。

No.	出土地点	直径(cm)	高(cm)	上縁高さ/幅(cm)	ふくみと供給口(cm)	分画×溝数	供給口の径	石材	特徴　㊟は形状　㊟は換手穴　㊟は整形　㊟は火熱を受けていること　㊟は備考を表す
91	7号溝	不明	9.2	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊟破片、副溝の間隔1.8cm。
92	7号溝	30.2	10.5	不　明	0.5×不明	不明	不明	安山岩	㊟破片。副溝の間隔2.3cm。
93	7号溝	28.6	11.7	3.5 ／ 3.4	不明	不明	不明	安山岩	㊟上縁部のみ。
94	7号溝	不明	不明	4.0 ／ 3.5	不明	不明	不明	安山岩	㊟上縁部のみ。
95	7号溝	不明	不明	4.7 ／ 2.0	不明	不明	不明	安山岩	㊟上縁部のみ残存。
96	8号溝	(31.2)	9.2	3.9 ／ 3.1	2.4／不明	6×3以上	4.0	安山岩	㊟くぼみに加工痕、ふくみが大きい。㊟
97	8号溝	(24.0)	8.3	3.3 ／ 3.3	不明	不明	不明	安山岩	㊟すり合わせ面に接している。
98	8号溝	不明	不明	2.0 ／ 3.7	不明	不明	不明	安山岩	㊟上縁部の破片。
99	8号溝	(21.4)	〔7.1〕	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊟破片。
100	8号溝	(31.8)	〔8.7〕	不　明	不明	6×5？	不明	安山岩	㊟副溝の間隔は2.6cm。㊟
101	8号溝	(22.6)	不明	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊟すり合わせ面の破片。
102	8号溝	(22.0)	不明	2.3 ／ 3.5	不明	不明	不明	安山岩	㊟一部が残存。
103	8号溝	不明	不明	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊟すり合わせ面の破片。
104	8号溝	(25.6)	7.5	2.7 ／ 3.0	0.4×不明	不明	不明	安山岩	㊟材質が粗く分画数の判定が困難。
105	10号溝	(27.4)	14.3	2.6 ／ 3.0	1.2×不明	6×5	不明	安山岩	㊟臼の径に比して奥行がなく径も小さい。
106	14号溝	(31.8)	〔10.0〕	不　明	2.0×不明	6×不明	不明	安山岩	㊟副溝の間隔は広い。
107	15号溝	(26.4)	不明	3.4 ／ 3.0	不明	不明	不明	安山岩	㊟上縁部の破片。
108	表採	(27.4)	9.7	2.6 ／ 2.8	1.0×不明	不明	2.6	安山岩	㊟副溝の間隔は3.0cm。
109	表採	(27.2)	10.9	2.0 ／ 3.2	0.4×不明	不明	不明	安山岩	㊟ものくばりの一部が残存。
110	表採	不明	不明	不　明	不明	不明	不明	安山岩	㊟副溝に深く明瞭に刻んである。
111	20号井戸	(29.4)	〔6.5〕		不明	不明		安山岩	㊟分画数不明。㊟
112	20号井戸	(27.8)	11.2		0.8	6×7		安山岩	㊟副溝の幅は1.5～2cm。㊟　㊟副溝内には付着物がある。すり合わせ面には敲打による凹穴があり、二次利用が考えられる。
113	20号井戸	(27.9)	10.0		0.3	6？×不明		安山岩	㊟ふくみは小さい。㊟
114	24号井戸	24.6	13.0		1.4	6×3～4		安山岩	㊟分画は6分画であるが不均等である。㊟
115	25号井戸	(27.5)	10.8		1.5	6		安山岩	㊟円形でない。原型は6分画と考えられるが分画は著しく不均等である。㊟
116	25号井戸	(28.2)	〔13.0〕		不明	不明		安山岩	㊟破片。㊟
117	29号井戸	(23.8)	〔7.7〕		不明	不明		安山岩	㊟破片。すり合わせ面は著しく磨滅。㊟
118	38号井戸	不明	〔10.3〕		不明	不明		安山岩	㊟破片。
119	40号井戸	(30.2)	7.3		1.9	不明		安山岩	㊟芯棒穴は矩形か？すり合わせ面は磨耗。
120	43号井戸 3号溝	33.0	10.2		0.8	不明		安山岩	㊟芯棒穴の原型は矩形の可能性がある。分画数は不明瞭であるが、副溝は刻みなおしがみられる。
121	43号井戸 46号井戸	28.0	10.8		2.4	6×4		安山岩	㊟分画は2区画が明瞭に残存するが他は磨滅している。ふくみは他に比して大きい。㊟46号井戸出土片は火熱を受けている。
122	3号溝 43号井戸	26.4	8.2		1.7	不明		安山岩	㊟完形。㊟
123	44号井戸	(30.4)	〔5.8〕		不明	6？×8？		安山岩	㊟破片。目たてをなおした痕跡があり、旧い副溝が残存している。㊟
124	44号井戸	不明	不明		不明	不明		安山岩	㊟破片。副溝の間隔は1.7cm。
125	44号井戸	不明	11.2		不明	不明		安山岩	㊟副溝の幅は2.8cm前後でややばらつく。
126	44号井戸	(22.6)	〔6.6〕		不明	不明		安山岩	㊟破片。㊟

No.	出土地点	直径(cm)	高(cm)	上縁高さ/幅(cm)	ふくみと供給口(cm)	分画×溝数	供給口の径	石材	特徴 ㊧は形状 ㊥は換手穴 ㊨は整形 ㊤は火熱を受けていること ㊦は備考を表す
127	44号井戸	(29.0)	10.0		0.6	不明		安山岩	㊧すり合わせ面に分画はみられない。
128	46号井戸	(26.3)	7.9		1.0	6？×不明		安山岩	㊧副溝の幅は大きく一定していない。芯棒穴は上面で2.5cmの矩形、下面は円形を呈する。
129	47号井戸	不明	不明		0.1	不明×3以上		安山岩	㊧すり合わせ面は非常に粗い。底縁部は砥石に利用されている。
130	52号井戸	(26.1)	9.6		0.8	不明		安山岩	㊤
131	52号井戸	(26.9)	5.0		0	不明		安山岩	㊧ふくみがほとんどない。㊤
132	54号井戸	(29.9)	6.1		0.6	6×3以上		安山岩	㊤
133	66号井戸	(20.4)	〔5.8〕		不明	不明		安山岩	㊧破片。
134	66号井戸	不明	不明		不明	不明			㊧破片。副溝の間隔1.7cm。
135	49号土壙	28.2	12.0		1.8	6×6～7		安山岩	㊧分画の主溝と副溝は方向がややずれている。また、目たてなおしの工具痕がある。㊤
136	81号土壙	(27.0)	〔5.9〕		不明	不明		安山岩	㊧片べりが著しく残存部分で1cm以上の差。㊤
137	3号溝	(37.1)	7.3		1.1	不明		安山岩	㊦底面には敲打によるくぼみあり。
138	3号溝	(28.2)	〔10.5〕		不明	不明		安山岩	㊧破片。㊤
139	3号溝	不明	不明		不明	不明		安山岩	㊧破片。㊤
140	5号溝	(29.8)	6.5		1.1	6×7		安山岩	㊧すり合わせ面はざらつきが強い。
141	5号溝	(29.8)	6.2		0.9	6×5以上		安山岩	㊧すり合わせ面の縁端部は凹面レンズ状に反りかえっている。副溝は2.0cmの間隔でほぼ一定している。㊤
142	5号溝 46号井戸	(35.7)	7.0		0.8	不明		安山岩	㊧すり合わせ面は粗い。㊤側面のみ。
143	5号溝	(27.5)	(10.9)		1.7	6×4.6		安山岩	㊧6分画であるがやや不均等である。また、主溝は中心に向って刻まれていない。㊤
144	7号溝	(28.6)	不明		不明	不明		安山岩	㊧破片。
145	7号溝	不明	〔10.0〕		不明	不明		安山岩	㊧破片。㊤
146	7号溝	(18.6)	〔10.4〕		不明	不明		安山岩	㊧破片。㊤外面のみ。
147	8号溝	不明	不明		不明	不明		安山岩	㊧破片。
148	8号溝	(27.9)	7.4		1.1	6×4		安山岩	㊧副溝の幅は4mm前後、2.5cmの間隔で刻まれる。㊤ ㊦炭化した付着物がある。
149	8号溝	(27.9)	7.0		1.5	6×7以上		安山岩	㊧副溝は目たてなおしがなされ、旧い刻みが残っている。
150	8号溝	(28.2)	不明		不明	不明		安山岩	㊧下半部の破片。㊤
151	9号溝	(29.1)	7.2		1.8	不明		安山岩	㊧すり合わせ面の磨滅が著しい。底面は削り込まれており、工具痕が残る。
152	15号溝	不明	不明		不明	不明		溶結凝灰岩	㊧破片。
153	表採	不明	不明		不明	不明		安山岩	㊧破片。㊤
154	表採	(28.8)	11.4		0.2	不明		安山岩	㊧すり合わせ面は磨耗が顕著。
155	表採	(32.3)	11.1		2.3	不明		安山岩	㊧片べりが著しい。㊤？
156	表採	(30.4)	10.0		1.0	不明		安山岩	㊤
157	表採	(27.8)	12.4		不明	不明		安山岩	㊤

6　石 擂 鉢　（第60図，図版33図）

本遺跡出土の石擂鉢は総数11点で、その全てが破片である。

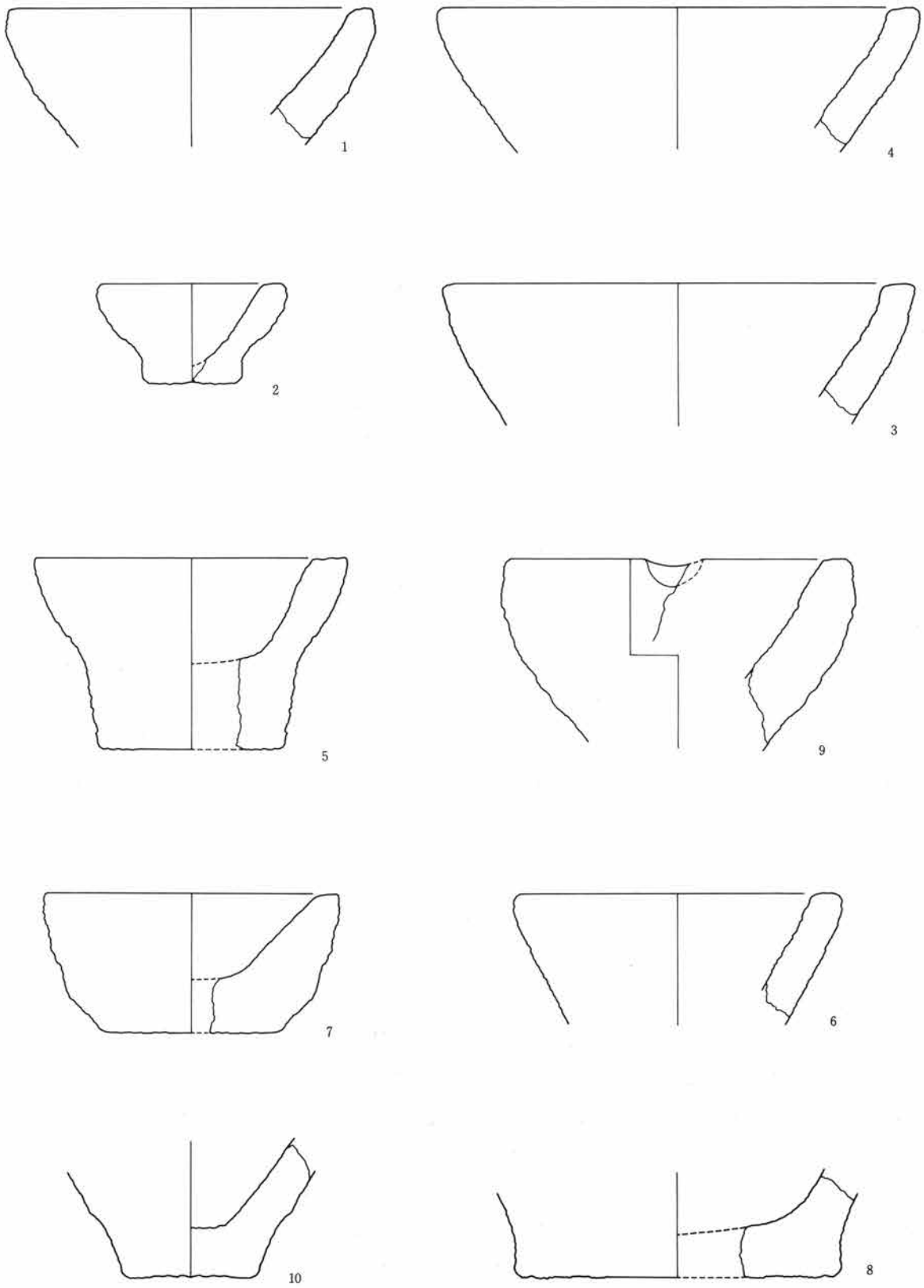
器形には大小があり、同じ粉砕、擂りおろしの中で対象物の違いによる使い分けがあったことがわかる。特に２の法量は他に比して小さい。外面はやや丸味をおび金属工具の敲打による粗仕上げで、いわゆる「ハツリ」痕が残っている。特に２のそれは顕著である。口縁部の先端は平坦で外面に比してていねいな器面調整が施されている。また、３・４・７の口縁部平坦面には磨擦痕が認められ外面の整形と明らかな意識の相違があることがわかる。内側の使用面には回転による磨擦痕があり、下位に至るほどそれが顕著である。底部は平底で厚く堅固な形状を呈する。

９は基部のみの残存であり、不明な点も多いが片口がもうけられていたと思われる。石擂鉢について多くの類例にあたっていないが長楽寺遺跡出土[註1]のものに同様の造り出しのあるものがある。また、前橋市下東西遺跡[註2]の溝からは完型品が出土している。造り出しの片口は幅５㎝程でさほど深いつくりではなく液体状の物質を導く為に主体的に機能したとも考えられないものである。また、これには片口と相対する口縁部先端の外面に把手が造り出されていた。

註１　参考文献９　大江正行他
註２　1980・1984年度と群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査を実施した。未報告資料であり担当者の教示を受けた。

表10　石 擂 鉢 一 覧

No.	出土位置	口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	石質	特徴　形は形状　整は整形　使は使用面の状態　備は備考を表わす
1	27号井戸	(30.5)		〔10.8〕	安山岩	形破片。口縁部の先端は平坦。整外面は敲打による仕上げ。使内面の全て強い磨擦痕。
2	40号井戸	(15.1)	(8.0)	8.1	安山岩	形残存⅓。内面の断面形は円錐状を呈する。外面には台部がつく。平底。整外面は敲打による粗仕上げ。使磨耗は特に顕著でない。
3	46号井戸	(39.2)		〔11.3〕	安山岩	形破片。使内面の磨擦痕が顕著である。備石質は他に比してより多孔質。火痕あり。
4	53号井戸	(39.4)		〔11.0〕	安山岩	形破片。使内面の磨擦痕が顕著である。備火痕。
5	56号井戸	(26.1)	(15.6)	15.9	安山岩	形残存¼。底部は８㎝前後と厚く平底で、径も口径に比して小さい。整外面は敲打を加えた後やや研いている。使下半の磨擦痕が顕著である。備火痕。
6	126号土壙	(27.4)		〔10.2〕	安山岩	形破片。使磨擦痕は特に顕著でない。
7	399号土壙	(24.5)	(15.5)	〔11.6〕	安山岩	形破片。口径に比して器高が低い。器肉も厚い。口縁部先端の平坦面には工具痕がある。平底。使内面の全面に磨擦痕が顕著である。備火痕、炭化物が付着する。
8	３号溝	(29.4)	(26.0)	〔8.4〕	安山岩	形底部破片。平底。整敲打による仕上げ。使内面は磨擦痕が顕著。備火痕。
9	３号溝 10号溝	(28.1)		〔15.3〕	安山岩	形４片が接合。残存⅓。つくり出しの片口がつくが先端は欠損する。整外面は敲打による仕上げ。使内面の下⅔には磨擦痕顕著。
10	10号溝	(19.8)	(11.3)	〔11.0〕	安山岩	形底部破片。平底。整敲打による仕上げ。使磨擦痕はあまり顕著でない。



第60図 石 擂 鉢

7　砥　　石　（第61～65図，図版34図）

本遺跡出土の砥石は総数51点、遺構別の出土数は溝23点、井戸14点、土壙７点である。

これらの砥石は研主体（研磨を用する物体）の大きさや研磨の工程にあわせて形状の大小や石材が選択されるようである。形状や石材を要素に本遺跡の砥石を分類すると２型式４分類することが可能と思われる。１は手持ちの砥石、２はいわゆる置き砥石である。

１の手持ちの砥石は形状から２分類ができる。Ａは従来から多くの類例がみられる糸巻状を呈するものである。砥石の研磨減りについては「右利きなら砥石の軸に合わせ奥側左肩から手前右肩にかけて研磨減りが生じる（中略）悪い場合には中央部分の凹みを利き癖による研磨りが生じいわば糸巻状の形状となる」[註]と既に述べられているところであり、Ａはいわゆる「砥ぱなし」の砥石で、13に代表されるものである。使用面の最大幅は最も大型の23でも72㎜であり、研主体は小型のものが主体であったと思われる。

もう一つは１や２に代表されるような長軸の断面が三角形の形状を呈するものでこれをＢとする。特徴は形状と使用面の状態にある。Ａの使用面は凹状をなしており、このことから研主体の面も凹面を呈していたと考えるのに対し、Ｂの使用面は平滑あるいはやや凸状を呈しており、研主体も平滑あるいは凸面を呈していたと考えられる。これらＢの砥石はいわゆる「砥石合わせ」に使用されていたと思われる。平滑な面を有するものほど有能な砥石として使用されていたと思われる。長期間研磨に使用した結果、37に代表されるものが２のような偏平な三角形を呈するものに変化していくと思われる。

石材には流紋岩、安山岩が用いられている。ともに、黒色のやや硬い鉱物粒を含有するが研主体に大きな影響はないと考える。これらは現在使用されている砥石の中で名倉から鳴滝砥に対応する硬度であると思われるが使用面には研主体による強い擦痕が残存するものが少ない。このことから研主体は平滑な鉄製品、あるいは銅のように鉄よりも軟質の金属、あるいは木製品を類推することができる。また、大きさはＡ同様のものが中心であろう。長軸に直交する刃傷も砥石の特徴として指摘することができるが、これは研主体の刃部等を研磨する前に調整した場合に生ずる痕跡の可能性が考えられる。

２の置き砥石のうち39をＡとする。台にセットして研磨するもので残存面は台に接する面と思われる。側面にも擦痕があり多少は使用されている。仕上げ砥である。小口には原石面を残す。砥石本体を製作した時のものと思われる沈線状の加工痕を残す。石材は粘板岩で劈開性が強い。

Ｂは41～51で荒砥である。棒状を呈し、小口に自然面を残すものもある。使用面は４～６面あり、いずれもやや凹状の彎曲をなす。石材は全て安山岩であるが石質から黒色で多孔質のもとと暗灰色あるいは黒色を帯びやや硬度のあるものに細分することも可能である。この２種類の安山岩の利用は単純な石材の相違であるのか研主体や製作工程における使用の段階の相違にまでかかわってくるのかは不明である。41や44の使用面には金属器等による敲打によって生じたと考えられる痕跡があり、使用面に微妙な起伏が表われている。これは研磨減りを調整した痕跡とも考えられよう。

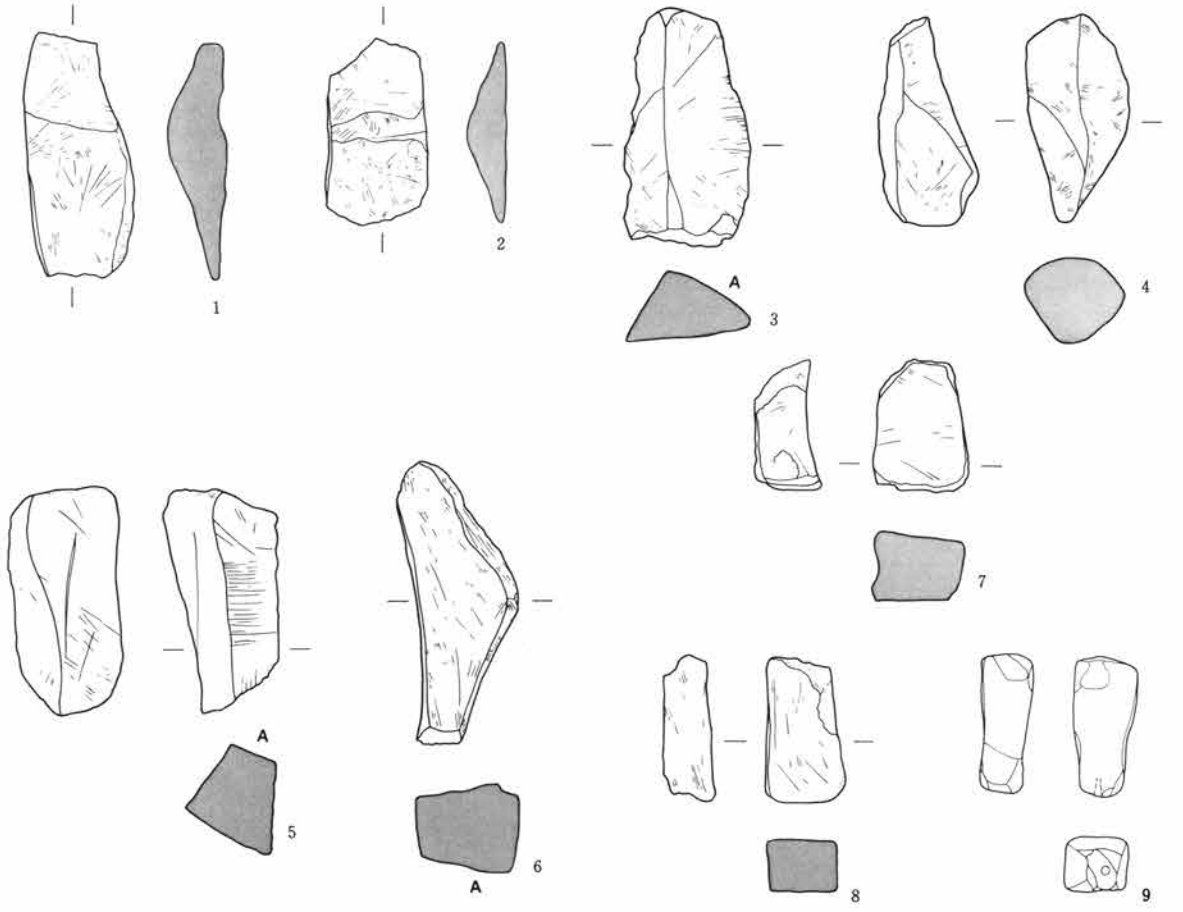
49の未使用面には細長い凹みがある。このことからこの砥石は臼の破片を再利用した可能性が考えられる。

本遺跡出土の砥石のうち、１―Ｂ類は15個体出土している。使用の時間幅を決定することが困難な遺物であるから単純な比較は危険であるが、他の遺跡において同様の形状の砥石がまとまって出土している例をみない。砥石は金属を中心とした研主体に対応して存在し、金属器の生産・加工に大きくかかわっている。今後は砥石とともに研主体の技術面での検討が必要となるであろう。

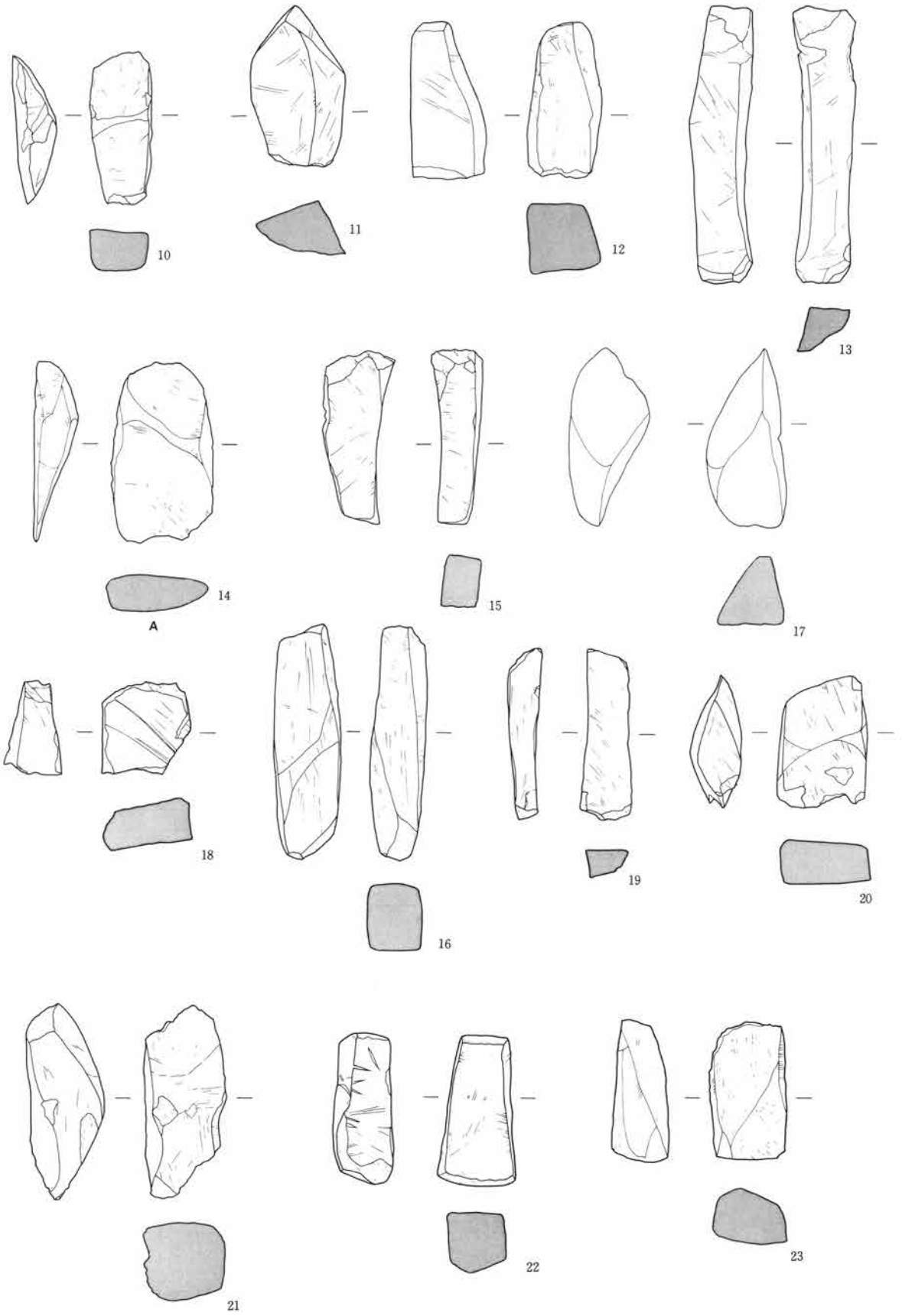
註　大江正行　「砥石」『八幡原Ａ・Ｂ　上滝　元島名Ａ』群馬県教育委員会　1981より引用

表11 砥 石 一 覧

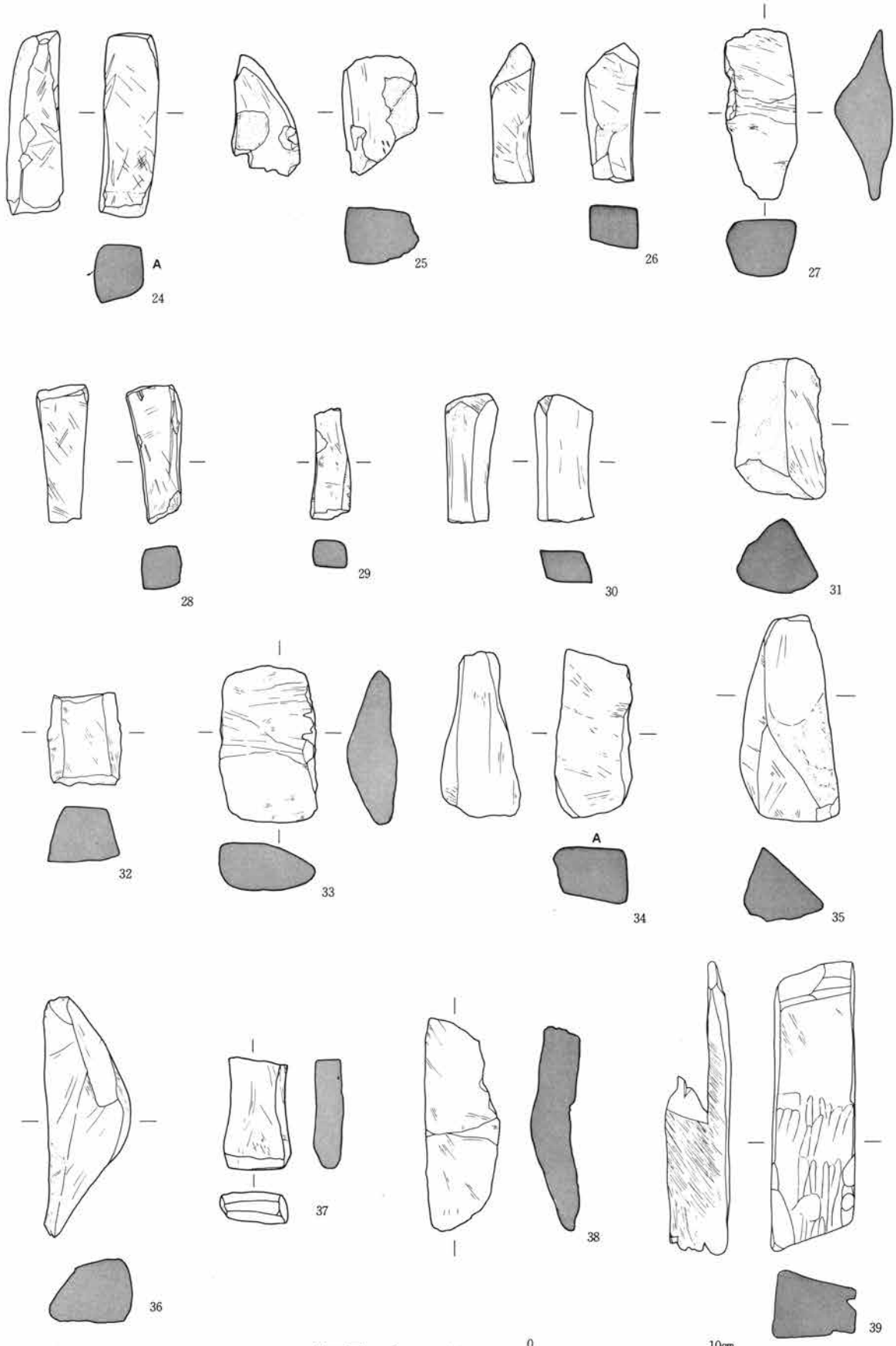
No.	出土遺構名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	特　徴　形は形状　使は使用面の数　擦は擦痕　石は材質　火色は火熱、変色を表わす
1	2号井戸	9.8	4.3	2.3	形1－B　使4　擦長軸方向に強い擦痕　石安山岩　鉱物粒は大小　硬軟の差が大きい　火色スス付着
2	3号井戸	7.4	4.1	1.5	形1－B　使3　石石英安山岩　白く硬い鉱物粒を含む
3	46号井戸	〔9.5〕	5.2	2.7	形1－B　使3　擦Aに短軸方向の擦痕　石安山岩　やや大粒の黒色鉱物粒を含む　火色
4	46号井戸	9.3	3.8	3.4	形1－B　使4　擦弱い擦痕が残る　石安山岩　硬い黒色鉱物粒を含む　付タール状の付着物
5	46号井戸	〔9.0〕	4.1	3.6	形1－A　使5　擦Aに短軸方向の強い擦痕　石石英安山岩
6	47号井戸	〔11.1〕	3.5	4.1	形1－B　使3　擦2面にあり、特にAは沈線状をなす　石安山岩　硬い黒色の鉱物粒を含む　火色表面は黒色味を帯びる
7	49号井戸	〔5.3〕	3.7	2.3	形1－A　使　石石英安山岩　鉱物粒は整っている　色黒色味を帯びる
8	53号井戸	5.8	2.8	2.1	形1－A　使4　端部にも小さな使用面がつくられている　石流紋岩　鉱物粒は細い
9	60号井戸	5.5	2.2	1.8	形1－A　Aの面には径2㎜、深さ7㎜程の穿孔が施されている　使5　石流紋岩
10	456号土壙	9.8	3.3	2.0	形1－B　使5　石安山岩　黒色の硬い鉱物粒を含む　火
11	59号土壙	9.3	4.6	2.9	形1－B　使5　石石英安山岩　全体に鉱物粒は粗い　付着物あり
12	22号土壙	8.1	3.7	3.7	形1－A　一方を欠失する　使用面はねじれている　使4　擦短軸方向にある　石安山岩　黒色の硬い鉱物粒を含む　火色黒色味を帯びる
13	139号土壙	14.4	2.5	3.1	形1－A　使3　擦短軸方向の擦痕　石石英安山岩　鉱物粒子は大きさ、硬さとも整っている



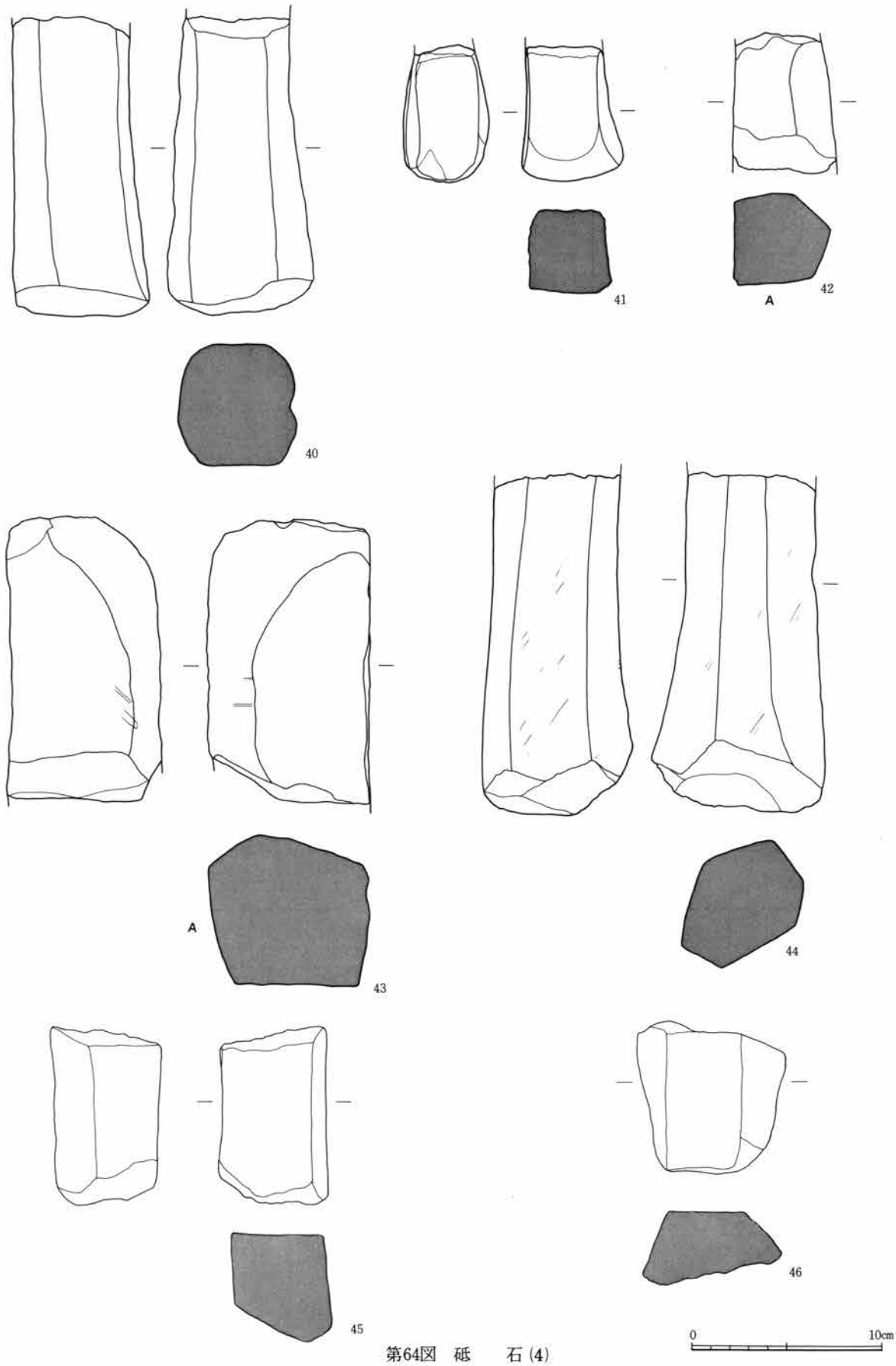
第61図　砥　　石 (1)



第62図　砥　　石(2)

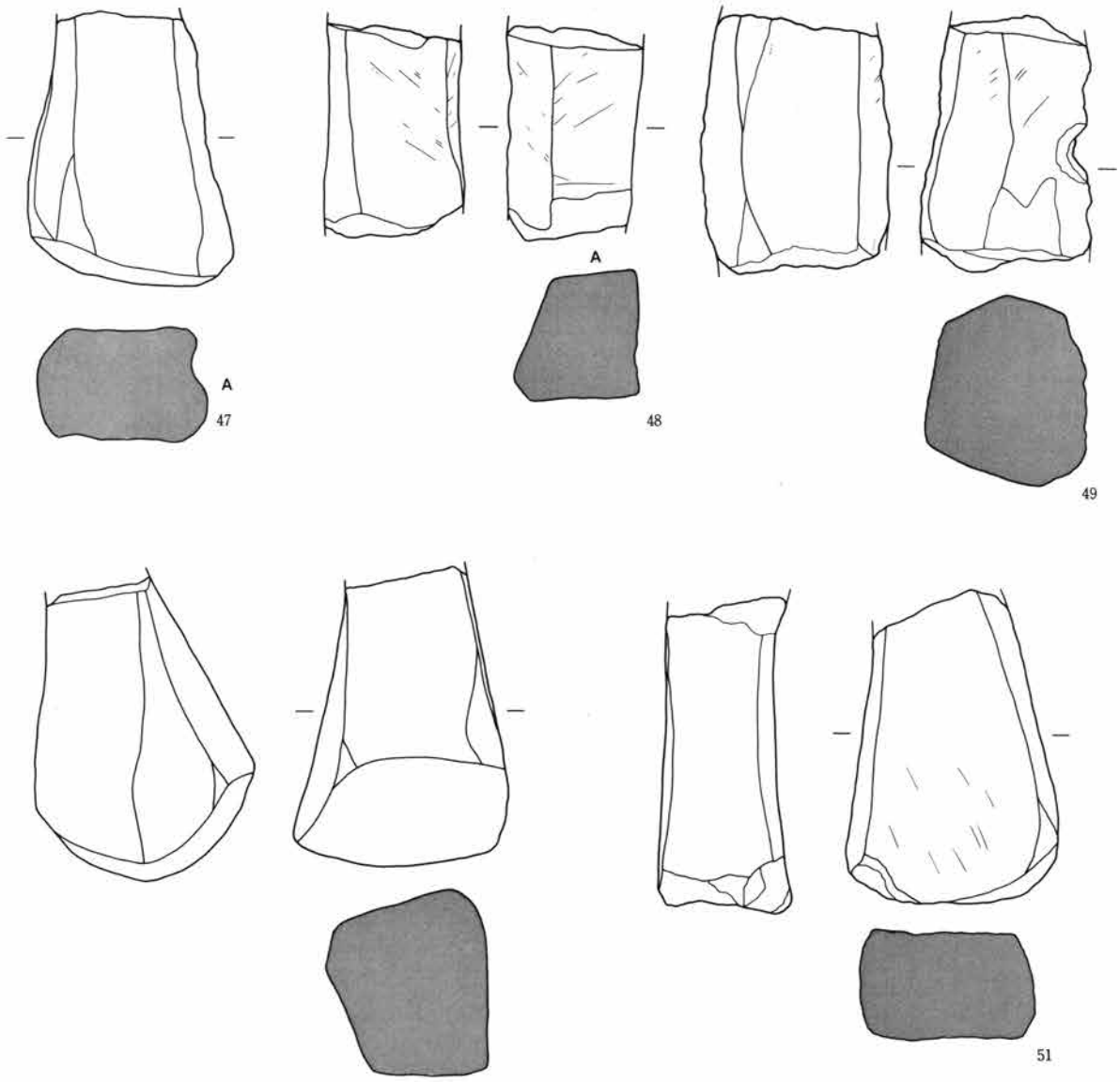


第63図　砥　　石 (3)



第64図　砥　　石(4)

No.	出土遺構名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	特　徴　㊐は形状　㊙は使用面の数　㊚は擦痕　㊗は材質　㊋㊊は火熱、変色を表わす
14	142号土壙	9.4	5.2	1.9	㊐1－B　Aに弱い段差がある　㊙4　㊚短軸方向に弱い擦痕　㊗安山岩　黒色鉱物粒　㊋
15	314号土壙	8.9	3.0	2.0	㊐1－A　㊙3　㊚弱い擦痕がある　㊗石英安山岩
16	454号土壙	9.2	3.2	3.8	㊐1－A　㊗安山岩　黒色の硬い鉱物粒を含む　㊋
17	8号溝	〔4.8〕	4.6	2.2	㊐1－A　㊙4　㊚2面にある　㊗流紋岩　鉱物粒はやや粗い
18	6号溝	〔12.2〕	3.4	2.9	㊐1－A　㊙5　㊚弱い擦痕がある　㊗安山岩　黒色の硬い鉱物粒あり　㊋
19	7号溝	〔8.8〕	2.3	1.5	㊐1－A　㊙4　㊚短軸方向にある　㊗安山岩　鉱物粒は大小硬軟の差が大きい　㊚付着物
20	7号溝	〔7.1〕	4.4	2.3	㊐1－B　㊙6　㊚長軸方向に弱い擦痕がある　㊗石英安山岩　鉱物粒は細かいが整っている
21	7号溝	10.0	4.4	3.9	㊐1－B　㊙5　使用面はねじれている　㊗安山岩　硬い黒色の鉱物粒を含む　㊋㊊スス付着
22	7号溝	7.8	3.1	3.0	㊐1－A　㊙4　㊚短軸方向に強い擦痕　研主体を整えた痕跡と考えられる　㊗流紋岩　鉱物粒は大きさが整っている



第65図　砥　　石 (5)

No.	出土遺構名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	特　徴　㊧は形状　㊨は使用面の数　㊩は擦痕　㊫は材質　㊬㊭は火熱、変色を表わす
23	7号溝	7.2	4.0	2.7	㊧1－A　㊨6　㊩長軸方向に弱い擦痕　㊫安山岩　鉱物粒はやや細かいが整っている　㊬㊭
24	7号溝	9.4	2.9	2.6	㊧1－A　㊨4　㊩弱い擦痕あり　Aの面には長軸方向に沈線上の擦痕　㊫流紋岩　㊬
25	8号溝	6.7	3.8	2.8	㊧1－B　㊨3　㊫砂岩の補獲岩を有する流紋岩　㊬表面が変質し剥離が著しい
26	9号溝	7.2	2.6	1.9	㊧1－A　㊨4　㊩弱い擦痕が残る　㊫安山岩
27	10号溝	6.8	2.1	2.2	㊧1－A　㊨5　端部も使用面となる　㊫流紋岩
28	10号溝	〔8.7〕	3.8	3.4	㊧1－B　㊨4　使用面がねじれている　㊩弱い擦痕がある　㊫石英安山岩　鉱物粒は硬軟が混る
29	14号溝	〔5.6〕	1.7	1.8	㊧1－A　両端を欠失　㊨4　面の角には面取りのような狭い幅の使用面もある　㊫安山岩　硬い鉱物粒を含む
30	14号溝	6.6	2.8	1.7	㊧1－A　Aの面には角を打ち欠いたようなキズが残る　㊨3　一面に粗い擦痕　㊫石英安山岩　鉱物粒にやや硬軟あり
31	14号溝	7.3	4.0	3.9	㊧1－A　一端を欠失する　使用面の他は舟底状に丸味を帯びる　㊨1　㊩弱い　㊫安山岩　鉱物粒は全体的に粗い
32	14号溝	4.9	3.8	2.8	㊧1－A　両端を欠失する　㊨5　㊫安山岩　㊬㊭黒色味帯びる
33	21号溝	8.2	5.0	2.7	㊧1－B　完形　横は自然面　㊨2　㊩短軸方向の擦痕　㊫石英安山岩　鉱物粒はやや細かく整っている　㊬黒色の付着物が多い
34	R－8G	8.6	3.9	3.0	㊧1－A　㊨3　㊩Aの面に短軸方向に擦痕あり　㊫安山岩　黒色の硬い鉱物粒あり　㊬
35	U－19G	10.7	4.3	4.2	㊧1－A　㊨4　㊩自然面に残る　㊫安山岩　硬軟大小の鉱物粒を含む
36	U－19G	12.4	3.4	4.3	㊧1－B　㊨5　㊩山形の頂部に短軸方向の擦痕　㊫安山岩　白色のやや硬い鉱物粒を含む　㊬付着物あり
37	表　採	〔5.9〕	3.5	1.4	㊧1－A　㊨6　端部には面取がなされたように幅の狭い使用面がある　㊫安山岩　黒色の硬い鉱物粒を含む　㊬
38	表　採	11.0	3.9	2.7	㊧1－B　㊨4　㊫安山岩　黒色の硬い鉱物粒を含む
39	7号溝	8.8	4.4	3.4	㊧2－A　㊨3　㊩弱い擦痕あり　㊫粘板岩　鉱物粒は細かく良好
40	2号井戸	〔15.5〕	6.4	6.1	㊧2－B　㊨6　㊫安山岩　㊬鉄分が付着する
41	13号井戸	7.1	4.6	4.6	㊧2－B　㊨4　㊫安山岩　粒子が粗い
42	13号井戸	〔16.0〕	8.9	8.3	㊧2－B　㊨4　㊫安山岩　Aには使用面製作時の擦痕がある
43	37号井戸	〔14.9〕	8.2	7.8	㊧2－B　㊨7　㊫安山岩　㊬Aには使用面荒仕上げ時の工具痕が残る
44	40号井戸	〔7.3〕	4.9	5.2	㊧2－B　両端は欠失する　㊨5　㊫安山岩　鉱物粒は大きく粗い
45	40号井戸	17.6	6.8	6.0	㊧2－B　㊫安山岩　㊬鉄分が付着する
46	3号溝	11.4	(5.0)	(7.6)	㊧2－B　一部自然面を残す　㊨2　凹状に強く彎曲する　㊫安山岩　㊬鉄分凝集が著しい
47	7号溝	11.0	6.8	8.1	㊧2－B　㊨4　㊫安山岩　㊬Aは未使用面、溝状の凹みがあり、臼のものくぼりの様にも思われる
48	3号溝	9.3	5.2	5.9	㊧2－B　Aの面は使用面に段がつく　㊨5　㊫安山岩
49	7号溝	〔7.9〕	6.5	3.4	㊧2－B　㊨2　㊫安山岩　㊬破片
50	8号溝	〔12.3〕	7.5	8.0	㊧2－B　㊨6　角を面取りするよう使用面をつくっている　㊫安山岩　㊬鉄分が付着する
51	表　採	〔13.2〕	7.8	4.8	㊧2－B　㊨6　㊫安山岩　㊬鉄分が付着する

8 板　　碑 （第66～70図，図版35）

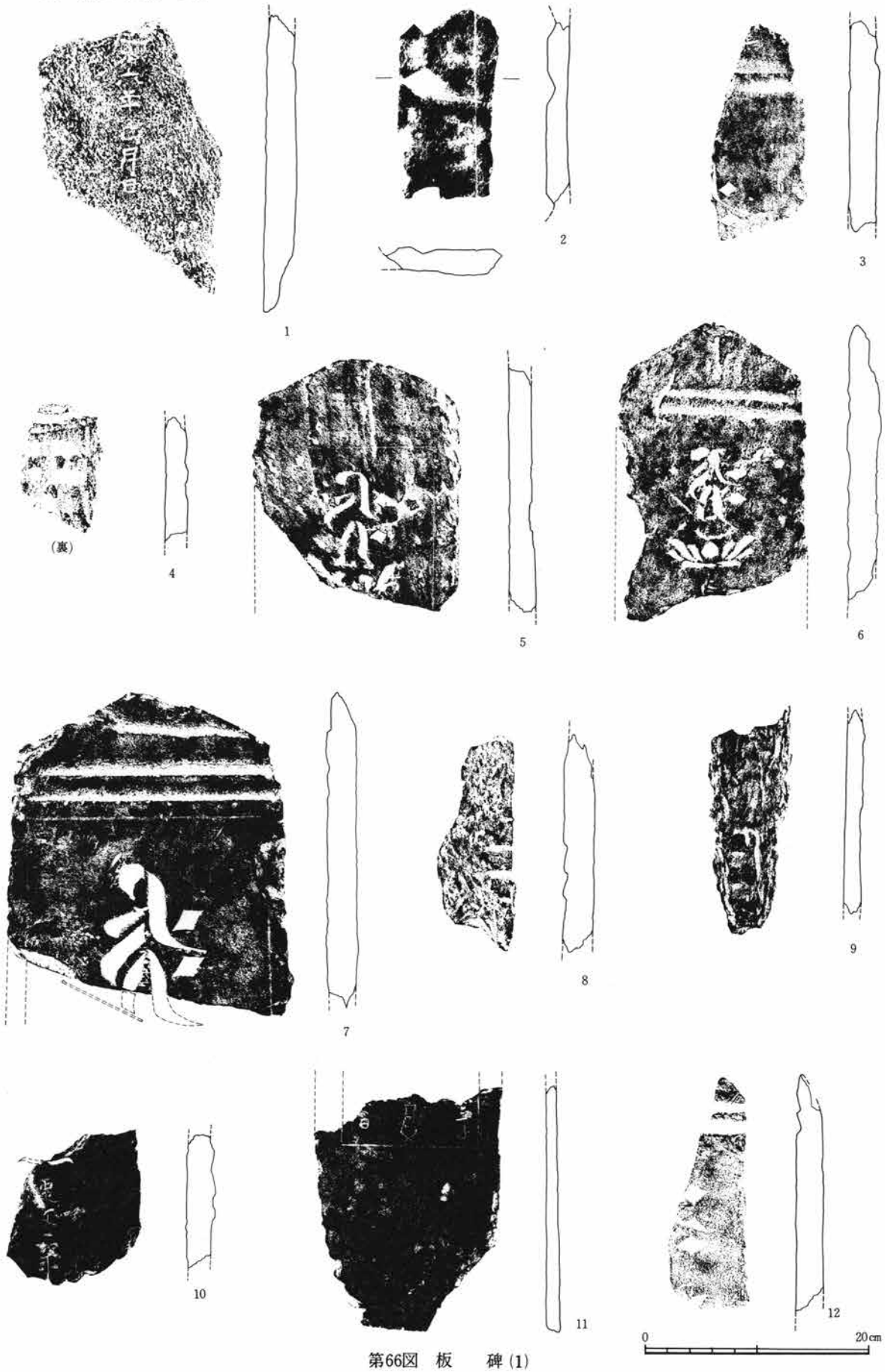
1．はじめに　本遺跡から出土した板碑の総数は破片を含めるとおよそ258基にもおよぶ。出土したものの多くは破損し、紀年銘の残るものは33の建武元年（1334）しか無く、造立年代を確定できないが、この出土量は一遺跡のものとしては大変多く、これは本遺跡の性格の一端を物語るものと思われる。また、周辺地域や県内の板碑研究にとっても今後貴重な資料になるものであろう。本稿では出土した板碑の造立年代を推定し、その出土状況などから遺跡の年代・性格等を考察する。

2．石材について　本遺跡出土板碑の石材はすべて緑泥片岩（青石）である。これを細分すれば石英・雲母等の含有量から若干の材質差を認められるが、このことで産出地を多数の地域に求めることはできず、同一地域からの採石でもその層位の差から若干の材質差は生じるものであり、本遺跡出土の板碑は同一地域で産出された石材を用いている可能性が高い。

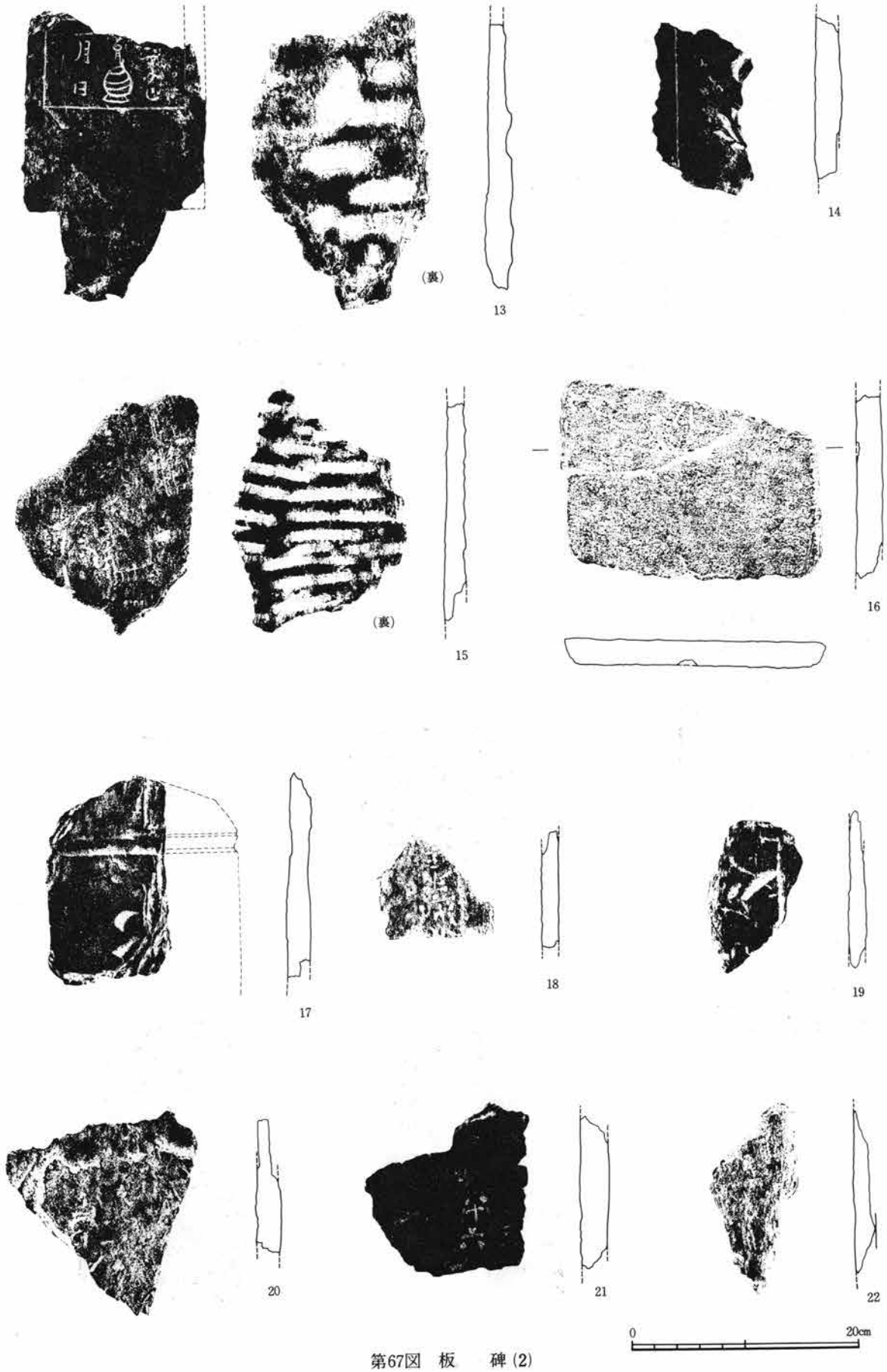
3．造立年代と形状について　造立年代については先に述べたように紀年銘の残るものが少なく、形状から推定するしかない。板碑の造立年代（製作年代）は、一般的に二条線の有無、頂部山形の角度、全長と全幅の比率、種子の形状及び刻字法、蓮座（蓮台）の形状、文字の書体及び刻字法などから推察される。本遺跡出土の板碑を見ると、大きさ、頂部山形の角度、種子の形状、蓮座の形状等がさまざまであることからこれらの板碑は短期間に造立されたものではなく、それぞれ時間差をもうけて造立されたことがわかる。たとえば、26・50の板碑を見ると二条線・種子のキリーク・蓮座共に薬研彫り（断面がV字型）で深く刻まれ、破損のため全長は不明だが、種子の大きさから見て他の板碑より大型である。これらの板碑は本遺跡出土の板碑中最も古い14世紀前半頃の造立であろうと思われる。それにくらべ、27・40・42の板碑は二条線が退化又は、線刻化し、種子は竹彫り（断面がU字型）で蓮座も図様化（簡略化）しており、彫り込みも浅い。また、大きさも小型化しており、本遺跡出土の板碑中最も新しい15世紀前半から15世紀末にかけて造立されたものと思われる。以上のことから本遺跡出土の板碑は、14世紀前半から15世紀末にかけて造立されたものと考えたい。また、年代と造立量の関係を見ると造立量の一番多い時期は14世紀中頃から15世紀前半頃と思われ、全体の半数近くがこの時期に造立されたものといえる。これは板碑造立のピーク時とほぼ一致する。

4．板碑の破損状態と出土状況について　本遺跡出土の板碑の特徴として、その破損状態があげられる。板碑はその形状と石材の関係上割れやすく表面も磨滅・剝離しやすい。本遺跡出土の板碑も破損しているが碑面は磨滅が極めて少なく、欠損部分が検出されていない。このことから造立後長い年月風雨にさらされることなく短期間のうちに故意に廃棄されたものと考えられる。このことは特に14世紀の造立と考えられる板碑に顕著に見られる。

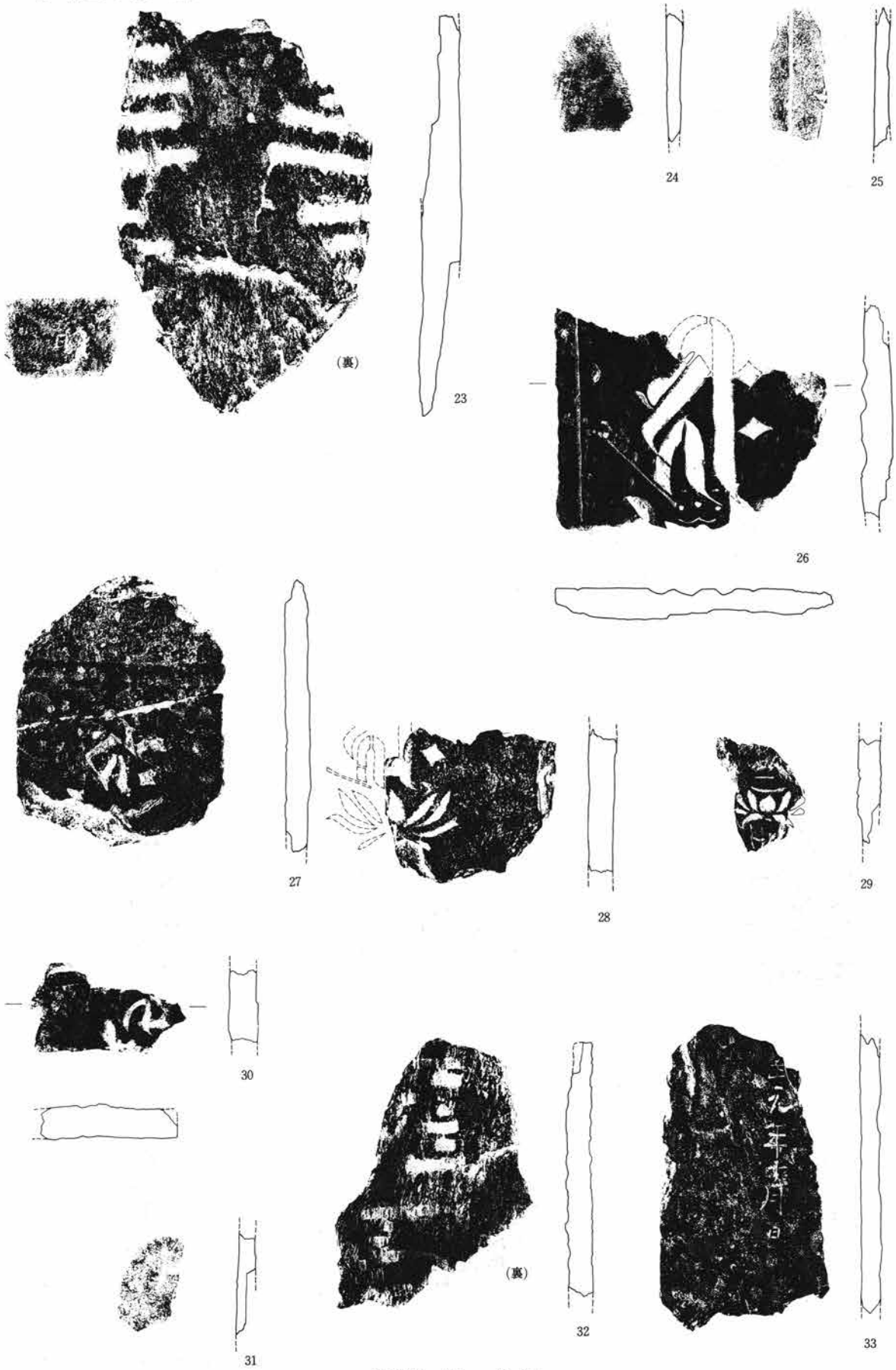
5．まとめ　板碑を造立した人々は、板碑の大小にかかわらず富有者階層（土豪等）の人間であったと考えられる。なぜならば、板碑を産地から購入し運搬できる経済的基盤と板碑を造立し供養を行うという仏教思想の両方を持ち合わせる人間でなければならないからである。このことから板碑が造立された地域の付近にはこの階層の人間が居住していたことになる。特に本遺跡の居館的な性格を考えると、板碑を造立した人々、すなわち居館・屋敷を造営した人々の社会的階層を富有者階層に限定できるものと思われ、屋敷を造営した年代を板碑に求めるならば、14世紀前半から15世紀末頃と考えられる。また、先に述べたように14世紀頃の板碑が造立後短期間に廃棄された様相を示していることから14世紀から15世紀にかけて、支配勢力の交替のような何らかの異変があったことも推察されよう。



第66図　板　　碑 (1)

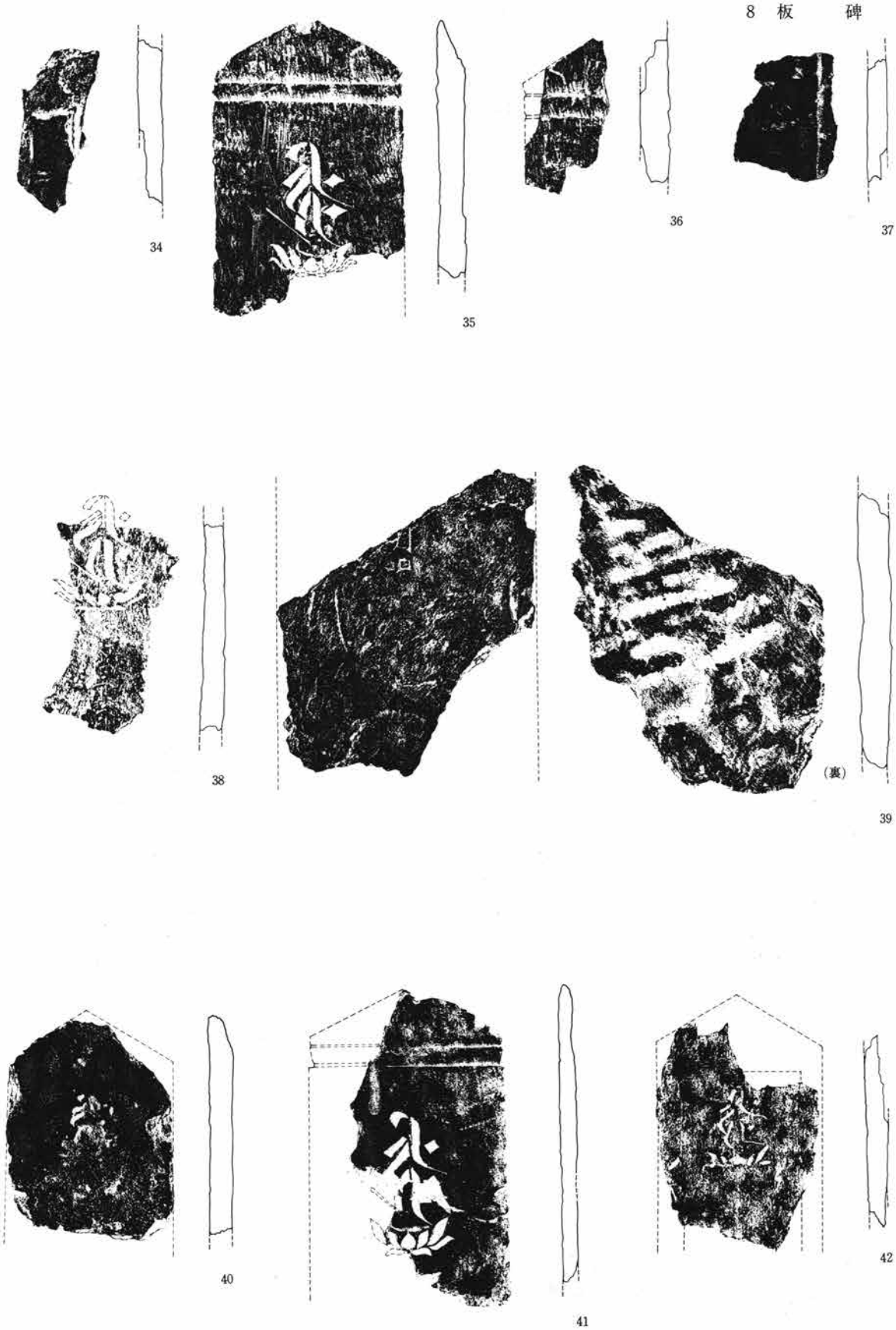


第67図　板　　碑 (2)

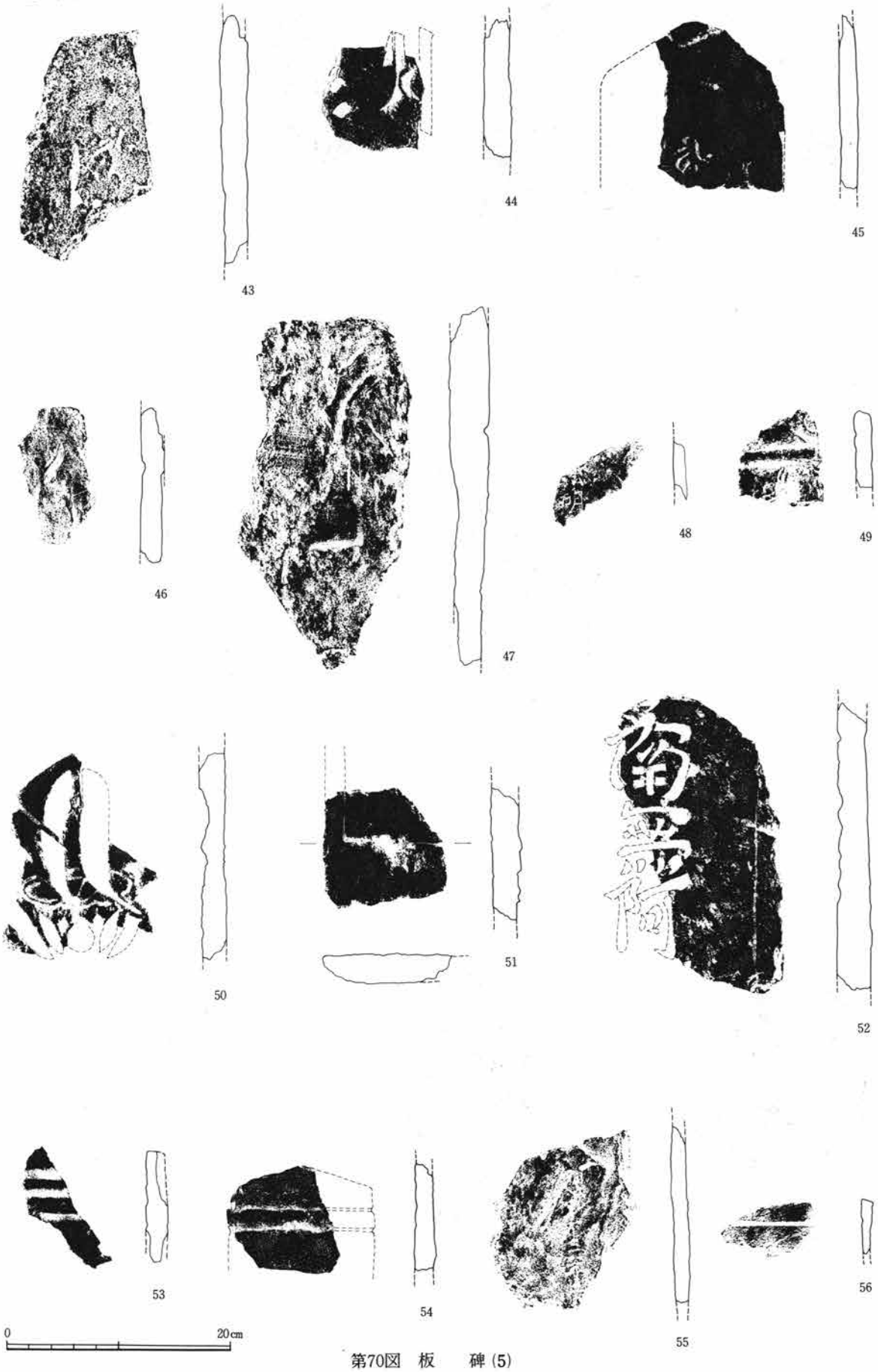


第68図　板　　碑 (3)

8 板　　碑



第69図　板　　碑(4)



第70図　板　　碑 (5)

表12 板 碑 一 覧

No.	出土遺構	主尊	紀年銘	計測値(cm) 幅・厚さ	備考
1	23号井戸	不明	□六年七月日	2.8	
2	13号井戸	キリーク種子	不明	2.0	種子(キリーク)のアク点から大型板碑
3	25号井戸	キリーク種子	不明		二条線
4	35号井戸			1.9	
5	39号井戸	キリーク一尊種子	不明	18.2・2.4	線刻二条線、枠線有り
6	40号井戸	キリーク一尊種子	貞□	17.2・3.6	貞和1345～1350年、貞治1362～1368年
7	40号井戸	キリーク種子	不明	25.5・2.9	中型板碑
8	40号井戸			2.7	
9	40号井戸	不明	不明	1.5	
10	40号井戸	不明	圏文二年	2.5	
11	40号井戸	不明	□□三年□□□月	16.7・1.1	花瓶、枠線有り
12	42号井戸	キリーク種子	不明	2.5	小型板碑
13	42号井戸	不明	□年⊡月日	15.8・2.3	花瓶、枠線有り。根部差し込み型
14	44号井戸			2.3	
15	44号井戸	キリーク種子	不明	2.0	
16	46号井戸			22.5・2.3	
17	46号井戸	キリーク種子		(17.0)・2.0	
18	46号井戸			1.5	
19	46号井戸			1.4	
20	53号井戸			2.0	
21	53号井戸	不明	□□十六　⊞か	1.5	
22	53号井戸				
23	48号井戸	不明		21.8　3.3	
24	54号井戸			1.4	
25	59号井戸			1.2	
26	62号井戸	キリーク種子	不明	2.9	中型板碑、枠線有り。種子薬研彫り
27	3号溝	キリーク種子	不明	17.9　2.1	小型板碑
28	3号溝	キリーク種子	不明	2.2	蓮台特徴的
29	3号溝	不明	不明	1.8	蓮台部のみ
30	3号溝			2.5	
31	3号溝南側			1.5	
32	3号溝南側	不明	不明	2.0	根部のみ、工具痕
33	3号溝	不明	武元年十月日	1.6	「建武」元年＝1334年
34	5号溝	不明	不明	2.0	二条線
35	7号溝南側	キリーク種子	不明	16.4・2.3	二条線有り
36	7号溝	不明	不明		二条線
37	7号溝東側	不明	不明		
38	7号溝東側	キリーク種子		2.0	紀年銘判読不可能
39	7号溝	不明	不明	22.6・2.8	
40	7号溝	キリーク種子	不明	14.9・1.9	小型板碑、粗製
41	8号溝	キリーク一尊種子	不明	(17.5)・1.5	二条線有り。種子薬研彫り
42	8号溝西側	キリーク一尊種子	不明	(14.2)・1.7	小型板碑、粗製、枠線有り。種子線刻
43	8号溝西側	キリーク種子	不明	2.0	小型板碑、粗製
44	8号溝西側	キリーク三尊種子	不明	2.6	サ・サク部のみ
45	8号溝	不明	不明	(16.2)・1.6	小型板碑
46	8号溝	不明	不明	3.5	下半部のみ
47	9号溝	不明	不明		
48	10号溝	不明	明（明応か？）	1.3	二条線有り。小型板碑
49	10号溝	不明	不明		
50	14号溝	キリーク種子	不明	2.3	大型板碑、種子薬研彫り
51	14号溝	不明	不明		枠線有り
52	M－12グリッド	六字名号(南無阿弥陀仏)	不明	3.0	枠線有り
53	K－18グリッド	不明	不明	2.0	三条線有り
54	表採	不明	不明	2.0	二条線
55	表採	不明	応十三年⊡月日	1.5	枠線有り
56	表採	不明	不明		

9　五輪塔　(71～73図，図版36・37)

五輪塔は空・風・火・水・地輪からなる石造物である。本遺跡から空風輪４、火輪８、水輪４、地輪６の合計22が検出された。遺構別の出土は溝６、井戸11、掘立柱建物址１、土壙１、遺構精査時の検出２である。出土状態は原位置を保つものはなく、それぞれの組み合わせ関係も不明である。火輪の数から最低８基以上、最高22基が存在していた可能性がある。

五輪塔は大日如来を本尊とする供養塔として発展したとされており、その初源は平安時代末期と考えられているようである。群馬県内においても安中市上磯部、松岸寺所在のもの[註1]をはじめとした現存のもの、発掘調査による出土例も含め相当数の例があると思われる。

現在まで大型のもの、紀年銘の刻まれているものを中心にその変遷についての型式学的な研究が進められている。以下、五輪塔の個々の形状の特徴と変化を記してみる[註2]。空風輪は一石からなるものが多いが、本来は宝珠と請花といった別のものである。風輪の下面には火輪と接続するための柄[註3]が突出してつくられている場合が多い。形状は前出のものは空輪の頂部が丸味をもったものから丸味がこけ新しくなるにつれて先端が尖ってくる。また、空・風輪の境が、しだいに明瞭になり、風輪に対する空輪の長さの割合が大きくなってくる。

火輪は角錐状を呈し、上面には風輪を受けるための穴がつくられている。形状は高さに比して幅の割合の大きな偏平なものが後出である。屋根反りも縄たるみの強い曲線のものが比較的後出で、隅反りも強くなるようである。軒反りも形態の変化を理解する上で重要な視点である。前出のものは軒反りがあまり強くなく、また反りも上・下両端がほぼ平行である。軒反りは後出のものほど強くなり、戦国時代[註4]から江戸時代になると下端は平坦になる。軒端は前出のものが垂直に切られているのに対し、南北朝以降は斜めに内傾に切られている。

水輪は上下のおしつぶされた球体で上下両面はやや凹レンズ状を呈している。形状の変化は球形のものが後出になると偏平な形を呈してきたり、そろばん珠状を呈するようである。側面の曲線にも変化がみられる。最大径は前出のものが中位よりも下位にあるのに対し時代が下がるに従って上に移動している。

地輪も方形から偏平に変化してゆくようである。上面が緩やかな凸面を呈しているものもある。

以上のような視点で本遺跡出土のものを検討すると空風輪は１が４つの中でやや前出で室町時代後半から戦国時代、２、４は空風輪の境が明瞭であり戦国時代以降の所産と考えられる。３については不詳である。火輪は全般的に偏平で軒反りが強く、軒端も斜めに切れており12を除いて戦国時代以降の所産である。５は屋根に厚みがあり戦国時代の初～中葉と思われ、９と10を比較すると軒端の作りから10が後出である。12は凝灰岩製である。欠損が著しいが屋根反り、軒反りともになくやや古く位置づけられるようで南北朝の時期があてられるようである。水輪は13が室町時代後半、他は戦国時代の所産で15がやや前出であろう。地輪は比較的新しいものと思われる。

本遺跡の五輪塔は硬質安山岩、角閃石安山岩、凝灰岩を原材料としている。石材の利用材料入手に地理的な要因が関係すると思われるが全体的には鎌倉時代は凝灰岩が比較的多く使用されている。これは凝灰岩が軟質であったためと考えられる。その後、大量に五輪塔が造立されるに及び安山岩がその主流となるようである。角閃石安山岩は戦国時代以降使用頻度が増すようである。また、原石のみでなく河原石を整形する場合もあり、原材に制約された形状を残しているものもある。

石造物全般にわたるがその視覚性を重視することから外面のみ化粧仕上げが施されるものが多い。本遺跡

の場合も、風輪の下面や火輪の柄穴には工具痕が明瞭に残存する。また、火輪の屋根の側面にも弱いハツリの痕跡が認められる。

五輪塔は供養塔であるとともに墓塔として機能しており、太田市別所の円福寺所在の五輪塔や前橋市富田町の東原遺跡[註5]の古墓からは地輪の下に土壙を有し骨蔵器が埋納された例がある。また、水輪や地輪に納入物を入れる穴を穿って舎利[註6]等を納入している例もある。17は上面にえぐりこみがあり、同様の例と思われる。

本遺跡出土の五輪塔は型式的には室町時代後半から戦国時代（特に戦国時代に重心をおく）の所産であることがわかった。造立後どのくらいの時間的経過を経たかは証明できないが、少なくとも江戸時代前半には溝や井戸に投棄されていたと思われる。しかし、表面の状態は地輪の角や火輪の軒隅に欠損が認められるものが多い。また、投棄する前に20・21のように砥石として二次利用したり、12のように下面をえぐったり、18のように敲打による凹痕を残すなど多様な使用がなされていることも本遺跡における五輪塔の位置づけを考える上で興味深いものである。

53号井戸出土の五輪塔

この五輪塔は地輪にあたる。長さ、19.1cm、幅、19.7cm、厚さ、15.5cmの直方体で、正面と背面に墨書が施されている。石材は輝石安山岩と思われ灰褐色を帯びる。墨書の施されている面も含めた側面には敲打痕が顕著で金属工具による調整が加えられたものと思われる。下面はやや外反し剝離痕と思われる凸凹が残る。縁辺を中心に磨耗が顕著である。上端の四隅にも同様の磨耗痕が認められる。下端の磨耗痕は他の機能に二次利用された可能性もあるが判然としない。

墨書であるが器面の調整痕、石材に黒色の輝石が多量に含入することに加え、火熱のために変質しており非常に不明瞭である。正面の中央には梵字の（ア）が記されており、この五輪塔の空風・火・水輪にも墨書で梵字（キャ カ ラ バ）が記されていたことが推定できる。梵字の右側の墨書[註7]は5字の漢字と思われ、「奉為法華経」と判読することもできる。

左側は、上隅から始まり下位で2行に分ち書きされている。左の行の上半分は、剝離の為にほとんど残存しない。また、下半も不明瞭で判読が困難である。欠損した部分には年号干支と月日が記されていると思われる。右の行は「施主」と記されているようであるが断定するまでには至らない。

裏面には「—」と記されている。通常4面に梵字が刻まれる場合は（キャン・カン・ラン・バン・アン）の（アン）が記されるようであが、これについては類例もみられず筆記の意味も不明である。

墨書から看取できることは以上のようであり、墨書の記される例は戦国時代の後半以後に多く認められるものである。

（註1） 1293（正応6）年4月10日の紀年銘がある。群馬県指定史跡。

（註2） 五輪塔の形状の変化については群馬県立歴史博物館学芸員、磯部淳一氏に御教示いただいた。ここに記した内容は氏の考え方に基づくところが多大である。

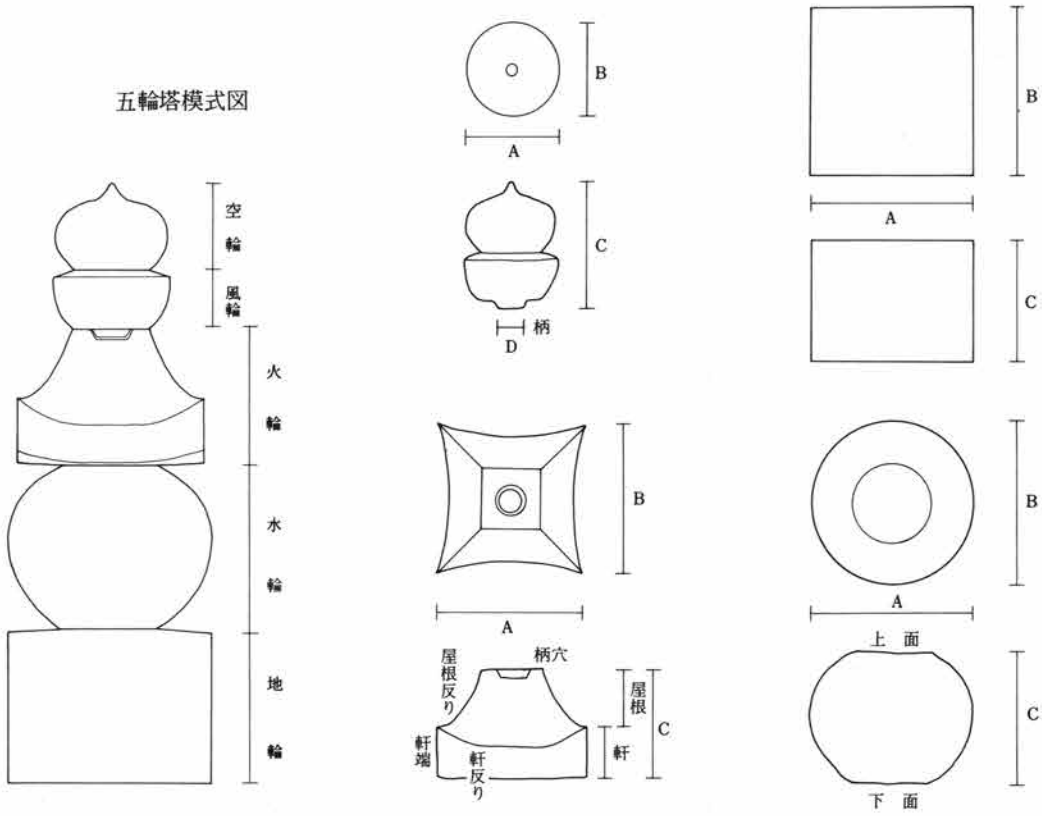
（註3） 部位名称については財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財　浄光明寺五輪塔修理工事報告書』1976（昭和51年）によるところが多い。

（註4） 時代区分も磯部氏の考え方に従っている。南北朝と室町時代の境を1392（明徳3）年とし、応永年間（1394～1427）を室町時代前半とし、応仁の乱（1467年）までを室町時代後半とする。また、応仁の乱以後は戦国時代としてあつかう。

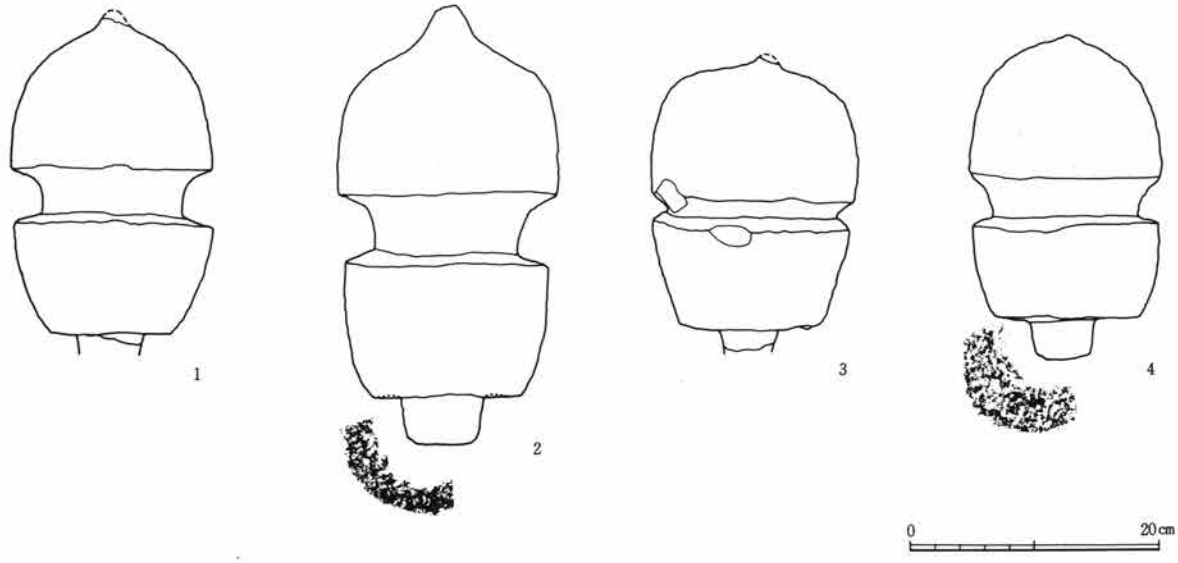
（註5） 51基の墓壙が検出され、多数の板碑、骨蔵器を伴出、鎌倉時代末から戦国時代に至る古墓群と考えられている。『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』1980（昭和55）年　前橋市教育委員会

（註6） 当事業団、調査研究員、津金沢吉茂氏の指摘による。

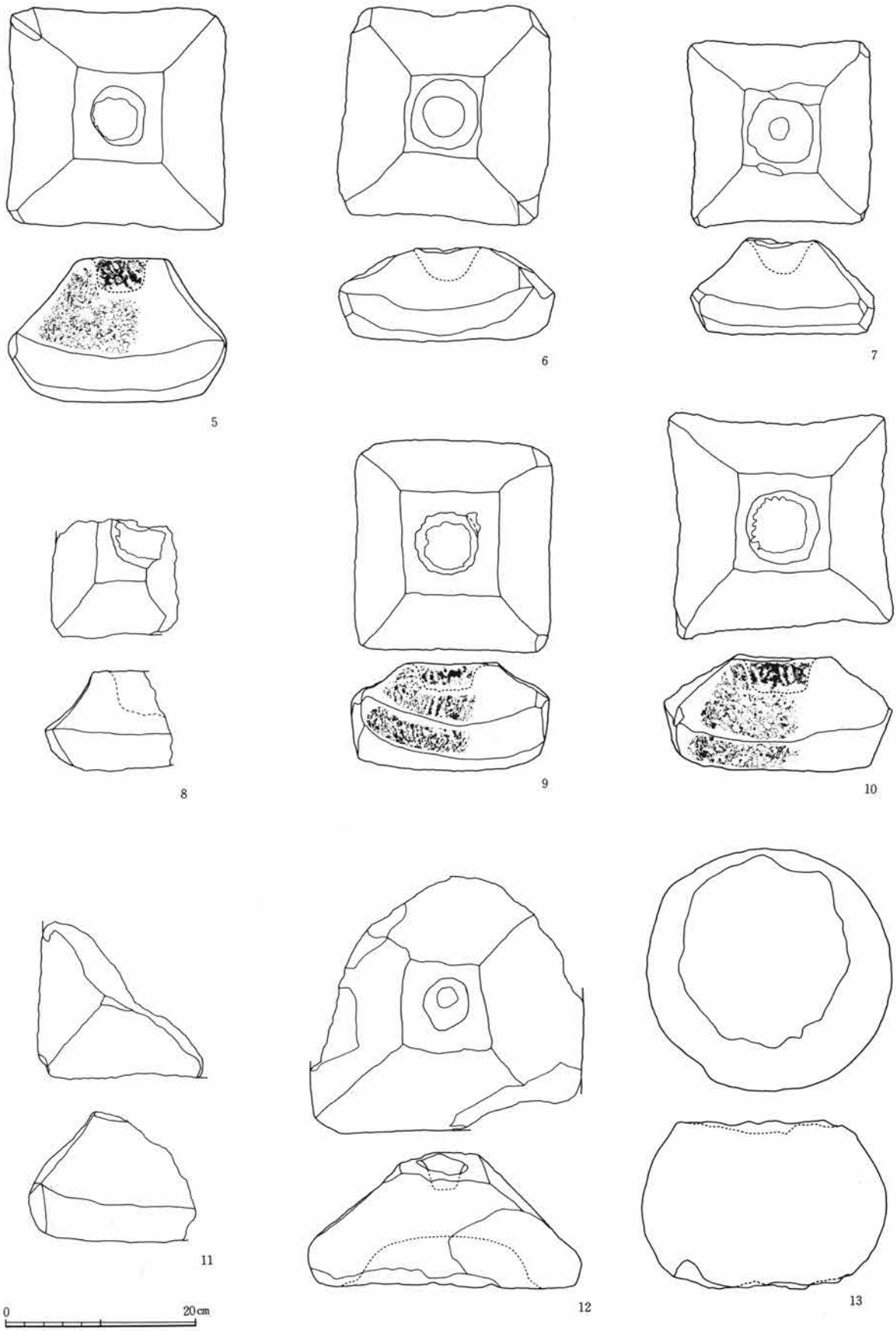
（註7） 墨書の判読にあたっては、群馬県立文書館、阿久津宗二氏の御教示をいただいた。



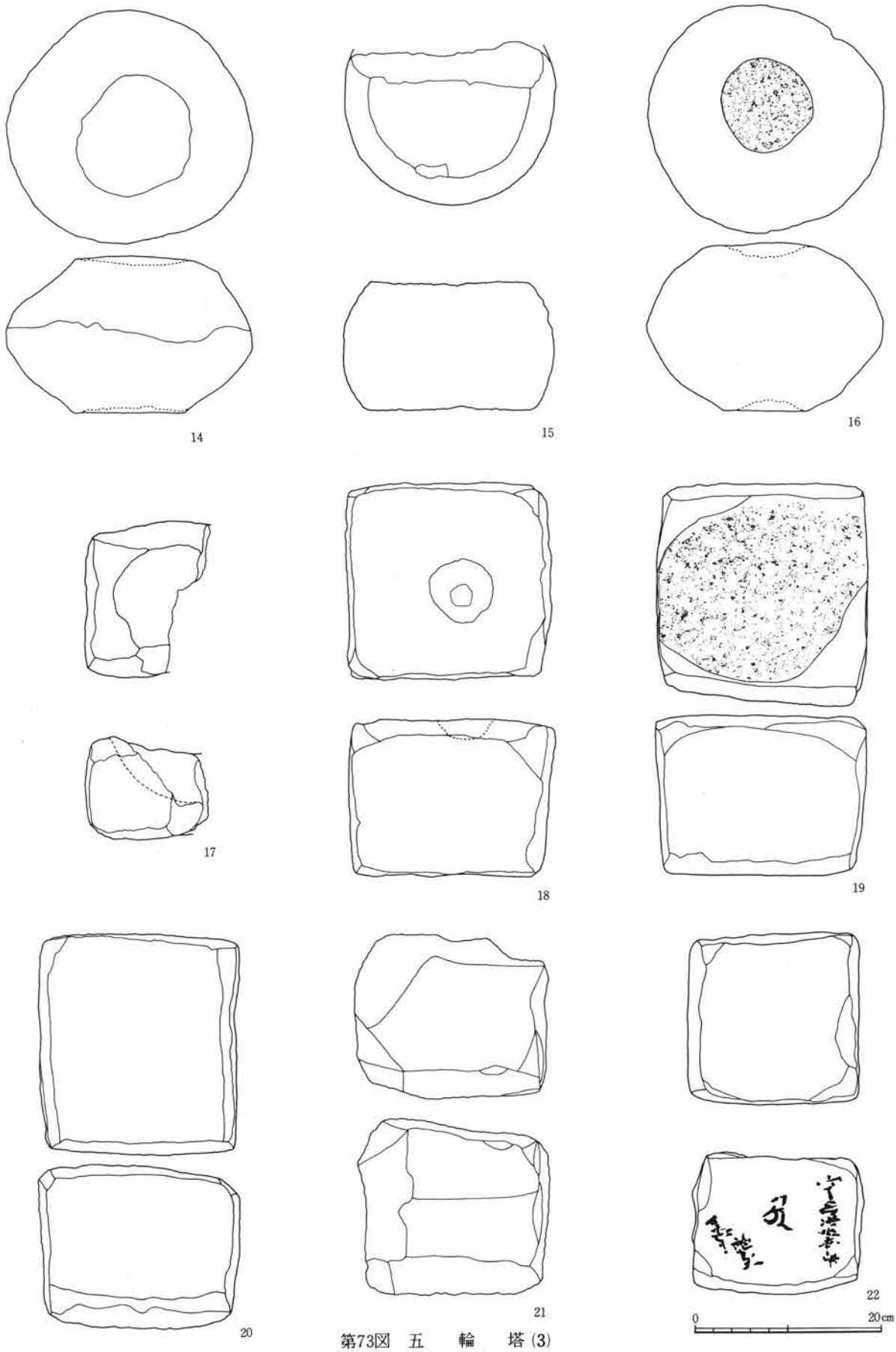
A幅　B厚さ　C高さ　D柄の径



第71図　五　輪　塔(1)



第72図 五 輪 塔 (2)



第73図　五　輪　塔(3)

表13 五 輪 塔 一 覧

No.	出土地点	種別	幅 (cm)	厚さ (cm)	高さ (cm)	石質	特徴 ㊐は形状 ㊥は数値 ㊢は整形を表わす
1	25号井戸	空風輪	15.9	13.5	〔25.8〕	安山岩	㊐空、風輪の最大径はほぼ同じ数値である。風輪の柄は欠失する。㊢空風輪を区別する刻みは明瞭である。㊤火熱。
2	44号井戸	空風輪	17.6	17.6	34.7	安山岩	㊥柄の径6.7、長3.9cm。 ㊢風輪の底面には放射状にノミ痕がある。㊤鉄分が沈着する。
3	44号井戸	空風輪	15.7	14.0	〔23.2〕	安山岩	㊐やや小型、断面は著しい楕円形を呈する。㊥柄の径4.7 ㊢空、風輪の区別はV字状の刻みで簡単に分けられている。
4	7号溝	空風輪	14.2	14.2	25.6	安山岩	㊐断面はやや楕円形。㊥柄の径5.5、長3.1cm。 ㊢風輪の底面には工具痕を残す。柄の軸は中心からはずれている。
5	40号井戸	火輪	21.8	21.6	14.8	安山岩	㊐厚さがあり軒の稜線はやや反り返る。底面も反る。㊥柄穴の径6.0深さ3.5cm。 ㊢柄穴内面には弱いノミ痕が残る。
6	46号井戸	火輪	20.4	21.4	9.6	安山岩	㊐偏平な形状。㊥柄穴の上径7.1、底径4.2、深さ3.4cm。
7	8号溝	火輪	18.3	19.1	10.0	安山岩	㊐軒の隅がやや反り、屋根反りもある。柄穴は円錐状を呈し不明瞭な形状をなす。㊤底面は円形状に変色している。
8	62号井戸	火輪	〔12.3〕	——	10.3	安山岩	㊥柄穴の径6.2、深さ3.7cm。 ㊤石材は角閃石安山岩。
9	表採	火輪	21.5	20.5	11.0	安山岩	㊐上面が大きく偏平な形状、軒の稜下面は反りが強い。㊥柄穴に浅い径6.3、深さ2.6cm。 ㊢表面に明瞭に残る。
10	1号掘立	火輪	20.8	23.4	11.6	安山岩	㊐全体的に粗雑な形状、稜の長さが異なる。㊥柄穴の径7.6、深さ3.5㊢柄穴の内面に工具痕が良く残る。
11	142号土壙	火輪	〔17.1〕	——	13.4	安山岩	㊐破片。
12	3号溝	火輪	〔29.5〕	——	13.7	砂岩	㊐軒は下面に比して上面が小さく、鋭角な稜が形成される。㊥柄穴他の火輪に比して小さく径3.8、深さ3.8cm。 ㊤下底には三角形状のえぐりこみがあり、二次利用されたと思われる、火熱を受けている。
13	10号溝	火輪	25.2	25.2	16.8	安山岩	㊐上下の面は中心軸から大きくはずれている。また、凹状を呈している。
14	10号溝	水輪	26.1	24.5	16.5	安山岩	㊐ゆがみが著しく、側面は中央に弱い稜をもつ、上、下面とも弱い凹状を呈する ㊤側面の一部分は磨滅しており、二次利用の可能性あり。
15	246号土壙	水輪	22.5	——	12.9	砂岩	㊐半分を欠失、上、下両面とも弱い凹状を呈する。㊥上面の径17.0、下面は17.2cm。 ㊤火熱を受けて変色する。
16	44号井戸	水輪	25.2	23.8	17.8	安山岩	㊐㊥上・下面とも側面の最大径に比して小さく、凹状。上面の径9.2
17	7号溝	地輪	16.8	——	11.0	角閃石安山岩	㊐㊥各面は凸状を呈している。上面には大きな円形のえぐりこみがあると思われる。深さ8cm。
18	48号井戸	地輪	22.3	20.6	16.3	安山岩	㊧上面の中央やや外辺よりには径6.6、深さ2.0cmのくぼみがある。
19	48号井戸	地輪	22.4	23.0	16.8	安山岩	㊐各角はやや磨滅している。㊢上面の整形痕は顕著、㊤火熱を受ける。
20	12号溝	地輪	21.0	23.2	17.1	安山岩	㊐上、下両面はやや凸状を呈し、各辺の角が3ヵ所磨耗する。
21	25号井戸	地輪	20.4	14.4	18.6	安山岩	㊐欠損している。側面は砥石として二次利用されている。
22	53号井戸	地輪	19.7	19.1	15.5	安山岩	㊧側面に墨書あり。

10　不明軽石製品　（第74図，図版37）

浮石質角閃石安山岩は、榛名山二ッ岳を給源とする火山性噴出物であり軽量で加工の容易な石材である。近年、中・近世の遺跡から、この石を使用した用途不明石製品の出土例が増加している。ここでは本遺跡出土の角閃石安山岩製不明石製品を一括して説明する。

石製品　1　40号井戸出土

用途不明の角閃石安山岩質石製品破片で、現状での大きさは長径17.5㎝、短径12.8㎝、厚さ7.6㎝。もとの形はおそらく平面プランが楕円形の扁平球体で、中央付近に表裏両方面から擂鉢状の穿孔がなされている。加工は片面がやや深くなり、いずれも粗く敲打されている。割口付近の剝離痕は分割の際生じたものと推測される。

砥石状石製品　2　46号井戸出土

角閃石安山岩質で大きさは長径16.3㎝、短径13.6㎝、厚さ9.5㎝。平面プランは楕円形の扁平球体で、石の表面はやや風化摩滅し、長端部両面が欠け一部が火を受け赤褐色化している。表面にはほぼ平行して３条、直交して１条、又、裏面に２条平行し断面「U」字状の溝がある。この他に大きな剝離が表面を中心に側面付近にも見られるが、こちらは石全体の形状を整えるのが目的であるのに対して、溝条痕中にはいずれも擦痕状痕の見られるところから、この使用痕が本遺物の性格を示すものと考えられる。

石製品　3　３号井戸上層出土

用途不明の角閃石安山岩質石製品破片。現状での大きさは長径12.0㎝、短径6.0㎝、厚さ10.4㎝。１の石製品同様平面プランが楕円形を成していたものと推測され、表面には同種の擂鉢状の窪みの一部が見られるが、両面からの穿孔か否かは不明。一部火を受けて赤褐色化している。

石製品　4　３号井戸上層出土

用途不明の角閃石安山岩質石製品破片。現状での大きさは長径10.1㎝、短径5.0㎝、厚さ8.0㎝。１の石製品と同種の形態を呈し、３と同じ部位の破片で片面からの窪みが確認できる。窪みの縁部には削り痕が見られ、擂鉢状窪の敲打痕とは別のものである。

砥石状石製品　5　14号井戸出土

現状での大きさは長径8.2㎝、短径5.0㎝、厚さ5.4㎝の角閃石安山岩質石製品破片。本来はやや大き目の握りこぶし大の紡錘状をしていたと推測される。狭端部の一部に、なだらかな弧を形成し擦痕の見られる面があり、この使用痕が本遺物の性格を示すものと考えられる。

石製品　6　23号井戸出土

用途不明の角閃石安山岩質石製品破片で、現状での大きさは長径15.1㎝、短径9.8㎝、厚さ7.3㎝。遺物のもとの形は平面プラン楕円形で表面中央を敲打して擂鉢状に窪めている。窪みの縁周辺には平ノミ状工具による整形痕が残る。裏面がやや平らになるよう加工されているのは、石の座りを良くする為のものと思われ窪みの縁周辺に認められると同種の加工痕である。

石製品　7　表採

用途不明の角閃石安山岩質石製品で長径17.2㎝、短径14.2㎝、厚さ7.8㎝。平面プラン楕円形の表面中央付近を敲打してわずかに窪めている。また窪みの縁に３条のノミ状痕が認められる。

石製品　8　表採

10　不明軽石品

用途不明の角閃石安山岩質石製品小破片。現状での大きさは長径5.6㎝、短径2.5㎝、厚さ2.6㎝。遺物のもとの大きさは鶏卵大と思われ、この中央付近を敲打して窪ませている。

石製品　9　52号井戸出土

長径7.2㎝、短径5.7㎝、厚さ4.0㎝の鶏卵大の角閃石安山岩質用途不明石製品。石の表面中央部付近を小刀状工具により抉り削ることで窪ませている。

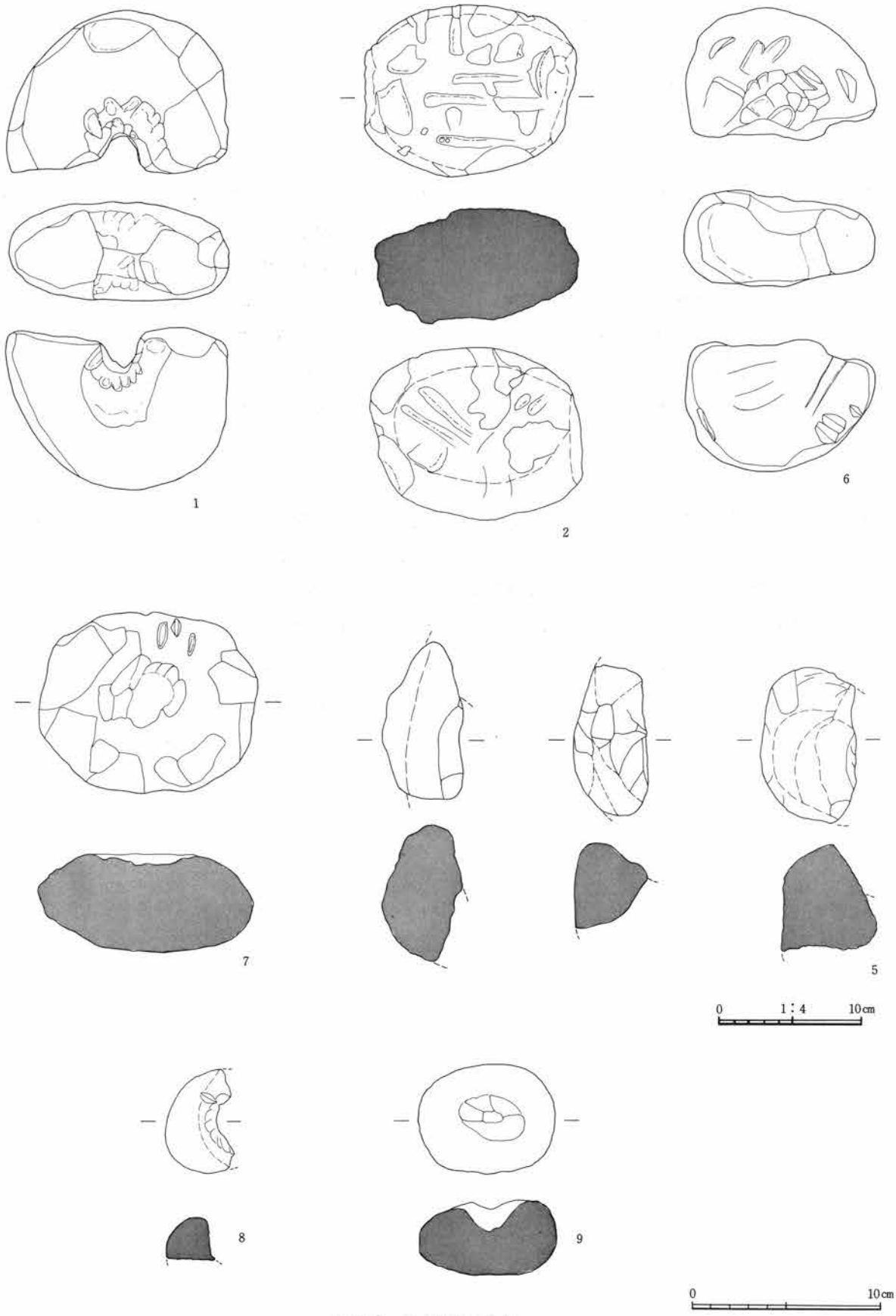
ここに取り上げた用途の判然としない浮石質角閃石安山岩を使用した石製品は、鶏卵大のものとそれよりやや大ぶりのものとがあり、その形態から穿孔されているもの、片面からの窪みを有するもの、更に擦痕の認められるものとに大別できる。この内の、片面に窪みを持つ石製品の破片３・４は穿孔されている石製品１の未製品とも考えられなくはないが、反対面からの窪み加工痕が現存する部分に認められないことから石製品６・９に類するものと見ることができる。これら９点の石製品の使用目的に関して２・５には、使用痕とおぼしき擦痕の存在から砥石の一種としておきたい。石製品１については、同種の穿孔された角閃石製石製品が荒砥諏訪西遺跡の中世溝から出土している[註1]が用途は明確でない。石製品７に類する資料は同道遺跡の中世館跡から出土しているが用途不明と報告されている[註2]。このことから石製品１・７とも中世の用途不明石製品と考えておきたい。石製品３・４・６・８・９に類する資料は、小野上村椿原所在の中～近世墓地より大小あわせて数点出土していることから、この時代を中心とする時期の墓に関連した遺物の可能性も含まれるが断定するには至らず、用途不明石製品である。以上のことからここに述べた遺物の大部分は製作、使用時期が中世～近世にかけてのもので用途も不明確な資料であると云える。

これら浮石質角閃石安山岩は加工が容易で、大きさも手ごろのものであることから入手も運搬も困難であったとは考えられない。また製品としての仕上げ観に著しく欠けていることから、日常目に触れる場所に使用されたとは考えにくいなど、あまり専門的石材加工技術を有していなくとも加工可能であった石製品と云うことができよう。今後は民俗例の検討なども含めた用途の究明が課題となるであろう。

註

1　1983年度　本事業団が発掘調査を実施した。前橋市荒口町に所存する。

2　『同道遺跡』1983　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



第74図　不明軽石品

11 金属製品 （第75・76図，図版38・39）

第75図1．2はともに煙管の雁首で、火皿部分を欠失している。1は偏平に押し潰されて板状になり、さらに2回折れ曲っている。これを復元すると長さ4.5cm、径0.9cm（最大）が推定できる。2は現存長2.7cm径0.9cmを測る。いずれも包含層出土で、遺構に伴わない。

3は用途不明の銅製品である。厚さ約0.2cmの銅板に孔をあけ、タテ2つ折りにしている。孔は現状で3ヶ所に認められ、中央の孔径は外径で0.6cm、内径で0.4cmである。長さ5.4cm、幅1.2cmが遺存している。49号井戸から出土した。

4はC—16グリッド出土の印で、焼印と考えられる。印文は「㊐」と読め、銅製で鋳造品と考えられる。背面には文字の天部を示す目印がついている。鈕に相当する部分に鉄サビが付着していることから、欠失した柄部は鉄製と思われる。印面の径2.7cm前後で、多少歪みがある。現存高1.6cm、文字部の深さ0.6cmである。

5は340号竪穴から出土した銅製の不明金具である。厚さ0.1cm前後の銅板2枚を継ぎ合せ、さらに断面「コ」字状の金具（厚さ0.2cm）を、継ぎ目をつなぐように接合する。銅板外面は魚子地で、図中向って左側の表面の遺存が良く、「コ」字部分の下にも魚子が認められる。「コ」字部分の高さは1.0cmで、この部分の銅板は約2×2cmの大きさで盛り上っている。銅板は現状で長軸3.9cm、短軸2.5cmの楕円形を呈する。本金具のケイ光X線分析の結果は、別掲の通りである。[註1]

強度比からみるとほとんど銅地金で、錫・鉛を含むものの合金成分と考えるほどの量ではなさそうである。[註2]

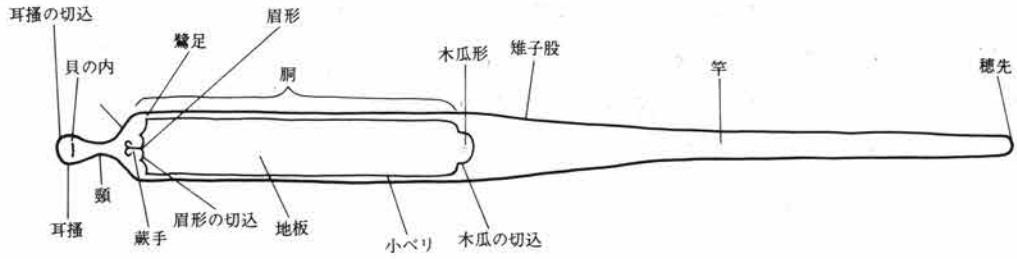
6は3号溝出土の鉄刃子である。現存長18.3cm、棟から刃までの最大幅1.6cm、現存刃部長9.3cm、茎長7.8cmで切先部分を欠く。両関式と考えられる。

7は刃剣装具の笄で、出土地点は不明である。現存長6.1cm、幅1.2cm、厚さ約0.2cmで耳掻きは半欠し、胴の一部が遺存している。文様は向き合わせの2葉を丸のなかに表し、これを90°回転して連ねており、穂先側の文様の丸輪は耳掻側の文様の丸輪に接していて、全周しない。2葉の葉脈は毛彫りされている。文様は素地に直接高彫りされており、全体のバランスからみて3個がセットになって彫られたものであろう。地文は魚子地で、銅製である。眉形の切込みは深く、蕨手は根元から分かれており、左右の巻き込み方は非対称的でわずかに偏平である。肩はあまり張らず、ナデ肩の感をもつ。

笄について

笄は小柄・目貫と合わせて後世三所物（みどころのもの）と呼ばれ、刀剣装具の小道具として室町時代から江戸時代にかけて発達したものである。[註3] 鎌倉時代のものとされている国宝の菊造腰刀（きくづくりこしがたな）には、すでに装具として備わっている。[註4] 笄の部分名称は下の図に示す。

室町時代は刀装史上大きな変化が起きている。戦闘方法の転換が行われ、それに伴って腰に佩用する太刀拵えが、腰にさす打刀（うちがたな）に変わり、従来とはちがった材質や意匠の変化がもたらされた。



打刀の刀装は鞘に小柄と笄を装着するもので、鐔にはこれらを出し入れするための櫃穴（ひつあな）をあけている。[註5] 打刀の刀装の発展に合わせて、笄も大きく発展をとげる。

江戸時代の笄の寸法は、長さ七寸（約21.2cm）、幅四分前後（約1.2cm）とほぼ定形化したものがつくられていた。これより以前のものは、長いもので七寸四分（約22.4cm）、短いもので五寸七分（約17.3cm）のものがあり、幅はその長さに比例して大小があったようである。厚さについても同様であったと思われるが、笄櫃穴の形状をみると、比較的古いとされているもののサイズに、薄手に造られた笄が合致するようである。[註6]

刀装具を製作した家系として著名な後藤家は永享12（1440）年に生まれた後藤祐乗にはじまり、明治はじめの典乗まで17代にわたっている。祐乗は室町八代将軍足利義政に仕え、以後豊臣家・徳川家に仕えて永正9（1512）年、73才で没した。後藤家は各代とも将軍家に仕えていたことから、この家の作品は家彫りと呼ばれ、一般の人々に応じた町彫りとは区別されている。初代の後藤祐乗の造り込みのうち、とくに蕨手と眉形の形状には独特の手法があるとされており、時代が下がるに従い、それらの形状が変化して年代や製作者の推定に有力な決め手の一つになっている。町彫りは家彫りの手法変化にある程度対応するものらしい。

本遺跡出土笄の形状を詳細にみると、次のようなことがあげられる。

①胴の厚さが薄く、偏平な造りである。

②蕨手の根元は短くて直線部を殆どもたず、根元から左右に開いてゆく。

③蕨手の左右の巻き込みは非対称で、右の巻き込みがより偏平である。また、巻き込み自体は後代に比べ渦巻き状に巻き込まない。

④眉形の切込みは蕨手の根元（眉形中心部）に比べて左右とも低いが、切込み自体はシャープで深い。

⑤肩は丸味をもっていて、後世の角張った感がない。

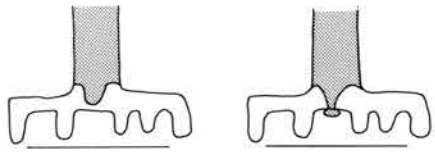
⑥文様はタガネで丸輪と2葉の外形を打ち出し、2葉の葉脈を毛彫りする。その形状は の簡単な細工である。そして穂先側の丸輪は耳掻側の丸輪に接して全周せず、さらに穂先側の2葉は耳掻き側の2葉を時計回りに90°回転させている。この紋章風にみえる文様は、これまでの研究によれば奇数個並べるのが普通であり、本遺跡例の場合は長さとのバランスで3個あったものと考えられる。

⑦こうした同一物を数個連結配置する図案は室町時代に最も多く見られ、この時代の特色といわれている。さらに、本遺跡例の文様が紋章または定紋だとすれば、こうした図案は室町時代から多く見られるという。

以上、本遺跡出土の笄を計測値・造り込み・文様等からみると、室町時代～桃山時代の作と考えられる。また、造り込みが優品（伝世品）に比べて数段劣るところから、〝田舎彫り〟といわれる在地的なもので、実用品の部類に入ると思われる。

焼印について

焼印はまず熱せられなければその用途を果さないから、その熱に耐え得る程の結合の強さと使用時の振動・衝撃……などに耐える程の結合の強さを合わせてもたなければならない。このことを探るために、本遺跡出土の焼印についてX線透過試験を行った。[註7] 図版40は焼印のX線透過写真で、柄部側からX線を照射して得られたものである。



※ X線フィルムは物体を透過したX線がフィルムの乳剤に当ることによって、現像処理後に黒化する。従って、フィルム上黒っぽい部分はX線がフィルムの乳剤に比較的多量に当った部分であり、逆に白っぽい（透明度の高い）部分は物体を透過することができず、乳剤面にX線が余りとどかなかったことを意味する。フィルムは現像処理を施せばそのままでポジティブであり、一般撮影用のモノクロフィルムが通常ネガティブであるのとは異なる。

一般に、X線の金属に対する透過度は鉛―銅―ステンレス―鉄―アルミニウムの順に透過しやすくなるという性質をもっているという。従って、銅と鉄とを同じ大きさで並べて同じ強さのX線を照射すれば、鉄をやっと透過するほどの強さの場合はフィルム上鉄部分は黒っぽく、銅部分は透明に近くなる。逆に、銅を透過するほどの強さの場合は、いずれもフィルム上は黒っぽくなるはずである。

但し、フィルム面上に物体が占める面積が同じでも、物体を透過する距離が異なれば、フィルムの濃度は異なる。なお、鉛玉を周囲に敷きつめるのは、X線が散乱することによって像のコントラストが低下することを防ぐためである。

写真のa部分は小さな鉛玉を敷きつめた部分で、鉛玉の間隙をぬってX線がフィルムに達している様子がわかる。

b部分は銅地の印本体（背部）を透過してX線がフィルムに達している。「㊐」の文字部分が白に近くなっているのは、X線がフィルムに達するまでの銅地の距離が長かったため、透過しきれず感光しなかったことによる。

d部分は柄部の遺存と鉄サビのフクレのカゲである。X線は印本体と鉄柄部及び鉄サビの二重になった部分を透過することができず、フィルムに達する量が少なかったために白っぽくなっている。

c部分は黒化している。既ち、X線がフィルムに充分達していることを意味する。フィルムそのものを見ると、一辺3㎜ほどの方形を呈する黒化部が見えている。従って、この部分は柄部と印本体とを透過してX線がフィルムに達している訳である。

c部分の黒化の原因を推定すると、以下の様に考えられる。

この周辺において印本体の背面を透過する程度の強さをもったX線は、文字部分を構成する銅地では透過することができない。にもかかわらずc部分が黒化しているということは、この部分が鉄地の柄部であり、銅地は背面の他の部分よりも薄く、鉄地が銅地にはいり込んでいるということになる。

以上の観察から、柄部と印本体との結合は、背面中央にホゾ状の穴がありそこに鉄製の柄部を挿入するという方法、または背面を貫通して穴がありそこに鉄製柄部を挿入して先端を叩き潰す（リベット状）方法をとったと考えられる。さらに柄部及び鉄サビのフクレと考えたd部分は鉄地だけではなく、銅地があった可能性がある。この状態を模式的に示せば、150ページ右下のとおりである。

註1 群馬県工業試験場 花岡紘一氏の御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

2 銅板の接合技法、「コ」字状金具の接合技法及び表面の魚子タガネの目が不揃いであることなど江戸時代のものに比べ古い要素がみられ、用途としてはトビラ金具のカンヌキの受け金具または金物が考えられる。（大江正之の教示による）

3 笄は髪掻（かみかい）の転訛したものといわれ、男女ともに用いた結髪補助具で、髪が乱れないように刺して止めたり、頭部を掻くのに用いられた。ここで示す笄は女性結髪用のそれではなく、同様の用途をもちながらも刀剣装具の一つに数えられるほどに発達した帯刀する人物の小道具の一つである。

4 腰刀は太刀の補助として鎌倉～室町時代に用いられた鐔のつかない合口造り（あいくちづくり）で、櫃に小柄と笄をいれてあるのが普通とされている。

5 笄櫃は耳掻きを通すので、通常小柄櫃よりも大きいか、または凸形を呈している。但し、同形状の櫃穴をもつものもある。

6 笹野大行（1983）所載の写真16（永享前後）と写真17（応永前後）は、櫃穴が薄く造られている。

7 群馬県工業試験場 小林重夫氏の撮影による。記して謝意を表する次第である。

銅金具の螢光X線分析

第75図5の不明金具について、螢光X線分析を行ったところ、その結果は次のとおりである。分析は群馬県工業試験場　花岡紘一氏による。

1　緒　　言

銅製遺物を非破壊で分析するため、螢光X線分析により行った。遺物には青色のサビが多量に発生していた。螢光X線分析ではサビと地金の両方の元素を測定している。このため、サビだけ、地金だけの成分比率は不明である。なお、地金からの出たサビは地金の組成とは異なっている。ここでは遺物の組成を推定するため螢光X線分析により含有元素のX線強度比を測定した。

2　測定条件

螢光X線分析装置；理学電機製KG—4型

X　線　管　球；銀対陰極，50 KV，20 mA

分　光　結　晶；Cu，Su，Pb，Fe，As，Sb，Bi，Zn，Ni　にはLiF　（2 d=4.028 Å）
　　Si，Ca，S，Al　にはEDDT（2 d=8.808 Å）

検　　出　器；LiFを使用したときS．C　　EDDTを使用したときP．C

時　　定　数；1

チ　ャ　ー　ト；4°/min

波 高 分 析 器；FeK $_{\alpha}$(1)　はPbL $_{\beta 3}$(2)，PbL $_{\beta}$(1)はSnK $_{\alpha}$(2)　と重なるため微分方式で使用。他は積分方式で使用

測　　定　線；CuK $_{\beta}$，SuK $_{\alpha}$，PbL $_{\beta}$，FeK $_{\alpha}$，AsK $_{\beta}$，SbK $_{\alpha}$，BiL $_{\beta}$，ZnK $_{\alpha}$，NiK $_{\alpha}$，SiK $_{\alpha}$，CaK $_{\alpha}$，AlK $_{\alpha}$，SK $_{\alpha}$　の各1次線を使用。

X 線 照 射 面 積；20㎜φ

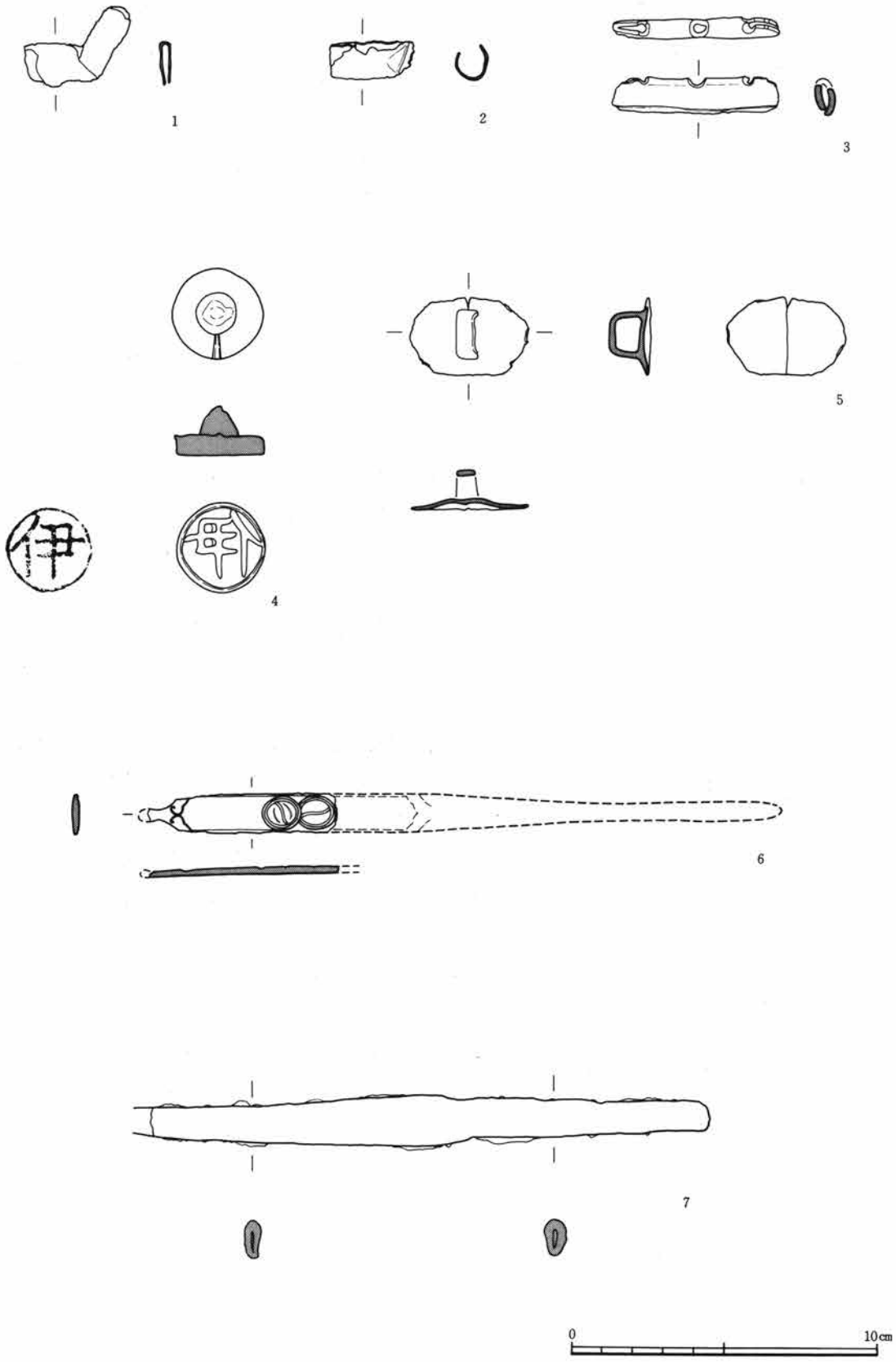
3　結果及び考察

銅製金属器の螢光X線分析結果を下表（銅製金属器に含有されている元素の特性X線強度比）に示す。

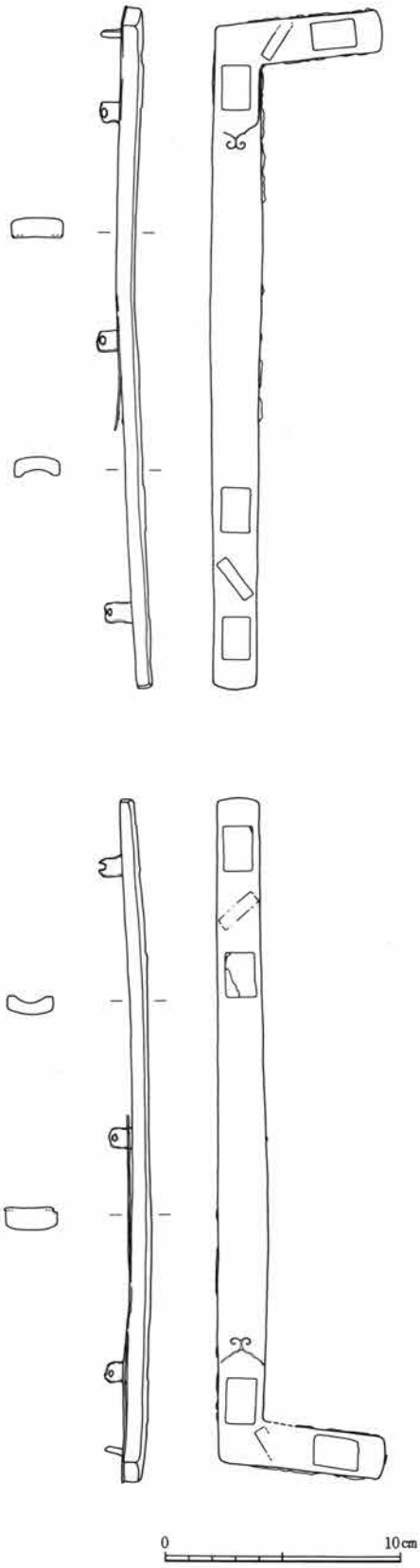
	CuK$_{\beta}$	SnK$_{\alpha}$	PbL$_{\beta}$	FeK$_{\alpha}$	AsK$_{\beta}$	SbK$_{\alpha}$	BiL$_{\beta}$	ZnK$_{\alpha}$	NlK$_{\alpha}$	SiK$_{\alpha}$	CaK$_{\alpha}$	AlK$_{\alpha}$	SK$_{\alpha}$	備　　考
No 1	1	0.350	0.723	0.204	0.032	0.003	?	0.005	0.001	0.053	?	0.008	0.001	月夜野町薮田遺跡、不明金属器
No 2	1	——	0.003	0.011	0.001	0.001	0.003	0.001	僅少	0.019	0.010	僅少	0.001	月夜野町薮田遺跡、脛巾
No 3	1	——	0.006	0.048	0.003	0.002	0.001	——	僅少	0.007	0.005	——	0.003	月夜野町薮田遺跡、脛巾
No 4	1	0.011	0.952	0.117	0.071	0.014	?	0.004	0.001	0.032	0.018	0.005	0.001	月夜野町薮田遺跡、不明金属器
No 5	1	0.001	0.343	0.220	0.076	0.005	?	0.001	0.001	0.009	0.016	0.003	0.001	月夜野町薮田遺跡、銅印
No 6	1	0.006	0.003	0.093	0.017	0.002	0.002	——	僅少	0.028	0.012	0.004	0.002	太田市浜町屋敷内遺跡、不明金属器

BiL $_{\beta}$　の？はBiL $_{\beta}$(1)とPbL $_{\beta 5}$(1)が重なるため多量の鉛を含有する遺物のBiは不明である。CaK $_{\alpha}$ の？はCaK $_{\alpha}$(1)とSnL $_{\beta}$(1)　が重なるため多量のSnを含んだ遺物のCaは不明である。僅少とは検出された元素でX線強度比が0.001未満のものを示している。

検出された元素のうち、Cu，Sn，Pb，Fe，As，Sb，Bi，Zn，Ni，Sの大部分は遺物中およびサビの成分とみられる。Si，Ca，Alの大部分は、土壌中に埋蔵されていたときの土壌に由来する石英・長石・粘土などがサビ中に混入したものと考えられる。なお、各試料によりサビの厚さ・面積・密度・地金の露出割合が異なっているので、サビを地金それぞれの成分比率を求めることは困難である。



第75図 金 属 製 品(1)



第76図　金属製品 (2)

L字状飾り金具について

この遺物については、東京芸術大学教授　中野政樹氏、東京国立博物館　香取忠彦氏、関　秀夫氏より多大の御教示を得ている。また、大江正行、山本朋子の教示があった。

本調査着手前の、トレンチ再精査時に出土したもので、浅い皿底状の落ち込み内より検出した。6号溝東側の小穴群内に位置する。表面を合わせるように二本重ねにして出土した。共伴遺物はない。

本品は上下一対となる銅製飾り金具で、計測値は長辺約28cm短辺約7cm、幅1.8～2.1cmである。コーナーは鈍角となる。表面の地文は端正な魚子で、4ヶ所の銀象嵌と、蕨手および短冊状の文様があり、金渡金が施されているようである。象嵌は、1.2×1.9cmの長方形で、本の表紙を意匠とする線刻の絵柄がある。秋草文と、勅撰和歌集の題名が記され、「千載」「詞花」が判読できた。また、題名の位置より本品の上下を知ることができた。側面は無文である。裏面は船底状に窪んでおり、4対の止め金具がある。止め金具の先端に径2.5mmの釘穴がある。裏板が¾残在していた。飾り金具本体と裏板とは隙間なく密着していたが、釘穴とは5～6mmの間隔がある。

裏板側端部はギザギザで加工の痕跡がない。このことから、木板の上に、銅の表板で飾り、更に本品を取り付けて止め金具で個定したものと思われる。飾り金具を剝ぎ取る際に、金具に密着していた部分も一諸にちぎり取られたものと考えられよう。なお、鏃と思われる断面正方形の鉄器破片がこびりついていた。

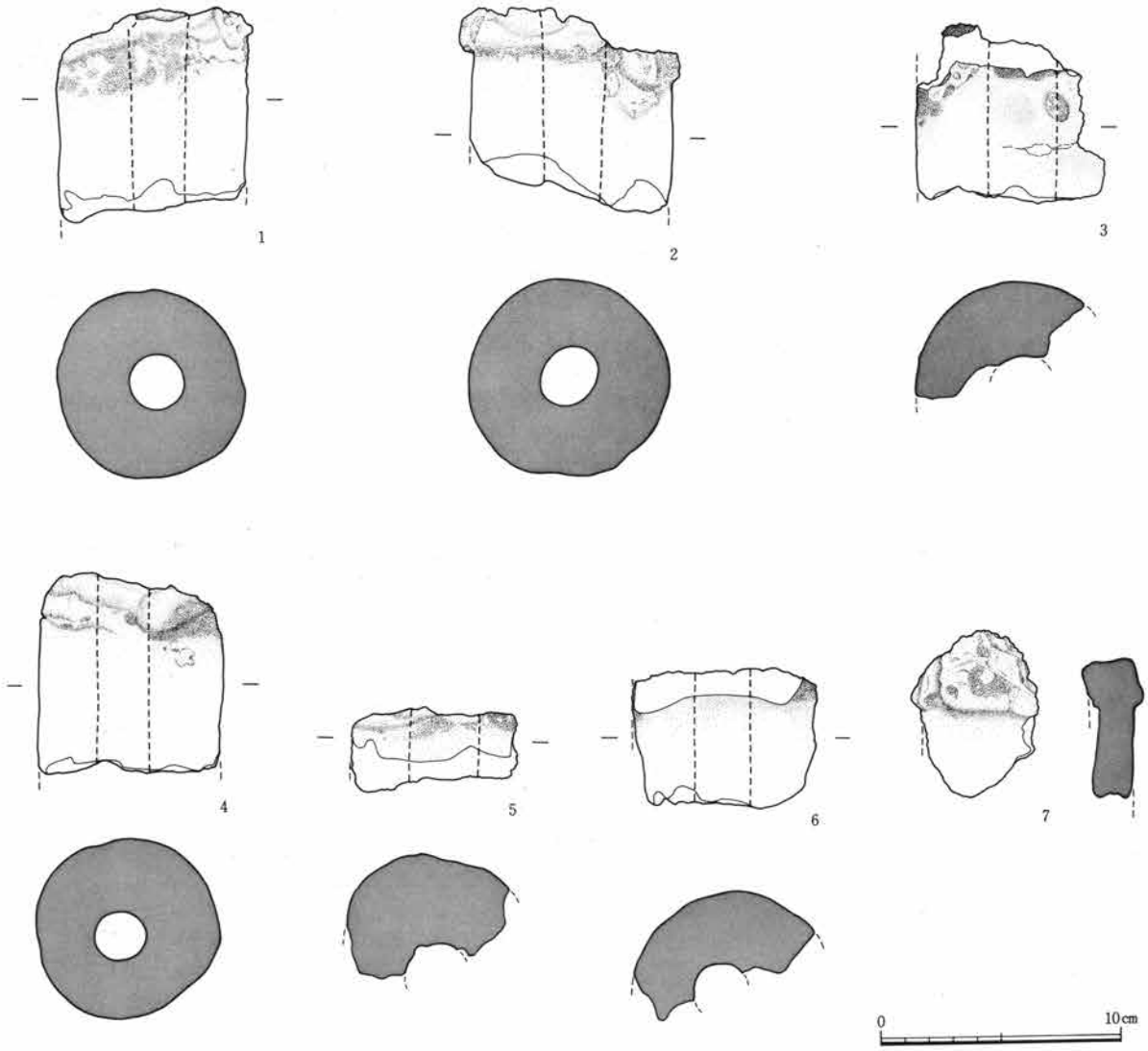
管見にして類例を知らないが、以上のような特徴から、本品を廚子の扉の飾り金具と想定できそうである。中野氏は、本の意匠の象嵌から書庫を想定されている。魚子や、象嵌にある秋草文や文字の書体などは、すべて桃山期を中心とした時代の特徴を備えており、大よその年代観を得られる遺物である。

12　フイゴ羽口　（第77図）

本遺跡から、7個体のフイゴ羽口が出土した。重機による表土はぎ時に検出した1点を除くと、他の6点は井戸・溝からの出土である。これらのうち4は8号溝の中央、底面より20㎝上方から出土した。また6は5号溝・8号溝の重複部分から出土し、5号溝底面から10㎝の高さであった。これらは、多量の土器や石製品と混在した状態で検出したもので、いずれも直接遺構に伴うものとは考えられない。

比較的遺存の良い1・2・4は径7.3～8.5㎝、孔径2.1～2.8㎝で、2がやや大きい。胎土は砂粒を含み、白色鉱物粒がみられる。先端部にはガラス質の気孔の多い滓が付着しており、フイゴ寄りの部分は還元されて灰色を呈する。通風孔壁面は平滑に仕上げられている。

製鉄関連遺物としては13号井戸上層から多量の鉄滓が出土している。製鉄・鉄器生産に関連するとみられる遺構は検出されていないことから、調査区周辺にこれらと関連する遺構が存在するか、または極めて小規模な・痕跡を遺存しない程度の作業が行われたと考えられる。



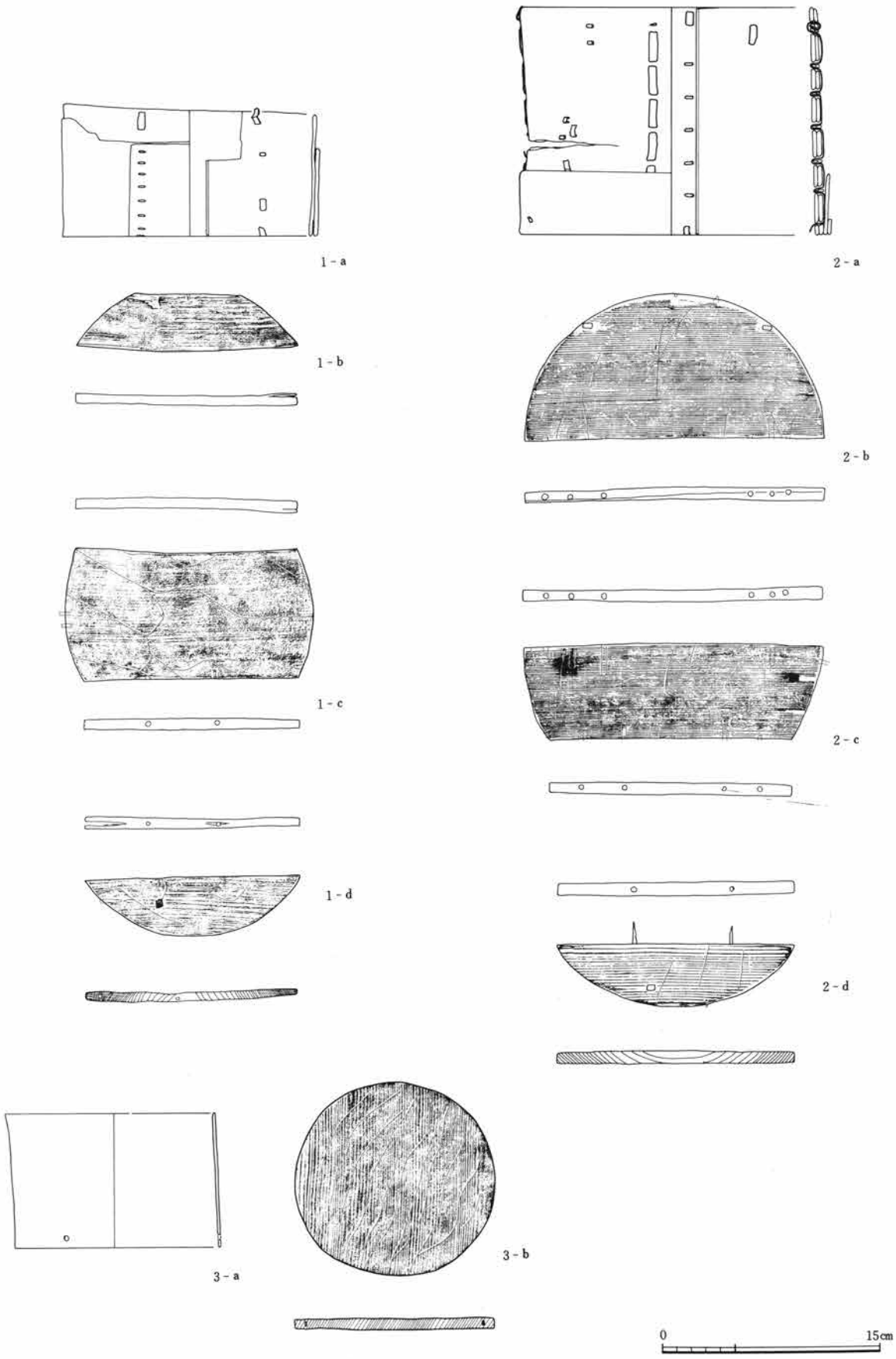
第77図　フイゴ羽口

13　木　製　品　（第78～82図，図版40・41）

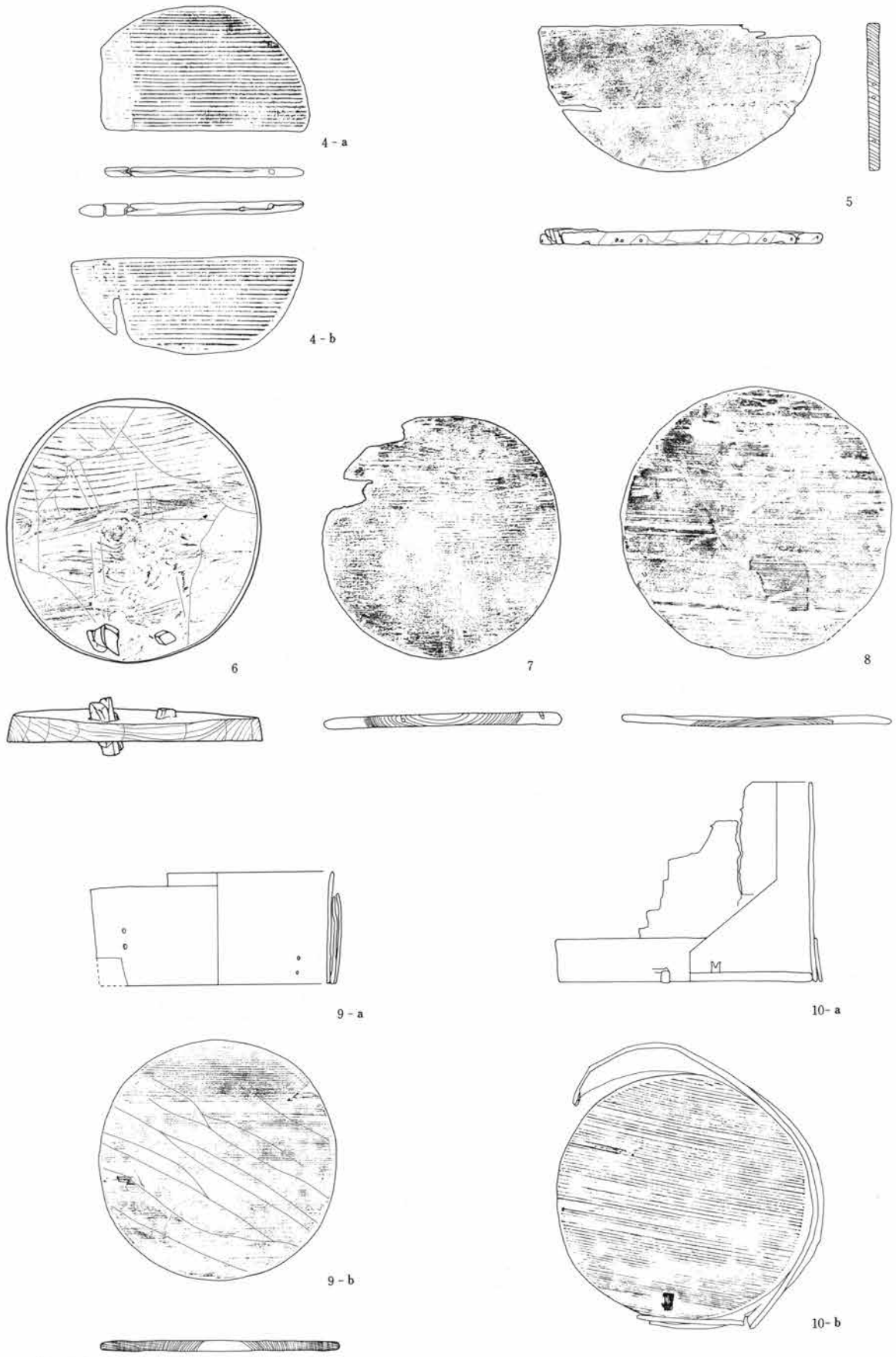
木製品はすべて井戸の下層から出土している。曲物と桶の内面にみられる黒色の付着物は漆と考えられる。20号井戸出土の桶は10枚の側板と２枚で構成する底板とからなり、これらから復原するとその大きさは第80図のようになる。側板はすべて木芯付近の板目材を素材とし、木芯側を外面にする。タガは上下２条であろう。56号井戸出土の12～25の側板は板目材・柾目材の両者があり、12・13・15・16、14・17・18、19～22、23～25＋２点の質感がよく似ていて、３～４個体分と考えられる。各遺物の特徴は観察表に示す。樹種の鑑定は、須田光衛氏に依頼した。モミ・カヤ類とスギが中心で、マツも若干見られる。これらはすべて太田市周辺に自生し、入手の容易な材とのことである。

表14　木製品一覧

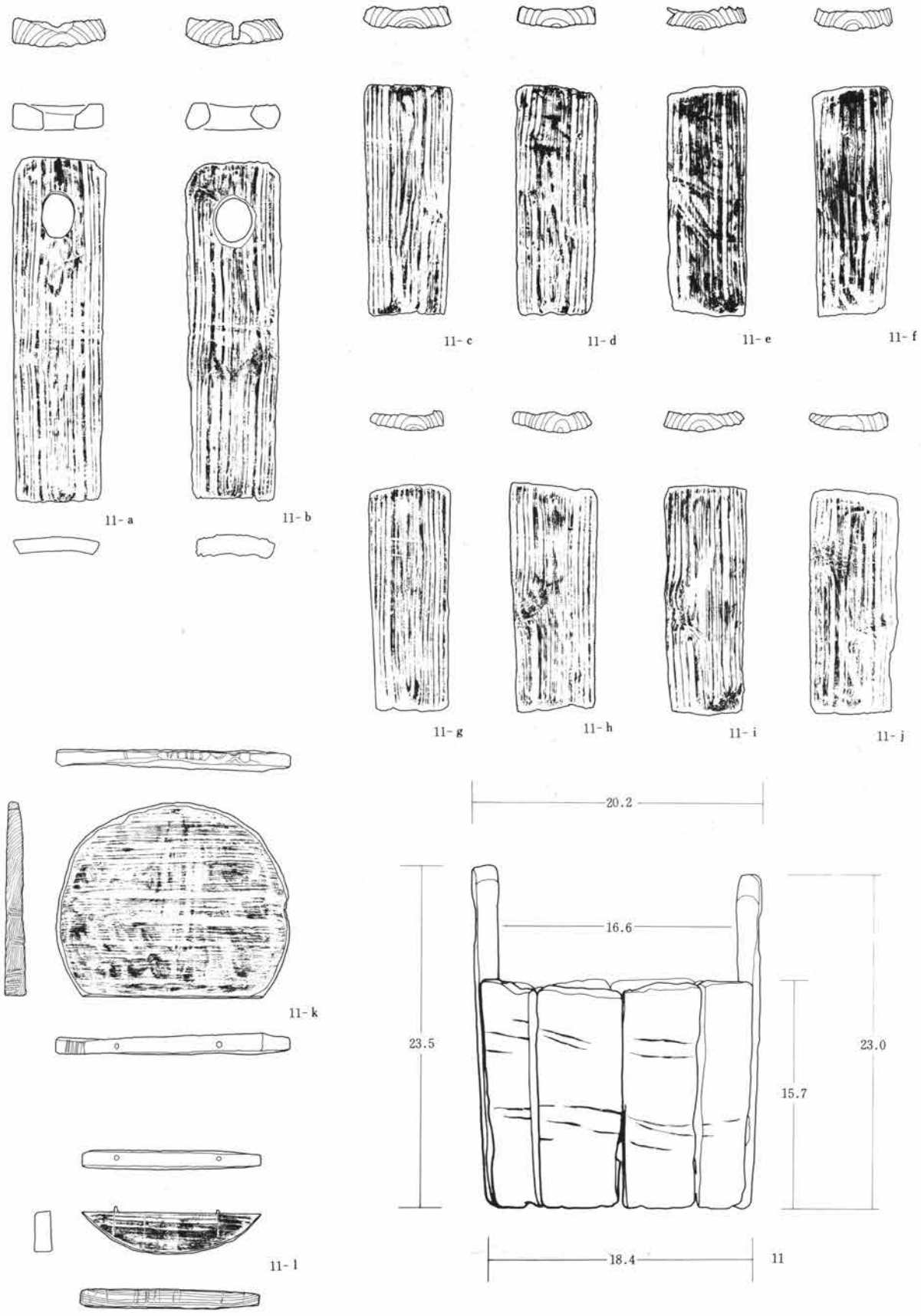
番号	名　称（樹種）	出土遺構	長さ(高さ) cm	幅 cm	厚　さ cm	特　　徴　単位はcm
1 a	曲物　側板（モミ・カヤ）（サクラの皮）	17号井戸	9.1	17.6	0.3	内側板は外径17.6、外側板は外径18.0に復元できる。外側板をつくったのち、内側板をいれて外側板とともに綴じる。内側板を綴じる部分は内外貫通して綴じ、その反対側は上方のみ綴じる。内側板外面には曲げのためのタテ方向の切り込みがみられ、内面は黒色を呈する。底板との接は木製クギを用いる。高さ9.1残。
1 b	曲物　底板（モミ・カヤ）	17号井戸	15.3	4.0	0.4～0.6	１ｃ・１ｄとともに１ａの底板を構成する。側板と接合するクギ穴を４つもち、内２つにはクギが遺存する。１ｂ－１ｃは割レである。内面黒色。クギ１、３残。
1 c	曲物　底板（モミ・カヤ）	17号井戸	17.0	8.7	0.6～0.8	側板と接合するクギ穴を３つもち、内２つにはクギが遺存する。また１ｄと接合するクギ穴を２つもつ。径17.4。内面に削り痕を残す。
1 d	曲物　底板（モミ・カヤ）	17号井戸	14.8	4.1	0.5	側板と接合するクギ穴を２つもち、１ｃとの接合は対応する位置にクギが一部遺存している。
2 a	曲物　側板（モミ・カヤ）（サクラの皮）	56号井戸	21.4	15.6	0.2～0.4	基本的には十字形に４ヵ所で綴じ、一部３重になる。その他任意に４ヵ所で補強する。底部近くは幅4.2の側板の外にさらに1.1の幅の板を巻いて強化する。底板との接合は木製クギ10ヵ所、綴じ紐３ヵ所で行なう。上端径20.5、下端径21.3、高さ15.5を測る。
2 b	曲物　底板（モミ・カヤ）	56号井戸	20.6	9.9	0.6～0.9	２ｃ・２ｄとともに２ａの底板を構成する。側板と接合するクギ穴を４つもち、綴じ紐２ヵ所が遺存する。また２ｃとの接合用クギ穴を６ヵ所にもつ。
2 c	曲物　底板（モミ・カヤ）	56号井戸	20.5	5.5	0.7～0.9	側板と接合するクギ穴を５つもつ。また２ｄとの接合用クギ穴を４ヵ所にもつ。２ｄとの接合用を含めて計10ヵ所になる。
2 d	曲物　底板（モミ・カヤ）	56号井戸	15.8	4.3	0.8～0.9	側板と接合するクギ穴を１ヵ所もち、綴じ紐１ヵ所が遺存する。２ｃと対応する底板接合用の穴は２ヵ所しかなく、内側のものが対になる。クギは断面方式で、竹製の可能性がある。径20.5。
3 a	曲物　側板（モミ・カヤ）	55号井戸	14.3	9.2	0.2～0.3	外径14.2、高さ9.2が復元される。下端から0.8上方に、側板との接合用クギ穴２ヵ所が遺存する。内面黒褐色を呈する。
3 b	曲物　底板（モミ・カヤ）	55号井戸	13.8	13.3	0.6～0.8	径13.2～13.8の不整円形を呈する。１枚板である。内面に削り痕がよく残っている。側面は丁寧に削って仕上げており、側板との接合用クギ穴が、約120°の間隔で３ヵ所みられる。内外面に黒色の付着物がある。



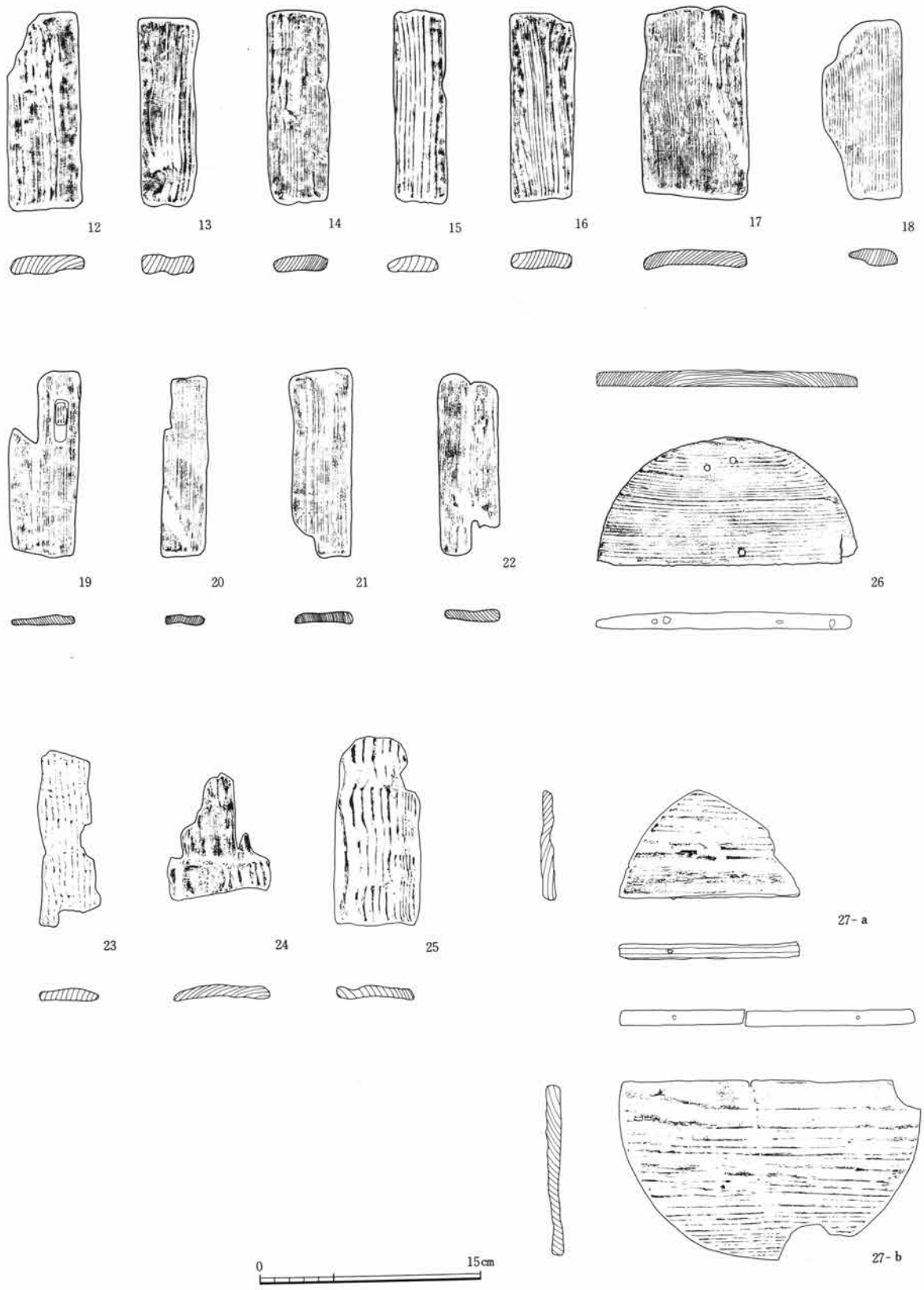
第78図 木 製 品(1)



第79図　木　製　品(2)

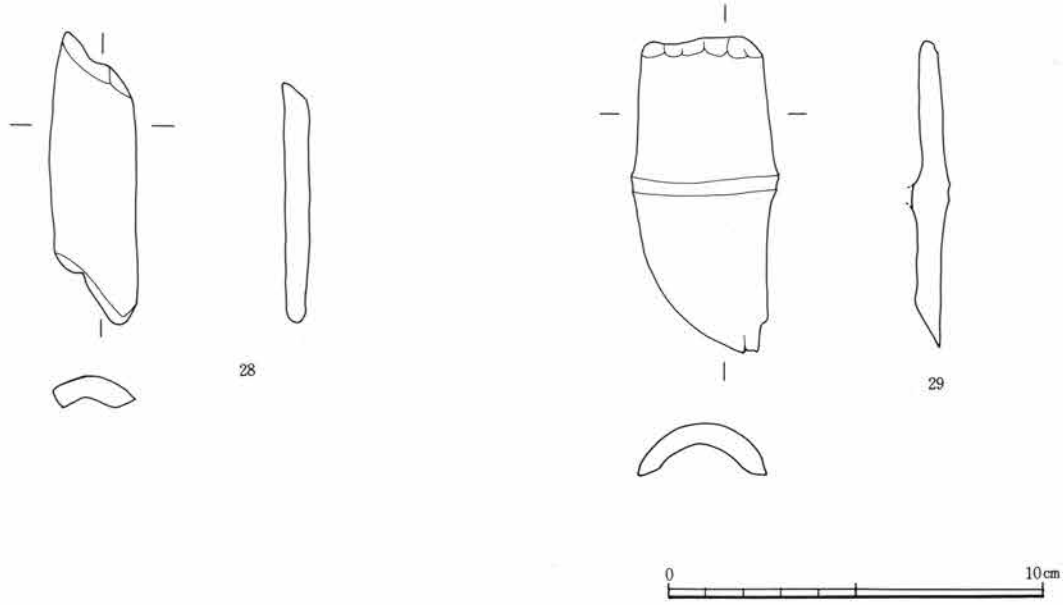

11-a
11-b
11-c
11-d
11-e
11-f
11-g
11-h
11-i
11-j
11-k
11-l
20.2
16.6
23.5
23.0
15.7
18.4
11
0
15cm

第80図 木 製 品 (3)



第81図　木　製　品(4)

番号	名　称 (樹種)	出土遺構	長さ(高さ) cm	幅 cm	厚　さ cm	特　　徴 単位はcm
4 a	曲物　底板 または蓋 (スギ)	52号井戸	14.3	8.5	0.4～0.8	径15.1～16.0の不整円形を呈する。周縁部は磨滅して薄くなっており、4 bとともに曲物の底板を構成する。側板との接合用クギ穴が2ヵ所みられる。内外面とも磨滅著しい。蓋に転用された可能性がある。4 bとの接合用クギ穴が2ヵ所あり、うち1ヵ所の木製クギは長さ1.1が遺存している。
4 b	曲物　底板 (スギ)	52号井戸	15.0	6.6	0.4～0.8	側板との接合用クギ穴は周縁が磨滅しているため、現存ではみられない。4 aとの接合用のクギ穴は3ヵ所にある。蓋の可能性あり。
5	曲物　底板 (モミ・カヤ)	52号井戸	19.5	10.0	0.8～0.9	側板との接合用クギ穴10ヵ所がみられる。径19.1が復元される。内外面・側面とも丁寧に削って仕上げている。内外面に細かい擦痕があり、内面は黒色の付着物がみられる。
6	桶　底板 (マツ・スギ)	52号井戸	17.8	18.2	1.3～2.2	径17.6～18.1のほぼ円形の1枚板で、図示した面は比較的雑に仕上げ、裏面の方が丁寧である。図示面中央が凸状になり周縁よりも厚く作っている。側面の傾斜からこの面を外面とする桶の底板と考えられる。節穴2ヵ所にはクサビ状の木片を裏面から5打ち込んでふさいでいる。樽の底板または蓋の可能性もある。
7	曲物　底板 (モミ・カヤ)	52号井戸	16.5	16.7	0.5～0.9	径16.3～16.5のほぼ円形の1枚板で、図の上方が薄く、下方が厚くなっている。裏面中央に径0.4ほどの貫通しない小孔がある。内外面に擦痕と刻みがあり、図示した内面では木目にほぼ直角のものが多い。側面は丁寧に仕上げており、側板との接合用クギ穴は3ヵ所に遺存する。図上左上の欠損部にもう1ヵ所あったと思われる。幅0.7ほどの棒状のアタリがみられる。
8	曲物　底板 (モミ・カヤ)	56号井戸	18.8	18.7	0.3～0.6	径18.7前後のほぼ円形の1枚板である。周縁部の破損が著しく、側板との接合用クギ穴は見られず、綴じ紐の痕跡もない。蓋の可能性がある。遺存している側面は丁寧に仕上げている。



第82図 木　製　品(5)

番号	名　称 (樹種)	出土遺構	長さ(高さ) cm	幅 cm	厚　さ cm	特　　徴 単位はcm
9 a	曲物　側板	52号井戸	7.8	17.3	0.2～0.3	内側板は内径15.2、外側板は外径17.0前後に復元できる。一部は三重にまかれる。下方に１対、中位に１対の計４孔（径0.3前後）がみられる。内面に黒色の付着物がある。
9 b	曲物　底板	52号井戸	16.6	16.6	0.6～0.8	径16.6の１枚板で、内面に削り痕が残っている。側面に側板との接合用クギ穴が１ヵ所みられる。内面に黒色の付着物がある。
10 a	曲物　側板 (モミ・カヤ) (サクラの皮)	59号井戸	13.8	18.3	0.2～0.3	上端径18.0、下端径18.7が復元できる。高さ13.7を測る。底部は幅3.0の板を巻いている。底板との接合はクギおよび綴じ紐の両者を使い、それぞれ180°の位置で接合する。内外面の磨滅が著しい。
10 b	曲物　底板	59号井戸	17.0	16.8	0.3～0.6	径16.6～17.2の楕円形を呈する。１枚板である。側板との接合用綴じ紐２ヵ所が遺存している。クギ穴は２ヵ所認められる。
11 a	桶　側板 (スギ)	20号井戸	23.8	5.9～6.4	1.0～1.8	木芯近くからとった板目材を使い、外面に木芯側をおく。上方に2.9×2.2の楕円形の穴をあけ把手を通す穴にしている。穴の内側面は浅く抉られて薄くなり、外面の下方には穴を囲むようなアタリがみられる。
11 b	桶　側板 (スギ)	20号井戸	23.2	5.8～6.6	1.3～1.7	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。上方に2.9×2.4の楕円形の穴をあけて把手を通す穴にする。穴の内面側は浅く抉られて薄くなっている。下端から5.0付近および11.0付近にタガのアタリがみられる。
11 c	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.9	5.4～6.2	1.2	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。下端から5.0付近および12.0付近にタガのアタリがあり、内面下端から2.0付近にも底板のアタリが見られる。以下、11の側板はすべて同様のアタリがみられる。
11 d	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.9	5.2～5.7	1.3	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。
11 e	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.9	4.7～5.5	1.4	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。
11 f	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.9	4.7～5.5	1.2	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。
11 g	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.6	5.1～5.8	1.4	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。
11 h	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.8	5.5～6.1	1.3	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。
11 I	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.8	5.0～5.7	1.5	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。
11 J	桶　側板 (スギ)	20号井戸	15.5	5.6～6.1	1.3	木芯付近の板目材を使い、木芯側を外面におく。
11 k	桶　底板 (スギ)	20号井戸	16.4	13.5	1.1～1.5	径16.2の柾目材で、11mとともに底板を構成する。11mとの接合用クギ穴が２ヵ所ある。側板との接触面は丁寧に仕上げている。
11 l	桶　底板 (スギ)	20号井戸	12.5	2.8	1.1～1.3	柾目材。11 l との接合用クギ穴が２ヵ所あり、木製（竹製？）クギ２本が遺存する。側面は丁寧に仕上げている。
12	桶　側板 (スギ)	56号井戸	13.3	4.9～5.0	0.9～1.2	板目材で、木芯側を内面にする。内面に漆と考えられる黒色の付着物がある。下端から4.0付近にタガのアタリが残っている。

番号	名　称 (樹種)	出土遺構	長さ(高さ) cm	幅 cm	厚　さ cm	特　　徴 単位はcm
13	桶　側板 (スギ)	56号井戸	12.7	4.0～	1.0～1.2	板目材で、木芯側を外面にする。片側面は12と接合し、他の側面下方は破損している。下方にタガのアタリを遺存する。
14	桶　側板 (モミ・カヤ)	56号井戸	13.1	4.1～4.2	0.9～1.0	柾目材。下方にタガのアタリが遺存する。内面に黒色の付着物がある。
15	桶　側板 (スギ)	56号井戸	12.9	3.5	1.0～1.1	板目材。木芯側を外面にする。内面下方に黒色の付着物があり、外面の上下端近くにタガのアタリがある。
16	桶　側板 (スギ)	56号井戸	12.7	4.1～4.3	1.0	板目材。内面に黒色の付着物があり、外面の上下にタガのアタリがある。
17	桶　側板 (モミ・カヤ)	56号井戸	13.0	7.2	0.9～1.1	柾目材。内面に黒色の付着物があり、外面の上下にタガのアタリがある。
18	桶　側板 (モミ・カヤ)	56号井戸	12.1	5.4	1.0～1.2	柾目材。内面に黒色の付着物があり、外面の上下にタガのアタリがある。
19	桶　側板 (モミ・カヤ)	56号井戸	12.5	4.2～4.8	0.5～0.7	柾目材。内面下方に黒色の付着物があり、外面の下方にタガのアタリがある。上方に2.7×0.9の長方形の穴があり、把手またはクサビの一部と思われる長さ1.5の木片が遺存する。
20	桶　側板 (モミ・カヤ)	56号井戸	12.2	3.0	0.5～0.7	柾目材。内面上方に黒色の付着物があり、上端は焼けている。外面の上下にタガのアタリがある。
21	桶　側板 (モミ・カヤ)	56号井戸	12.7	3.9～4.3	0.6～1.0	柾目材。内面に黒色の付着物があり、外面の上下にタガのアタリがある。
22	桶　側板 (モミ・カヤ)	56号井戸	12.2	4.1	0.6～0.8	柾目材。内面に黒色の付着物があり、外面の上下にタガのアタリがある。
23	桶　側板 (スギ)	56号井戸	11.7	3.6～	0.4～0.9	柾目材。外面に幅1.5～2.0の帯状の凹みがあり、タガのアタリとみられる。
24	桶　側板 (スギ)	56号井戸	8.3	7.0	0.5～0.9	板目材。外面下端は幅1.7～2.3の厚い部分がある。上方は破損している。
25	桶　側板 (スキ)	56号井戸	12.2	5.9	0.3～1.0	板目材。木芯側を内面にする。外面に幅1.6～2.1の帯状の凹みが3本あり、タガのアタリとみられる。内面に黒色の付着物がある。23～25の表面の磨滅が著しい。
26	桶　底板 (スギ)	13号井戸	17.3	8.6	1.0～1.2	径17.6に復元される底板の構成材である。板目材。他の底板と接合する面には4ヵ所のクギ穴があり、また内外面に貫通する小穴が3ヵ所にみられる。内面には削り痕が残り、黒色の付着物がある。側面は丁寧に削って仕上げている。
27 a	桶　底板 (マツ)	56号井戸	12.3	7.3	0.9～1.0	板目材。27 b とともに底板を構成する。内外面磨耗が著しい。27 b との接合面にクギ穴が1ヵ所遺存している。
27 b	桶　底板 (マツ)	56号井戸	20.0	12.0	0.7～1.1	板目材。径20.4に復元される。内外面磨滅が著しい。27 a との接合面にクギ穴が2ヵ所遺存している。
28	不明竹製品 (マダケ)	56号井戸	7.7	2.3	0.6	上端部に鋭い削り痕が2回見られる。釣瓶の部品か。
29	不明竹製品 (マダケ)	56号井戸	8.3	節部3.9	0.5	上端部に削り痕が残っている。釣瓶の把手か。削り痕付近の復元径3.2。

14　硯　（第83図）

1は358号土壙から出土した。A面は墨堂中央部が大きく窪んでよく使い込まれており、図中中央上端部は薄くなっている。硯縁は3方にあり、池部を欠失する。側面は平滑に仕上げていて、A面右下隅はさらに面取りされている。B面は中央部がやや窪んで滑らかな部分をもつ。一部に擦痕も見られるが、この面も硯として使用された可能性がある。長さ7.8cm、幅5.5cm、厚さ1.6cmが残存している。石質は黒色頁岩。

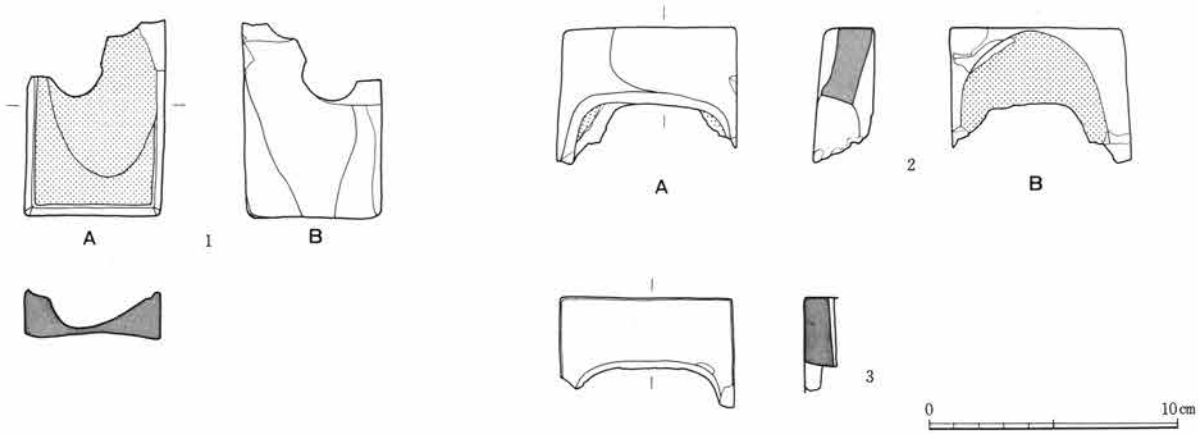
2は8号溝D区から出土した。A面は池部の一部であり、図中右上は薄く石材が剝離している。現存から計測した池部の深さは1.3cmである。側面は平坦に仕上げているが、池部の縁を基準にすると右上隅は直角をなさず、90°以下である。また、各側面の接する部分は細い幅で面取りされている。

B面は中央部が半円状に窪んでおり、この窪んだ面も滑らかであることから、この面は墨堂として使用されたと考えられる。既ちA面の池部がB面の墨堂に、B面の池部がA面の墨堂に使用されたものである。また、図中の中央部下端は折れた形跡がみられず、A面の池部最深部とB面の墨堂の面は鋭利に接しており、このことからB面使用中にB面が磨り減ってA—B両面に貫通する穴があいてしまい、その後廃棄されて折れたものと考えられる。長さ5.3cm、幅7.4cm、厚さ2.3cmが残存している。石質は黒色頁岩。

3は175号土壙から出土した。池部の縁が遺存しており、背面は破損した剝離面である。縁の上面は平坦に仕上げており、各側面を接する角は丁寧に面取りを施している。各側面も平坦に仕上げている。実際に使用されたものかどうかは不明で、平坦に仕上げた面には擦痕が多く残っている。長さ4.2cm、幅6.9cm、厚さ1.3cmが残存している。石質は黒色頁岩。

以上の3点の硯のうち、3を除く1・2はよく使い込まれており、使用するうちに表面・背面に貫通する穴があいて廃棄されたものと考えられる。

日本での硯石の採掘は平安時代にさかのぼり、石製硯は鎌倉時代に至って多用されるようになったという。本遺跡出土の石製硯は実用的な大量生産品の一つと見られ、文字が普及して日常的に文字を書くようになる近世以後の遺物の可能性もある。なお、長楽寺遺跡（大江　1978）では15世紀末の井戸から石製硯が出土しているが、本遺跡出土例に比べ優品である。



第83図　硯

15 古　　銭 （第84～86図，図版43）

総数34枚の貨幣が出土した。1～4は45号竪穴から、6～16は136号竪穴からそれぞれ出土している。136号竪穴出土の6～16は紐でつづられて出土したものであるが、その年代は1039～1408年と幅が広い。一覧表では並んでいた順に示したものである。45号土壙も同様で、年代の幅が広い。両者とも永楽通宝が最も新しく、墓域としての本遺跡の年代示標となろう。

出土貨幣を時代により分類すると、右のとおりである。

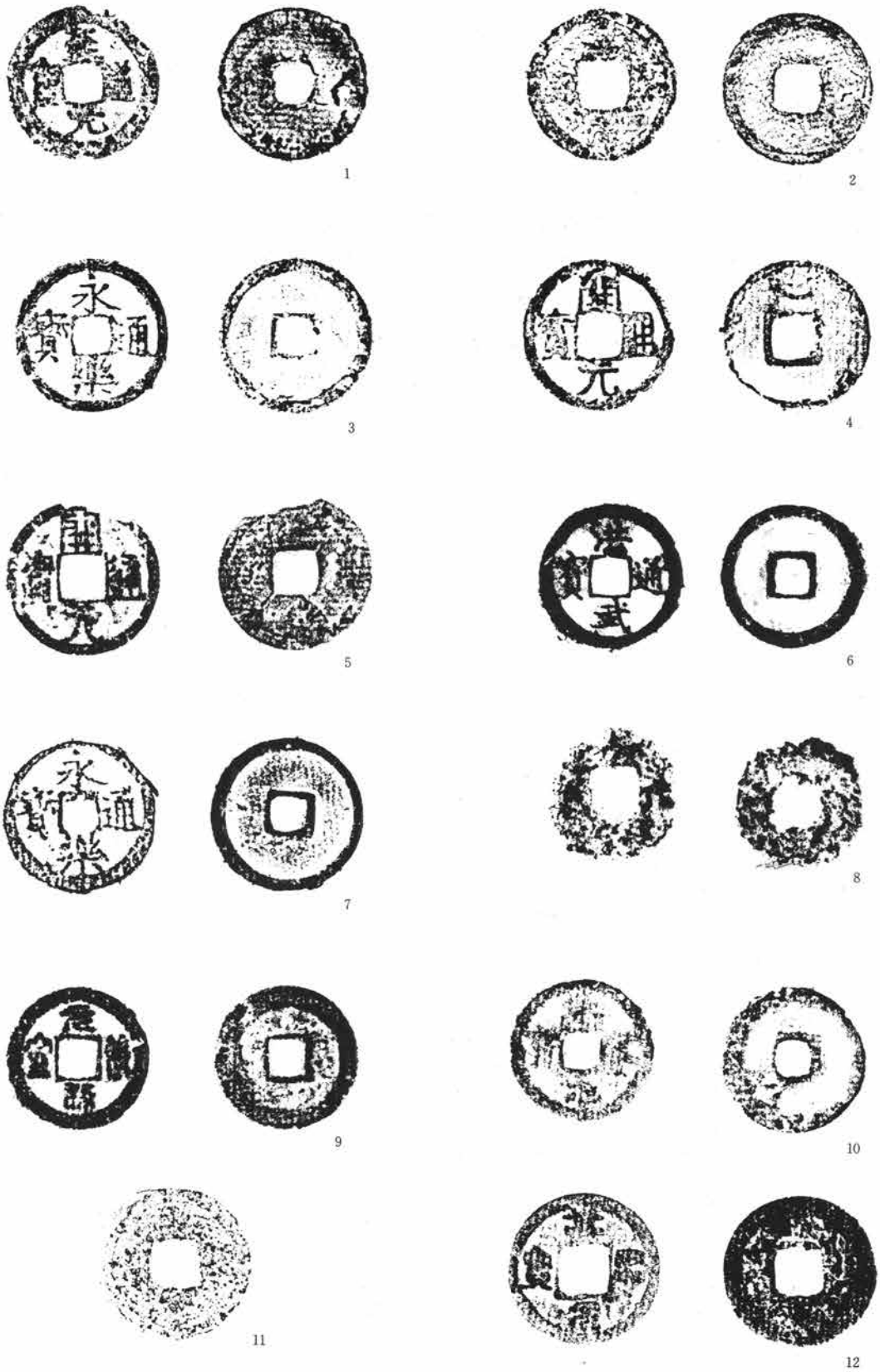
唐　　銭	3枚
北　宋　銭	14枚
南　宋　銭	1枚
明　　銭	11枚
寛 永 通 宝	2枚
文 久 永 宝	2枚
不　　明	1枚

渡来銭では北宋銭が最も多く、明銭がこれについで多いが、元銭を含まない。国内銭では皇朝銭の出土がなく、江戸時代以降のもののみである。(矢島恭介・1967)。また、江戸時代の貨幣はすべて、遺構に伴っていない。

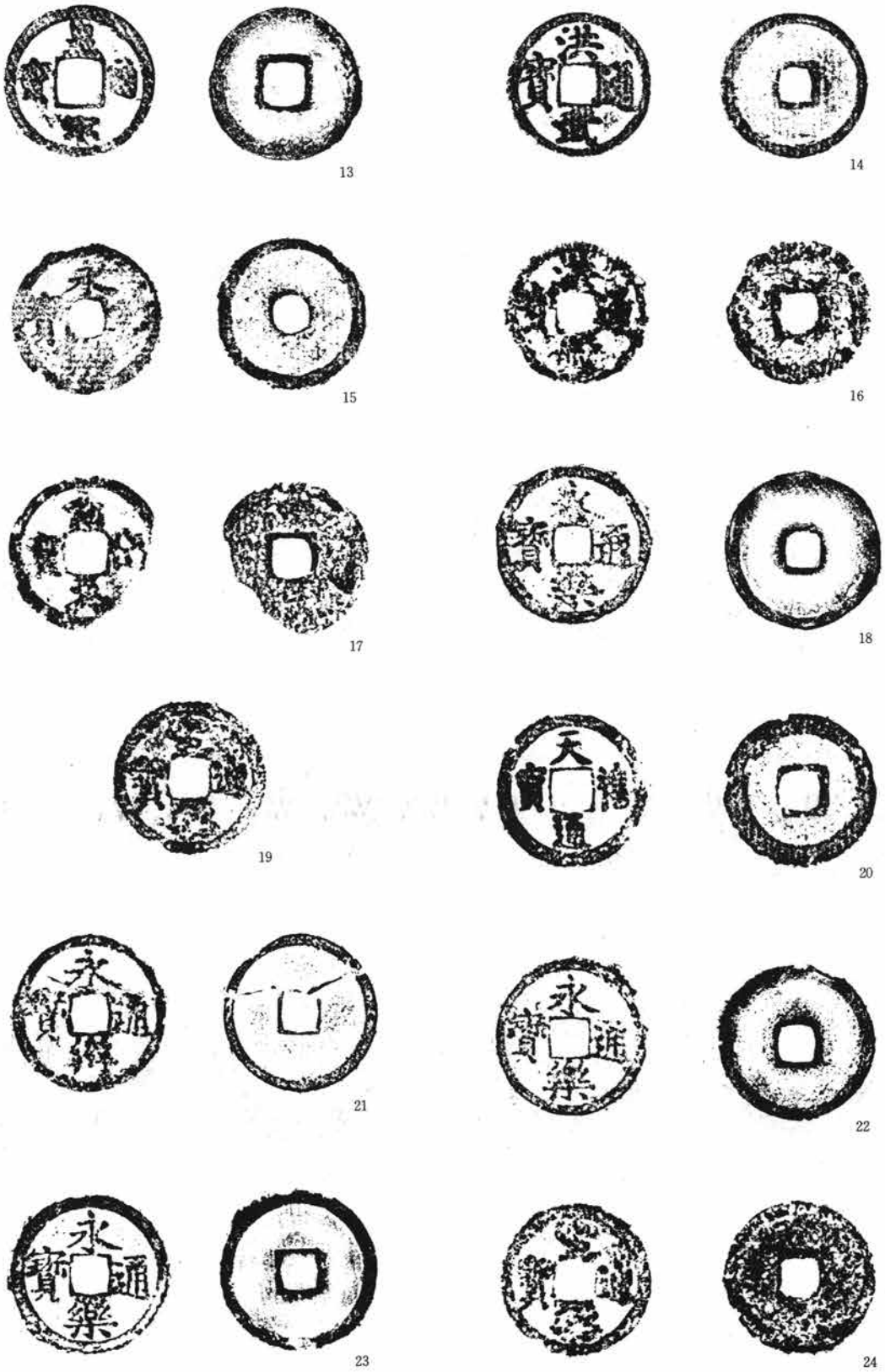
なお、桃山期に永楽通宝（銅銭・天正15年＝1587年）が国内で鋳造されているが、当遺跡の永楽通宝を当該期のものとする根拠があげられないため、すべて明銭として扱った。

表15 古 銭 一 覧

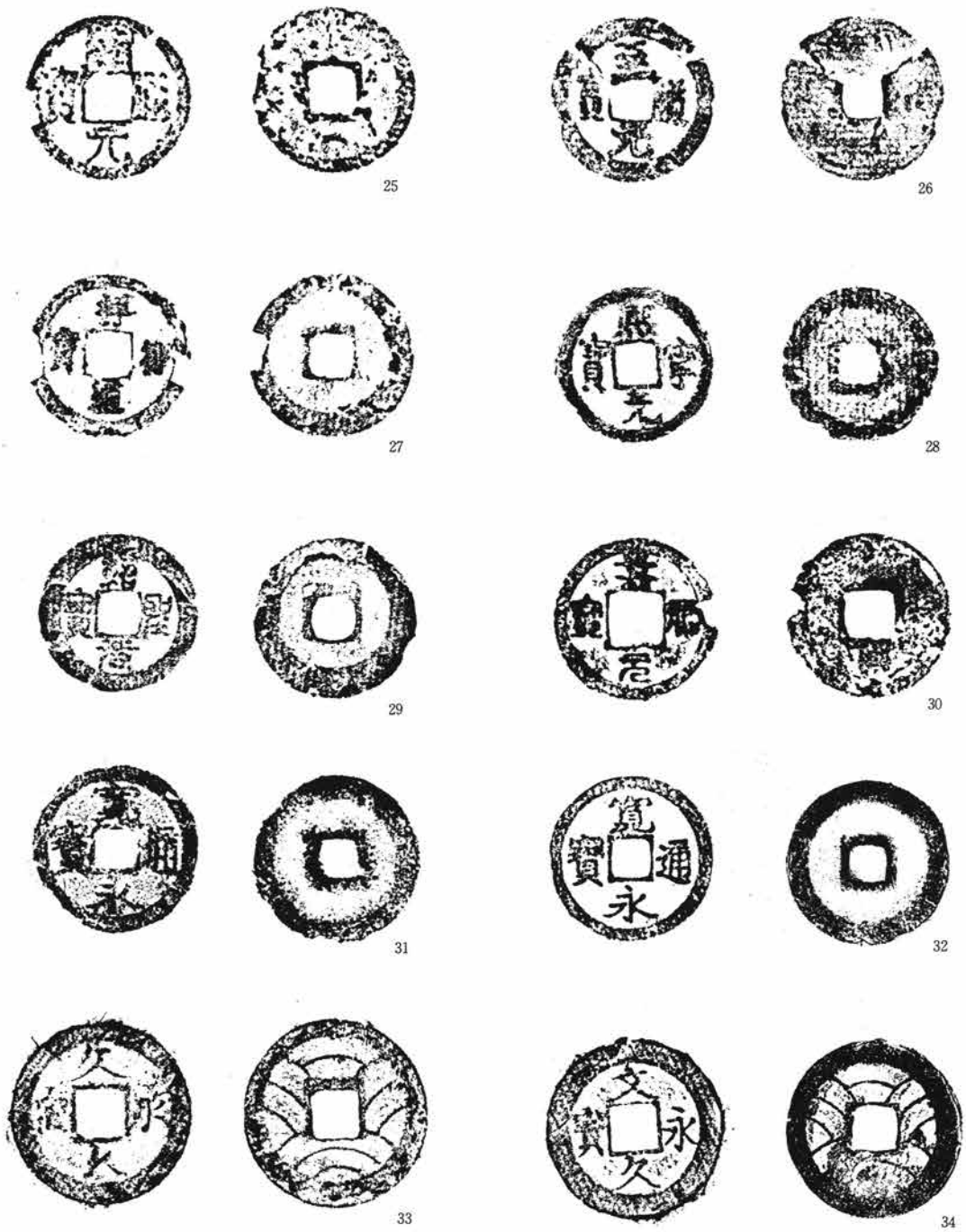
番号	銭名	出土地点	鋳造年号（西暦）	鋳造地名	備考
1	至道元寶	45号竪穴	至道元年 (995)	北宋	
2	嘉祐元寶	45号竪穴	嘉祐元年 (1056)	北宋	腐食がすすみ不明瞭。
3	永楽通寶	45号竪穴	永楽6年 (1408)	明	
4	開元通寶	45号竪穴	武徳4年 (621)	唐	裏面「爪」
5	開元通寶	120号竪穴	武徳4年 (621)	唐	
6	洪武通寶	136号竪穴No.1	洪武元年 (1368)	明	
7	永楽通寶	136号竪穴No.2	永楽6年 (1408)	明	
8	嘉定通寶	136号竪穴No.3	嘉定元年 (1208)	南宋	腐食がすすみ、外縁部を欠失する。
9	元符通寶	136号竪穴No.4	元符元年 (1098)	北宋	篆書、元祐（北宋1084）か？
10	熙寧元寶	136号竪穴No.5	熙寧元年 (1068)	北宋	
11	不明	136号竪穴No.6			腐食が著しく、銭名の判読できない。
12	嘉祐元寶	136号竪穴No.7	嘉祐元年 (1056)	北宋	篆書
13	皇宋通寶	136号竪穴No.8	宝元2年 (1039)	北宋	
14	洪武通寶	136号竪穴No.9	洪武元年 (1368)	明	
15	永楽通寶	136号竪穴No.10	永楽6年 (1408)	明	
16	洪武通寶	136号竪穴No.11	洪武元年 (1368)	明	
17	祥符元寶	M－7グリッド	大中祥符元年 (1008)	北宋	祥符一不明瞭。腐食がすすむ。
18	永楽通寶	U－11グリッド	永楽6年 (1408)	明	
19	聖宋元宝	Q－10グリッド	建中靖国元年 (1101)	北宋	
20	天禧通寶	W－11グリッド	天禧年間 (1017～)	北宋	
21	永楽通寶	X－18グリッド	永楽6年 (1408)	明	
22	永楽通寶	南東包含層	永楽6年 (1408)	明	
23	永楽通寶	東南包含層	永楽6年 (1408)	明	
24	宣德通寶	3トレンチ東端	宣德8年 (1433)	明	腐食がすすむ。
25	開元通寶	包含層	武徳4年 (621)	唐	
26	至道元寶	包含層	至道元年 (995)	北宋	腐食し、脆くなっている。
27	祥符通寶	包含層	大中祥符2年 (1009)	北宋	
28	熙寧元寶	包含層	熙寧元年 (1068)	北宋	腐食し、脆くなっている。
29	紹聖元寶	包含層	紹聖元年 (1094)	北宋	篆書
30	嘉祐元寶	包含層	紹聖元年 (1094)	北宋	篆書
31	寛永通寶	K－14グリッド			
32	寛永通寶	西北包含層			
33	文久永寶	A地点表採	文久3年 (1863)		
34	文久永宝	A地点表採	文久3年 (1863)		王宝



第84図　古　　銭(1)



第85図　古　　銭 (2)



第86図　古　　銭 (3)

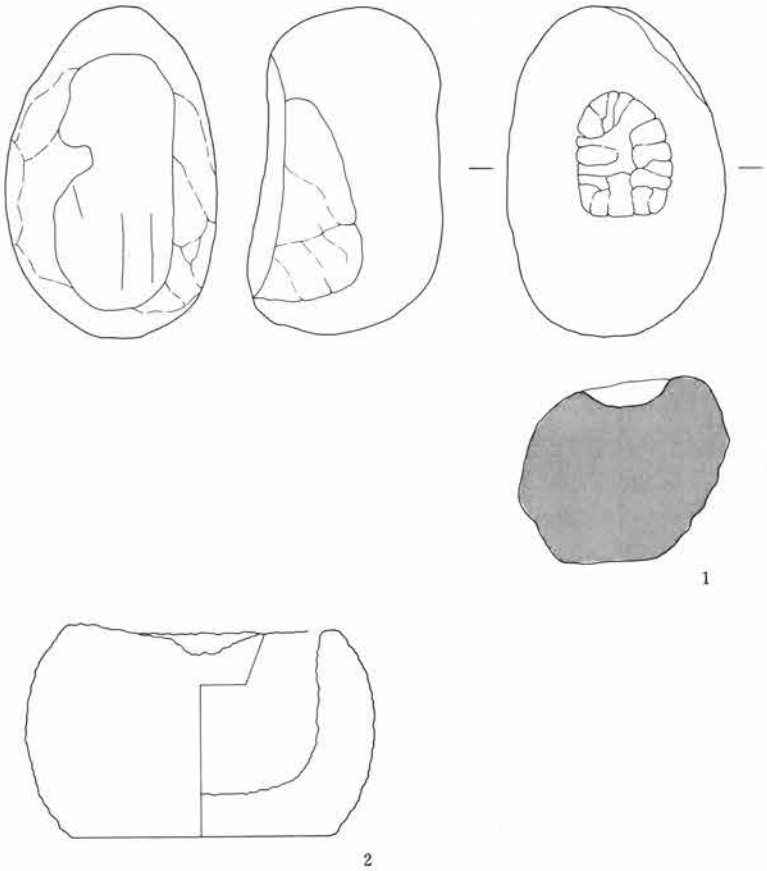
16　その他の遺物

(1)　不明石製品　　1は47号井戸の上層より出土した。長さ21.7㎝の多孔質安山岩（円礫）に9.0×4.8㎝楕円形の窪みが1ヵ所あり、ノミ状の工具痕が不明瞭に残っている。反対側は砥石として使用し、著しく磨滅している。一部に火熱を受けた痕跡がある。また剝落した所も多い。

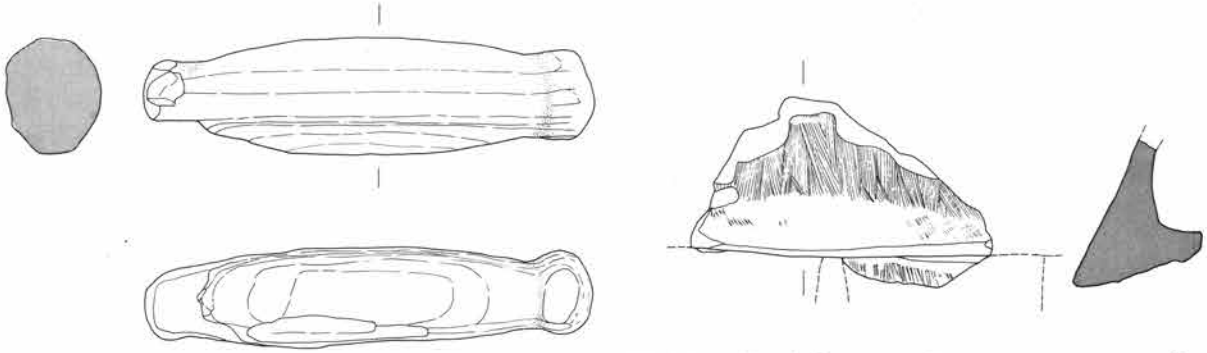
2は66号井戸より出土した完形の石鉢で、片口状の窪みがある。口径18.6、胴部径23.3、底径17.6、高さ14.0（単位㎝、径は外径）である。倒置すると五輪塔水輪と同一の外観を呈す。内外面とも細かなはつり痕があり、器面の磨滅は少ない。容器と思われるが、片口のあることより骨蔵器とは考えにいく。

(2)　1　石棒　　2号井戸の上層から、多量の礫と混在した状態で出土した。緑泥片岩製で、長さ35.8㎝、厚さ10.2～7.7㎝である。やや剝落しているが、ほぼ完形である。一部に火熱を受けている。縄文時代の遺物と思われるが、本遺跡から時期の明瞭な縄文土器は採集されていない。

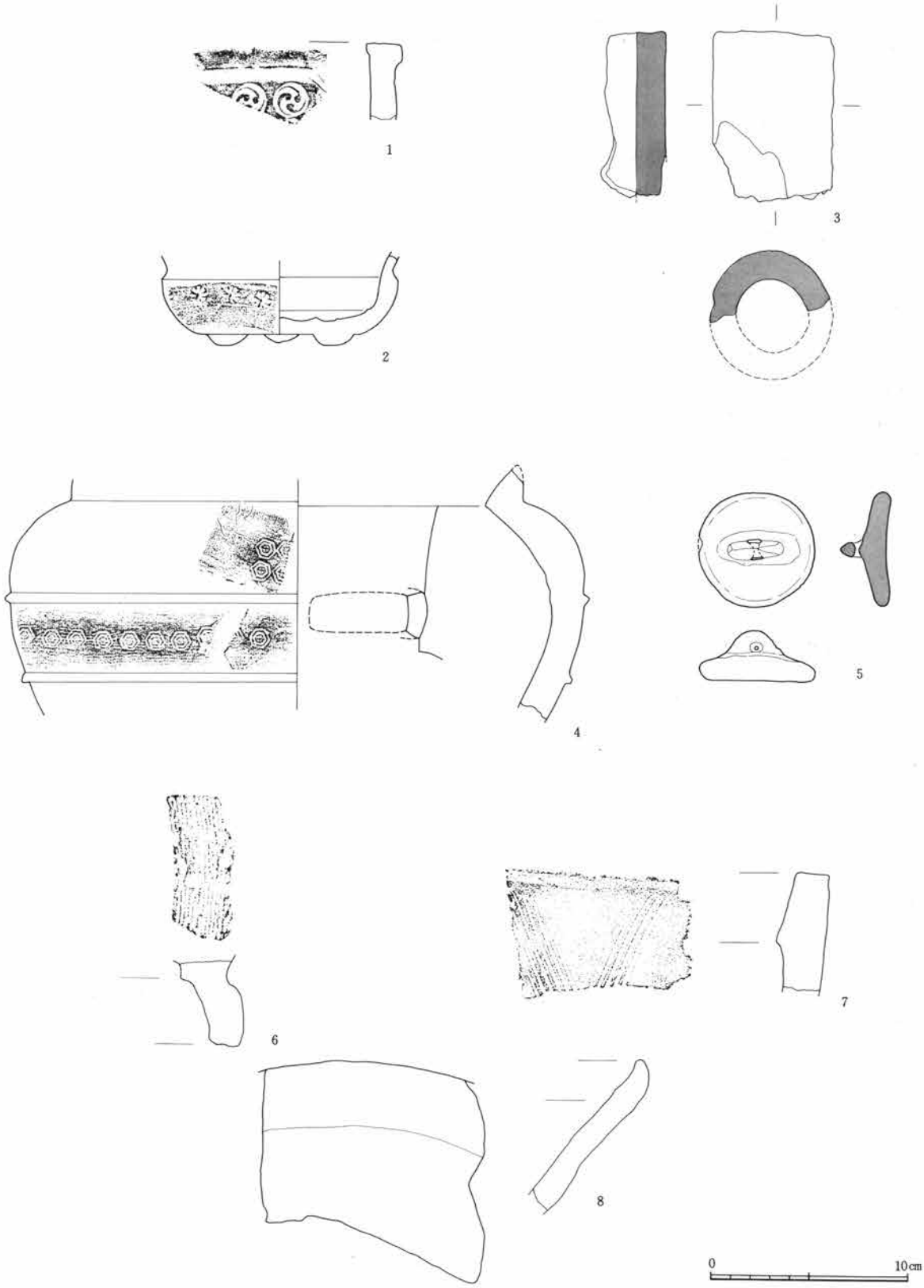
2　形象埴輪　　52号井戸の上層から出土した。大型の正装男子立像の上衣裾部分の破片である。刷毛目はやや不揃いで、端部のナデは刷毛目の後に施す。胎土には細礫の混入が多い。焼成は良好で須恵器的な焼きしまりがある。色調は淡褐色で断面は灰色を呈す。なお、本遺跡からは井戸・溝を中心に埴輪が出土し



第87図　その他の遺物 (1)　石製品



第88図　その他の遺物 (2)　石棒・埴輪



第89図　その他の遺物 (3)　土　　器

たが、大半が円筒埴輪の破片であった。

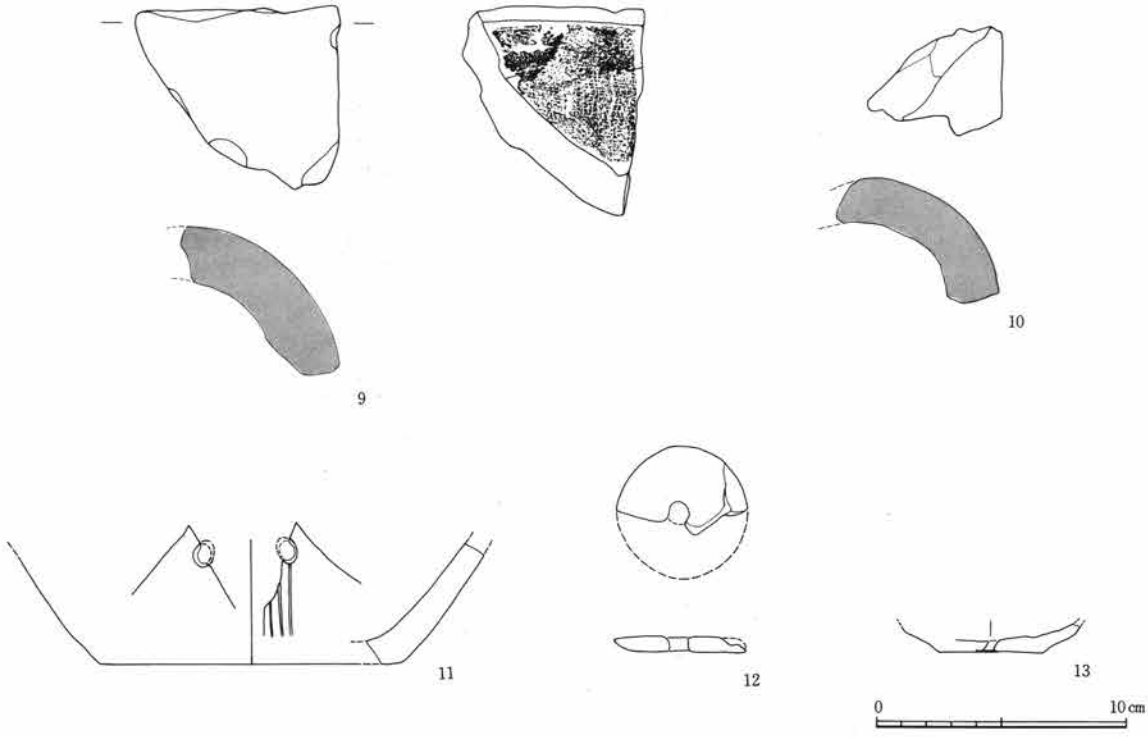
(3)　中・近世の土器　　かわらけ・内耳・擂鉢以外の中近世土器（土製品）を一括した。穴鉢・瓦などが中心であるが、不明のものもある。2の香炉は15世紀代の遺物と思われる。[註1] 5は工具と思われる。形状は鏡の模造品のようであり、小型の蓋のようでもある。胎土や焼成は内耳や擂鉢に近いものであり、断面が黒色となる特徴はそれらと完全に一致する。3は筒状を呈すと思われる土製品である。戦前まで、モミガラや麦ワラを焼く時、筒状の土製品を空気吸入用にさし込んだ風景が見られたそうである。7は内面にきわめて強い二次火熱を受けているため、置き竈と考えられる。瓦の出土は2点のみであり、瓦葺きの建物が遺跡地に存在したとは考えられない。9は中世・10は近世の瓦である。13は底部中央に焼成後穿孔のあるかわらけで、青砥葛西城址の報告で灯明皿としての使用が指摘された遺物である。[註2] 本例にはススの付着は認められなかった。12は有孔かわらけの底部破片であるが、縁辺を研磨しており、古代に見られる土製紡錘車に類似する。11は擂鉢体部に焼成後の穿孔のあるものだが、補修孔としては孔の径が大きすぎるようだ。

本遺跡から出土したこれらの遺物は、量的にきわめて少なく、細片をのぞき、すべてを図示した。

註

1．大江正行の教示による。

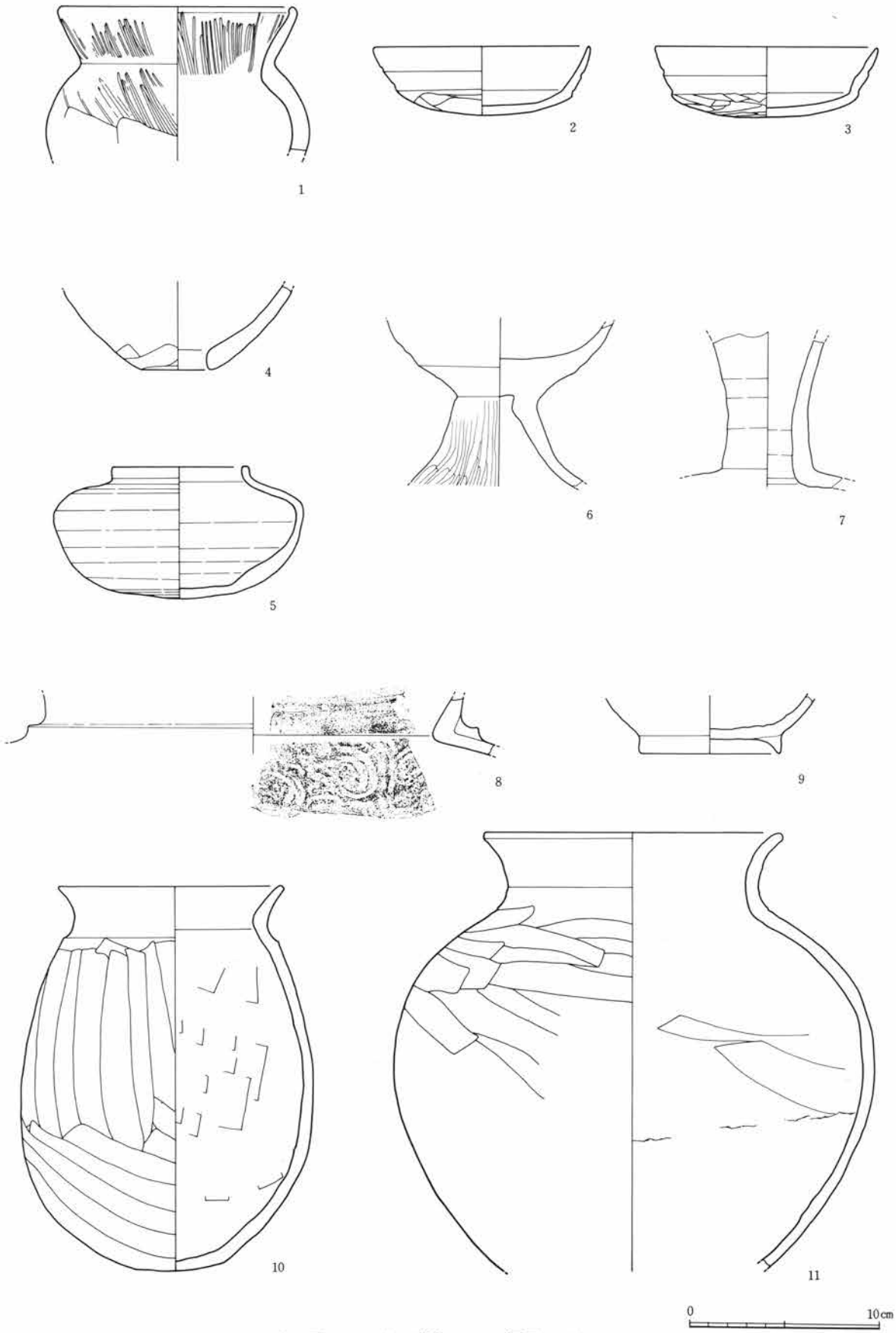
2．長瀬　衛　1975　文献41の115頁に有孔かわらけと名付け、灯明具を想定している。



第90図　その他の遺物 (4)　瓦・有孔土器

表16　その他の中・近世の土器一覧

No.器種	出土遺構	計測値　(cm)	器形・製作技法の特徴	備考
1 火鉢	7号溝	図示部のみの細片	外面の段顎状の突出部下に、三つ巴のスタンプ文様が並らぶ。内面と上面は丁寧なナデを施し平滑。	胎ベンガラの混入目立つ。砂粒多くやや粗い。焼やや硬調。色器面は黒褐色で内面は淡い。断面中央は黒色。他口縁部外端が磨滅する。
2 香炉	7号溝	脚(12.0)底(8.5) 図示部の½。脚は一ヶのみ残存。	袴腰で三つ足。ロクロ成形と思われ内面に同心円状の強い成形痕。外面に菊花様のスタンプ文様が巡る。	胎輝石散見。砂粒多く粗い。焼軟調でしまり欠く。色黒褐色。断面は橙褐色。他脚端部の磨滅が著しい。器面は脆く、二次火熱を受けた可能性。
3 不明	11号溝	径(6.4) 図示部の½。	筒状の土製品。内面に粘土板を折り曲げた時のシマがある。端部に強いナデ。外面は無調整。	胎砂粒・ベンガラ等の混入物多く粗い。焼やや硬調。色淡褐色、外面に暗いムラあり。断面灰黒色。他二次火熱の痕跡はない。
4 火鉢	10号溝	脚(29.0) 図示部の¼。	外面に2条の凸帯とスタンプ文様を配し、強い横位の研磨を施す。透かし窓あり。厚手で重い。	胎砂粒の混入多く粗い。焼やや硬調。厚手の土器としては良好。色淡褐色～黒褐色、一様でない。外面に弱い光沢。内面は淡い。断面黒色。
5 不明	10号溝	径5.7～6.0　高2.5 ほぼ完形。	円盤状の本体に有孔のつまみが付く。孔は両側から穿たれる。円盤部分は平滑さを欠き内面は凹面になる。	胎砂粒を含む。雲母散見。やや緻密。焼やや硬調。色淡褐色～黒褐色で一様でない。断面黒色。他孔は磨耗。円盤部分の磨耗なし。
6 養蚕火鉢	25号溝	高台部破片。	ロクロ成形と思われ、均一な擦痕が残っている。底部との接合痕がカキ目状になっている。	胎砂粒含むがやや緻密。気泡あり。焼硬調に焼きしまる。色黒色。断面灰黒色。他外面にウルシと思われる光沢あり黒色の塗りが施される。
7 不明	3号溝	図示部のみの細片。径50cm近い大型品と思われる。	外面に7本一単位の櫛目があり、斜格子の文様と思われる。口縁部外端に粗い削り。内面に強い横位ナデを施す。	胎ベンガラ目立つ。砂粒多く粗い。焼厚手としては硬調。色外面淡い黒褐色。内面は橙色味が強い。他内面に強い二次火熱を受ける。
8 鉢	203号土壙	図示部のみの破片。口径35cm前後と思われる。	いわゆる「こね鉢」。外面の上半にのみナデを施す。厚手できわめて重い。	胎粗砂を散見するが緻密。焼硬調で焼きしまる。須恵器と同じ。色灰色で断面まで一様。他内面の磨耗が強く、不滑になる。
9 丸瓦	表採	厚2.3	内面に布目があり、他は雑なナデ。厚手だがやや軽量。	胎砂粒・チャート等の混入物多くやや粗い。焼良好で焼きしまる。色断面まで灰白色で一様。
10 丸瓦	3号溝	厚2.0	内面は指頭状のナデと押圧痕がある。外面は丁寧なナデにより光沢があり、銀瓦を意識したものであろう。軽量。	胎きわめて緻密。雲母細片を散見。焼良好で均質に焼きしまる。色黄色味を帯びた灰色。外面と側面に光沢。
11 擂鉢	13号井戸	図示部のみの細片。	櫛目は4本以上で放射状。外面は縦位の粗いナデ。櫛目上に焼成後の穿孔を両面より行なう。	胎砂粒多く粗い。チャート散見。焼やや硬調。色外面淡褐色。断面はやや灰色味をおびる。内面黒色。他内面著しく磨耗。
12 かわらけ	8号溝	径5.3　孔0.9 底部½。	右回転ロクロ成形。孔は垂直に穿たれる。全面を丁寧に研磨し、糸切り痕も不明瞭。ややいびつ。	胎砂粒やや多く輝石・ベンガラ散見。やや粗い。焼やや硬調。色橙褐色で一様。
13 かわらけ	表採	図示部の½	右回転ロクロ成形。孔は斜めに穿たれる。割れ口には研磨痕なし。	胎砂粒を含む。石英・長石散見。焼やや硬調。色赤色味をおびた淡褐色でほぼ一様。



第91図　その他の遺物 (5)　土師器・須恵器

(4)　土師器・須恵器　　古墳時代から平安時代にかけての遺物を一括した。完形品の出土が5号溝に集中していることが特筆されよう。A地点の調査で、石田川期と鬼高期の竪穴住居址を検出しているので、ここにあげる遺物はA地点の集落に伴うものが大半と考えられる。

表17　土師器・須恵器一覧

No.器形	出土遺構	計測値（cm）	器形・製作技法の特徴	備考
1・壺	81号土壙	⑪(12.6)　㊤10.3 図示部の⅓。	口縁端部は内側へ強くつまみ上げ、外側に弱い稜ができる。割れ口は接合痕と思われる。研磨はやや雑。	㊫ベンガラ・パミス等散見。気泡あり。㊧硬調に焼きしまる。㊨橙褐色。断面は黄色味をおびる。
2・杯	5号溝 下層	⑪11.2　㊧3.7 ほぼ完形。	口縁部中位と下端に沈線が巡り、端部は尖る。内面は平滑。	㊫砂粒やや多く、輝石・パミス散見。㊧軟調でやや甘い。㊨淡褐色～橙褐色。㊩風化する。
3・杯	5号溝 下層	⑪11.5　㊧3.7 ほぼ完形。	2に同巧。口縁部内面に弱い凹凸あり。	㊫㊧㊨㊩2に同じ。
4・甑	表採	㊥3.0 図示部の½。	体部下端に弱いヘラ削り。器面に輪積み痕と思われる弱い凹凸あり。	㊫砂粒含む。緻密。㊧硬調。㊨淡褐色。内面と断面はやや灰色味をおびる。
5・短頸壺 (須恵器)	5号溝 下層	⑪7.3　㊤13.1 ㊧5.5 完形。	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ削り。ロクロ痕はやや強く渦巻状。体部中央に接合の段あり。薄手で軽量。	㊫砂粒やや多くザラつく。㊧やや硬調。㊨灰黄色でほぼ一様。
6・高杯	表採	㊦4.0　　図示の杯部完存。脚部分½。	杯部内面雑な研磨で平滑。外面不規則な削り。脚柱部には強い研磨。	㊫砂粒・ベンガラ含む。やや緻密。㊧硬調。㊨赤褐色基調。ムラ多い。光沢なし。
7・長頸壺 (須恵器)	3号溝	㊤5.6 図示部ほぼ完存。	右回転ロクロ成形。三段成形と思われる。重量感あり。	㊫砂粒・細礫含む。やや緻密。㊧硬調で焼きしまる。㊨灰色で一様。
8・大甕	12号井戸	図示部の⅛破片。	頸部と肩部の境に貼付の隆帯あり。肩部内面に青海波。および輪積み状の接合痕あり。きわめて重い。	㊫白色鉱物の混入が目立つ。気泡含むが緻密。㊧硬調で焼きしまる。㊨淡青灰色。外面は白色味。断面一部にセピア色味をおびる。
9・椀 (須恵器)	8号溝	㊨7.8 図示部ほぼ完存。	右回転ロクロ成形→回糸→ロクロ利用高台取り付け。ロクロ痕は渦巻き状。	㊫砂粒多く粗い。石英・チャート目立つ。㊧しまり欠く。㊨褐色味をおびた灰色。
10・甕	5号溝	⑪15.9　㊤14.1 ㊥ 6.4　㊧25.7 ⅓個体。	やや厚手。胴下半に接合の段あり。体部歪みあり。体部ヘラ削りは弱い。内面平滑。	㊫砂粒やや多く粗い。輝石・ベンガラ散見。㊧やや軟調でしまり欠く。㊨淡褐色。下半では黒色味が強い。㊩底部付近は二次火熱を受ける。
11・壺	5号溝	⑪15.8　㊤(13.3) ㊦(25.4) 口縁部½、頸部下⅓。	内面に輪積み状の接合痕。外面のヘラ削りはやや粗く、乾燥のすすんだ状態で行なう。	㊫砂粒・長石を若干含む。㊧やや硬調。㊨淡褐色でほぼ一様。㊩器面は若干剝落する。

Ⅳ　浜町屋敷内遺跡の性格について

1　今井館址について

太田市浜町の西部、字屋敷内は、蛇川と八瀬川の合流点内側に当り、西北面も旧河道の幅30m、深さ３m程の平底窪地に限られ、東北部、幅50mばかりが、その窪地と八瀬川河崖との間の地峡となっている。そこを字屋敷道という。

これらの地名と地形が、古く屋敷或は館、又は集落のあったことを推定させ、新田義貞の叔父今井十郎惟義の居所とも伝えられている。このあたりは今井と呼び、今も北側の字を今井橋東、東北の字を今井境と名づけている。惟義の叔父惟氏も今井十郎と称しているから、惟氏が今井に住んで今井氏を称し、甥惟義がその跡をついだのであろう。(系図参照)。発掘調査で得られた中国製の陶磁器の年代観も、今井氏の年代と一致している。

新田義重 ── 義兼 ── 義房 ── 政義 ── 政氏 ┬─ 六郎 基氏 ── 朝氏 ── 義貞
　　└─ 今井十郎 惟氏 ── 今井十郎 惟義

字屋敷内は、頂点を南の八瀬川、蛇川合流点に向けた二等辺三角形の地域で、北面の底辺に当る面は東西200m、その中央から合流点まで、250mの線を辿って一筋の農道が走っていた。ここは周囲よりやや高く、標高40mの等高線は外縁に添って閉鎖曲線を形作っている。

昭和53年のＡ地点の発掘調査で、西北部に、東西40m、基盤に掘り込まれた幅2.5m、同じく深さ1.5mの薬研形堀址が発見され、古銭や土器が出土し、それらによってこの堀は中世のものとわかった。西端は南に折られているが、５m程進んで今度は西に折れ、道路の下を通って蛇川に達していたようである。堀の東端は、旧河道の崖端から50mの所で終っていた。

今次の調査で、前記堀址から南200mの所に、それと並行する幅７～８m、深さ２m以上（基盤での掘込）が二つの川を結んだ形で検出されたが、別に、中央を南北に通っていた農道の線に、基盤での幅３m、深さ１・２mの薬研形堀址が発見され、南30mの八瀬川崖端に達していた。

以上の三筋の堀址を結びつけると、不完全乍ら、西南部三分の一を蛇川の変流によって失った200m四方の正方形地域を劃することができる。

しかしながら、これを今井氏の館址と考えるには、その身分に対し広大にすぎ躊躇せざるを得ない。

この遺跡で特に注意を惹くのは、出土品中に約160点の石擂臼片のあったことである。

中世遺跡の発掘調査では、殆んど例外なしに石擂臼の出土を見るのだが、そのことは当時雑穀の粉食が食生活の重要な位置を占めていたことを推測させる。また、石擂臼の機能を食生活以外の視点で捉える必要もあるだろう。石擂臼の数が甚だ多かったことには、次のような原因が考えられよう。

一、戸数が多かったこと。

二、集落が長い間続いていたこと。

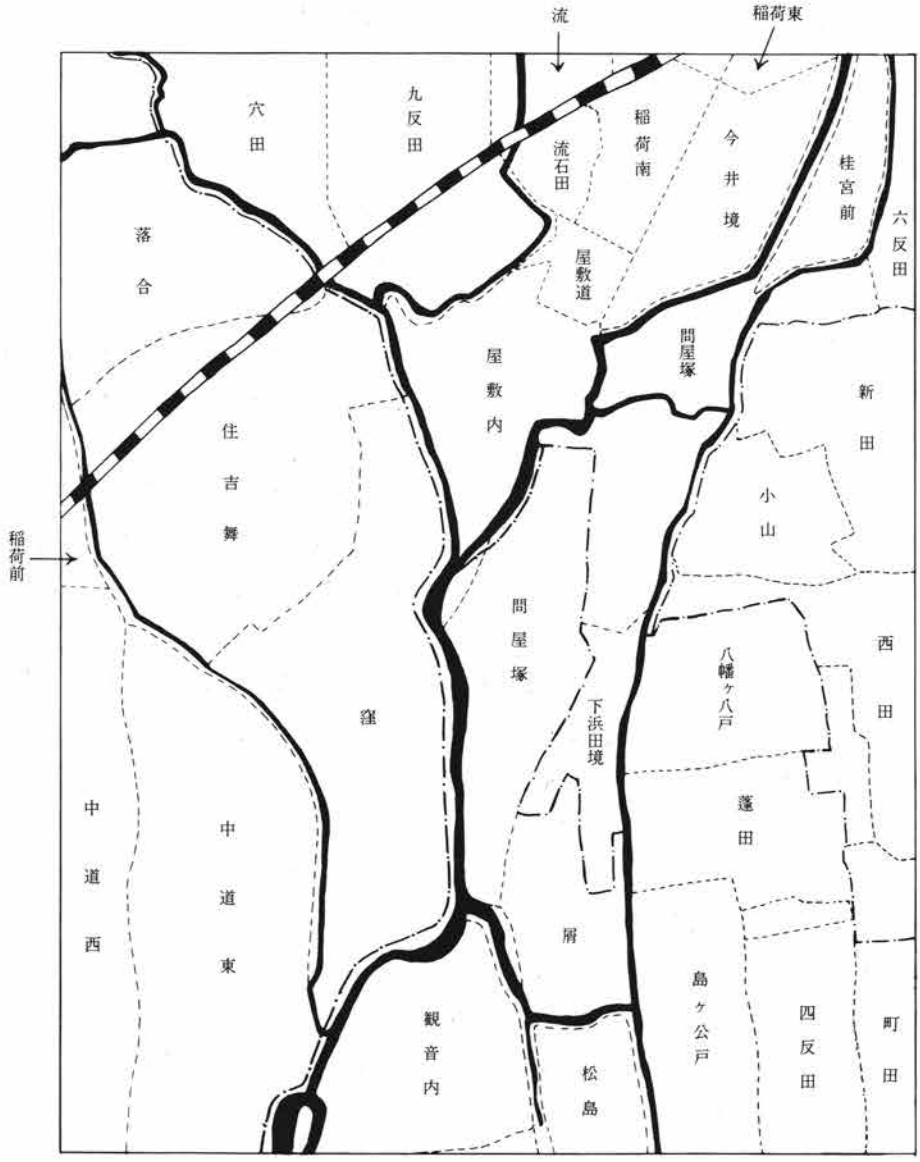
三、畠作が多かったこと。(江戸時代の記録では水田が多かったことが判る。)

これらが重なって石擂臼が多数遺ることとなったのであろうが、この事は、今井氏居館説とはなじまない。

今井氏は、二代で50～60年より長くは続かなかったからである。また、発掘調査で得られた遺物も、15～16世紀のものが多かったとのことである。

この「字屋敷内」の意味は、中世豪族の館を指すのではなく、中世集落（住居群）の意なのではあるまいか。今井氏の屋敷も、人々の屋敷に混って存在し、西北部の堀跡は、構築半ばで中止した遺構と考えられないであろうか。周囲を、大規模な濠に相当する二つの川と、一筋の旧河道に囲まれ、東北の一部だけで外部に通じていた二等辺三角形の「字屋敷内」全体が、格別な環濠を構える必要のない要害だったのである。

ここが誤りなく今井氏の居住地であったとすれば、その屋敷(館)は以上のような特異なものだったのである。



第92図　屋敷内遺跡周辺の小字名

2　近世における今井村の状況 ――〝無住村〟としての成立・展開――

はじめに――今井村の概観――

上野国新田郡今井村は、現在の太田市街地のすぐ西南に位置する、石高500石余の村である。西は蛇川・東は八瀬川にはさまれており、村の南端でこの両河川は合流している。また、今井村の北方約２㎞に、中世の山城・金山城が鎖座している。

今井村の耕地の状況を、絵図―（巻頭図版１）より見る。（これは明治５年のものである。）これより、その特徴として、屋敷地が皆無である[1]。村の南端（蛇川・八瀬川の合流地点付近）及び東端には、畑地が広がり、村の中央部から北側に水田が展開されている。全体として水田勝ちの耕地である。等のことがいえる。

１．今井村の石高及び、領主変遷

近世における今井村の石高及び、領主支配関係について、表―１にしたがい順次述べる。

史料的に溯りえる年代の上限は、慶安３年（1650）　までである。（『上野国勢多郡新田荘今井村御検地水帳』[2]）この時点での、今井村の規模は、37町６反９畝13歩であり、幕府により検地されている。この内訳は、上田・７町６畝８歩　中田・８町８反８畝18歩　下田・６町４反５畝４歩　上畠・５町３反２畝19歩　中畠・４町９反３畝10歩　下畠４町７反７畝13歩　下々畠・３反１畝10歩、となっている。全体の約60％、22町４反２畝が水田となっており、畑地を凌駕している。そして、特徴的なことは、屋敷地が皆無となっていることである。

さらに、この慶安３年の検地帳に登録されている帳付百姓と、同年の太田町の検地帳のそれを照らし合わせてみると、今井村帳付百姓総数57名中、太田町に居住している者は、22名を数えていることが分かる。

次にこの検地帳の分析より、当時の今井村内における農民の耕地所有状況（階層構成）を、表―２より見る。これによると、１反～５反の耕地を所持する層が27名（47％）と最も多く、次に、１町以上の耕地を所持する高持層が12名（21％）と続く。（最大の高持は、太田町在住の孫左衛門で、４町８反５畝５歩である。）そして、これらの階層のうち、１町以上の耕地を所持する層に、太田町在住の者が最も多い、という結果が出ている。（12名中、９名が太田町在住の者である。）

以上が、慶安３年時点での今井村の耕地状況である。これ以前、特に中世における今井村の状況は不明であるが、上記の検地帳表題が『上野国勢多郡新田荘今井村御検地水帳』（点・拙者）となっている点、さらに景観的に、今井村の北面に新田氏一族の岩松氏→由良氏の居城である金山城がひかえ、今井村の東を流れる八瀬川を溯ると、この麓にたどりつける点、また、周辺の村々、太田・鶴生田・大島・新野、らが新田荘に編成されている。等から当時の今井村も、新田氏の勢力下にあった可能性も考えられるが、史料的には確認できない。（尚、長楽寺文書に散見する、〝上今井村〟は現在の境町にある西今井村であり、この今井村ではないと峰岸純夫氏により実証されている。）[3]

天和２年（1682）の状況

従来（慶安３年より）幕領であった今井村は、天和２年に、旗本山岡氏・筧氏に分給され、都合３給の相給村落とし編成される[4]。幕領133,263石　山岡知行分158,262石　筧知行分230石

延享２年（1745）の状況

今井村のうち、幕領分133,262石が、前橋藩へそのまま転入される。他の旗本２給分は変化しない[5]。

寛政８年の（1796）の状況

今井村３給分のうち、前橋藩領分133,263石が、再び幕府領へ編成される。残る旗本２給分は変化しない[6]。

そして、以下明治維新まで、今井村は三給の相給村落（幕領133,263石・山岡知行分158,262石・筧知行分230石）として継続していく。

表―1　今井村石高・領主変遷

年代	領主		
慶安3 (1650)	幕領 521,530石		
天和2 (1682)	幕領 133,263石	旗本 山岡氏 知行 158,267石	旗本 筧氏 知行 230石
延享2 (1745)	前橋藩領 133,263石		
寛政8 (1796)	幕領 133,263石		

以上、近世における今井村の石高及び、領主変遷を述べた分けであるが、これを要するに、今井村の中世における状況は不明であが、新田氏との関係が推測される。そして江戸時代に入り、幕府により慶安3年に縄入れされ、天和2年よりは、三給の相給村落として成立・展開し明治維新をむかえている。この間、江戸時代全般を通じて、新田開発等による耕地の増加はなかった、ということがいえる。

2．〝無住村〟今井村

近世における今井村の最大の特徴は、〝無住村〟であった、という点にある。今井村は、前項で述べたごとく、江戸時代全般を通じて石高521石5斗3升で増減もなく安定していたものである。この500石余りのいわば中規模の村が、〝無住村〟という形で史料上散見してくるのである。

この〝無住村〟今井村の状況を史料を基に年代順に以下述べる。

慶安3年（1650）

史料残存の上限である、『上野国勢多郡新田荘今井村御検地水帳』[7]によると、屋敷地の記載はなく、耕地のみが書上げられている。これをもって、当時の今井村に農民が集住していなかった、と速断することは危険であるが、いわゆる「明確な経営主体」[8]としての屋敷持百姓が村内に居住していなかった例証になりうる。

表―2　今井村階層表

面積(反)	人数	%
0～1	10	17.5
1～5	27	47.4
5～10	8	14
10～	12	21.1
合計	57	100

天和2年（1682）

これも検地帳『上州新田郡今井村寅御水帳』[9]による。これは、今井村が幕領の他、旗本領二給に分郷された時点に作成されたもので、幕領分133,263石のみの書上であるが、やはり屋敷地の記載はない。

延享2年（1745）

『上州新田郡東今井村分郷石高帳』[10]による。これは今井村3給分のうち、幕領が前橋藩領へ転入された時点に作成されたと思われるものであり、前橋藩領分133,263石のみが書上げられているが、ここにも屋敷地の記載はない。

宝暦3年（1753）

これは、農民の家屋が今井村内に存在していない、という史料上の初現である。史料―1[11]より見ると、「……当村之義田畑斗之村ニ而村ニ者百姓家居壱軒茂無御座、御領分之田畑太田町之百姓不残所持仕候……」とあり、当時今井村の内、少なくとも前橋藩領分には農民の家屋はなくすなわち無住で、その耕地の全ては、太田町の農民が所持していたことが分かる。

明和5年（1768）

この状況を、史料―2[12]より見ると、「……殊ニ当村之義者御田地所持之越石地主共ハ田畑相隔り候場所故

過半小作人ニ仕候所……」とあるところから、前橋藩領分今井村の耕地を所持している農民は、越石地主と表現され、彼らは今井村から隔れた場所に居住しており、また、彼らの今井村内に所持する耕地の過半は、小作地として借あたえていたことが理解できる。これにより、今井村内に、耕地の所有者が存在しないことは分かるが、それでは、この耕地を実際に耕作している小作人はどこにいるのか、という疑問は残る。

明和7年（1770）

前橋藩領分今井村の状況について、史料―3[13]より見る。これによると、前橋藩領分今井村は無住で、その耕地の全ては、太田町在住の農民の越石地であることが分かる。

寛政8年（1796）

『上野国新田郡東今井村分郷石高帳』に[14]よる。これには、今井村三給分全ての耕地面積が、地目別に書上げられているが、屋敷地の記載はない。

文化2年（1805）

『石高書抜帳[15]』による。これは、今井村三給分のうち前橋藩領から幕領へ編成された分のみの耕地状況が表わされているものであるが、屋敷地の記載はない。

文化6年（1809）・文化7年（1810）・文化11年（1814）

これは、幕領分今井村にあてた、名々三通の年貢割符である[16][17][18]。これらには全て、屋敷地は記載されておらず、屋敷地といった地目の年貢課税対象は存在していないことが分かる。

文政3年（1820）

この状況を史料―4[19]より見る。これは、今井村三給の全域に関わるものである。これによると、「……然ル処百年来ゟ覚疫病流行仕過半死絶……当村本百姓壱軒も無之出石ニ相成……」とあり、次の2点のことが考えられる。まず、今井村三給分のうち幕領→前橋藩領→幕領と展開する、133,263石分は、前述したごとく、無住であったが、他の二給分（山岡・筧の両旗本知行分）は、近世初期から継続する無住であったのかどうかは史料が存在せず確実で

史料1

乍恐以書付奉願上候

一比度御作事為御用出人足五人ヅ、日数十日之内相勤申候様ニ被仰付承知仕候、此義先達而御願申上候通、当村之義田畑斗之村ニ而村ニ者百姓家居壱軒茂無御座、御領分之田畑太田町之百姓不残所持仕候、依之御先代様御領分之節茂御用捨之上御仲間割合等被成御免被下候、太田町之義従京都日光往還之御伝馬宿ニ而、日々町役相勤候上、御領分東今井村茂太田町江大助之村方ニ而人馬役相勤申候　（中　略）

宝暦三年酉二月　　大東領東今井村

組頭　清左衛門㊞

名主　茂右衛門㊞

（棒線抹者）

史料2

乍恐書付ヲ以奉願上候

去亥年迄三ヶ年御定免上納辻

一米三拾弐石壱斗九升四合　　御用捨引奉願上候

内

米石三石弐斗　当子年壱ヶ年　　残米石弐拾八石九斗九升四合

右者去亥年迄御定免奉願田方御米上納仕候所、近年打続不作仕取り実半増ニ不足仕、惣百性困窮難義至極仕候、毎度年継之節引石奉願上候得共御用捨不被成下候ニ付、御検見御願申上度奉存候得共、小高之村方ニ御座候故人馬等不足ニ御座候ニ付、御検見人用旗々難義仕、無是非御定免ニ御請仕候所、近年別而田方出来不宣、殊ニ当村之義者御田地所持之越石地主共ゟ田畑相隔り候場所故過半小作人ニ仕候所、去亥年去々戌年者不作ニ付　（中　略）

明和五年子四月　　大東領東今井村

長百性　七郎平㊞

組頭　清左衛門㊞

名主　茂右衛門㊞

御代官御役所

（棒線抹者）

はないが、少なくともこの時点においては、無住となったことが分かる。また一方、史料上の表現が「……本百姓壱軒も無之……」となっている点も問題が残る。（この点に関しては、後述する。）

文政10年（1827）

この時点での状況は、『儀定組合村々御地頭性名并石高帳』[20]より確認できる。史料―5[20]より見ると、今井村3給分全域が、無住として記載されている。

明治5年（1872）

これは、地粗改正直前に作成された絵図―1[21]であるが、これにも屋敷地は記入されていない。

以上、江戸初期から明治初期までの約220年間にわたり、今井村が〝無住村〟であったという事例を述べた分けであるが、以下問題点を述べる。

今井村における、検地帳、分郷石高帳といった土地台帳関係には、〝屋敷地〟としての地目は全く記載されていない。また、史料―4にある表現「本百姓無之」等が、問題点としてあげられる。

すなわち、今井村の内には、検地帳に登録され、年貢課役の対象となる〝近世小農〟または、彼らのうちの〝屋敷持百姓〟が存在していなかったといえるが、彼ら以下の階層――経営主体として自立できぬ階層（隷属農民・小作等）――が存在していた可能性は十分考えられる。しかし、彼らの存在を史料から実証することは、今のところ不可能である。

3．〝無住村〟今井村をどう理解するか

近世における今井村は、幕藩体制の経済基盤たる本百姓（近世小農）が、居住せずとも、〝村〟としての機能は、はたしていたのである。検地をうけ、検地帳は独立して作成された。また、年貢割符も今井村として独自にあてられていたのである[22]。（宗門人別帳は、今井村には存在していない。幕領分をみるならば、今井村に耕地を所有している農民は、親村たる太田町において、宗門人別帳に登録され、太田町の領主により把握されていた。）

こういった〝無住村〟をどう理解するかについて、以下考えていきたい。

まず、一般的に〝無住村〟といったものが、他に存在するかについて述べる。

史料3

明和七年子十月

今出石高田畑小作人方東西農事諸事

（前　略）

一東今井村之義田畑斗之村方ニ而百姓家居壱軒も無御座、太田町百姓東今井村分不残越石ニ田畑所持仕候、依之村内ニ人元ニかゝわり候義何ニ而も無御座候

一民家無御座候ニ付、御高札場無御座候

（中　略）

一百姓無御座候ニ付、寺社并ニ鉄炮所持之者と申義無御座候

（後　略）

史料5

文政十亥年六月

儀定組合村々

御地頭性名并石高控帳

（前　略）

一高五百弐拾壱石五斗三升　太田宿

但無民家　同州同郡

（後　略）　今井村

史料4

乍恐以書付奉願上候

吉岡次郎右衛門御代官所外弐給付役人惣代覓新兵衛知行所上州新田郡今井村名主林右衛門奉申上候、当村高之儀者三給入会ニ而高五百廿壱石五斗三升、右之内高二百九捨五石例幣使道同郡太田宿江助郷人馬相勤候、然ル処百年来ヲ覚疾病流行仕過半死絶、其上凶作打続連々困窮仕、いつとなく銘々所持之地面者勿論家作等ニ至迄売払、追々退転いたし、当村本百姓壱軒も無之出石ニ相成、御伝馬役相勤候もの皆式無御座、併御恩徳之難在事を奉存如何様ニも丹誠を凝シ相勤、是迄賃銀を以漸勤来候得とも、最早此上賃銀才覚可仕手段無之

（中　略）

吉岡次郎右衛門御代官所

山岡十兵衛

覓新丘衛　知行所

文政　辰七月　上州新田郡今井村

御奉行所様　名主　林右衛門

（棒線拙者）

新田村落ならば、開発の当初の段階においては無住であり、古村よりの出作百姓（通勤百姓）の多数の存在により、通勤開墾の形態がとられる場合もある。しかし、それとしても、開発が進展していくにしたがい、出百姓の入植増加へと転化していき、近世的村落共同体を完結させていく。[23]

また、旗本領中心の相給村落の場合も、無住の事例はある。しかしそれは、村の一部分であり、石高50石程度でしかない。[24]

つまり、近世におる今井村の無住である形態（500石余りの村が無住村である。）は、他に事例が求められぬ極めて特異なものであったといえる。

それでは、この特異な〝無住村〟今井村を理論的にどう位置づけるかについて、諸先学の研究成果、特に〝ムラ〟と〝村〟といった概念を基に考察していく。

まず、〝ムラ〟の概念について、福田アジオ氏は、「ムラは単なる家の集合ではなく、一つの自律した社会として存在する。……ムラは一定の家と一定の領域をもつ社会と把握することができる。」と規定している。そして、このムラの領域については、「ムラの領域の三重の同心円的構成」として図式化している。いわゆる、中心部の集落＝ムラ（定住地）・その外側の耕地＝ノラ（生産地）・もっとも外側の山林原野＝ヤマ（採取地）といった構造である。そしてさらに、歴史的な展開としてのムラの位置づけについて、近世村請制下の村とはかならずしも一致せず、「支配単位としての村の中にいくつものムラの存在するのが通例といえる。」としている。[25]

つまり、ここでいう〝ムラ〟とは、そこに居住する人間が中心となり形成される社会単位であり、実際的な共同体機能が完結される場である、と規定できる。

次に、幕藩制下における〝村〟の概念について、木村礎氏、中村吉治氏の見解を紹介する。

まず、木村氏は、近世の村を「一定の範域が決定されており、石高が付せられ、政治的支配の単位をなしている。……支配の末端としての行政村落である。」と規定している。そして、近世村落の主体は、本百姓すなわち近世小農である、と述べている。[26]

また一方、中村氏は近世における村の領域として、家・耕地・山野河沼をあげている。そして、村請制度との関係より、封建領主にとり、支配の単位は人でなく村である、として「大名は直接に一人ずつの農民を把握しているのではない。村単位の土地である。」と規定している。さらに、「小農民が独立したとか、自立した小農民を直接に把握したとかいうのは二重の誤りであり……。」と結論づけている。[27]

以上、木村・中村両氏の近世幕藩制下の村に対する見解は、小農が自立しえたか否か、という問題が前提にあり、[28]結論として相反するシェーマとなっている。

この他にも、村請制度との関係より近世村落の構造について述べた論文も数多くあるが、[29]紙面の都合上割愛する。

以上の〝ムラ〟と〝村〟という概念を基に近世における今井村を考えると、まず、〝無住村〟今井村は、〝ムラ〟という社会単位の範疇でないことは確実である。

また、近世幕藩制下において、本百姓が存在せずとも史料上では村として成り立っていた、という事実をもって、先の中村シェーマ――封建領主は自立した小農民ではなく、村単位の土地を把握したのである。――に短絡的に結びつける分けにはいかない。（氏のシェーマを、本百姓が存在せずとも支配単位としての村は成立する。と拡大解釈したとしても同様である。）

すなわち、今井村それ自体には、本百姓は存在しないが、越石・出作の形態として、彼らは親村において各々の領主により把握されているからである。前橋藩領分今井村に耕地を持つ農民が、親村太田町において、

幕府により把握されており、領主が各々で相違していたとしても、史料―2に、「越石地主共今」とあり、また史料―3には、「太田町百姓東今井村分不残越石ニ田畑所持仕候[30]」とあるように、この形態は、規模は133,263石と大きいが、越石の範疇で理解できるものであろう。

これらより、近世における今井村は、まさに〝行政村〟として存在しており、その形態をより単純化するならば、新田村落が開発の初期段階で、人の動きが止まった状態であると具体化することができよう。今井村がいわゆる近世的新田村落でないことはいうまでもないが、形態の面で上記のことがいえると考える。

4　結び

今井村は、近世全般を通じ（慶安3年から）〝無住村〟として存在していたが、それは〝本百姓〟が村内に居住していない行政村落の形態であった、と特徴づけることができる。

小稿では上記の問題に主題をおいたため、今井村の村落構造特に、相給村落としての問題、また、日光例幣使街道との関係等についても全く言及できなかった。研究諸先学の御教示をいただければ幸いと考える。

（付記）

小稿作成にあたり、諏訪和雄氏をはじめとする太田市史編集室の方々には史料調査の面で大変御世話になった。記して感謝の意を表したい。

註

(1)　群馬県立文書館所蔵
(2)　橋本家文書No. 462
(3)　『新田町誌』第4巻
(4)　『太田市史近世Ⅰ』No. 19　及び、『寛政重修諸家譜』
(5)　橋本家文書No. 460
(6)　橋本家文書No. 453
(7)　(2)に同じ
(8)　木村礎氏の『日本村落史』における規定
(9)　橋本家文書No. 461
(10)　橋本家文書No. 460
(11)　『太田市史近世Ⅲ』No. 56
(12)　『太田市史近世Ⅲ』No. 33
(13)　『太田市史近世Ⅲ』No. 38
(14)　(6)に同じ
(15)　橋本家文書No. 196
(16)　橋本家文書No. 317
(17)　橋本家文書No. 320
(18)　橋本家文書No. 316
(19)　『太田市史近世Ⅲ』No. 240
(20)　『太田市史近世Ⅲ』No. 10
(21)　(1)に同じ
(22)　橋本家文書No. 318・317・320・319・316
(23)　木村礎・伊藤好一編『新田村落』における武蔵野新田の場合
(24)　神崎彰利「旗本領の村」『歴史公論』95号
(25)　福田アジオ「村落領域論」『武蔵大学人文学会雑誌』第12巻第2号
(26)　木村礎『日本村落史』
(27)　中村吉治『幕藩体制論』
(28)　木村氏はこの点につき、「近世のごく初期からこのような体制が整った形で存在していたわけではない。しかし大体17世紀半ばには右のような姿が完成した。」（このようなとは小農自立のことである。）また、「私は近世本百姓体制の『満面開花』という事実を決して楽天的に考えているのではない。」と述べている。
(29)　佐々木潤之介『幕末社会論』・水本邦彦「幕藩制下の農民経済」『日本経済を学ぶ』下・深谷克巳「幕藩制における村請制の特質と農民闘争」1972年度『歴史学研究』別冊他
(30)　太田町は慶安3年以降明治維新まで幕領である。

3．成果と問題点

最後に、本報告書で行った個別の検討を集約し、遺跡の性格を類推してみる。

1．遺物より得られた年代観　製作実年代を求めやすい遺物には、板碑と古銭とがある。板碑では、年号の記されたものは少なかったが、14世紀から15世紀に製作されたものが出土し、特に14世紀後半と15世紀前半に、二つの集中する時期が認められた。古銭にはバラつきが多かったが、洪武通宝と永楽通宝が多く、古銭副葬の時期が、14世紀末以後に絞れるかもしれない。五輪塔は16世紀代のものと思われる。これら〝墓〟に関連した遺物は、14世紀から16世紀まで及ぶ、長い時間のものであった。

陶磁器も、年代観の明瞭な遺物である。本遺跡では13世紀の舶載磁器を初現とする。15世紀以後、国産陶器の出土が増加し、16世紀に至って、舶載・国産の陶磁器ともに、出土量が頂点に達するが、17世紀に至ると、皆無に近くなることが判った。飾り金具も16世紀後半のものであった。

2．江戸時代の文献による年代観　本遺跡の江戸時代の様相が、文献により明瞭になってきた。太田宿今井村として数多くの史料に記されているが、慶安3年（1650）以後の史料より田畑の開発がすでにいきわたり、また、民家が無いという景観が知られる。17世紀の初頭までに、本遺跡に大きな変化のあったことが導き出され、陶磁器の消長を裏付けることができた。さらに、井戸・かわらけ・内耳土器・木製品など、年代不明の遺構・遺物については、年代の下限を規定する根拠をえることができた。

3．遺構・遺物の特殊性　10,000㎡に満たない調査範囲の中で、66本の井戸、160点の石臼の検出は異例である。このことより、本遺跡を単純な居住域と考えるのは困難である。陶磁器の出土傾向のうち、舶載品の多い点、国産仏具を含む点などからは、居住者が限られよう。板碑からも、階層的な限定ができる。13世紀から16世紀にかけて、上野国にあってこれらの遺物を所持しえた居住者は、武士と僧呂以外には考えられない。しかし、本遺跡の遺構配置から、寺院址であったことは想定できない。

なお、大溝は、蛇川と八瀬川を結ぶ船着き場的な水路とも考えられるが、明治5年の絵図に、その痕跡は認められない。井戸とともに、人為的な（大規模な）埋め戻しがなされたと考えられる。

4．地形的環境　屋敷内の小字内は、八瀬川・蛇川および北側の低地に囲まれており、自然地形そのままで、“館”となりうる優れた立地にある。そしてここは、中世以後の東毛地区の拠点的山城、金山城からも近く、軍事的に重要な土地であったことも想定されよう。

5．まとめ　以上の点より、本遺跡を、自然地形を利用した特殊な立地の館址と考えたい。13世紀舶載磁器の使用者が、最初の居住者の可能性もあるが、この段階での発掘調査区の様相は、墓域的な性格が強かったようである。なお、新田義貞の叔父、今井十郎の居館が佐波郡境町西今井に想定されている[文献53]。本遺跡の居住者については不明であり、今後の残された最大の課題である。しかし陶磁器の年代からは、従来言われてきた今井氏との関連は否定しきれない。

居住域を示唆する遺物は、15世紀より増加し16世紀に頂点を形成する。そして、この時期の遺物に伴って、石臼や砥石など、本遺跡特有の遺物が出土している。16世紀代は、これら生産遺物が頻繁に使用された時期と考えたい。井戸が溝の上に築かれていることより、遺跡の性格に大きな変化のあったことも認められる。

本遺跡の終末は、天正18年（1590）の金山落城、正保3年（1646）の最初の日光例幣使の通過など、江戸時代初頭の大きな変革と無縁であったとは思えない。そして、江戸時代の“無住村”という特異な性格も16世紀までの特殊性と密接に関連するものではなかろうか。

（関、飯田、徳江）

引用・参考文献

1 ア 赤羽一郎 1977 「常滑」『世界陶磁全集3 日本中世』
2 秋池 武ほか 1974 『新井八幡神社古墳発掘調査報告』 太田市教育委員会
3 イ 石原純一ほか 1978 『日光例幣使街道』 群馬県教育委員会
4 井上 太ほか 1981 『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』 富岡市教育委員会
5 岩渕一夫・芹沢清八 1981 『赤塚遺跡』 栃木町教育委員会
6 ウ 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No. 2』 日本貿易陶磁研究会
7 梅沢重昭ほか 1971 『太田市米沢二ッ山古墳』 群馬県教育委員会
8 梅沢重昭 1975 「群馬県地域における初期古墳の成立」『群馬県史研究 2』 群馬県史編さん委員会
9 オ 大江正行ほか 1978 『長楽寺遺跡』 尾島町教育委員会
10 大江正行 1980 「群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿」『群馬考古通信 第7号』
11 大江正行 1981 「砥石」『八幡原A・B 上滝 元島名A』 群馬県教育委員会
12 大江正行・飯田陽一 1982 「群馬県出土の中国陶磁」『関東の中国陶磁』 群馬県立歴史博物館
13 大江正行 1984 「群馬県における古代窯跡群の背景」『群馬文化 199』 群馬県地域文化研究協議会
14 大橋康二ほか 1984 「肥前陶・磁の変遷と出土分布」『国内出土肥前陶磁』 九州陶磁文化館
15 小野正敏 1982 「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No. 2』 日本貿易陶磁研究会
16 カ 加島 進編 1971 「刀装具」『日本の美術 No. 64』 至文堂
17 亀井明徳 1973 「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」『考古学雑誌 58巻4号』
18 神崎彰利 1978 「旗本領の村」『歴史公論 95号』 雄山閣
19 キ 北畠雙耳・北畠五鼎 1980 『硯の基本知識』 秋山叢書
20 木部日出雄ほか 1980 『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』 前橋市教育委員会
21 木村 礎 1978 『日本村落史』 弘文堂
22 木村 礎 伊藤好一編 1960 『新田村落』 文雅堂書店
23 木村喜雄ほか 1977 『群馬のおいたちをたずねて（上）』 上毛新聞社
24 ク 日下部善己 1981 『深川城跡』 福島県教育委員会
25 久保田文雄・梅沢重昭・平野進一 1978 『群馬県太田市五反田・諏訪下遺跡』 太田市教育委員会
26 コ 小泉和子 1983 「桶樽」『講座 日本技術の社会史 第7巻 建築』 日本評論社
27 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』 柏書房
28 庚申懇話会編 『日本石仏事典』 雄山閣
29 小窪健一 1971 『図鑑刀装のすべて』 光芸出版
30 木暮仁一・柿沼恵介・須田 茂 1981 『入谷遺跡』 新田町教育委員会
31 木暮仁一・須田 茂 1983 「上野国新田駅とその周辺の東山道について」『群馬県史研究 19』 群馬県史編さん委員会
32 サ 佐々木油之介 1969 『幕末社会論』 塙書房
33 笹野大行 1983 「浜通遺跡出土の小柄の時代」『浜通遺跡』 青森県教育委員会
34 佐藤寒山編 1966 「刀剣」『日本の美術 6』 至文堂
35 セ 関口 修ほか 1979 『矢島遺跡・御布呂遺跡』 高崎市教育委員会
36 ソ 薗田芳雄ほか 1968 『焼山遺跡総合調査報告 第一分冊』 はにわの会
37 タ 大地のあゆみ編集委員会編 1982 『大地の歩み』 上毛新聞社
38 高橋幸夫・中島啓治 1980 『八王子丘陵の地形地質 群馬県自然観察指導員養成講座基礎資料』
39 ツ 津金沢吉茂 1982 「群馬県」『板碑の総合研究 2』 柏書房

40 ト 徳山暉純 1975 『梵字手帖』 木耳社
41 ナ 長瀬 衛 1975 「かわらけ」『青戸・葛西城址調査報告Ⅲ』
42 中田 英 1977 「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古 2号』 神奈川考古同人会
43 中村吉治 1974 『幕藩体制論』 山川出版社
44 楢崎彰一 1980 「美濃古陶のながれ」『美濃の古陶』 光琳社
45 ハ 服部実喜 1984 「鎌倉出土のかわらけについて」 第三回中世土器研究集会レジュメ
46 フ 深谷克巳 1972 「幕藩制における村請制の特質と農民闘争」『歴史学研究 別冊』 青木書店
47 福田アジオ 1980 「村落領域論」『武蔵大学人文学会雑誌 第12巻第2号』
48 マ 増田 修 1973 『群馬県太田市堂原遺跡発掘調査報告書』 太田市教育委員会
49 ミ 水野正好 1978 「まじないの考古学・事始」『どるめん No. 18』 ＪＩＣＣ出版局
50 水本邦彦 1982 「幕藩制下の農民経済」『日本経済史を学ぶ 下』 有斐閣
51 峰岸純夫 1973 「東国武士の基盤」『荘園の世界』
52 峰岸純夫 能登 健 1981 「赤城山南麓の開発と遺構〈女堀〉」『アーバンクボタ 19』 久保田鉄工株式会社
53 峰岸純夫 1984 「新田荘における館と寺と墓」『新田町誌 第四巻』
54 宮田 毅 1983 『舞台Ｄ遺跡確認調査の概要』 太田市教育委員会
55 三輪茂雄 1978 『臼』 法政大学出版局
56 モ 森田 勉 1982 「14～16世紀の自磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No. 2』 日本貿易陶磁研究会
57 ヤ 山崎 一 1972 『群馬県古城墨址の研究 上巻』
58 山崎 一 1979 『群馬県古城墨址の研究 補遺編上巻』
59 山崎 一 1979 「金山城」『日本城郭大系 4』 新人物往来社
60 ワ 若山泡沫 1972 『刀装小道具講座 2 後藤家編』 雄山閣

61 群馬県 1938 『上毛古墳綜覧』
62 群馬県教育委員会 1971 『群馬県遺跡台帳 Ⅰ 東毛編』
63 太田市教育委員会 1982 『太田市の文化財』
64 太田市 1978～83 『太田市史 史料編 近世１～３』

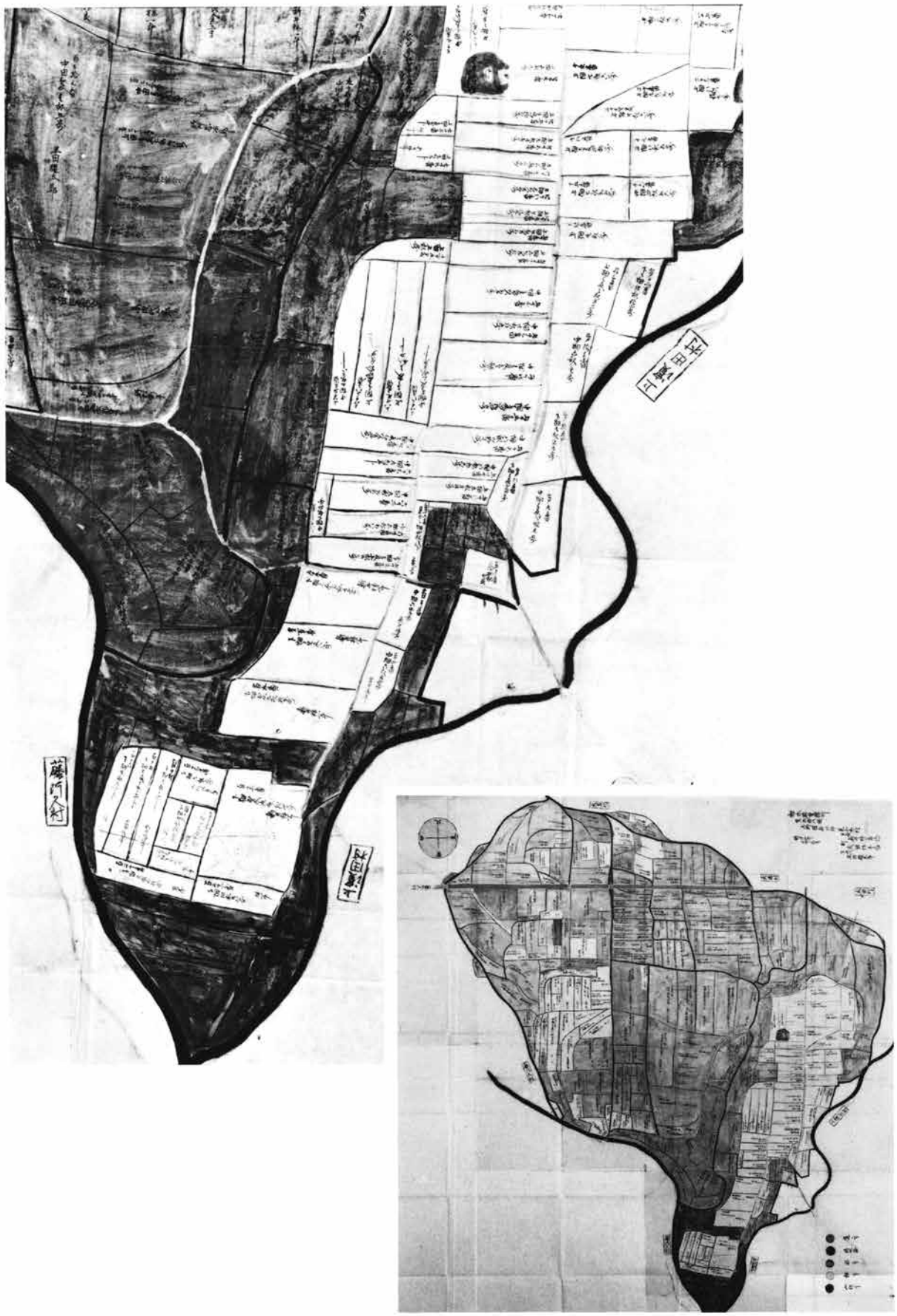
発掘調査参加者

青木公一　上野祥介　宇都宮雅彦　大塚登志夫　熊崎　薫　中島正義　中村忠寿　西出　司
馬場好雄　宮崎充慶　（以上、神奈川大学考古学研究会）

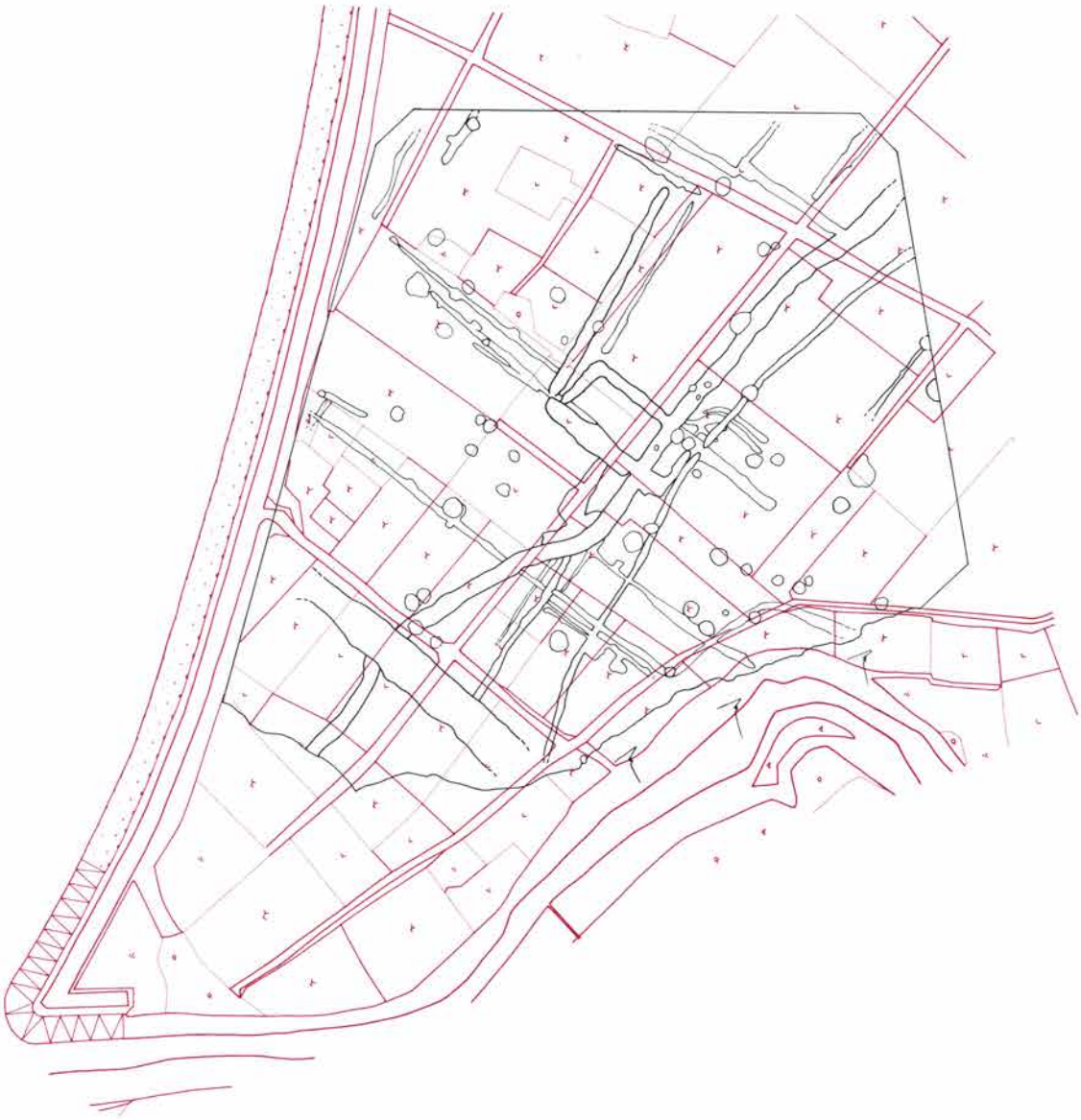
浅田君子　新井忠三郎　新井よ志の　石井ミツ　石川武子　市川ヨシ子　糸井キミ子　稲員みよ子
内田米三　江泉とく　遠藤たけ　遠藤タマ子　大木幸江　大島　孝　大谷節子　小此木ふじ
尾林とし　亀井公子　川島トヨ子　川島ミツ子　木暮茂一　北井孝子　栗原澄江　栗原ハル
桑原益雄　小暮美恵子　小林和江　小林とき夫　斉藤志津江　渋沢久子　嶋田ナカ子　清水文子
城田親蔵　鈴木光治　須藤和江　須藤よしの　関口芳江　高田金代　高田幸衛　高田十一郎
高橋まき子　高山ゆき　高山米吉　武内のぶ　竹川吉三郎　田島ミツ　田代高濃　津久井武雄
中村みどり　楢原洋子　萩原つゞし　浜田トキ　細谷友江　松尾クニ江　松沢幸一郎　森島ゆき子
森　宜子　毛呂宮子　横沢米吉

図　　版

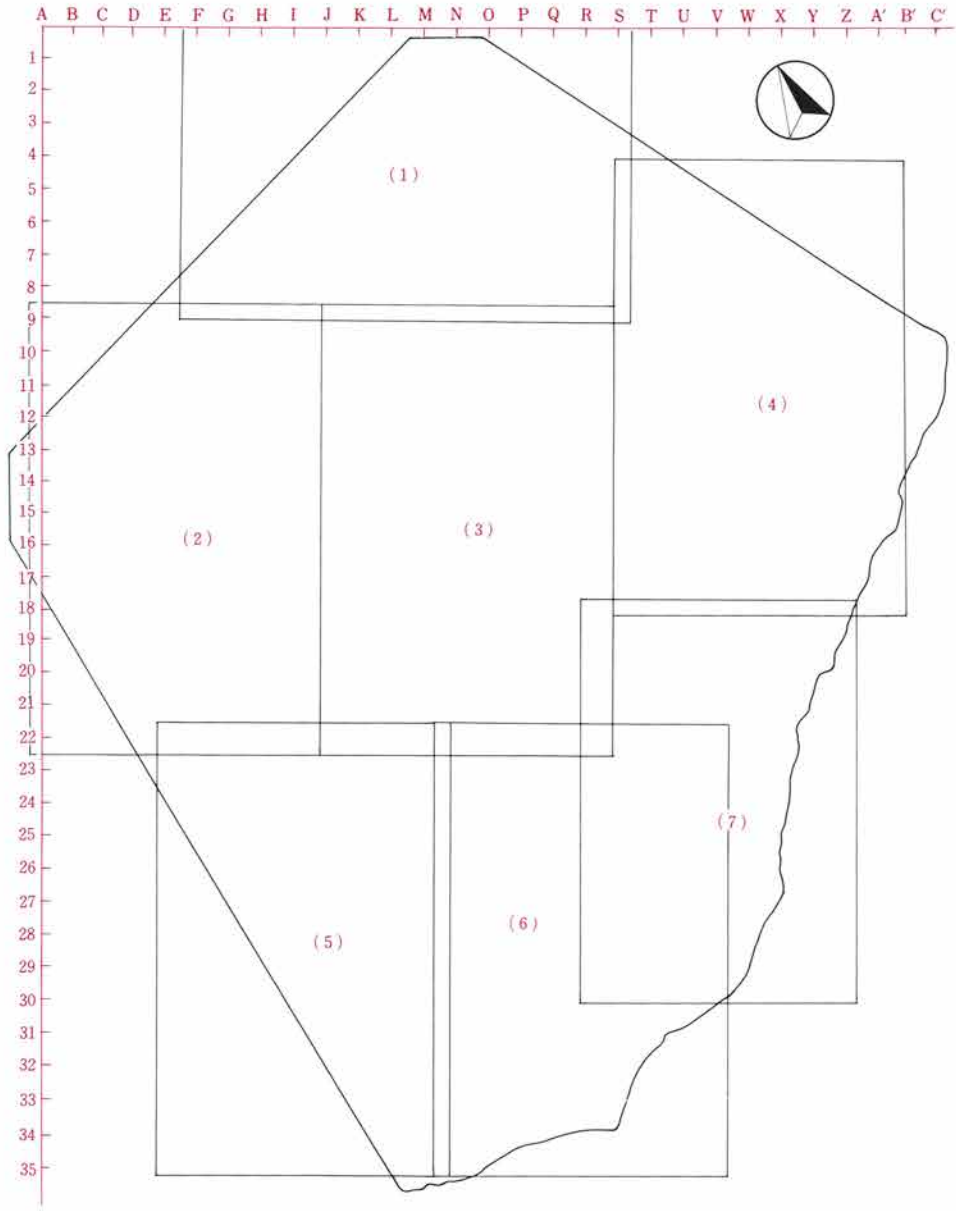
図版１　東今井村地引絵図 部分



図版２　調査前の土地利用と主な遺構



図版 3　遺跡部分図配置図



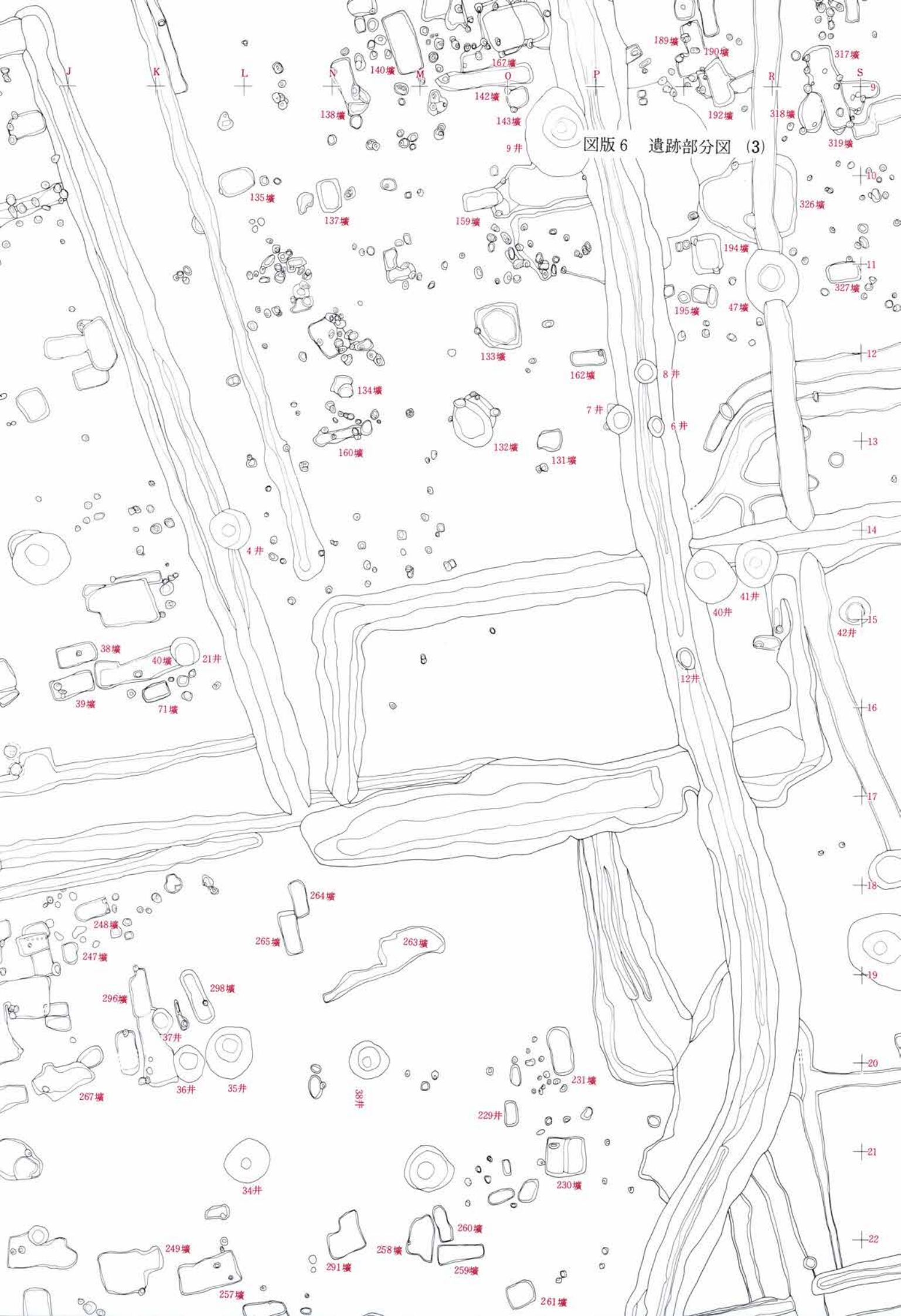
図版４　遺跡部分図（1）

F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
1
2
3
4
5
6
7
8
9
119壙
116壙
115壙
117壙
120壙
126壙
118壙
113壙
127壙
125壙
124壙
111壙
114壙
121壙
171壙
300壙
299壙
302壙
304壙
301壙
305壙
306壙
308壙
155壙
17井
123壙
156壙
172壙
310壙
312壙
307壙
18井
173壙
309壙
51井
151壙
157壙
175壙
181壙
311壙
174壙
182壙
19井
152壙
180壙
59壙
16井
149壙
150壙
11井
148壙
184壙
177壙
10井
128壙
185壙
30井
20井戸
2井
158壙
144壙
179壙
178壙
314壙
136壙
145壙
188壙
187壙
315壙
163壙
166壙
316壙
101壙
189壙
190壙
18壙
102壙
140壙
167壙
164壙

図版５　遺跡部分図（2）

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
18壙
101壙
102壙
22壙
19壙
103壙
106壙
16壙
104壙
105壙
20壙
3壙
5壙
17壙
1井
4壙
24壙
2壙
23壙
9壙
8壙
11壙
21壙
6壙
27壙
13壙
12壙
7壙
3井
14壙
28壙
15壙
29壙
1壙
37壙
36壙
30壙
77壙
35壙
34壙
76壙
33壙
78壙
72壙
23井
22井
82壙
81壙
73壙
26井
83壙
244壙
80壙
24井
246壙
25井
245壙
238壙
84壙
85壙
236壙
94壙
228壙
90壙
235壙
277壙
87壙
270壙
271壙
88壙
276壙
266壙
267壙
274壙
275壙
285壙
252壙
283壙
254壙
282壙
253壙
251壙
284壙
290壙
272壙
209壙
211壙
287壙
289壙
27井
208壙
207壙
255壙
256壙
206壙
33井

図版6　遺跡部分図（3）


J
K
L
N
M
O
P
R
S
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
138壙
140壙
167壙
142壙
143壙
9井
189壙
190壙
192壙
317壙
318壙
319壙
135壙
137壙
159壙
326壙
194壙
195壙
47壙
327壙
133壙
162壙
8井
7井
6井
134壙
160壙
132壙
131壙
4井
41井
40井
42井
12井
38壙
40壙
21井
39壙
71壙
264壙
248壙
265壙
263壙
247壙
296壙
298壙
37井
267壙
36井
35井
38井
231壙
229井
230壙
34井
249壙
258壙
260壙
291壙
259壙
257壙
261壙

E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
287壙
289壙
211壙
209壙
208壙
27井
249壙
255壙
256壙
250壙
257壙
293壙
292壙
206壙
207壙
33井
31井
201壙
202壙
203壙
32井
204壙
210壙
294壙
13井
375壙
389壙
390壙
387壙
380壙
377壙
376壙
381壙
385壙
386壙
411壙
409壙
410壙
514壙
412壙
516壙
515壙
413壙

図版 7　遺跡部分図（4）

図版８　遺跡部分図（5）

R
S
T
U
V
W
X
Y
Z
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
258壙
259壙
260壙
261壙
465壙
430壙
453壙
452壙
454壙
507壙
506壙
505壙
504壙
508壙
503壙
509壙
513壙
59井
462壙
463壙
457壙
456壙
458壙
461壙
460壙
459壙
517壙
279壙
280壙
66井
29井
60井
28井
331壙
382壙
333壙

R
S
T
U
V
W
X
Y
Z
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
43井
367壙
404壙
398壙
396壙
397壙
405壙
419壙
417壙
418壙
54井
61井
64井
407壙
408壙
48井
420壙
424壙
406壙
429井
445壙
446壙
423壙
427壙
440壙
431壙
428壙
443壙
444壙
448壙
466壙
422壙
426壙
441壙
449壙
442壙
425壙
450壙
63井
464壙
421壙
432壙
451壙
165壙
430壙
453壙
452壙
495壙
454壙
496壙
493壙
507壙
497壙
498壙
506壙
512壙
499壙
59井
505壙
500壙
462壙
463壙
504壙
457壙
503壙
509壙
456壙
501壙
491壙
65井
458壙
513壙

図版 9　遺跡部分図（6）

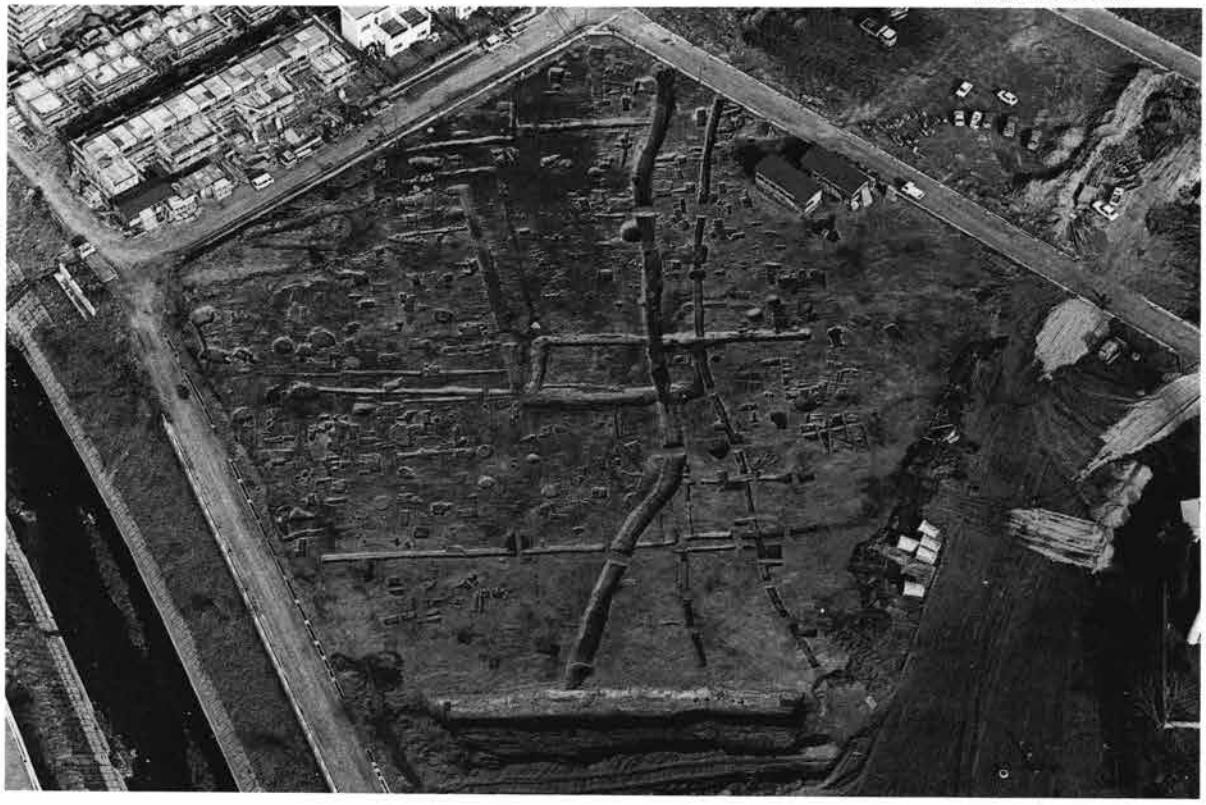
図版10　遺跡部分図（7）

S
T
U
V
W
X
Y
Z
A′
B′
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
306壙
42壙
14井
312壙
309壙
54井
57壙
56壙
45壙
50壙
478壙
51壙
479壙
475壙
476壙
477壙
510壙
60壙
438壙
323壙
61壙
434壙
439壙
324壙
321壙
480壙
492壙
416壙
325壙
437壙
435壙
436壙
481壙
330壙
511壙
345壙
343壙
52井
482壙
355壙
483壙
484壙
329壙
340壙
349壙
414壙
486壙
344壙
341壙
53井
415壙
485壙
487壙
346壙
488壙
5井
45井
44井
455壙
468壙
350壙
392壙
46井
347壙
393壙
467壙
470壙
52井
41壙
469壙
473壙
466壙
348壙
471壙
472壙
474壙
55井
370壙
378壙
356壙
371壙
365壙
372壙
56井
368壙
373壙
57井
403壙
369壙
359壙
50井
367壙
49井
363壙
360壙
402壙
395壙
361壙
401壙
400壙
398壙
396壙
58井
364壙
397壙
394壙
43井
362壙

図版11　遺跡航空写真

▲遺跡遠景(発掘調査前)

▼発掘調査区全景



図版12　発掘調査スナップ

▲遺跡遠景(発掘調査前)

▲調査風景(3号溝)

▲調査風景(5号溝付近)

▲調査風景(4号井戸)

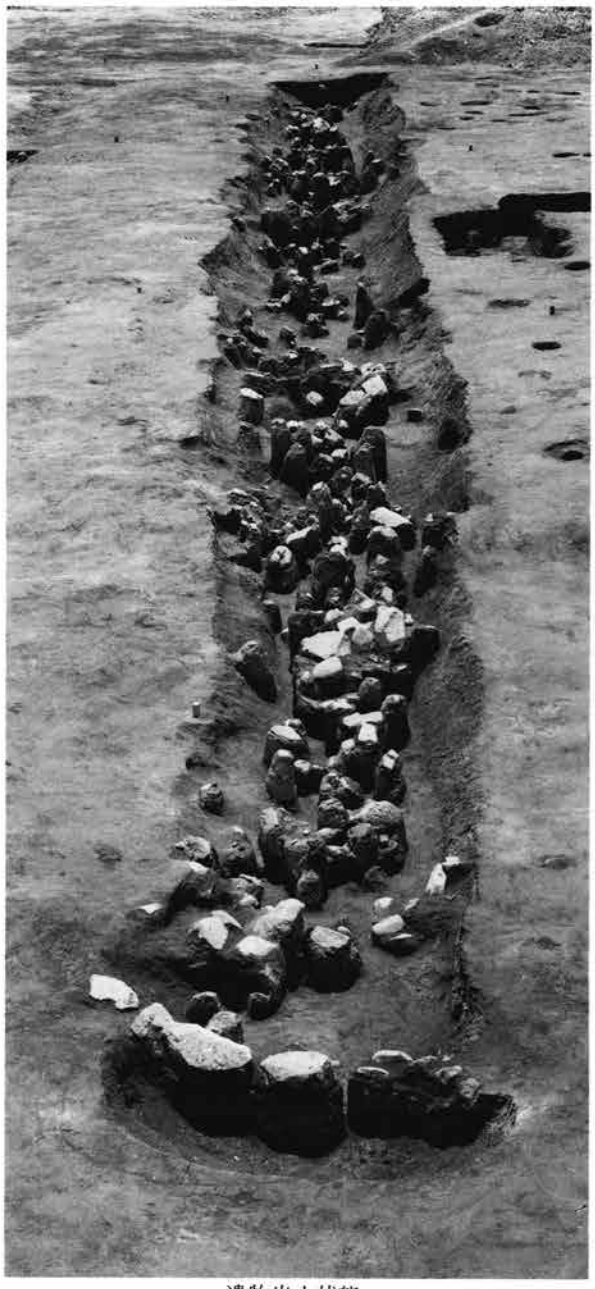
▲調査風景(大溝)

▲遺跡遠景(北東より)

▲遺跡遠景(南西より、後方に金山を望む)

▲遺跡地現況(1984年 夏)

図版13　溝(1)　3号溝

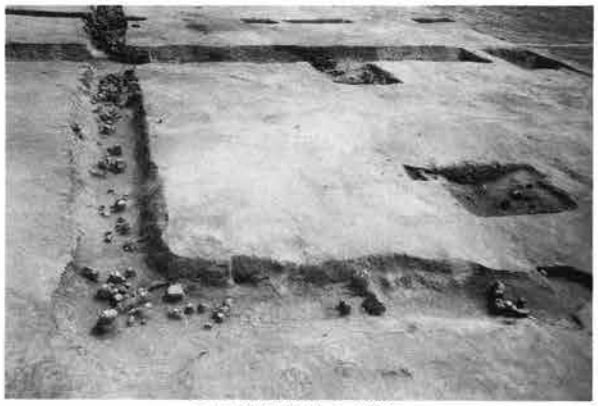


遺物出土状態

土層断面

5・6号溝

5号溝遺物出土状態



7号溝遺物出土状態

8号溝

7号溝

8号溝遺物出土状態

大　溝

大溝土層断面

図版15　井戸(1)

1号井戸

2号井戸

3号井戸

5号井戸

7号井戸

10・11号井戸

22号井戸

55・56・57号井戸

43号井戸

43号井戸遺物出土状態

46号井戸

46号井戸遺物出土状態

54・64号井戸

54号井戸土層断面

59号井戸

59号井戸遺物出土状態

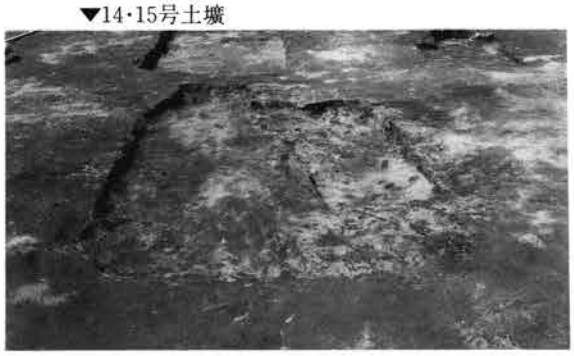
図版17　土壙1

▲1号土壙

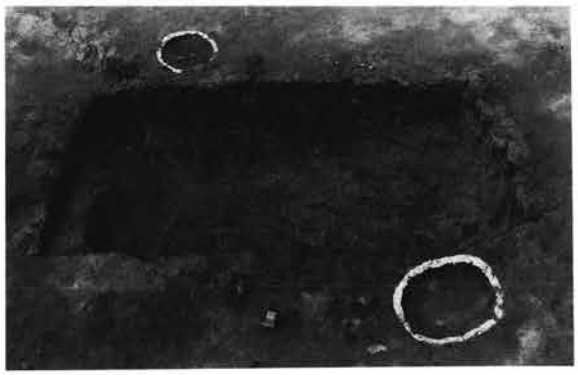
▲8号土壙

▼10号土壙

▼14･15号土壙



▲19号土壙



▲20号土壙

▼2号土壙

▼6号土壙

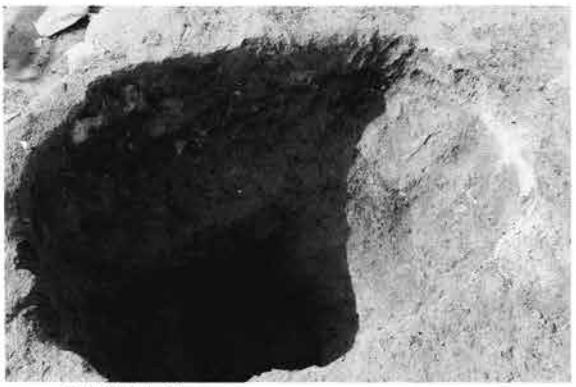
▼25号土壙

▲22号土壙

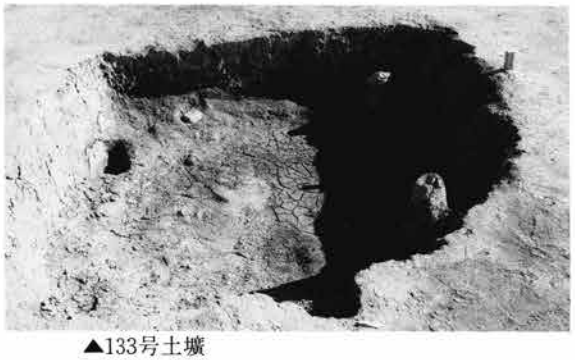
▲33号土壙

▼44号土壙

▼81・82号土壙



▲119号土壙



▲133号土壙

▼142号土壙

▼120号土壙

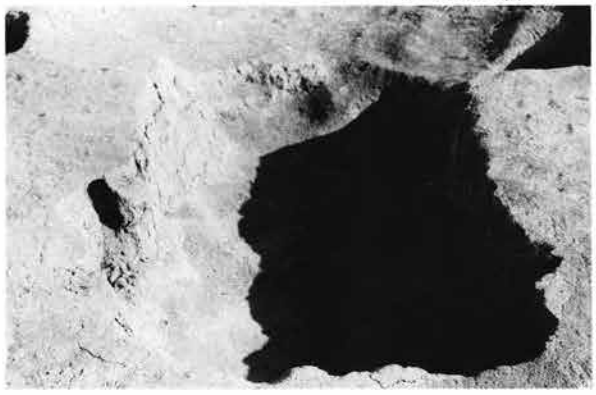
▼138号土壙

図版19　土壙3

▲136号土壙

▲149号土壙

▼159号土壙



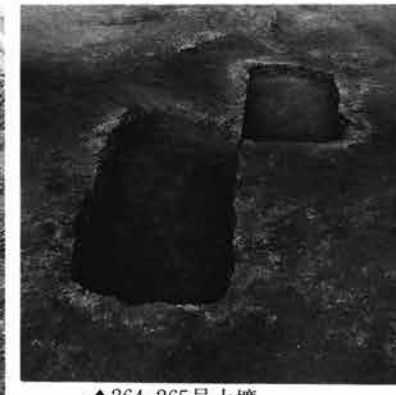
▼179・185・186号土壙

▲234～238号土壙

▲194号土壙

▼178号土壙

▼201号土壙



▲264・265号土壙

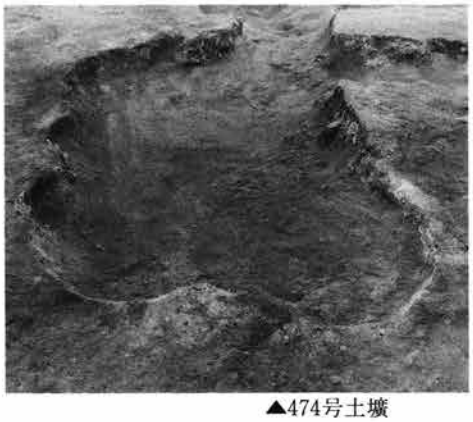
▲250号土壙

▲314号土壙

▼375号土壙

▲327号土壙

▲356号土壙



▲474号土壙

▼379号土壙

▼439号土壙

図版21　土壙(5)遺物出土状態

▲120号土壙

▲182号土壙

▼246号土壙

▼272号土壙

▲273号土壙

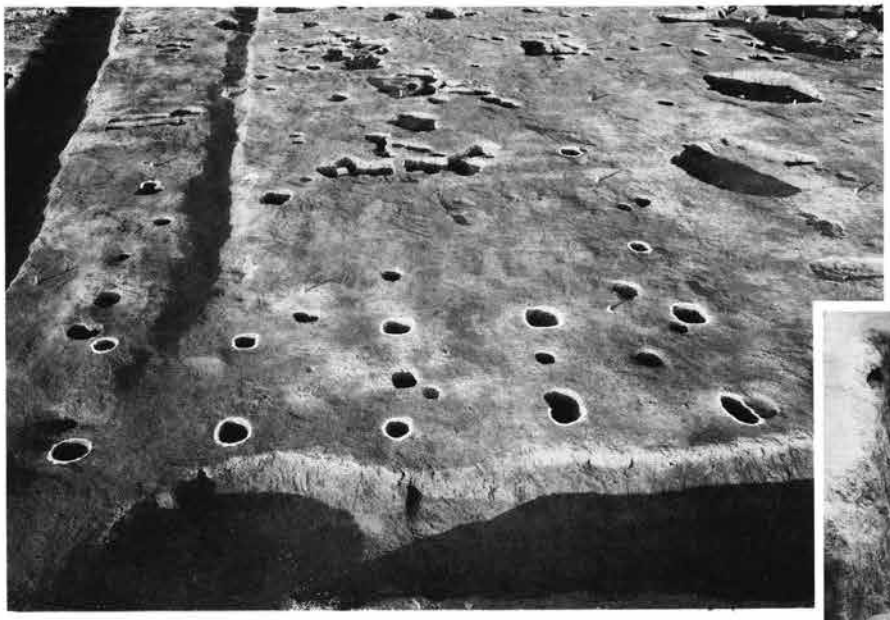
◀358号土壙

▼142号土壙

▼136号土壙

▼517号土壙

図版22　掘立柱建物・柱列



◀1号掘立柱建物

▼1号掘立柱内
(160号土壙)
遺物出土状態

◀2号掘立柱建物

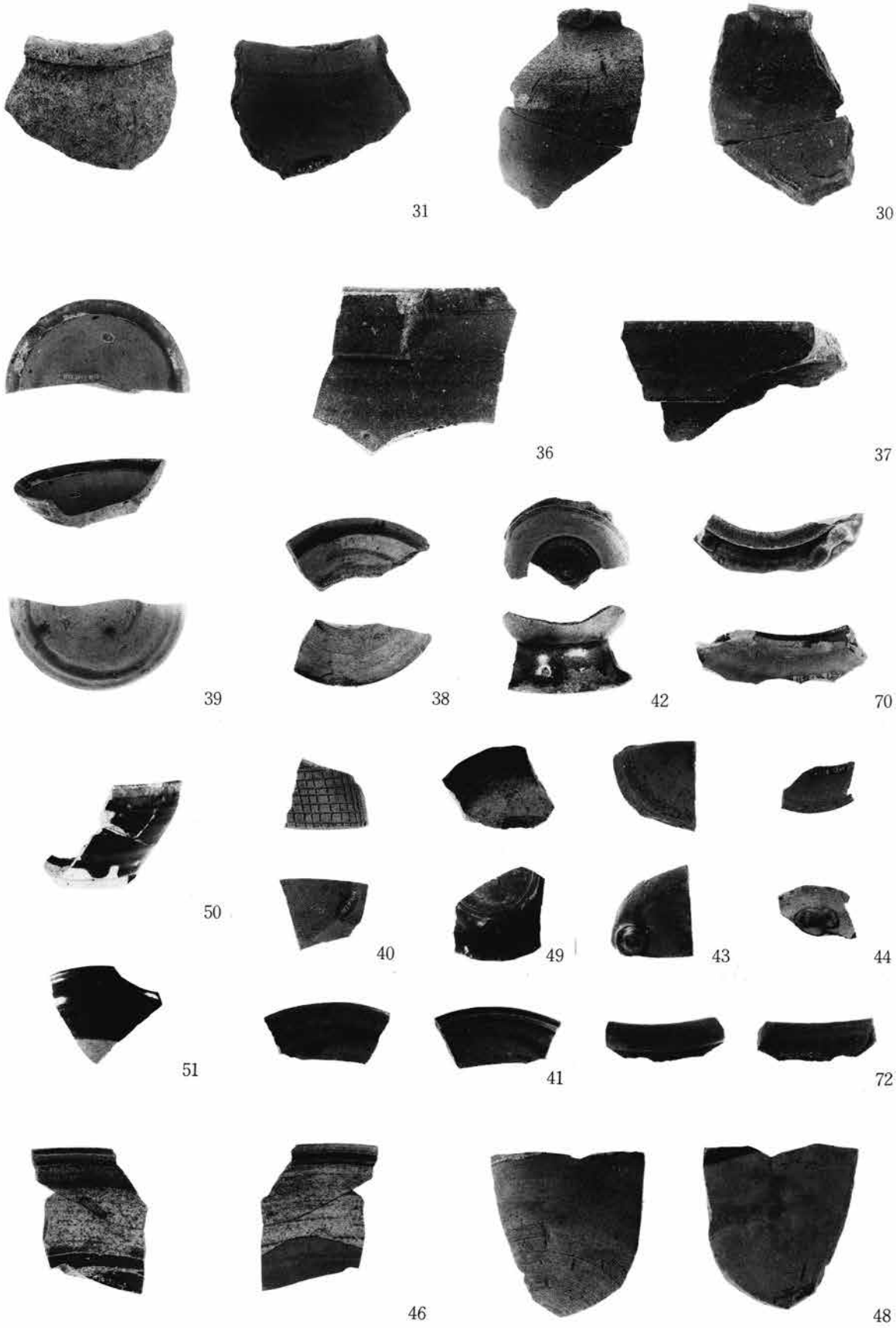
▼1号柱列

▲2号柱列(大溝内)

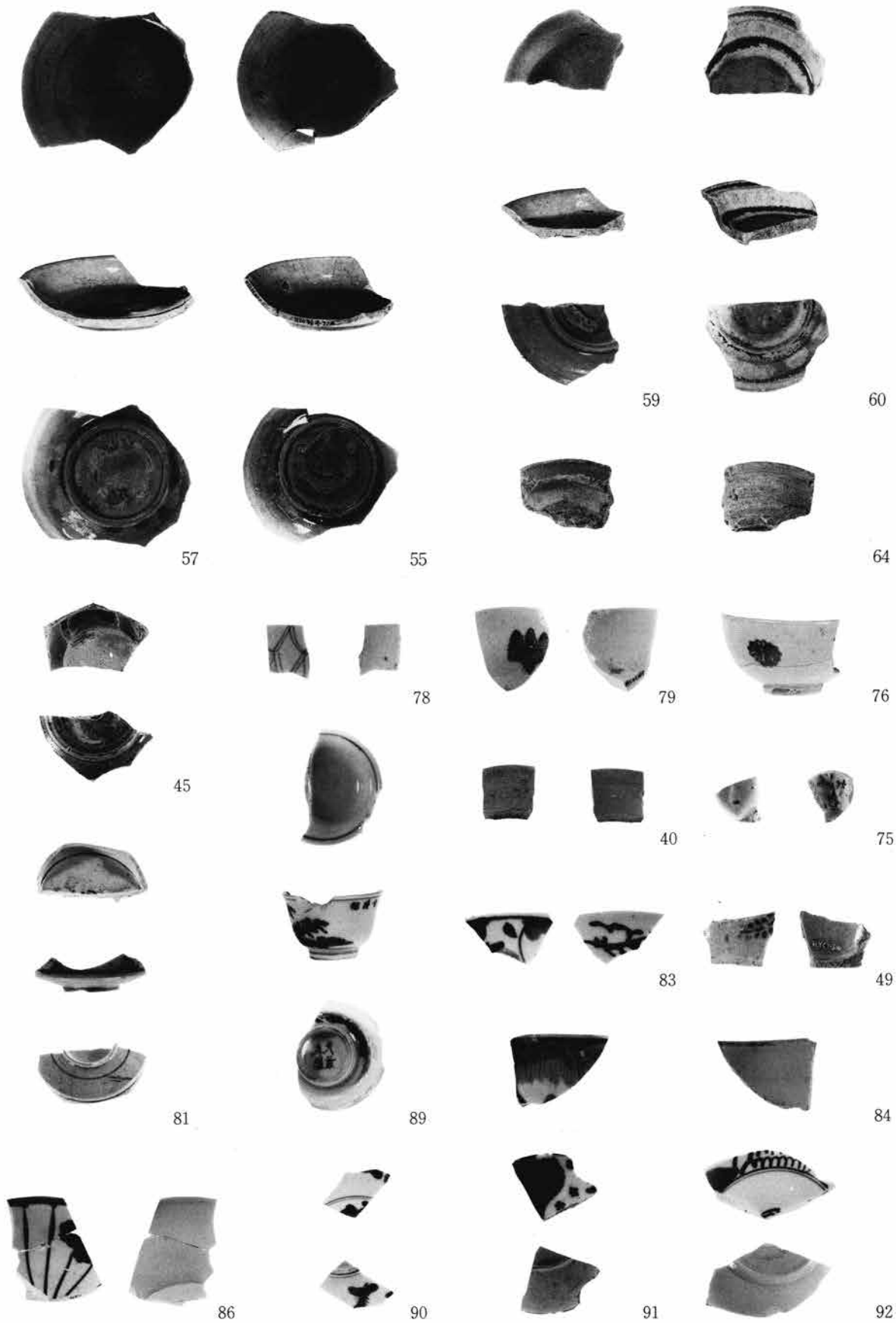
▼1号小穴群

▼3号小穴群

図版23　陶磁器(1)

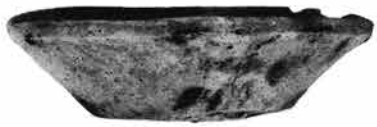


図版24　陶磁器(2)



図版25　かわらけ(1)

14


15

16

32

45

46

49

53

56

59

61

67

72

74

79

85

図版26　かわらけ(2)

89

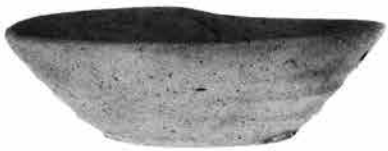
90

93

96

100

101


103

107

122

132

161

166

169

170

174

176

図版27　かわらけ(3)

1

2

7

17

20

22

23

24

25

30

36

40

70

80

83

84

86

88

91

97

104

118

119

121

138

150

175

図版28　内耳土器(土鍋)

3

4

6

7

8

9

10

11

12

13

図版29　内耳土器(ほうろく)

16

20

19

21

25

26

28

29

31

30

32

33

図版30　内耳土器底部・擂鉢

ちぢれ目

砂目

板目

体部穿孔

3

4

9

10

7

11

14

図版31　石臼(1)

6

3

1

7

5

9

23

12

15

16

13

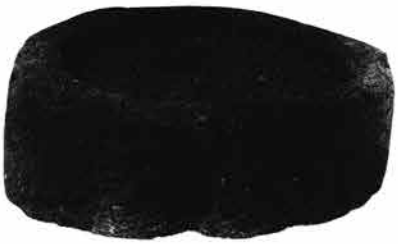
10

14

77

76

47



72

51

43

67

35

84

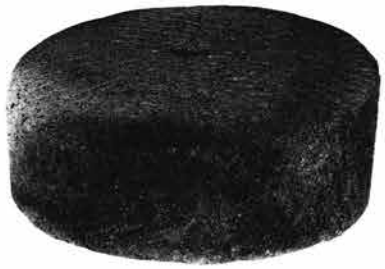
54

46

34

図版33　石臼(3)

114



135

121

156

122

127

115

143

142

151

目の状態(6)

目の状態(10)

上縁部の小孔－外側(51)

上縁部の小孔－内側(51)

くぼみ中央の小穴(72)

上縁部の磨耗状態(51)

9

5

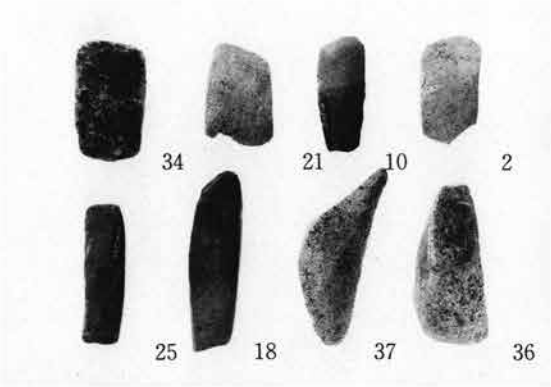
8

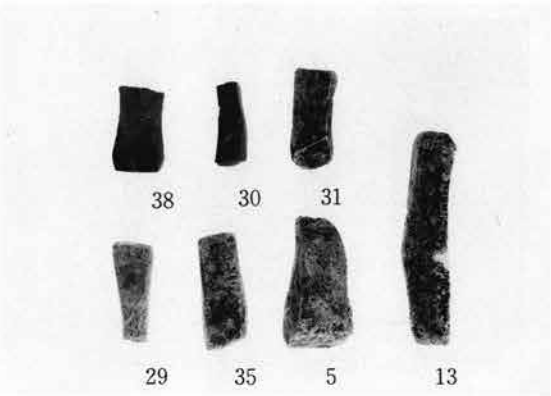
7

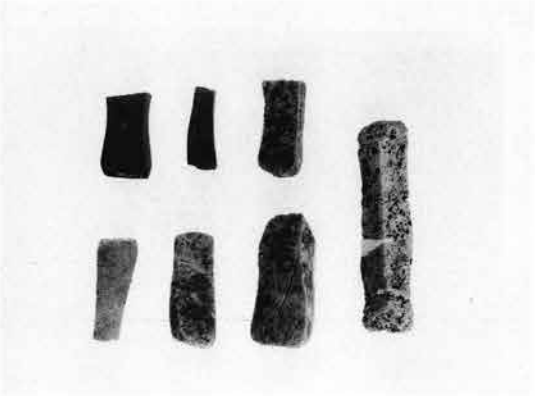
10

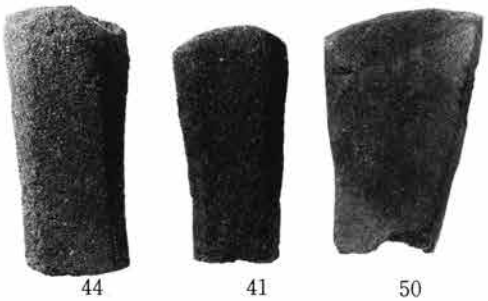
2

図版35　砥石









14

擦痕(横方面)

1

擦痕(縦方向)

50

擦痕(荒砥)

26

41

7

35

6

5

40

27

52

13

11

33

図版37　五輪塔

1

2

3

4

5

6

7

9

12

10

14

16

15

19

23

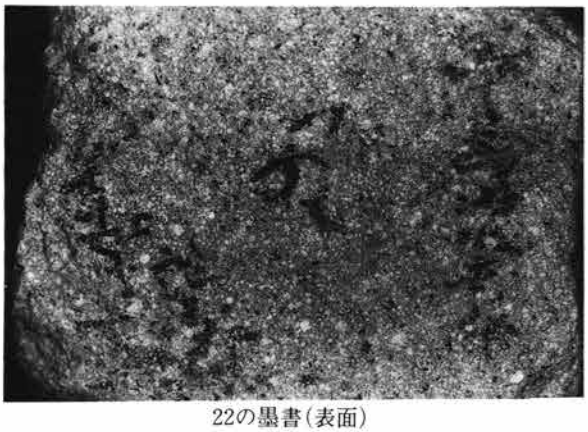
18

図版38　五輪塔、不明軽石品、その他

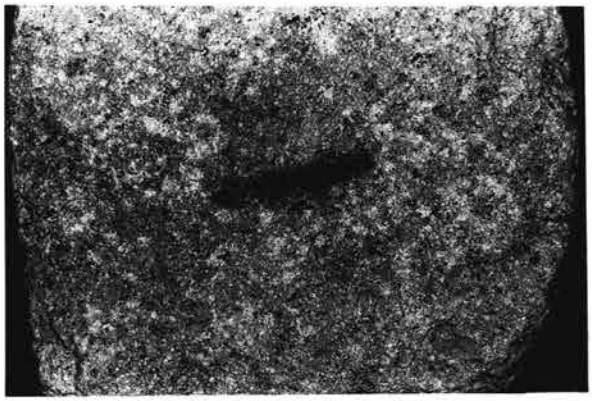
22

17

21

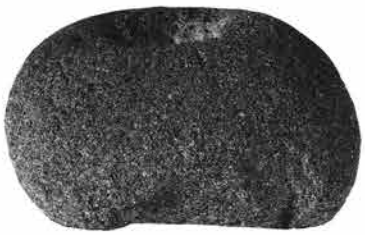


22の墨書（表面）



（裏面）

87図-2



87図-1

74図-7

74図-1

74図-6

74図-9

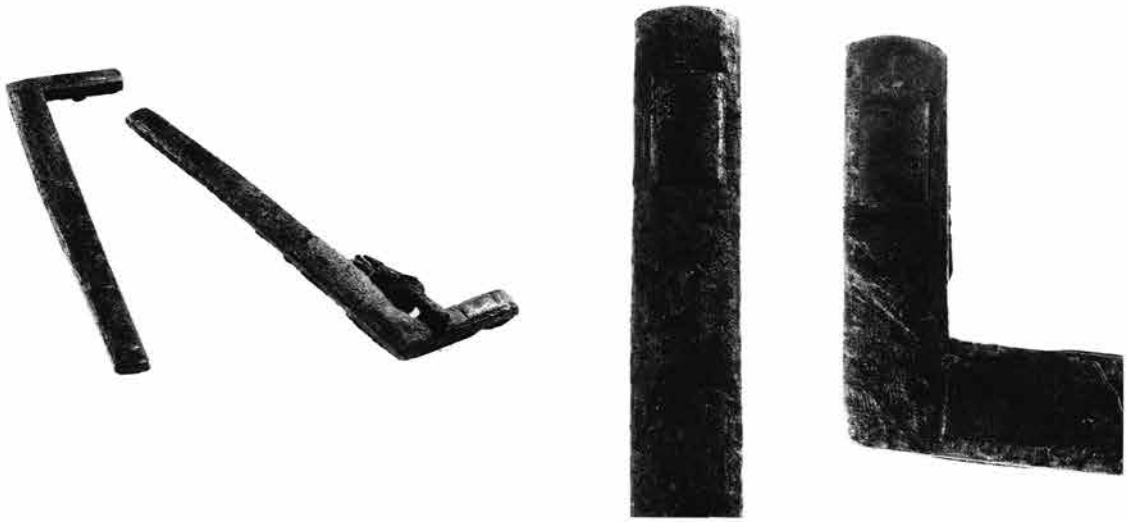
74図-8

図版39　金属器・フイゴ羽口

1　2　3

4　6　5

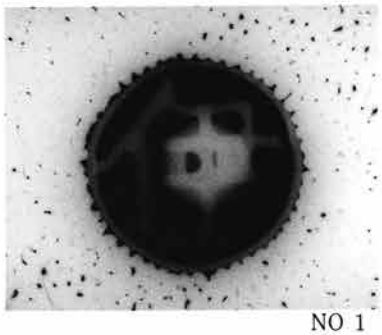
▼L字状飾り金具



▼フイゴ羽口

1　2　4

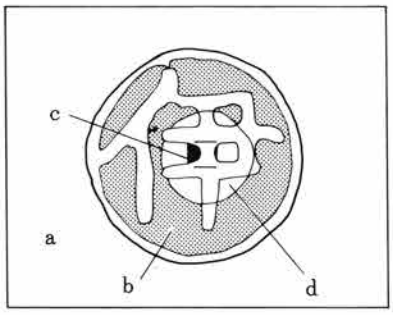
図版40　金属器X線透過写真



NO 1

写真撮影データー

電　　圧　110K.V.P
電　　流　5mA
露出時間　24 sec
距　　離　60cm
焦　　点　2.0×2.0mm

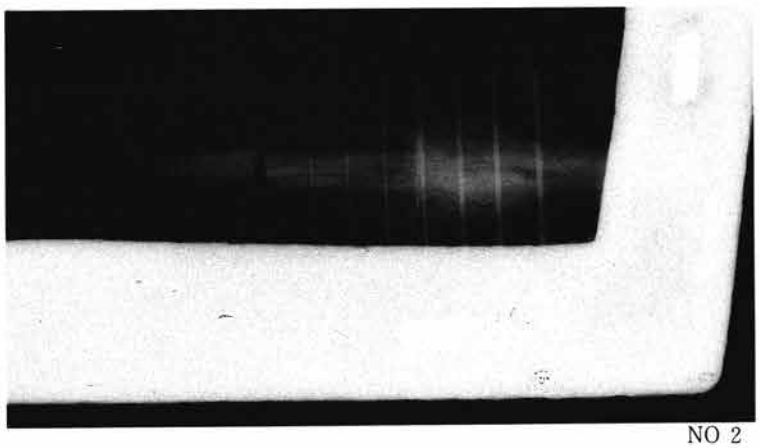


a　鉛玉によるX線未透過部

b　印本体(銅)X線透過部

c　柄部(鉄)・本体透過部

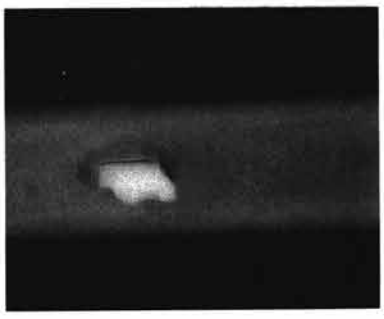
d　柄部鉄サビフクレ透過部

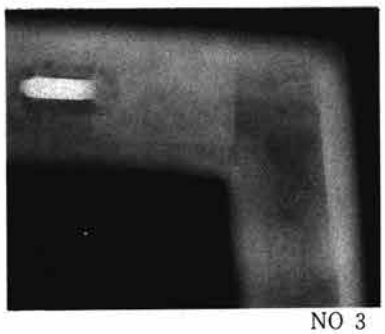


NO 2

写真撮影データー

電　　圧　110K.V.P
電　　流　5mA
露出時間　24sec
距　　離　60cm
焦　　点　2.0×2.0mm

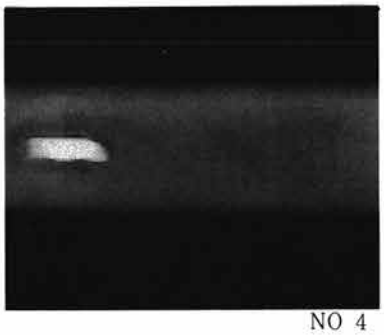




NO 3

写真撮影データー

電　　圧　120K.V.P
電　　流　5mA
露出時間　30sec
距　　離　60cm
焦　　点　2.0×2.0mm



NO 4

写真撮影データー

電　　圧　120K.V.P
電　　流　5mA
露出時間　30sec
距　　離　60cm
焦　　点　2.0×2.0mm

撮影　群馬県工業試験場

図版41　木製品(1)

3-a

2

2

9-a

26

10

10

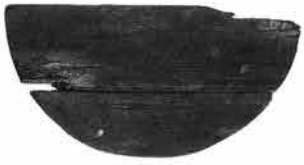
1b-d

4

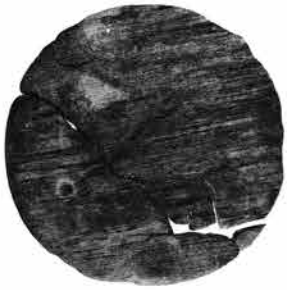
7

9

6



5



8

3-b

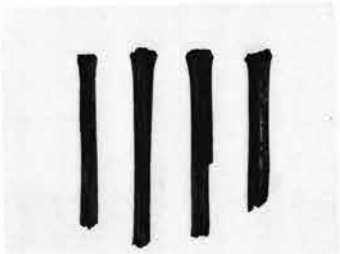
27

図版42　木製品(2)

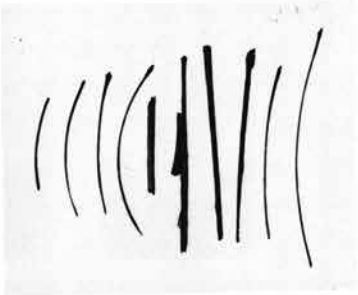
11

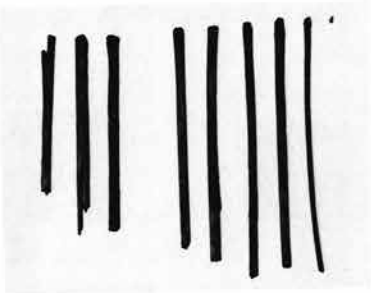
11

12～22



56号井戸出土竹材





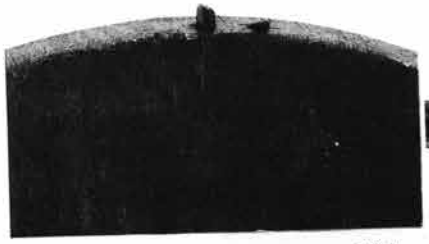
28

29

1-u

23～25

2



10-b

1-d

11k

4-a

図版43　その他の遺物

2　3　7　5　8　10

▲土師器・須恵器

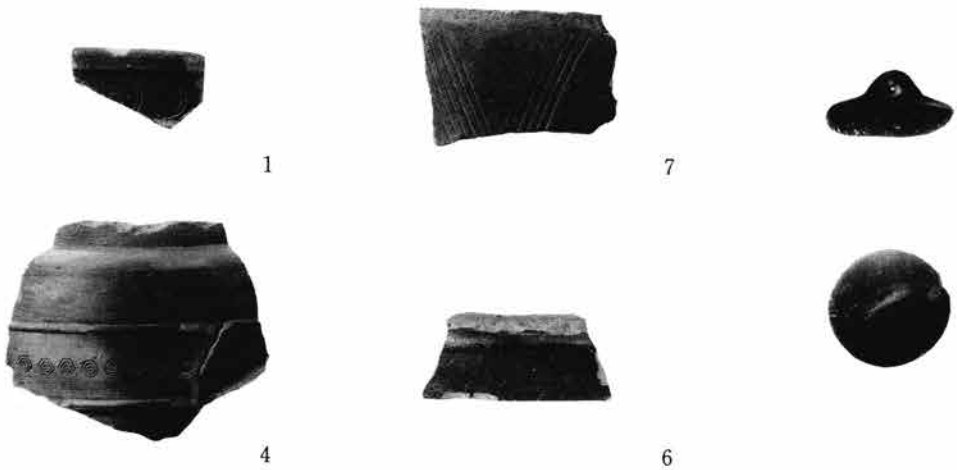
1　2　3

▲硯

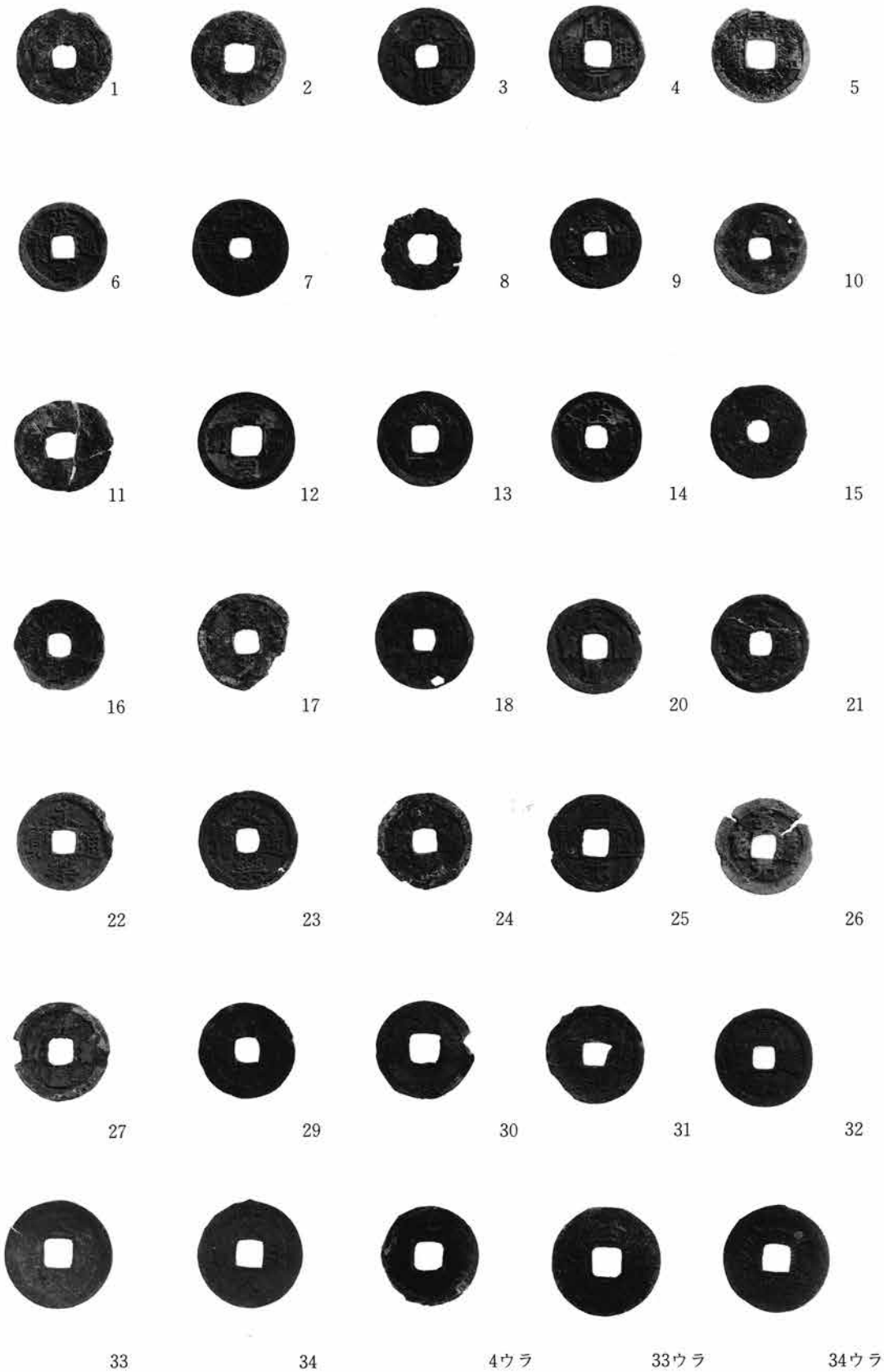
▼瓦

10　9　3

▼火鉢、その他



1　7　4　6　5


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
20
21
22
23
24
25
26
27
29
30
31
32
33
34
4ウラ
33ウラ
34ウラ

浜町屋敷内遺跡C地点 県営浜町住宅団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印　刷　　昭和60年３月20日
発　行　　昭和60年３月30日

編集・発行　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の２
電　話（0279）５２―２５１１　（代表）
印　　刷　株式会社　前　橋　印　刷　所